The Mad Hatter in Abstract World

雪白と紅薔薇。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｔｈｅ　Ｍａｄ　Ｈａｔｔｅｒ　ｉｎ　Ａｂｓｔｒａｃｔ　Ｗｏｒｌｄ

【Ｎコード】
Ｎ３４９７Ｊ

【作者名】
雪白と紅薔薇。

【あらすじ】
アリスがいない「不思議の国」彼女が来ても、来なくても、……
…彼らには関係ないみたいです。て言うか、誰ですか、それ。
アリスが目にするお茶会が開かれるようになるまでの、あれやこれやの昔話。
タイトル（舞台）は帽子屋、裏ボス（実は主人公？）は三月ウサギ、眠りネズミは半異世界？人。――さぁ、今日もお茶会を開きましょう？――Ａｖｅｒｙ　ｍｅｒｒｙ　ｕｎｂｉｒｔｈｄａｙ

to you！――。

【Fantan Domino】新章開始しました。

The Capital of Roses（前書き）

「不思議の国のアリス」完全アリス抜きスピンオフです。

帽子屋狂愛の作者的に、第一弾（？）は問答無用でお茶会メンバーです。リーダーは帽子屋……ではなさそうです。

作者はコメディ大好きですが、nonsenseな方向に行くとどんどんダーク方面に堕ちていきそうな感じがします。

最近madとcrazyの差がわからなくなってきました。

みんなオカシイんだから、まぁいいか。

……第2弾があるかどうかは。。。。女王様あたりに聞いてください。

The Capital of Roses

今ではないいつか。
ここではないどこか。

通りという通りのいたる所に、薔薇が咲き乱れる王都、レイシー。
『Ｑｕｅｅｎ』はいつの時代も薔薇を愛してやまない。

スペードの女王は　紫の薔薇を愛し、
クラブの女王は　緑の薔薇を愛し、
ダイヤの女王は　黄色い薔薇を愛し、

そして

ハートの女王は　紅い薔薇を愛した。

一年を通して絶えることのない薔薇は、女王の象徴。

◆◆◆◆◆

昔々、あるところに、とても仲のよい兄と妹がおりました。

兄は葡萄酒のように紅い髪をもち、

妹は月光のような銀色の髪をもち、

二人はお揃いの菫色の瞳をしておりました。

兄妹は仕立て屋を営む両親の元、決して裕福ではありませんが幸せに暮らしておりました。

ところがある日。

幼い兄妹は両親と離れ、この国一番の帽子屋で働くことになりまし

た。

この国の片隅で咲く菫は、血に染まって花弁を散らしてしまったのです。

As you know, nobody can be sane here, can we?

The Capital of Roses（後書き）

書き直してしまいました。
改めまして、はじめまして。作者です。
後日アリスが迷い込む予定の「不思議の国」が舞台です。トランプとか、薔薇とか、帽子とか、大好きモチーフをてんこ盛りにして進んで行きたいと思います。
文章力の無さは折り紙つきなので↑
読者様方の想像力に頼りながらよれよれと進んでいこうと企んでおります。
こういった長文を書くのは初めてですが、きっちり完結目指してがんばりますので、生温かい目で気長に眺めていただけると喜びの舞を踊ります。
感想や評価（＋－両方）も大歓迎です。浮上に時間がかかりますが、最終的にまたもや踊ることでせう。

Blue Violet（前書き）

Old Maid ＝ ババ抜き

Blue Violet

本当はね。

もう父さんの顔も、

母さんの顔も、

ぼんやりとしか思い出せないんだ――――――――

◆◆◆◆◆

7歳の誕生日を迎えてしばらく経った春の日。

レイズと一緒にこの国一番の帽子屋に預けられることになった。

父さんは

「二人とも、助け合ってがんばるんだよ」

と言って私たち二人の頭をくしゃくしゃと撫で、

母さんは

「家の人たちの言うことをよく聞いてね」

と言って私たちを交互に抱きしめた。

後ろ髪を引かれるように去っていく両親の背中を見送りながら、

右手にはレイズの手をしっかりと握り、左手には母さんがこの日のために縫ってくれた紺色のワンピースの裾を握りしめて、一生懸命泣くまいと踏ん張っていた気がする。

横では私の手をぎゅっと握り、唇をキッと真一文字に結んだレイズが地面を睨んでいた。

……奉公になんて出たくなかった。

小さな仕立て屋を営む両親は、ひとつ上の兄レイズと私の二人を揃って帽子屋に奉公に出した。父の古くからの友人が昔ここで帽子職人をしていた伝手で、私たちを預かってくれるよう頼んだのだ。後に聞いた話だと、家業の経営が芳しくなく、食い扶持を減らすため

に泣く泣く私たち二人を外に出したのだとか。

両親は子供たちに「礼儀作法と帽子作りを学ぶため」と親元を離れなければならない理由を説明し、自宅のあるクラブ地区から、幌馬車に乗ってにぎやかなハート地区までやってきた。

今思えば、売り飛ばされなかっただけ感謝するべきだろう。いや、実際は売られたようなものか。

事実、その後実家に里帰りすることも出来ず、両親が訪ねてくることもなく、両親の顔を見たのはこれが最後だった。

商業エリア、ハート地区の目抜き通りに店を構える帽子専門店「Ｈａｔｓ」。

その日から、総勢１３名の大所帯の一員になった。

◆◆◆◆◆

アゼルの朝1番の仕事は玄関の掃き掃除と、レイズと一緒に1ブロック先のパン屋に朝食のパンを取りに行くこと。

「おはよう、スミレの」

そういって今日分のパンの包みを渡してくれるパン屋の奥さん。帽子屋に奉公に入って3年。周囲の大人たちは、帽子屋の子供たちのことを「スミレの兄妹」と呼んだ。

二人の瞳がそろって青みの強い紫色をしているからだ。

ただ、兄のレイズの髪は葡萄酒のような黄みの無い深紅、妹のアゼルの髪は月光を吸い込んだような白銀だった。

額縁が違うと、顔の印象もだいぶ変わるらしい。

よく見ると、少しつりあがった目元や鼻の形などはよく似ているのだが、知らない人が初見で二人を兄妹と気づくことは稀だった。

「おはよう、おばちゃん！ねぇ聞いてよ！オレ今日から帽子の作り方教えてもらうことになったんだ！」

レイズが朝から勢いよくまくし立てる。アゼルはどちらかというと朝は苦手なのだが、レイズはいつも朝から元気だ。ベッドに入るのはだいたい同じなのに、決まってアゼルより起きるが早い。アゼルはようやく目が覚めてもなかなかベッドから起き上がれない性質なので、つくづくレイズの寝起きの良さが羨ましかった。

二段ベッドの下で寝ているアゼルは、毎朝レイズに起こして、と言

うよりベッドから引っ張り出してもらっているのだった。

「おぉ～、正式に弟子入りってこったね」

「うん！若旦那様が、レイズもそろそろミシン踏んでみるか？って」

「すごいじゃないか。アゼルはどうなんだい？」

奥からクロワッサンの載ったプレートを両手に持って主人が顔を出した。バターのいい香りが店内に立ち込める。

その匂いに釣られて、アゼルの腹の虫が朝食がまだだと自己主張した。思いがけず大きく響いたその声に一瞬呆気に取られた店内。一拍後にはその3倍の笑い声が響いていた。

こういう時は恥ずかしいけど、逆に笑い飛ばしてもらったほうが気が楽だとアゼルは思う。

「サーシャと一緒にブリムにビーズの縫いつけと、あとお茶請けのクッキーはあたしが焼くの。こないだ、マリアンに教えてもらったから」

それでもアゼルは、パンの入った紙袋で赤くなった顔を隠しながら、もごもごと答えた。

「アゼルのクッキー、すっごくうまいんだよ」

レイズが自分のことのように満面の笑みで自慢する。

「おぉ、今度おじちゃんたちにも食わせてくれ」

「うん、うまく焼けたら、持ってくるね」

さ、早く帰ろうぜ、とレイズが踵を返すと奥さんに呼び止められた。

「耳だけど齧って行きな」

切り落としのサンドイッチパンの耳が数本、小さな袋に入っていた。

◆

「なぁアゼル。オレも将来自分のお店が持てるかな」

「持てるよ！この国で2番目にすごい帽子屋さんになるよ」

「2番てなんだよ」

やや不満そうに妹を振り返る。

「だって1番は大旦那様じゃん。『役者』なんだし」

さも当たり前という顔をして、アゼルはパンの耳を頬張った。

「そりゃぁ、そうだけどさー。アゼルは今日クッキー焼いたらその後は？」

「銃の練習かなぁ。クレスも来るって言ってたし。」

帰り道を急ぎながら、そんな他愛もなく若干物騒な会話。

パン屋の奥さんがくれたパンの耳はあっという間に無くなってしまった。

大旦那様、と呼ばれる『帽子屋』レオナルドをはじめ、Ｈａｔｓの面々は右も左もわからない子供二人にとって、第二の家族となりうる存在だった。

奉公に上がっている身なので、当然それぞれ子供でもできる仕事を与えられる。仕事に対しては小遣い程度の給金も出たが、二人はその多くを将来のための貯えとした。

日々忙しい中でも仕事の合間を縫って、他の子供たちと違い学校に行かない分の教育も与えてもらえた。奉公人としては破格の扱いであろう。主に礼儀作法、読み書き、計算、更には帽子製作に欠かせない水銀などの薬品の扱い方、護身術や銃の打ち方まで。それらの全てが一職人として、場合によっては身分の高い顧客と接するために欠かせない教養として、日々従業員からみっちり叩き込まれる。

帽子屋の従業員たちの指導は、学校など比べ物にならないくらい厳しいものだったが、なにしろ学校というものに通った経験が無い二人には知る由もない。
与えられるそれらを感謝こそすれ、弱音を吐きそうになっても必死についていった。

…実際には一般的に帽子屋に関係ないものも含まれていたが。

Ｈａｔｓの人間はみんな銃の扱いには長けていたし、帽子を作る際に薬品についての知識は必要不可欠だった。

他の家の子供たちと違って外で遊んだりする時間はそれほど多くなかったが、そこは奉公に上がっている身なので仕方ないことは、幼いながらもわきまえてる。
それ以上に、二人は芸術的な帽子を作るＨａｔｓの主レオナルドに尊敬の眼差しを向け、帽子職人として二人で店を持つことが自然と将来の目標となった。

「まぁーた来んのかよ、あのウサギ。毎日じゃんか」
「なんでぇ？いいじゃん、仕事の邪魔しに来るわけじゃないし」
「そういう問題じゃねぇんだよ」

レイズは急に機嫌が悪くなった。

あたしは数歩先を歩きながら、少しだけ自分より背の高い兄を振り返った。

「またケンカしないでよ」

少し眉間にしわを寄せて、再度釘を刺す。

「わーってるよ」

不機嫌に返してきたが、本当にわかっているのだろうか。
何しろ我が兄ながら前科がありすぎるので、イマイチ信用が薄い。

「射撃なんて一人で練習できるだろ」
「そうだけど…自分じゃ何がいけないのかとか、よくわかんないし」
「じゃあオレが教えてやる」
「レイズはこれから忙しくなるんでしょ？それにお茶の時間だって、たくさんいた方が楽しいじゃん！」

ウサギと一緒にお茶なんてごめんだ、とレイズはまだ文句を言っていたが、もうアゼルは気にしないことにした。レイズのこの手の不機嫌にいちいち取り合ってたら日が暮れる。

レイズは若旦那様に弟子入りして忙しくなるから、一緒に過ごす時間はどんどん減っていくだろう。寂しくないと言えば嘘になるが、自分たち兄妹の夢に向かっての大きな一歩だ。

レイズががんばるのだから、自分も何かがんばるものを見つけないと。

そう考えたアゼルがその一つに定めたのが、お菓子作りだった。なんと言っても、最高の師匠が家にいる。

Ｈａｔｓでは、上顧客を接客する際にはお茶とささやかなお茶請けを出す。帽子屋の家事の一切を取り仕切るマリアンが作るお茶請けのお菓子は、帽子屋の顧客たちの密かな楽しみの一つになっていて、実はこれを目当てに店に来る客も多い。

マリアンもその辺は心得ていて、上顧客の予約が入っている日はわざわざその客の好きなケーキを焼いてもてなすのだった。

クッキーが上手く焼けるようになったら、マリアンにいろいろなケーキの焼き方を教えてもらおう。

将来レイズが開いた帽子屋で、同じようにお客様をおもてなし出来るように。

これが、今のアゼルの当面の目標。まだ、誰にも言っていないけれど。

Ｂｌｕｅ　Ｖｉｏｌｅｔ（後書き）

はじめまして、作者です。

こんな拙い文章、読んでくださってありがとうございます。

よれよれと書いていきますので、どうぞよろしくお願いします。ｍ（＿＿）ｍ

ちなみにＢｌｕｅ　Ｖｉｏｌｅｔの花言葉は「忠実」と「愛」だそうな。

The Hatter

そんなやりとりのうちに勝手口の薔薇の木戸を開けた。赤い薔薇が朝露に濡れてしっとり光り、木戸をくぐる度に薔薇の芳香が鼻をくすぐる。毎朝この木戸をくぐる瞬間が、アゼルの密かなお気に入りだった。

飛び石を渡ってキッチンのドアを開けると、マリアンとサーシャが忙しく立ち回っていた。野菜スープのいい匂いが立ち込める。

「ただいまー」

「レイズ、テーブルセッティングお願い」

テーブルにパンを置くと、帰ってくるなりサーシャに言われて、レイズはまだ少し不機嫌そうにテーブルセッティングを始める。

「どうしたんだい、レイズ？　アゼル、出来たからベル鳴らして」

アゼルは廊下についている小振りの鐘を3回打った。食事の合図だ。

ほどなく全員がテーブルに着き、いつもと同じ朝食の風景。

この屋敷の住人は総勢7人。

大旦那様、若旦那のウォルター様と、一人娘のサーシャ、家事担当のマリアン、帽子職人のジェム、そしてレイズとアゼル。

他6名が通いで働いている。
あと一時間もしたら、皆出勤してくる時間だ。

忙しい帽子屋の一日の始まりである。

◆◆◆◆◆

今日も射撃の稽古が終わった後、クレスは屋敷を抜け出し裏手の森の中をひた走っていた。

飛ばせば、午後のお茶に間に合うかも知れない。

早くアゼルに会いたい。走りながら苦笑してしまう。
昨日もおとといも、その前も会ったのに。

いっそのこと、アゼルもうちの子になればいいのにな。
あ、でもあの赤毛のバカももれなく付いてくるだろうしなぁ。

……ウザいんだよな。

「…やっぱり一度シメるか」

小さく舌打ちをしてつぶやく。

フルスピードで駆けていた足を止めて、目当ての赤薔薇の木戸を開ける。

甘い匂いが漂う裏庭では、マリアンが洗濯物を取り込んでいた。

「あら坊ちゃん、また来たのかい」

「こんにちは、マリアン。アゼルいる？」

ちょくちょく通ううちに、すっかり帽子屋の面々とも顔なじみになってしまった。

マリアンはこの帽子屋のおかみさんのような存在。元々若い頃は貴族の家でメイドをしていたらしいのだが、本人曰く、貴族のお堅い雰囲気は水が合わなかったらしい。いい加減嫌気が差した頃に、その貴族の家にも出入りしていた大旦那に仕事の口はないか相談したところ、彼の家の住み込みの家政婦を打診され、翌日には引っ越していたそうな。

そんなマリアンは、オレが伯爵家の人間だと知っても、特に礼を取るわけでもなく、その辺の子供と同じ扱いをする。彼女曰く、一般家庭の裏木戸から前触れも無く供も付けずに一人で友達を訪ねて来るようなガキは、貴族扱いするに値しないのだそうだ。なぜなら、数多の尊い貴族様方と比べるのもおこがましいからだと言う。

「‘敬語’とは‘敬う’言葉、と書くんだよ」

彼女なりの、もっと貴族らしく振る舞え、という忠告なのかも知れないが、その一言で彼女のメイド時代が窺い知れようというもの。

そして、「あんたはアゼルの友達だろ?」とイタズラっぽくウィンクを飛ばしてきたのだ。

「あぁ、キッチンでクッキー焼いてるよ。」
「オッケー」

庭の飛び石を渡ってキッチンの勝手口を開けると、アゼルが真剣な眼差しでオーブンの中を覗き込んでいた。こちらを見もせずに話し出す。

「ねぇ、マリアン。あと3分くらいで焼けるんだけど、見た目こんな……」

マリアンが返事をしないことで振り返った途端。オレを認めると、ただでさえ大きな瞳を更に大きくした。

「クレス!もう来たの?早くない?」
「あぁ、猛ダッシュで走ってきたから」

その割には全然息も切れていない。

「フツーは走れる距離じゃないけどね…」

驚いた次は軽くため息をついて呆れていた。

「まぁウサギだからな」

なんてことない風に肩をすくめてみせる。

「クレスが一人で走ると、お屋敷からどのくらいで来れるの？」

戸棚からカップを取り出し、紅茶を注ぎながら聞いてくる。

「うーん、２０分くらいかな」

ちなみにダイヤ地区のはずれにある屋敷から、ハート地区の中心にある帽子屋までは馬車で１時間はかかる距離だ。ちなみにアゼルを抱えて走ると３５分くらいだろうか。

「えぇっ！？…っあっつ！」

「っ、大丈夫か？」

驚いて顔を上げた拍子にカップからお茶が溢れた。慌ててカップを取り上げ、手近にあったティータオルを当てる。

「『役者』って、やっぱりすごいんだね…」

感心したのか、呆れたのかわからない声音でつぶやきながら、紅茶を淹れなおしたカップを出してくれる。

「オレの場合は足が速いだけだけどな」

実は聴力と嗅覚も人のそれ以上にいいのだが。話したことあったかな。

「もうすぐ焼けるよ。座って待ってて。」

ミトンを手にオーブンの傍に向かうアゼル。

「変なモノ入れてないだろーな？」

ニヤニヤ笑いながらからかってみる。

「…無理して食べなくていいし。」

大きな青紫の瞳を細めてじっと睨んだと思うと、唇を尖らせ背中を向けられてしまった。

「一番最初に毒見してやるよ」

意地悪ぶって更に続ける。アゼルの焼いたのなら、全部食ってやってもいい。

…廊下から誰か来る。杖の音がするから大旦那か。

「他のみんなが腹壊す前に」

「クレスにはあげないんだからっ」

「お、クレセント坊ちゃんじゃないかね」

アゼルが怒鳴りながら振り返ったちょうどその時、廊下からＨａｔｓの主、レオナルドが杖をつきながら現れた。

「大旦那様」

思いがけず主人がやってきて、アゼルが少し慌てる。

「いい匂いに釣られてねぇ。呼ばれる前に降りてきてしまったよ」

「こんにちは、大旦那」

お邪魔しています、と立ち上がって挨拶をする。身分からすれば必要ないのだが、そうさせる何かが、この老人にはある。

「ゆっくりしていきなさい。…しっかし、伯爵家の坊ちゃんがクッキーの毒見とはなぁ」

本当にここの連中は、曲がりなりにも伯爵家令息のオレが自分たちの家の台所でお茶を飲んでいても、なんとも思っていないらしい。…だからこそ、入り浸ってしまうのだが。

「いよっこいしょ…っと。…あぁ、ありがとう」

大旦那は膝が悪いらしく、いつも杖を使っていた。支えようと手を貸したアゼルに礼を言う。カラカラと笑いながらオレの向かいに腰を下ろした。

この国1番の帽子職人、レオナルド。齢70に届こうという彼は、先々代のハートの女王の時代から「王室御用達」の免状を頂き、芸術と呼ばれる美しい帽子を作り続けている第一人者だ。

だが当の本人は驕ることもなく、誰とでも気さくに言葉を交わす人

物である。
現在は高齢を理由に現役を引退、息子のウォルターにＨａｔｓの看板を譲ったものの、現女王がレオナルド指名で帽子を注文し続けているので、今だ「王室御用達」の免状はレオナルドの下にある。この免状はＨａｔｓではなく、レオナルド個人が頂いているものだった。
だがレオナルド自身は７０歳になる前に返上すると公言しており、次は誰が免状を頂くのかが貴族たちの間で密やかに注目を集めている。

「大丈夫です、大旦那様。クレスにはあげませんから」
大旦那にお茶を出しながらアゼルがまだ拗ねた声を出す。
「大旦那が腹壊したら困るだろ」
立ち上がってオーブンから天板を取り出しているアゼルに近寄る。
「…クレスの分にだけ水銀入れてやる」
…恐ろしいことをサラリと言ってのけやがった。おぉ、怖。と肩をすくめる。
そんなオレたちの様子を見ながら、大旦那はにこやかにカップに口をつけた。
天板から網にザラザラと移されるクッキーを背後からひとつつまんだ。
焼きたてのクッキーは中が柔らかくて甘かった。

「あっ、ダメって言ってんのにっ」
「中やわいぞ、これ」
いつもと違う歯ごたえに、思わず今自分の齧った断面を見やる。
「そりゃ焼きたてだから。冷めればいつも食べているようなサクサクになるよ」
「……そうなんだ」
母のお茶会で皿の上に載っているクッキーしか知らないオレは少し驚いた。
「ほら、クレスどいて。熱いから」
アゼルが2枚目の天板を出してきた。
もう一枚口に放り込んでテーブルに戻る。
「焼きたてもまた美味いだろう？」
まだ口をもごもごさせているオレに、目を細めてレオナルドが笑った。
「あらあら大旦那様、わざわざ降りて来なくてもお部屋まで運びますのに」
マリアンが大きな洗濯籠と一緒に勝手口から現れた。
「今日は天気がいいからね、たまには外でみんなでお茶にしようか。

アゼルのクッキーも成功したようだし」

その場の女性陣の顔がパァッと輝く。

「もちろん、クレセント坊ちゃんも呼ばれてくれるね？」

「喜んで」

断る理由なんてどこにもない。

「じゃあ外にテーブルを用意しましょうね。みんな手が空くといいけれど」

私もお客様にお茶をお出ししたら参ります、とマリアンがうれしそうに言った。

A tea party

…そもそも帽子屋は普通に営業中なので、全員集合など土台無理な話なのだが。
結局は基本的には隠居の大旦那と、アゼルとオレだけが外に用意された丸テーブルに着いていた。マリアンは客にお茶とアゼルが先ほど焼いたクッキーを振舞ってからやってくる。
他の面々は手が放せなかったり、接客中だったり、外出していたりした。

絶対くっついてくると思ったレイズは、今日から帽子成型を手伝っているということで若旦那と作業部屋に籠っているらしい。
オレにとっては朗報だ。アゼルと一緒にくっついてくる回数が減るってことだよな？このままフェイドアウトしてくれることを切に願う。

テーブルには各々のティーカップとミルクとシュガーのポット、アゼルが焼いたクッキー、マリアンが昨日焼いたというアプリコットタルト、ダークチェリーケーキが並んでいた。
アゼルがそれぞれのカップに紅茶を注いでいく。

「『帽子屋』のタトゥーはどんな影響がありますか」

ミルクを足してもまだ熱い紅茶を一口すすって、大旦那にかねてから聞きたかったことを聞いてみる。

「おや、三月ウサギは知らなんだか」
「自分のはわかりますが、本には人によって影響の出方が違うと書

いてあったので」

書物には主だった特徴は挙げられているが、個人差がかなりあるらしい。

「『Ｔｈｅ　Ｈａｔｔｅｒ』の特性は、奇行、薬品の扱いに長ける、幻覚を見る者も昔いたらしいが、わしは無いな。わしの場合はまるでギャグのようにそのまま帽子屋になったがの。水銀やらなにやら薬品を扱うのは得意だが、それだけ…かのぅ。奇行は…たぶんないぞ」

はっはっはっ、と笑いながら最後の方は惚けていた。

…今度サーシャあたりに聞いてみよう。

「…必ず帽子屋を職業にするわけじゃないんですか？」

横で黙って聞いていたアゼルが口を開いた。この国一番の帽子屋である主人が『Ｔｈｅ　Ｈａｔｔｅｒ』のタトゥーを持っていることに何の疑問も持ったことが無かったのだ。だからこその証のような。

ニワトリが先かタマゴが先か、という話ではないが、帽子屋だからタトゥーが出たのか、タトゥーが出たから帽子屋を生業としたのか。レオナルドの場合は…どちらかと言えば後者らしい。タトゥーも職業選択の理由の一つとなったわけだ。

「わしはむしろ稀なケースじゃろうな。坊ちゃんこそ、人間なのに『ウサギ』じゃないか」

「…なろうにもなれませんけど」

オレはクッキーを頬張りながらうなずいた。

そもそも人間じゃない。

だからこそ、その影響も人外のものとなる。ただ、本当に超能力となるか、人より若干優れている程度で収まるかは、その人間次第。

オレの場合は「ウサギ足」に関しては超能力と言っていい。耳や鼻も、今までの経験からすると、多分普通の人のソレよりはかなり良いのだろう。

だから、『役者』は自分にタトゥーがあることをあまり公にしないことが多い。それでも人々の口に戸は立てられない。多かれ少なかれ、広まっていくものだが、オレも幼い頃はあまり外に連れ出してもらえなかった。隠すと言うよりは、いきなり駆け出して自分が怪我をしたり、誰かに怪我をさせたりするのを防ぐ為だ。

大旦那はダージリンティーを一口飲むと、逆に聞いてきた。

「…坊ちゃんのタトゥーはいつ現れたんだったかな」

「9年前です」

3歳のある日、突如左胸に『Ｔｈｅ　Ｍａｒｃｈ　Ｈａｒｅ』の文字が浮かび上がった。

当時のことはほとんど覚えていないが、周囲の大人が大騒ぎし、親に連れられて城に行った記憶がある。他の『役者』も、城に行ったりするのだろうか？

また、疑問。

「…あぁ、ダリルが逝ってそんなに経つか。」

一瞬遠くを見つめてつぶやく。

ダリルとは、先代の三月ウサギだ。

「先の三月ウサギはスペード地区の踊り子だったと聞いていますが」

「そうそう、若い頃はとにかく気の荒い女でなぁ。気に入った男とはすぐ寝るし、気に入らないヤツはすぐナイフで切って捨ててたな」

だが、歓楽街スペード地区でも1，2を争うシアター「ブラックジャック」で常にＮｏ，1の人気を誇る美貌のダンサーだったそうだ。

…物騒な女には違いないが。

「その人が、クレスの前の『三月ウサギ』だったんですか」

初耳だったのだろう、カップから口を離しアゼルが聞いてくる。オレも直接の面識なんて、もちろん無い。ただ、ダリルが有名だったから、大旦那と知り合いだったからわかったこと。

「前にも言ったろう、アゼル。次に誰の体にタトゥーが出るのかは全く予測不可能での。家柄も性別も先代との関わりも何も関係ないのだよ。わしも先の『帽子屋』のことは何も知らんしの」

わしが先と現在の『三月ウサギ』を知っているのは、単なる偶然に過ぎないよ。現『役者』で自分のタトゥーの先代が誰だったかなんて、知っている人間はほとんどいないだろう。当然、その時点で死んでおるしあまり自分からは広めて歩かないからな。

大旦那がケーキにフォークを入れながら続ける。

「タトゥーを持っている『役者』は世界に一人ずつだ。『Ｔｈｅ Ｈａｔｔｅｒ』は今現在わしだけなんだよ。だが絶えることはない。『役者』が死ねば、次の瞬間から他の人間にタトゥーが現れる」

だから、ダリルが死んだ瞬間が、次のクレセント坊ちゃんにタトゥーが出た瞬間だよ。

と、大旦那はアゼルにゆるゆると微笑んだ。

黙々とクッキーを食べながら、アゼルに言って聞かせる大旦那の話を聞いて、ぼんやりと考える。

…先代が死んだ瞬間に次の依り代にタトゥーが出る。次々と途切れることなく体を乗り換えて、

……何か、寄生されているみたいだ、と思った。

「ですが、予測出来ないとは言っても、１５歳以上でタトゥーが出たというケースは過去にも例がないそうですよ」

ようやくやってきて、席に着いたばかりのマリアンが口を出してきた。今までしなかった声に、物思いの淵からはっと浮上する。

「ということは、『役者』が死んだ瞬間にこの国で15歳未満の子供であれば、誰でも可能性があるってことですよね」

マリアンの発言に、じゃあ私にも出るかも知れないんですか?と、アゼルが実感が湧かない、という風に大旦那を見上げた。

「そうだね。アゼルが15の誕生日までに、誰か『役者』が死ねば、出るかも知れない。…『Ｑｕｅｅｎ』と『Ｔｈｅ　Ｄｕｃｈｅｓｓ』だけは違うようだが」

冷めてきた紅茶を一口飲んで大旦那が言った。

「女王様?」

頭の上にクエスチョンマークを浮かべたアゼルが聞き返した。

「『Ｑｕｅｅｎ』と『Ｔｈｅ　Ｄｕｃｈｅｓｓ』のタトゥーは貴族だけに出るんでしょ?」

クッキーを飲み込んでから答えてやる。現女王のスート（紋章）はハート、前女王はダイヤだった。公爵夫人についてはクレス自身は聞いたことがない。噂話が飯のタネの貴族社会だ、おそらく両親や兄に聞けばすぐわかるだろうが。

「4大伯爵家以上の家の子に出るらしいぜ。なぜか両方女なのに、男子に出たこともあったんだって」

「え、男なのに女王様になるの?王様じゃなくて?」

アゼルの頭にさらにクエスチョンマークが増えた気がする。

「実質は王なんだが、国の最高権威は『女王』のタトゥー保持者だ。だから男であっても、女王、と呼ぶんだよ」

「へぇ…じゃぁ公爵夫人が男の人だったりもするんだ…」

なんとなく納得したのか、目をぱちくりさせながらオレと大旦那を交互に見た。

「そもそも、なんでそんなのが出るんだろう」

つぶやきながらアゼルが視線を落とし、アプリコットタルトと格闘を再開した。

タルトの土台にフォークを入れたら、サクサクのクッキー生地はそこからまた二つに割れてしまった。小さくなったそれにごく小さく息をついて、なんとかフォークの腹に欠片を乗せようと試みる。

「歴史書には、この国の有事の際には重要な役割をする…みたいなことが書いてあるんだけど、昔すぎてよくわかんないな。特に国から何をしろって言われるわけでもないし、特に強そうな感じもしないしなー」

日常生活にはさして直接影響していない。…今在るこの世界、タトゥーがある自分が《日常》なのだから。『役者』でない自分など、この世界には存在しない。

「三月ウサギの特性はなんだったかな。俊足、五感の発達、活発な異性関係だったか」

大旦那がニヤニヤしながら振ってきた。

「未来の色男だねぇ！坊ちゃんキレイな顔してるし、モテるよぉ絶対」

アゼルもうかうかしてられないねぇ、とマリアンも便乗して冷やかしてくる。

え、何が？とアゼルが顔を上げる。

「オレはもう人より足が速いし、耳も鼻もいいから、最後のはもういいんですっ」

オレは顔に血が上るのを感じながらまくし立てた。

…大の大人二人していたいけな少年をからかうな。そしてアゼルにまで振るな。

特に疚しいことなど何も無い。何も無いのだが。それでも。

オレが焦っている元凶の方をちらと見やると、１０歳のアゼルにはイマイチ意味がわからなかったらしく、口に入れていたタルトを飲み込むと…爆弾を落とした。

「クレス、イセイカンケイってなに？」

「アゼルは知らなくていい！」

…思わず立ち上がって、真っ赤になって怒鳴っていた。

大爆笑している大旦那とマリアンを睨みつけて、アゼルの前でこのネタを出すのはやめよう。と真剣に思った。

The March Hare（前書き）

前話のお茶会より、数ヶ月前の話です。

Solitaire ＝ ソリティア。

The March Hare

いつもと変わらない1日のはずだった。

その日も朝から拷問にも等しいマダム・ジーナの講義があり、

いつものように隙をみて抜け出した。

そして始まる鬼ごっこ。

本当にいつも通りの伯爵家の風景だったのに。

あの日から

世界がそれまでとは全く違って見えるようになってしまった。

◆◆◆◆◆

「――――坊ちゃん！！今日という今日は逃がしませんっ――――！！！」

「出来るもんならやってみなーー！」

面白半分に、かなり速度をセーブして廊下を走る。

３歳のとき、突然何の前触れもなく左胸に『Ｔｈｅ　Ｍａｒｃｈ　Ｈａｒｅ』のタトゥーが出た。それの影響で普通の人間じゃありえないくらい走るのは速いし、ジャンプ力もある。我ながら本当にウサギみたいだ。

もっと幼かった頃は、スピードの加減とブレーキがうまく出来ずよく壁に激突して骨折したりしていたが、最近はかなり加減が利く。

当然、毎朝恒例のこの鬼ごっこも、今のところ無敗記録更新中だ。

友達とはやる前から勝負がついているのでそもそもやらない。

……本をなぞっているだけの講義なんて、時間の無駄としか思えない。たとえ同じ本でも、お気に入りの木の枝の上で目を通した方が

よっぽど頭に入ると思う。部屋で机に縛られるより、森で銃の練習でもした方がはるかに有意義な時間を過ごせるというものだ。

教養は伯爵家の一員として必要だとはわかっているし、机の前以外で本にはきちんと目を通している。ただ、あのスタイルがどうしても性に合わない。マダム・ジーナも、本当のところはオレが本の内容を理解していることは知っているし、追いかけても追いつけやしないことも百も承知だ。

……だったらなぜ毎朝こんな鬼ごっこをしているのかって？

オレを机に座らせて講義をするのが彼女の仕事で、オレはそれが嫌だからに決まってる。

一度まだマシかと思って外で講義をすることを提案したが、下に敷いたブランケットにバッタが飛んできただけで、あえなくその日の講義は終了になった。

廊下の角を曲がると、トレードマークのシルクハットを被った帽子屋が母の部屋から出てくるところだった。
足音に左を見やった帽子屋は、笑いながら猛ダッシュで走ってくるオレと鬼の形相のマダム・ジーナを認めると、軽く目を見開いて足を止めた。

そのまま彼の後ろをすり抜けようと、スピードを落とさず突進するオレ。
進行方向に人を見つけ、叫ぶマダム。

「――――帽子屋様っ――――危ないっ…」

この間、約3秒。

後5歩で帽子屋の背後を抜けようというその時。

予想外に、帽子屋の後に続いて人が出てきた。

さすがのオレも残り４歩じゃ止まれない。ジャンプをしてもこの距離じゃ相手の頭に飛び蹴りを食らわせるだけだろう。…まぁあらかじめわかっていたらちゃんと止まれるんだが。

…結果、その出てきたもう一人に豪快に体当たりを食らわせた。

「…うわぁっっ」

◆◆◆◆◆

大旦那様に続いて伯爵夫人の部屋を下がろうと廊下に出た瞬間。

「え？……きゃあぁっ！？」「…うわぁっっ」

左からものすごい勢いで黒っぽい髪の男の子が突っ込んできた。

…と確認するかしないかで、体当たりされて右に吹っ飛んでいた。

◆◆◆◆◆

目が覚めたのは、見知らぬベッドの上だった。

「…あぁっ！よかったっ君、大丈夫？気分はどう？」

見知らぬ男の子が枕元で声を上げた。ちょっと目が赤い。

…

……

……あれ？どこだろ？ここ。

何であたしこんな豪華なベッドで寝てるんだ。

なんだか頭がボーっとする。

「あぁ、アゼル、無理に起き上がらなくていいよ。脳震盪だからね。」

もう一人、部屋にいた知らない女の人が声をかけて近寄ってきた。

「そのままでいいから。これ、何本に見える？」

指を一本立ててみせた。

「…一本です」

「じゃこれは？」

次は三本。

「三本です」
「じゃあこの指をじっと見て」

今度は目の前に人差し指を立てて、ゆっくりと左右に動かした。
その動きに合わせて眼球も左右に振れる。

「うん、大丈夫そうね。」

「君、アゼルっていうんでしょ？さっきは本っっ当にごめん！！！
わざとじゃないんだ！」

何がどうなってるのかさっぱりわからない。

あたし、今日は大旦那様について朝一で伯爵様のお屋敷に上がって、
夫人に仕上がった帽子をお届けして…

……あぁ、そうだ。

夫人の部屋を出た途端に、この枕元にいる男の子に突撃されたんだ。

よく見ると、この子もあちこちに絆創膏を貼っている。

ぼやけた頭でなんとか思い出すと、あたしは首を少し右に傾けて、さっきからひたすらあたしに謝っている男の子を見た。

さっきは黒っぽく見えた気がしたけど、グレーに茶色の混じった長めストレートの髪に、それより濃いグレーの瞳。あたしの周りにいる男の子たちと比べても、かなりキレイな顔の部類に入るんじゃないだろうか。年はちょっと上かな。

白い綿のシャツにモスグリーンのベスト、黒系チェックのハーフパンツ。かなり上質なものだと思う。

「あなたは…」

「オレ？オレはクレセントっていうんだ。ここん家の三男だよ」

言われれば、伯爵夫人と少し似ているかもしれない。

「クレセント…様？」

「オレのことはクレスでいいよ。気持ち悪い？頭痛くない？ねぇ、アゼルって今いくつ？帽子屋ん家の子なの？」

「クレス坊ちゃん、いくら使用人でもレディに年を聞くなんて失礼です。アゼル、どっか痛むとこない？一応、骨には異常なかったけど」

矢継ぎ早に質問されてぽかんとしていると、さっきの女性が聞いてきた。

「…あ、はい。……いっっつっ」

右手をついて起き上がろうとすると、肩のあたりに鈍痛が走った。慌ててクレスが背中を支えてくれる。起き上がると、背が高い。

頭が冴えてくると、肩から、手首から、体のあちこちがズキズキ痛いことに気がついた。特に右側。

「ありがとうございます。…クレス様」
「様はいらない。敬語も使わないで。」

「でも…」

伯爵家の坊ちゃんに、そんなわけにいかないでしょう。

「どれ、ちょっと見せて」

私たちのやり取りに少し微笑みながら、女性が近づいてきた。

「坊ちゃん、ちょっと向こうに行っててくださいな」
「うん」

クレスがドア続きの隣の部屋に行くと、女性はあたしの濃い緑色のワンピースの上を脱がせた。
右肩から二の腕にかけて、青黒く打ち身になっていた。

「さっきは見た目なんともなかったけど、やっぱり色変わったか。…シップしときましょう。しばらく痛むと思うけど、我慢してね。あと、さっき手ぇついて痛がってたけど、手首は？」

女性は慣れた手つきでシップを当て、包帯を巻いてくれた。

「あの……大旦那様は…」

さっきから気になってしょうがなかったことを聞く。この後、まだ伺わなければならないお屋敷が2件ほどあったはずなのに。

「帽子屋は次に行くところがあるといってあの後すぐ帰ったよ。あなたは坊ちゃんに体当たりされて脳震盪を起こしちゃったからね。すぐに動かせなかったし、こちらできちんと手当てをして帽子屋まで送ります、と言っといたよ」

手首にも包帯を巻きつつ、あっさり答えてくれた。

「…そうですか。」

早く帰らないと。今日はこれからやる仕事があるのに。

「どれ、左は…この辺痛む？」

左肩を少し押された。またも鈍痛に顔をしかめる。

「…まぁ右ほどじゃないか。湿布だけ貼っとこうね。」

左肩にも湿布を貼られた。湿布草独特のツンとした匂いが鼻をつく。

…今日はお店に出られないな。

「はい、他に痛いとこある?」

「いえ、大丈夫です」

「ん、じゃあもう服着ていいわよ。右は床に打ちつけちゃったからちょっとひどいね。…ほんっと、坊ちゃんには困ったもんだわ。」

「…はぁ。」

そんな肯定も否定もしづらいことを。

ワンピースのボタンを留めながら、なんだか間の抜けた返事をしてしまった。

「坊ちゃんは人より足が速いからねー、痛かったでしょう?あの子に体当たりされるなんて、軽く交通事故だから」

…すごい言われようだ。

「…痛いと思うより、びっくりしました」

「あはは、そうだよねぇ」

女性は笑いながら、隣の部屋に声をかけた。

◆

「アゼル、大丈夫??痛む?」

隣の部屋からさっきの少年が心配そうに駆けてくる。

「はい、ちょっと痛いですけど…大丈夫です、クレス様」

「様はいらないって言っただろ」

クレスは整った顔を不機嫌そうに歪めた。

「ですが…」

そんなこと言われても、この人伯爵家のお坊ちゃんなのに友達みたいな話し方をしたらきっと絶対怒られる。

手当てをしてくれた女性に視線で助けを求める。

「坊ちゃんがそう言うんだから、この家の中なら普通にすればいいわよ。外ではきちんとしてもらわないといけないけど」

そんな風にあっさり肩を竦めて言う。

「…わかりました」

大人にもそう言われてはしょうがない。この人も使用人っぽいけど、敬語は使っているが、クレスに対してかなりフランクだ。

とっても気が引けるけど、恐る恐る言い直してみる。

「じゃあ……ちょっと痛いけど、大丈夫だよ、クレス」
「よく出来ました。もうランチの時間だよ。アゼルも一緒に食べよう？」
さっきと打って変わって満面の笑みのクレスが言った。
……帰らないといけないのにな。

The March Hare（後書き）

Swear in as your・・・

あ、と思ったときにはもうぶつかっていた。

2回転くらいしてようやく止まる。

「……っつっーー、いってぇ……」

「アゼルっ」「坊ちゃん！」

頭を振りながらなんとか起き上がる。マダム・ジーナが鬼の形相で駆け寄ってきて、オレをひっ立たせた。

「だからあれほど止まりなさいと言ってるんです！！！人に怪我をさせてからじゃ遅いんですよ！？ほんっとにあなたって人はいくら言っても聞きやしないんですからウサギが聞いて呆れます！ウサギの長い耳はお飾りですか！？ほら、ご覧なさい！！」

マダム・ジーナは一気にそうまくし立てると、オレを乱暴に、今さっきぶつかった子に向かせた。

耳元で大声を出されて耳鳴りがする。ウサギよろしく、耳もいいのだ。

3歩前には、濃い緑色のワンピースを着た女の子がうつぶせで倒れていた。銀のゆるくウェーブのかかった髪が散っている。

…全然、動かない。

耳鳴りが止んで、顔から血の気が引いていくのがわかる。急に怖くなった。

母さんも部屋から出てきて、使用人を呼んでいた。

「頭を動かさないように」

使用人が駆けてきて、足の悪い帽子屋に変わって使用人が二人がかりで向かいの客間に運ぼうと慎重に抱き上げた。

抱き上げられて上を向いた少女の顔は、蝋人形のように真っ白だった。

◆

それから、マダム・ジーナと母さんからこってり絞られた。もう二度と廊下でダッシュはしないと約束させられる。
オレはおとなしくうなずいて謝った。

だがそんな間にも、脳裏にあの少女の白い顔が焼きついて離れなかった。

あの子は大丈夫だろうか？打ち所が悪くて、もう目を覚まさなかったらどうしよう？

「ちゃんと聞いているんですか！？」

半ば上の空になっていることをさらに咎められ、もう悲しいやら、情けないやら、恥ずかしいやら、気持ちがぐちゃぐちゃで目に涙が溜まってきた。

「マダム・ジーナ」

情けないことに声が震えてくる。

「あの子、ちゃんと目ぇ覚ますよね？」

一粒こぼれそうになった涙をシャツの袖でゴシゴシこする。

「大丈夫ですよ。ただの脳震盪みたいですから。体に痣はできるでしょうけどね」

マダムが少しだけ表情を緩めて言った。最後はやや嫌味っぽく。

「全く、使用人とはいえレディの体に傷をつけるなんて、紳士の風上にも置けませんわ。彼女の意識が戻ったらちゃんと謝罪なさい」

普段全然怒らない母さんが、呆れてものも言えない、と言う風に続けた。視線が痛い。いたたまれなくなる。

「…はい」

項垂れて部屋を出ると、すぐさま少女が運び込まれた部屋に向かった。

三男とはいえ伯爵家に生まれた男として、紳士たるもの女性に対してどういう振る舞いをすべきかは物心が付いたときから叩き込まれている。

わざとではないにしろ、敵でもない女性を傷つけるなんてタブー中のタブーだ。

…オレって最低だ。

ドアの前で思わず自己嫌悪のため息をついた。

…もう目を覚ましただろうか？

大きく深呼吸を一つして、遠慮がちにノックをしてドアを開けると、ラティカがいた。女性ながら、我が家の用心棒兼自分たち兄弟の格闘全般の師匠。応急処置の心得もあるので、医師を呼ぶまでも無い怪我などは、ほとんどの場合彼女が診てくれる。

ベッドにはあの子が寝ていた。

「その子、具合……どう？」

「もうすぐ起きると思いますよ。廊下がカーペット敷きだったのが幸いして骨までは逝ってませんね。まぁ青タンはあちこち出てくるでしょうが」

恐る恐るベッドの脇に近づく。

床に散っていた銀髪が、日に当たってキラキラ光っていた。眉もまつげも白に近い銀で、頬骨の辺りには少しそばかすがある。たぶん年は、オレのちょっと下くらい。

一瞬でよくわかんなかったけど、瞳は青っぽかった気がするな。帽子屋に女の子がいるなんて知らなかった。あの帽子屋の孫だろうか。でも、自分の孫が倒れたにしては全然動じた風ではなかったし、やっぱりただの使用人か。

……どうしよう。めちゃめちゃカワイイぞ。

「あんまり見てると穴が開きますよ」

ハッとしてラティカを見上げると、目を細めてニヤリと笑われた。
なんだか心の一部を見透かされたような気がして、急にどぎまぎする。

「嫌われないように、しっかり謝ることですね」

顔が熱くなってくるのを感じて、ぷい、と横を向いた。
ラティカはくすくす笑いながらオレの横顔を見て、

「あぁ、そこ擦りむいてますね、消毒しましょう」

といって薬箱を取りに行ってしまった。

部屋に二人きりで取り残される。

…ラティカがいない間に目を覚ましたらどうしよう。

そんな不安が胸を過ぎるが、コレと言って出来ることも無く、ただ枕元の椅子に座ってラティカが戻るのを待つ。

何をするでもなく、意識の無い少女をまじまじと観察してしまう。寝顔にかかっていた髪をそっとよけてみる。

アゼル、とか言ってたな。

目を覚ましたら、なんて言おう。口利いてくれるかな。怒るかな。泣かれるかも知れない。

…泣かれるくらいだったら、まだ怒鳴られた方がマシだな。

実際、女の子に泣かれるのはすごく、すっごく苦手だった。たとえ相手のほうが悪くても、泣かれたら最後、どうやっても男の方が悪いことにされてしまう。どうしたらいいのかわからなくなるし、いたたまれない。周りに人がいたらなおさらだ。あれは反則だと思う。

…でも今回ばかりは自分に非があるのだから、しっかり謝らないと。男が廃る。

そんなことを考えていると、小さくノックの音がしてラティカが戻ってきた。

膝やら、手やら、あちこち擦りむけていたが、そんなことは日常茶飯事で全然気にも留めなかった。と言うより、全然それどころじゃなかったから気づかなかったんだ。認識した途端じくじくと痛み出したそれらに、ほんの少しだけ眉をひそめる。

「…ラティカは、怒ったり呆れたりしないのか？」

淡々と傷に絆創膏を貼ってくれるラティカに聞く。怒るでもなく、呆れるでもなく、師匠はいつもと全く変わらない調子で少しだけ口角を上げて微笑んでいる。
返ってきた答えは至極あっさりしたものだった。

「もう奥様やジーナさんに十分怒られたでしょう？」

私まで怒る必要はありませんよ、と言って最後の絆創膏をぺしっと貼り付けた。

「痛っ」

傷を叩かれて思わず声が出る。

「ちょっと外しますので、目が覚めたら呼んで下さいね」

と言い残し、ラティカはまた部屋を出て行った。

…ちょっとって、どれくらいだよ。

一つ息を吐いて、ベッドサイドの置時計とにらめっこを始める。

大人は、時間の流れは変わらないというけれどそんなの絶対嘘だと思う。ラティカが出て行ってからまだ5分しか経っていないじゃないか。こんなにじりじりと長い時間、目覚めなかったらどうしよう、という焦燥感と戦っているのに。今この時は、マダム・ジーナの講義の時間同様引き伸ばされているに違いない。
今のこの5分と、兄貴と暖炉の前でベッドに入る時間ぎりぎりまでカード勝負を粘るラスト5分が同じ長さだなんて、決して認めない。

またベッドの上に目を移す。
白銀の長い髪と、血の気の引いた紙のように白い顔。

白いベッドと相まって、

……真っ白だな。

人一人寝ているのに、こんなにも、色が無い。窓から差し込む光が更に白さを助長している。上掛けから僅かにのぞく深緑の襟元と、サイドボードの木目が余計濃く映る。

なんだか、人形みたいだ。呼吸しているのか不安になる。

……本当に生きているのだろうか？

ふと心配になって椅子から腰を浮かし、顔を近づける。

ふわっと、何か、お菓子みたいな甘い香りが鼻をかすめた。
途端、心臓がぎゅっとなる。なんだろう。

ようやくラティカが戻ってきた直後。

ベッドの中の少女が身じろぎして、ゆっくり、目を開けた。

瞳は菫の花を写したような、青みの強い紫色だった。

◆◆◆◆◆

ラティカに呼ばれて隣の部屋から戻ってみると、アゼルのワンピースの袖から痛々しい包帯が覗いている。

やっぱり、床に強打した右腕がひどい青タンになったらしい。

半ば無理矢理ランチに誘うと、少し困ったような顔をした。

「…ダメか？」

「今日はまだ、帰ってやらなきゃいけない仕事があるの」

「でもどっちにしろ、ランチは食べなきゃだろ？食べたら馬車で送るよ」

「腫れが引くまではあまりきつい仕事はできないよ、どうせ」

ラティカに言われて、アゼルは本当に困った、という顔をしてうつむく。

しばらくアゼルは、帽子屋での仕事を休んだり、減らさなければならないだろう。

…オレのせいで。また沈みそうになる。

「帽子屋には連絡しておくから、今日一日ゆっくりしていきなさい。クレス坊ちゃんの話相手になってやって」

ラティカが意味ありげにニヤリと笑った。

「…嫌でなければね」

そんなラティカを見上げ、これ以上意地を張ってもしょうがないと思ったのだろうか、小さくひとつ息をついて。

「…はい。じゃあお言葉に甘えさせていただきます」

……初めて、アゼルが笑った。

また顔に少し血が上る気がしたが。

ベッドから出て靴を履くと、アゼルの背はオレの肩より少し高いくらいだった。

「アゼル」

オレはベッドの脇に立ったアゼルに片膝で跪き、彼女の左手を取って真剣な顔でアゼルの目をしっかり見て、言った。

「アゼル嬢、この度のあるまじき無礼、なにとぞ、お許し願いたい」

アゼルはきれいな目を見開いて驚いている。

頭を垂れて、華奢な左手に額を付け、許しを請う。

「えっ……あ……」

いきなり跪いて格式ばったことを言い出したオレに、アゼルは戸惑っているようだ。

だが深呼吸を3回して、真面目な声で答えてくれた。

「……許します。クレセント。お顔を上げてください」

――――そして何者にも、あなたを傷つけさせません。

ぱっと顔を上げると、緊張で若干こわばった顔のアゼルがオレを見下ろしていた。

目が合って、ニッと笑うとアゼルも破顔した。

……あぁ、やっぱりカワイイ。

――Why can't we hear the sound of falling in Love?――

Ｓｗｅａｒ　ｉｎ　ａｓ　ｙｏｕｒ・・・（後書き）

マダム・ジーナが「ウサギ耳はお飾りですか！？」的発言をしてますが、ウサギ耳なんて生えてません。この国の住人は姿形は全員ちゃんと人間です。

…たまに能力規格外がおりますが。

A curious lovely lunch

何だかんだと説得され、あたしは今、伯爵家で昼食に呼ばれている。本来だったら、帽子屋の使用人に過ぎない私が伯爵家の方とランチをご一緒するなんて、ありえない話なんだけど。

同席しているのはクレスとラティカ。彼女はクレスやクレスのお兄さん達の銃やナイフ、体術の先生兼、伯爵家の用心棒らしい。道理で、格好も侍女さんやメイドさんなどとは違って、黒のパンツに白いシャツという動きやすい格好に、腰には銃を差していた。切れ長の藍色の瞳に浅黒い肌をして、黒金色の長い髪を後ろで一つに結んでいる。女性にしては背も高くて、隙が無い。女の人なのに『かっこいい』っていう形容詞がよく似合う感じ。

「う…わぁ」

クレスに案内されたテラスに用意されたテーブルを見て、思わず声が出た。

色とりどりに盛り付けられたサンドイッチ、スープ、フルーツ類が並ぶ。すっごくおしゃれでかわいくて、これを見て喜ばない女の子なんていないと思う。

両腕が痛いあたしのためにか簡単に食べられるものばかりだ。心遣いに感謝しつつ、夢のような昼食の席についた。

…そう、すっごく素敵なのだ。

……クレスの席の前の一部を除いて。

大きなボールに文字通り山盛りのグリーンサラダ。と、なぜかフルーツの盛り合わせ以外にクレス用に用意されたバナナ一房。

…1本ではなく、一房。……6本付いている。

私がサンドイッチを齧る傍らで、クレスは刻んだ野菜の山を豪快に切り崩していた。
しばらく呆気にとられつつ、気になったので聞いてみる。

「……クレスって、ベジタリアンなの？」

「いや、肉も魚も普通に食うけど、やっぱ野菜が一番体になじむっていうか」

…だからって、いくら成長期だからって、食べすぎじゃない!?しかもバナナ一房って、どんだけバナナ好きなの!?

「この子『ウサギ』だからね」

ラティカがターキーサンドをほおばりながら言う。

「『ウサギ』??」

「タトゥーがあるんだよ。『三月ウサギ』の。アゼルんとこの大旦那にもあるだろ」

「あ、うん。……て、えぇ?」

「3歳のときに出てさ」

タトゥー持ってる人って、『役者』ってことだよね?この国にも数人しかいないんじゃなかったっけ?うちの大旦那様は特別にしても、普通に生活してたらあんまりお目にかかる機会もそうないと思うんだけど。

でも、目の前にいる少年はその世界に数人しかいない『役者』だという。

「たぶんこれの影響で肉や魚より野菜や果物が好きだし、走るのも人の何倍も速いよ」

「…ぶつかったら相手に脳震盪起こさせちゃうくらいにね」
「いや、マジで走ったらあんなもんじゃないって」
私の皮肉をさらっと流すと、フォークで串刺しにしたプチトマトを振りながら得意そうに笑う。

……被害者本人を前にして自慢するのはどうかと。

「あぁ、ちなみににんじんは嫌いだから」

……ホントにウサギなの？

半ば呆れながら、刻み野菜の山を片付けて2本目のバナナの皮を剥いている目の前の草食動物？を見た。

◆◆◆◆◆

……遅い。遅すぎる。

もうティータイムも終わろうという時間なのに、一向に帰ってくる気配がない。

レイズはイライラしながらキッチンで洗い物をしていた。

伯爵家から、アゼルが怪我をしたので手当てをして店に送り届ける、という知らせを聞いたときには驚いた。動けないとはどういうことだ。骨折でもしたのだろうか。そもそもどうして夫人に帽子を届けるだけでそんな動けなくなるような怪我をするんだ。アゼルは反射神経も悪くないのに。何があったんだろう。

想像するだけで青くなったが、それからそう経たず帰ってきた大旦那様にありえない事の次第を聞いて少し安心したのと同時に、その伯爵家の三男坊とやらに殺意が沸いた。

おそらく、以前伯爵夫人が来店したときに一緒にいた少年だろう。

確かオレと同い年か、少し上くらいの。

…伯爵だかなんだが知らないが、アゼルに怪我をさせるなんて一度死んだ方がいい。

表の方で、急に人の気配が増えて会話が聞こえてきた。

弾かれたように拭いていた皿を放り出して、表玄関に走る。店舗内に入ると、大旦那と知らない背の高い女性が立ち話をしていた。そ

の横にアゼルと加害者であろう少年。
他にも店内には二人ほど客がいるが、それぞれサーシャとロレッタが接客していた。

アゼルのワンピースの半袖からは包帯が覗いていた。

「アゼル！」

声をかけて駆け寄る。

「レイズ」

ごめんね、仕事ほったらかしちゃって、とかなんとか言っていたがそんなのは全て流して、包帯の具合を見やる。

「おまえ、大丈夫なのか？」
「うん…、あんまり力入んないかも」

アゼルは少し呆れつつ、困ったように苦笑した。

「血ぃ出たのか？」
「ううん、青くなっただけ。シップしてもらったの」

オレの問いかけに首を振って答える。その横に若干罰の悪そうな少年。その顔を見た途端、頭に血が上る。

生かしておくものか。

「てめぇ…っ」「レイズ！」

少年に食ってかかろうとしたところ、アゼルに止められた。他の人間も何事かとこちらに気を向けている。

「レイズ、お客様の前だ。向こうに行ってなさい。」

大旦那様にも止められ、アゼルが痛む腕で弱々しくオレの背中を押した。

アゼルに押され振り向きざま睨みつけると、そいつは生意気にもグレーの瞳で睨み返してきた。

「クレス、またね」

「ラティカさん、手当てしてくれてありがとう」

アゼルは少年と女性に一声かけると、オレを押してキッチンの方に向かった。

「お前なんであんなヤツと仲良くしてるんだよ!?その怪我あいつのせいだろ!?」
「もう仲直りしたし。ちょっと変な子だけどね」
キッチンに入るなりアゼルに詰め寄った。アゼルは飄々としてちっとも怒っている様子がない。
こいつのいいところでもあるが、困ったところでもある。
アゼルは自分のことに関しては、過ぎてしまったことに対して心が広いというか、あまり関心がない。自分を大切にしない、とも言えるかもしれない。余程のことでないと怒ったり、悲しんだりしないのだ。未然に防げることなら、それなりに全力で何とかしようとはするんだけれども、それも周囲に危害が及ぶかもしれない時に限られる。
「でも、もう終わっちゃったことだし」
そんな一言で薄く笑って流してしまう、子供らしくない子供だった。
…要するに、諦めが良過ぎるのだ。
だから、オレが代わりに怒ってやるんだ。
「もうクレスには怒ってないんだから、いじめたりしないでよ。一

応伯爵家のお坊ちゃんなんだし」
「でもおまえ、名前呼び捨てにしてたろ」
「それは…、本人が、そうしろっていうから」

困った、という顔をして言った。

「それに、どうしてこんなに遅かったんだ」
「ランチをごちそうになって帰るって話だったんだけど、クレスがなかなか帰してくれないんだもん。お皿レイズが洗ってくれたの？」

片付いた流し台を見たアゼルが聞いてくるが、今はそんな話ではない。

「帰してくれなかったってどういうことだよ」
「なんかいろいろしゃべってて。ホラ、あたしたちクレスと全然違う生活してるから、面白いんだって。お皿洗い、明日代わるから」

怪我させたあげく、今まで延々引き止めていたらしい。

「使用人の生活なんて、お坊ちゃんが聞いても面白くないだろ。その手で出来んのか？」
「痛いは痛いけど…でもやらなきゃ。レイズばっかり働いても」

ほっとくとがんばり過ぎる。けなげと言うか、自分を大事にしないんだ。

「無理はすんなよ。きつかったらオレがやるから。伯爵だって何だって、おまえに怪我させるようなヤツは今度会ったらマジ殺す」

そうでなくたって、アゼルに近づく男はただじゃおかない。

「レイズ！ホントにやめてよ？クレスはあたしの友達なんだから」
「あんなヤツと友達になんてなるな！」

なんだってこいつはこんな怪我をさせられたヤツと半日で仲良くなれるんだ。

「レイズには関係ないじゃん！ぶつかったのだってわざとじゃないんだから」

…関係大有りだ。

「レイズもクレスと話したら絶対仲良くなれるよ」
「顔も見たくないね」

アゼルがこんなにしつこく言うのは、オレに前科があるからだ。…しかもかなり大量に。

まぁオレはこれっぽっちも悪いとは思ってないが。

二人が帽子屋に来てから、これまでも兄妹をからかったり、バカにしたりした近所の子供たちにはレイズがことごとく制裁を加えている。しかもこの3年間負け無しだ。その甲斐もあって、今では帽子屋の兄妹にちょっかいを出してくるヤツはほぼいなくなった。特にレイズを見ると3歩ほど後ずさる連中は多い。

ようやく銃の使い方も慣れてきたし、今度あいつに会ったら片足くらい打ち抜いてやってもいいかも知れない。
11歳の少年にしてはかなり物騒な事を考えながら、アゼルを残して部屋に戻った。

アゼルを守るのはオレだ。アゼルはオレのたった一人の妹なんだから。

……あいつ、気に入らないな。

どこが、というわけではない。ただ、目が合った瞬間から無性にイライラする。

帽子屋から帰る馬車の中で窓の外を眺めながら、クレスは無意識に口を尖らせた。

春になり日が伸びて外はまだ明るいが、大通り沿いの店は店仕舞いを始めている。…もう17時か。

ハート地区の目抜き通りにある帽子屋。普段は帽子屋が屋敷に出向いてくるので、店には以前一度母さんに連れられて短時間寄ったことがあるだけだ。その時はさして興味があったわけでもない、ほとんど記憶にも残っていなかったが、改めて見渡すとこんな店だったっけ、と既視感に似たものを感じる。実際来たことがあるのはわかっているのだから単純に思い出せないだけなのだが、ふわふわしたような不思議な感覚で周囲を見た。

さほど広くない店内には、白い壁面のいたるところに色とりどりの帽子が掛けてある。紅と黒を基調にした凝った内装で、家具もゴシック調にまとめてあった。

従業員の制服は男性が白いシャツに黒い蝶ネクタイ、黒いスラックス、女性は黒のレースが付いた深緑のワンピース。アゼルのワンピ

ースも制服だったらしい。店の奥では同じお仕着せを着た女が二人、接客にあたっていた。

そんな店内でラティカが大旦那とマリアンという従業員にアゼルの怪我を説明している最中に、奥から出てくるなり自分に食って掛かってきた少年。店内には他の客もいる、あからさまに向けられた敵意に本当だったら蹴りの一つでも入れるところなのだが、今回は場を弁えて、ぐっとこらえて軽く睨み返すだけにしておいた。

「髪の色は全然違うんだけど、瞳の色が同じだから『スミレの兄妹』って呼ばれてるの」

アゼルが言っていた通り、瞳はアゼルと同じ青紫色なのに髪は燃えるように紅かった。否、燃え盛る火を通り越してなお紅い。木炭の周囲で静かに揺らめく高温の紅。その髪の色は、兄妹の気性をそのまま写したようだ。

火の様に熱くなる兄と、月夜のように穏やかな妹。

「すごく気が短くて、特技はケンカだね。あたしには優しいけど…。

でも強いから、近所で知らない人はいないんじゃないかな。むしろ、相手の方が心配なの。ひどい怪我させてそうだから…。ホントは止めたいんだけど、いっつもあたしの知らないところでケンカしてくるんだよね」

だからレイズはいっつも傷だらけなの、アゼルはそう言って困ったように息を吐きながら肩をすくめた。アイツはいつもああやって、アゼルに近づく気に入らないヤツに牙を剥いているのだろうか。

…まるで番犬だな。

クスっと笑いが漏れた。

「ほどほどにしときなさいね」

向かいに座っているラティカが、まるでオレの思考を読んでいるかのように釘を刺してきた。

「まぁ半殺しで止めとくよ」

躾のなってない犬にはお仕置きが必要だ。

「それにしても面白いくらい正反対の兄妹だったわねー。髪の色があぁも違うと第一印象は全然違うわね。瞳はそっくり同じだったけど」

「目だけはな」

あれが兄妹なんて、言われなければまず気が付かないだろう。生まれ持っている属性が違いすぎる。

「そおねぇ、アゼルは落ち着いてるというか、ちょっと子供らしくないわね。その分あの子、レイズったっけ？お兄ちゃん。出てくるなり坊ちゃんにケンカ売るなんていい度胸だわ～。よく我慢したわね？」

ラティカもそう言って笑った。

「あそこが店じゃなくて路地裏だったら秒殺だぜ」

レイズはケンカで負けたことが無いとアゼルは言っていたが、オレが本気を出せば同年代の普通の人間なんてどうってことない。何しろ初動が違う。

もうここ最近は、全力で手合わせできるのはラティカだけだった。…悔しいが、まだ勝ったことがない。兄貴たちとはもう随分永いこと手合わせをしていない。もう自分の方が強いから。兄二人にしてみれば、やや年の離れた弟に打ち負かされるのも、手加減されるのも、プライドに傷が付くだろう。

だが、ケンカに関しては話は別だ。男には容赦も手加減も必要が無いものと思っているので、売られれば全力で潰しにかかる。…もちろん死なない程度に。以前そうラティカに言うと、後遺症や傷跡が残らない程度に、と訂正された。後遺症はともかく、男が傷の一つや二つでガタガタ言うようじゃ、器の大きさが知れると思うのだが。

アゼルには悪いが、レイズは今度会ったらタダじゃおかない。

おそらく、向こうもそう思っているだろう。

……ちなみに人はこんな二人の事を、「犬猿の仲」と言う。片方ウサギだが。

◆◆◆◆◆

その日の夜。

レオナルドは自室にレイズを呼び出した。

「どうして呼ばれたかわかっているね」

「……はい」
「お客様の前だぞ。もう少し弁えたらどうだ」
「…すみませんでした」

レイズは自分と目を合わせようとはしない。
レオナルドは内心ため息をついて続けた。

「しかも伯爵家は古くからの顧客だ。クレセント坊とモメるのは控えるように。そのくらいわかるじゃろう？」
「……アイツが、アゼルにちょっかいを出してこなければ」

…今更反省などしないだろう。
実際、今度クレセントの坊が来たら間違いなく一悶着あるに違いない。この場合『役者』のクレスが勝つのは目に見えているが、クレスもクレスで敵には容赦が無いと聞く。まぁ伯爵家の血筋はそう出来ているからな…アゼルとは親しくなったようだし、とどめまで刺してくることはなかろう。

「あれでも伯爵家の人間だ。お前が心配するような事態は起こるまいよ。アゼルも今日のことは気に病んでおらんようだし、お前が手を出す必要もあるまい」
「でもアイツは、アゼルに怪我をさせました」
「…クレセント坊といがみ合う方が、アゼルは悲しむと思うがの？」
「……っ」

レイズはものすごく不服そうに唇を噛んだ。

レイズのアゼルに対する執着は、妹思いの域を超えている。妹に近づこうとする男に対しては全く容赦がない。その男の目的が何であれ見境無しである。それがいつからなのかは定かではないが、８歳

でここに来たときには、もうその片鱗が見えていた。

―初めてレイズがアゼルをからかった近所の少年を血まみれにしたのは、確かこの家に来て1ヵ月経った頃のことだ。

それ以降も時に周りが見えなくなり、単なるケンカの域を超えかけたこともあった。運良くその場に出くわした人が止めてくれなかったら、取り返しが付かないことになっていただろう。

――ただでさえ、狂気の深遠に片足を突っ込んでいるこの少年が両手を血に染めるのは……まだ、早い。

――――いや、もう手遅れか。

レオナルドは一つ息をついて、切り出した。

「今度屋根裏部屋を大掃除して、お前たちのどちらかをそこに移そうと思うのだが。屋根裏とは言っても窓もあるし、今までとそう広

さは変わらんじゃろ。来週はカイルと一緒に片付けを手伝ってくれ」
「っ！…オレたち、今のままでいいです。相部屋で不自由はありません」
「そうは言っても、いつまでもそういうわけにはいかないじゃろう」
やはり食い下がってくるか。普通なら一人部屋を持てることを喜ぶものだが。

「じゃあ、オレが屋根裏に行きます。アゼルが今までの部屋で」
「頭に天井がつかえると思うが、大丈夫か？」
「はい。…でも本当に今のままで」

本当ならもっと早く別々の部屋をあてがうべきだったが、先代、先々代からの荷物がなかなか整理が付かず、ずっと伸ばし伸ばしになってきていた。
…元々一人が来る予定だったから、二部屋用意していなかったのだ。
いずれにせよ、そろそろ年齢的にも離さないといけない時期だ。

「では来週屋根裏が片付き次第、レイズが部屋を移るように」

まだ何か言いたげなレイズに、やや強めに言い渡す。

「もう遅いから下がりなさい」

強制的に話を打ち切った。

レイズが部屋を出ていった後、壁の一角を見やり、兄妹と初めて対面したときのことを思い出す。
妹を守るように背後に隠し、あたかも世界全体が敵であるかのように周囲に牙をむいていた少年。生意気、という表現は正しくないだろう。自分も不安だろうに、妹の手を固く握り、降りかかる全てのことから逃げるでもなく、受けて立とうとするその瞳。

――面白い。

なかなか8歳の少年ができる目ではない。

探していたのは雑用をやらせる男の子供一人で十分だったが、条件を付けて二人とも預かることを決めた。

居もしない神に祈る。

――願わくば血塗られた兄妹に、青薔薇の加護を。

窓の外は、下弦の月。

A visiter with Rose music

それから数日後。

クレスは帽子屋の裏手の建物の屋根の上に座って、帽子屋を眺めていた。

午後のティータイムを早々に切り上げると、普段は屋敷の裏の森で銃の練習をしたり、読書をしたりしているのだが、今日は思い立ってウサギ足でここまで駆けてきた。アゼルの腕の具合も気になるし、何より彼女と話がしたかったから。

正面きって訪ねていけばいいのだが、兄のレイズに会うと面倒なことになるのは目に見えているし、向こうはオレの顔を見た瞬間に掴みかかってくるだろう。本当ならその場でボコボコにしてやるところなのだが、それが出来ないなら顔も見たくない。アゼルが止めてくるに違いないから。

そんなことを思いながら、入り口でうろうろしているところを誰かに見つかったりしても嫌なので、ひとまず帽子屋の裏口と小さな庭が見える屋根の上に腰を落ち着けていた。庭に洗濯物が干してあるので、誰か出てきたらアゼルだけ呼んでもらえればいい。

帽子屋はハート地区の目抜き通りの一角に店を構えている。この道をずっとまっすぐ行けば城の正門に辿り着くのだ。ハート地区全体

がこの国の商業エリアであり、表通りには様々な高級店、有名店が軒を連ねる。だが一本裏通りに入ると、昔ながらのアパルトマンや、小さい商店街、問屋がところ狭しとひしめいていて、もっぱら庶民はこちらを利用する。今オレがいる屋根の下も、3階建てのアパルトマンだ。

……落ち着けて、もう30分は経とうとしているか。

春の日とは言え、さすがに屋根の上は暑い。今日はもうあきらめようか、と思い始めた時、勝手口から大きなカゴを抱えて誰か出てきた。銀色の髪がキラっと光った…アゼルだ。少し遠いので、眼鏡を掛けた目を細めてみる。

やっぱりアゼルだった。先日と同じ深緑のお仕着せを着て、髪を後ろで一つにまとめている。先日帽子屋に入った時、他の女性従業員が同じものを着ている姿を見たが、大人と子供でサイズが違うせいかどうにも同じものには見えず、制服だったのかと気づくのに少々時間がかかった。…アゼルが着るとかわいく見えるのはどうしてだろう。

そのまま様子を眺めていると、背伸びをしながら洗濯物を取り込もうと、物干しを見上げながらシーツを引っ張りだした。日を浴びたシーツをバサバサと抱え込むと、きゅっと抱きしめて顔を埋める。

そうそう、いい匂いがするんだよな、あれ。自分も干したてのシーツが整えられた途端にベッドにダイブして、よくメイドに怒られる。

…最近はやらなくなったけど。

その姿に思わず口元が緩む。もちろん屋根の上で一人ニヤける少年

を見ている人間は誰もいない。いたら確実に怪訝な顔をされていただろう。

だが、そうして何枚目かのシーツを引っ張ろうとした時、ふとその手を止めた。その物干しの延長にある見慣れない影に気づいたらしく、手で太陽を避けながらこちらを見上げてくる。

…見つかったらしい。

オレは立ち上がると、一気に3階の屋根から飛び降りた。

◆◆◆◆◆

今日は食器洗いの後に洗濯物を取り込まないといけない。大きな洗濯カゴを抱えて外に出た。

物干し竿はあたしの背より高いから、結構背伸びをしないとなかなか届かない。まだ肩が少し痛むので、下の方を掴んでシーツを引っ張った。春の太陽を吸い込んだシーツはいい匂いがする。願わくばこのまま昼寝したくなるぽかぽか陽気だった。

見上げながらシーツを引っ張っていると、裏通りの向こうの屋根の上に、何か不自然な影が見えた。猫か何かと思ったが、それにしては大き過ぎる気がする。引っ張っていたシーツをカゴに放り込むと、若干逆光気味の方向へ手をかざして目を凝らした。

……クレス？

なんだって伯爵家の坊ちゃんが屋根の上にいるんだろう。…見間違いかな。いや、でもクレスでなくてもあれは人だよね……って飛び降りたし！！
あそこ3階だよ！？

慌てて裏通りに出る赤薔薇の木戸を開ける。

そこにはやっぱり、眼鏡をかけたクレスが無傷で立っていた。

◆◆◆◆◆

アゼルも自分を見つけてくれたみたいなので、ひとまず陶板焼きになる前に地上に降りることにする。

通行人がいきなり上から降ってきた少年に度肝を抜かれているが、本人は周囲の視線なんてさっぱり気にしていなかった。

帽子屋の裏の木戸から入ろうと通りを渡ると、アゼルが中から飛び出してきた。

「っ！クレス！」

「やぁ、アゼル。腕の具合はどう？」

元々大きい目を更に丸くしているアゼルに、笑顔で挨拶。…びっくりした顔も可愛いな。会うのはこれで2回目だが、アゼルはどうやらあまり表情が変わらないタイプのようだ。

特に、なかなか笑わない。

先日のお茶会でももっぱら聞き役で、こちらから聞かないとあまりしゃべってくれなかった。いきなりな出来事が続いて緊張しているのもあったんだろうが、どちらかと言えば静かで大人しい性格には違いないと思う。

「今、あそこから飛び降りたでしょ？なんで屋根の上になんている

の？」
「うん。散歩中だったんだ」
軽く飛び跳ねてみせる。なんともないことがわかると、息を吐き出して、呆れたような疲れたような声を出した。
「…変わった散歩ルートだね…」
「はははははっ」
その驚きぶりが面白くてつい笑ってしまう。
「ハイ、お見舞い」
差し出した左手には、屋敷の庭から無断で摘んできたピンクの薔薇一輪。
「え、あ、ありがとう…」
今度は一瞬戸惑って、モジモジと薔薇を受け取る。そばかすの浮いた頬が少し赤くなった。
「どう？肩の調子」
「うん、まだ本調子じゃないけど。だいぶ痛くなくなってきたよ」
「そっか。仕事はどう、出来てる？」
「ほとんどいつも通り。でも痛みが引くまで銃の練習は出来ないね」
「っ…銃なんて使うのか？」
なんで帽子屋の女の子が銃なんか。

「うん、ウチの店の人はみんな使えるよ。クレスだって出来るんでしょ？」

何がおかしいのかと首をかしげる。もちろん普通の女の子は銃なんて使わない。…だがこの様子だと、アゼルは銃を扱うのが普通だと思っているらしい。ていうか、どうして普通の帽子屋が全員銃を使えるんだ。

「出来るけど…、普通の女の子はあんまり使わないよ。何に使うんだ？」

「ジェムは、いざって時に身を守るためだって」

ジェムっていうのはこの店のスタッフのことか。そりゃあ、自分の身は自分で守れるに越したことはないが。

「銃は何を使ってる？」

聞くとかなり殺傷力の低い小型のタイプだった。まぁ致命傷にはなりづらいだろうが、身を守るには十分か。

「でもあんまりうまくないんだよね。最初はレイズと同じの使ってたんだけど、反動が大きくて弾道が逸れちゃうの。だからジェムが小型のタイプに変えた方がいいって」

無邪気にそう話すアゼルだが、帽子屋はそんなに危険な仕事だっただろうか？

…帰ったらラティカに聞いてみよう。

「じゃあ今度ウチに来て一緒に練習しようぜ？」
「え…でも、お屋敷で練習なんて」
「裏の森で出来るから、母さんたちにバレなきゃいいんだ」

アゼルは少し困った顔をしたが、自信満々に請け負った。
ばれなきゃいいって問題じゃ…と未だ渋っているアゼルに畳み掛ける。恰好の口実が出来た。毎回お見舞いじゃ、先がないからな。

オレが森に出かけていけば、屋敷の人間に見つかることはほとんどない。普通の人間の足じゃ入れないようなところに、隠れ家がいくつかある。マダム・ジーナの講義をサボったときや、一人になりたいときにそこで過ごしたりする。友達にも誰にも教えたことは無いけれど、アゼルが約束を守れるんだったらその一つに連れて行ってもいいかな。この間のお詫びに、ちょっとやそっとじゃ動じそうもないアゼルが喜んでくれそうな場所に連れて行ってあげよう。

「アゼル、午後で仕事が無い日ってある？」
「……太陽の日なら一日空いてる…あと樹木の日と黄金の日は夕飯の仕度当番じゃないから、ティータイムの後は出れるかな」
「ティータイムの後か。…じゃあ太陽の日にした方がいいな。ランチの後に、またさっきの屋根の上に来るから」
「屋根の上にって…普通に表から来ればいいのに」
「店から入ったって、オレは客じゃないぜ？」

別にもてなしを受けたいわけじゃないし、それに何よりお前の兄貴と顔を合わせたくない。

「そうだけど…別に仕事中に来るわけじゃ」
「何しに来やがった、てめえ」

……言ってるそばからこれだ。

赤薔薇の木戸から今一番会いたくない顔が現れた。

A visiter with Rose music（後書き）

Ｒｏｓｅ　ｍｕｓｉｃ＝実在する薔薇の品種名。きれいなピンク色のモダン・ローズ。クレスが庭からくすねてきたピンクの薔薇。実在する品種です。

せっかくアゼルと楽しく話してたのに、最低最悪な邪魔が入ってしまった。
兄の険悪な声にアゼルが振り向く。
ひとまずは、笑顔で挨拶しておくか。
「やぁ、レイズっていったっけ」
そういって声をかけるものの、目が全然笑っていない。……もちろん、ワザとなんだが。
「てめぇ妹と何してやがる」
「何って、こないだのお見舞いだけど？」
ね、とアゼルにはさっきまでと同じ笑顔を。
「うん、どうしたの？レイズ」
兄の様子に動じるでもなく、オレの方をちら、と見てアゼルが聞き返した。
「…マリアンが呼んでる」
ホントかウソか知らないが、従業員がアゼルを探しているらしい。
「レイズは？」
「オレはこいつに話がある」

早く行けと言わんばかりに投げやりに言った。
でも、アゼルは一向に動かない。

「…なんだよ、早く行けよ」

レイズはアゼルを急かすが、その目はアゼルを通り越しクレスを睨んだままだ。
クレスもレイズの殺気を受けて、さっきまでの笑みが子供らしからぬかなり危険なモノに変わっていた。

それなりに人通りのある裏通り。レイズの素行を知っている者は、アゼルにちょっかいを出したこの周辺では見かけない顔の勇者の末路に哀れみの視線を送り、知らない者も何事かと見やりながら遠巻きにそそくさと通り過ぎていく。

うららかな春の昼下がりに、赤薔薇の生垣をバックにして三人の周囲だけ空気がどんどん冷たくなっていく。

「レイズも一緒に中入ろう」

アゼルが睨み合うレイズとクレスを交互に見て、先刻クレスが渡した薔薇を持っていない方の手でレイズの腕を掴んだ。

「先行ってろ」
「嫌。」

オレからは背中しか見えないので表情はわからないが、アゼルの声も硬い。

普段とは違うであろう物言いに、レイズはようやくオレから目を離し妹の方を向いた。

「…クレスとは、ケンカしないで」

「お前には関係ねぇだろ」

兄はオレを睨んでいたままの目で妹を見るが、妹はひるまず続ける。

「あたしの友達に、これ以上ひどいことしないで」

「…っ！」

静かに言うアゼルに、レイズが驚いたように目を見開いた。

「…なんでいっつもあたしのいないところでケンカばっかりするの？なんでみんなと仲良くできないの？せっかく友達になったって、レイズが乱暴するからあたしまで嫌われちゃうんじゃん！！」

レイズの白いシャツの袖を握り締め、一言発する度に語気が強くなる。…と同時に、語尾に少し震えが混じる。

レイズは苛立ちを隠さずアゼルに向かってまくし立てる。

「こいつは友達なんかじゃねぇっ！お前に怪我させたんだぞ！？」

クレスを顎で指し、アゼルの手を振りほどいた。

だがアゼルはなおも兄に食って掛かる。

「レイズの友達でなくてもあたしの友達なの！あたしのためにそんなことしなくていい！なんか悪口言われたって、その子やっつけてなんて、あたしが頼んだことある！？レイズに、ありがとうなんて一度も言ったことないじゃん！」

解かれた手で再度レイズの腕を掴んだ。目には今にもこぼれそうなほど涙が溜まっている。普段のアゼルはこんな風に怒鳴ったりなんてしないのだろう。全然イメージと違う。自分を落ち着けるように大きく息をして、ゆっくりと続けた。

「…それに、レイズは強いけど、クレスには勝てないよ、きっと」

その一言に、レイズはカッと顔を赤らめる。

「てめぇ、それどういう…」

意味だ、と言いながら再度アゼルの手を乱暴に振りほどこうとするレイズの手を、横からとっさに掴んでいた。

レイズはギッとオレを睨みつけてくる。アゼルはいきなり近寄ってきたオレを驚いた顔で振り返った。その拍子に、瞳に溜まっていた大粒の涙が零れ落ちる。

…今まで蚊帳の外で兄妹ゲンカを眺めていたが、いい加減見かねて、というかアゼルが可哀相で口を挟んだ。猛烈にレイズがムカつくのでヤツは睨みつけたままだが。

そしてレイズが何か言ってくる前に口を開く。

「そんなにオレが気に入らないんなら、銃で勝負しようぜ」

銃、と聞いてアゼルが目を見開いた。

「心配するなアゼル。打ち合いじゃないよ。的当てだ」

クレスはそうアゼルに言った後、レイズに向かって口元を歪めてニヤリと笑った。

「オレとしても半殺しにしてやりたいところだけどな、アゼルに免じて許してやるよ」

どこまでも挑発的なオレ様発言に、頭に血の上っているレイズが掴まれていない方の手でクレスの胸倉を掴もうとする。クレスはそれをあっさり受け止めて、条件を提示した。

「オレが勝てば、お前は今後アゼルの友達には手を出さない。もちろんオレも含めてだ。もしお前が勝てば、もう二度とオレはアゼルに関わらない。どうだ？これならどっちも怪我しないだろ？」

最後はアゼルに向けられた言葉。

レイズはオレの提案にギリッと奥歯を噛み締めた。アゼルが心配そうにオレたちを交互に見る。

「自信がない？」

ふっと笑ってさらに挑発してみる。

「ふざけんな！いいだろう、オレが勝ったら二度とオレたちの前に出てくんじゃねえぞ」

上等、と意地悪く笑うとクレスは日取りを告げた。

「じゃあ太陽の日にウチの屋敷の森でやろう。アゼルも来てくれよ？立会いはラティカに頼んでおくから」

次は正面から来るよ、と涙目のアゼルの髪をくしゃりと撫でて二人から離れる。アゼルはうなずくと、また目からこぼれた涙が石畳に2、3粒落ちて水玉模様を作った。

じゃあまた、とアゼルにだけ告げて通りを渡るとうさぎ跳びでアパルトマンの屋根に上った。

…またもやいきなり屋根まで飛び上がった少年に周囲はドン引きだったが、やはり本人はどこ吹く風。

太陽の熱を吸い込み、屋根の上は地上よりさらに暑い。ムカつく紅い髪と、青紫の涙目を思い出し、苛立ちをそのまま足に込めてクレスは疾走する。我知らずその足並みが荒くなる。その時屋根の下にいる人々は、大きなネズミでも屋根裏に入り込んだかと、ネズミ駆除の心配をした。

レイズは、アゼルがレイズ自身を心配しているのがわからないのだろうか？さらに大事な妹を一番泣かせているのは自分なのだということも。

そしてあの様子を見ると、あれはアゼルの為ではなく、明らかに自分の自己満足の為だろう。

……やっぱり今度一回シメないとだめだな。

いずれにせよ、遅かれ早かれ、クレスの中では半殺し確定なのだった。

◆◆◆◆◆

来たときと同じように、クレスはお向かいのアパルトマンの屋根に上がって、すぐ見えなくなってしまった。

クレスが『役者』だと知らないレイズは、いきなり3階の屋根に飛び乗ったクレスを信じられないという目で見つめていた。ついでに口も開いている。

アゼルは鼻水をすすり上げながらこぼれた涙を手の甲で拭う。一つ息をついて、まだ上を見上げているレイズに声をかけた。

「ほら、入ろう？」

中からかすかにマリアンが呼ぶ声が聞こえてきた。マリアンが呼んでいるというのは本当らしい。

レイズの腕を引っ張って赤薔薇の木戸をくぐる。物干しのシーツと洗濯籠が目に入った。そういえば、洗濯物を取り込んでいる最中だった。
ひとまず、マリアンのところに行かないと。

「おい、アイツ一体なんなんだ！？」

レイズがやっと我に返ったのか聞いてきた。

「クレスって、大旦那様と同じ『役者』なんだって。めちゃくちゃ足速いんだよ」

勝手口に向かいながら答える。

「『役者』！？」

レイズにしては素っ頓狂な声を出す。
だからぶつかっただけでこんな大げさな青タンが出来てしまったのだ。

クレスがあの場でああ言ってくれなかったら、白昼の往来で殴り合いのケンカが始まっていただろう。
そしてアゼルの目から見ても、どうがんばってもレイズはクレスに勝てないと思う。アゼルも護身術は習ってはいるが、実践ではやはりスピードがものを言う。

レイズも一度くらい負けてもいいんじゃないかとも思うけれど、クレスにケンカを売ったらその辺のケンカでする怪我レベルじゃすまない気がする。それにレイズがクレスに怪我をさせたら、やはり後日その責めを負うことになるのだろう。

やっぱりどちらにも怪我はして欲しくないのだ。

……クレスにはお礼言わないと。

安心と共に、レイズに対して段々腹が立ってきた。
ほんっとに、なんだって誰彼かまわずケンカを吹っかけるんだろう。

「だから勝てないって言ったんだよ。あ、洗濯物入れといてね？」

取り込みかけの洗濯物を押し付けて、返事を聞く前に苛立ちまかせに勝手口を開けた。

Who presented a rose to her?（前書き）

うっかり初めてマリアン目線が入ります。

Who presented a rose to her?

勢い良く勝手口のドアを開けるなり、甘い香りが台所に充満していた。マリアンがさっき仕込みをしていたお得意のダークチェリーケーキだ。いきなり不機嫌に入ってきたあたしを見て、マリアンは少し驚いたみたいだった。

「アゼルあんた何やってたんだい？」

「ごめんなさい何でもないの、何の用だった？」

とっさに、クレスとレイズがモメたことは言わない方がいい、と思った。

しかし、次に出たマリアンの言葉に答えを窮してしまう。

「あら、どうしたんだい。その薔薇」

クレスにもらったピンクの薔薇。受け取ってから、ずっと握り締めたままだった。よかった、レイズに取られなくて。無意識の内に乱暴に扱ってしまっただろうか、既に花弁が数枚落ちてしまっている。帽子屋の生垣の薔薇は赤いから、外から持ち込まないとピンクの薔薇はない。

「あ…これは…」

一瞬返事に困って、慌てて薔薇を背中に隠す。

「お見舞いにもらったの…」

誰から、とは言わなかった。

「ふーん……っ…レイズは大丈夫だったかい？」

あたしの仕草を見てニヤっと笑ったあと、急にあたしのところにレイズを寄こしたのを思い出したらしく、今度は心配そうに眉根を寄せ、小声で聞いてきた。

…あれは‘大丈夫’の部類に入るのだろうか？

だが、クレスのおかげであそこで取っ組み合いにならなかっただけ、ひとまずは‘大丈夫’なのだろう。

あたしは数秒考えた後、微妙な苦笑いを浮かべた。

「うん、なんとか大丈夫…」

「レイズは？」

「洗濯物取り込んでる」

「そう、ならいいんだけど。それ、活けておくビンとかあるのかい？」

そういえば、あたしの部屋には花瓶がない。ない、と首を振ると、上の棚から細長い空き瓶を出してくれた。ビネガーか何かの空き瓶だろうか。

「これに挿しておけばいいよ」

「ありがとう」

お礼を言って受け取る。

「それを活けたら、夕飯の買い出しに行ってきてほしいんだよ。スープを作るのに、ちょっとベーコンとエシャロットとかがちょっと足りなそうだからね」

あたしを呼んでいたのはそれか。
わかった、と返事をすると瓶に半分ほど水を汲んで、自室のある2階に大急ぎで上がった。

帽子屋の建物は3階建てで、1階が店舗と台所兼食堂。上顧客をもてなす応接室も1階。帽子製作の作業部屋も1階にある。帽子成型にお湯を使うためだ。
2階は従業員の私室。兄妹が帽子屋にやってきたときには一部屋しか空きがなかったので、急遽二段ベッドを入れて二人一部屋とされた。
3階は大旦那、若旦那とその娘サーシャの居室。だがここ数年、足の悪い大旦那は3階までの階段の上り下りに苦労するようになってきた。なので大旦那は2部屋ある1階の応接室の一つを改造して、膝の調子が悪い日はそこを寝室としている。

階段を駆け上がると2階にある自室のドアを開ける。
つい昨日レイズが屋根裏部屋に移ったので、元々さして広くない部屋だが、なんだか随分広く感じる。二人とも持ち物は少ない方だが、2段ベッドはレイズが寝ていた上段を分解して屋根裏に運んでいた。
……上段がなくなるだけで、こうも広く見えるものか。

ドアに背中をつけて、大きく息をついた。アゼルにしては珍しくイラついているため、若干の震えが混じる。

何も言わなかったけど、マリアンにはバレているのだろう。

レイズが薔薇をくれた人に対して食って掛かったということも、そして、それがクレスだということも。

今まで心に仕舞っていたこと、新たに心に浮上してきたこと。なんだかごちゃごちゃだ。

また視界がぼやけてきたが、大急ぎで鼻をかんでなんとかやり過ごそうとする。ふと鏡を見ると、目だけでなく鼻も赤くなっていた。

「……あぁもうっ！全部レイズのせいなんだから！！」

しばらく頭の整理が付くまで部屋に閉じ籠もっていたかった。だが、ただでさえクレスとレイズがあれだけモメて、呼ばれてから結構時間が経ってるから、すぐ降りないといくら優しいマリアンでもホントに怒られそうだ。

それにしばらくレイズとは顔を合わせたくなかったが、勝手口から出れば洗濯物を取り込んでいるレイズの横を通ることになる。

「…遂に言っちゃったなぁ」

言わない方が、よかっただろうか。今のアゼルにはよくわからない。まぁ言ってしまったことは引っ込まないのだから、いまさらだ。

いつもの諦めの早さからなのか、はたまた単なる開き直りなのか、アゼルはそこで考えることを一時中断した。

薔薇を挿したビンを机の上に置くと、また大きなため息を一つ吐いて部屋を出た。

◆◆◆◆◆

手が放せなかったので、レイズに外にいるアゼルを呼びに行かせた。すぐそこで洗濯物を取り込んでいるのだから、すぐ返事が聞こえるものと思ったら、なぜかいつまで経っても子供たちは戻ってこない。…アゼルが無理ならレイズでもいいから、早く夕飯の買い物に行って来てほしいのに。

――――――

もう、一体何をしているのやら。

「アゼルーーーーっ」

どうせドア1枚だと思って大声で呼んでみる。
それでも返事は無い。

ホントにどうしたんだろう。
あの子たち、今まで仕事を放ったらかしてどこかに行くなんてこと

はなかったのに。

さすがに心配になってきたところに、アゼルが勢い良く飛び込んできた。この子にしては珍しく怒っているように見える。

何があったのか、若干目が赤い。そしてその手には、見慣れないピンク色の薔薇が一輪。

…これか、返事がなかった理由。

どこでもらったのか聞くと、見舞いだという。お、そばかすほっぺが赤くなったぞ。

子供だと思ってたら、隅に置けないわねぇ…。

アゼルは誰から、とは言わなかった。だがこの近所でアゼルの怪我を知っていて、更に見舞いに来て薔薇なんてくれる人間がいただろうか？

……次の瞬間、マリアンの頭に先日の伯爵家の三男坊の顔が浮かんだ。

まさか、伯爵家の人間が裏口から訪ねてくるなんて。だが思いつく限り、あのグレーの髪の少年以外に候補は浮かんでこない。

そこまで思い至り、マリアンはハッと固まる。

……レイズとあの子を鉢合わせにするのは、かなりマズかったんじゃないか？

「…レイズは大丈夫だったかい？」

マリアンは先日の二人のにらみ合いを思い出し、思わず聞いてしまう。レイズのことだから、相手が伯爵家だろうがなんだろうが、アゼルの怪我に対して一矢報いろうとするだろう。大旦那様にも釘を刺されているというのに。

「うん、なんとか大丈夫…」

だがレイズが戻ってこない。アゼルに聞くと、洗濯物を取り込んでいるという。その様子だと、どうやら路上で殴り合いなどにはならなかったようだ。

…まぁそんなことになっていたら、こんな風に戻ってきたりしていないだろうし。……たぶん。

どう収めたのかも気にはなったが、ひとまず買い物に行ってもらわないと夕食の仕度が始まらない。

持っていた薔薇を挿せそうなビンを出してやると、アゼルは一目散に2階に上がっていった。

だけれど、とマリアンは考える。あのレイズが、たとえあの伯爵家の坊ちゃんでないにしろ、薔薇の花を持ってアゼルを訪ねてきた男をそのまま帰すとは考え難い。

あの子には前科がありすぎる。
アゼルの涙目といい、まだ何かあるなと腹の中で一人頷いていると、レイズが洗濯カゴを抱えて入ってきた。こちらも随分不機嫌そうだ。

「アゼルが涙目で入ってきたけど、なんかあったのかい」

すっとぼけてカマをかけてみる。

「……別に」

レイズはマリアンとは顔を合わせようとはせず、キッチン用のタオルなどをばさばさとテーブルに置くと早足でキッチンを出て行こうとした。

だが、レイズが廊下に続くドアを開けたすぐそこには、アゼルが立っていた。
今自分が開けようとしたドアが急に開いて、アゼルは「わっ」と小さく声を上げたが、レイズを見た瞬間大きな目をキッと鋭くしてレイズを睨みつけた。
そしてそのまま兄の横を素通りすると、無言で買い物籠と買い出し用の財布を掴んで外に出て行ってしまった。すれ違いざま、レイズが「おい、待てよ」と呼ぶも見事にスルーだ。

わぉ、珍しいこともあるもんだ。

無視された方のレイズは一瞬呆気に取られていたが、次の瞬間くしゃっと顔を歪めてこれまた廊下に出て行ってしまった。

怒っているようにも泣きそうにも見えたが、マリアンには判断が付かなかった。

…やれやれ。

ふと振り返ると、うっかり放置したオーブンから黒っぽい煙が上がっていた。

Who presented a rose to her?（後書き）

にしても、何回も確認して、「よしっ」と思ってから投稿してるのに、後から見直すと、あっちもこっちも直したくなってきちゃうのは何でしょうねぇ。。。。orz

Ｈｅｒ　ｏｌｄｅｒ　ｂｒｏｔｈｅｒ　ｉｓ・・・

その日の夜。

アゼルはお湯を使ってから少し広い一人ぼっちの部屋に戻り、さっさとベッドに潜って今日何度目かわからないため息をついていた。

今日は一日最悪だった。

今まで言わなかったけど、遂に本人を目の前にして言ってしまった。

仇討ちなんてされても全然うれしくない、と。

……単に言う機会がなかっただけかもしれないけど。

あれから今日はレイズと一言も口を利いてないが（目すら合わせてない）レイズを傷つけたかも知れないな。形はなんであれ、レイズはあたしのことを思って仇を討とうとしてくれているのだ。

…そう思うと、これまではあまり邪険には出来なかった。レイズが傷だらけで帰ってきても、ただでさえ大人たちには毎度怒られているのだから、あたしはもう怒らないでおこうと思って、傷の手当をしてあげるだけ。…ため息はどうしても出るが。

でもレイズは口ではあたしの仇討ちと言うけど、今回は絶対あたしの為じゃないと思う。今日のあれは、どう見てもただ単にレイズがクレスを嫌いなだけだ。
あたしの怪我に託けて、あたしに見えるところでケンカするなんて冗談じゃない。

…だけど、なんであそこまでクレスが嫌いになっちゃったんだろう？これまではほとんど接点無かったはずなんだけど……。

こないだもお店に出てくるなりクレスに突っかかって、あとで大旦那様に呼び出されて怒られていた。相手が伯爵家のクレスだったから、さすがに大旦那様も再度注意したっぽいけれど。それに大旦那様もクレスが『役者』だということは知っているだろうし。

…大旦那様は大好きだし尊敬しているけれど、あの3階のお部屋には出来る限り行きたくない。特に夜。

アゼルは寒くもないのにぞくっと身震いして寝返りを打った。

…レイズがめちゃくちゃケンカが強いのは知ってる。だけど『三月ウサギ』とサシでやりあうなんて、無茶だ。レイズにも、クレスにも怪我はして欲しくない。絶対、二人とも無事じゃ済まないもの。

そりゃあ今回の怪我はクレスが原因だが、ちゃんと謝ってくれたし、あたし自身は最初びっくりしたものの全然怒っていない。むしろ伯爵家のお坊ちゃんなのに全然お高く留まった感じもしないし、話し

ていてとても楽しい。
先日ランチに呼ばれたときも、あたしと衝突した鬼ごっこの原因や、『三月ウサギ』であるが故のトラブル（ラティカ曰く、そのほとんどが交通事故）を面白おかしく話してくれた。

その話の一部を思い出し、クスッと笑いが漏れる。

……あたしはどっちに勝ってほしいんだろう？

いつも以上に寝つきの悪いアゼルは、少しだけ昔の出来事をぼんや

りと思い出していた。

◆◆◆◆◆

帽子屋にやってきて数ヶ月経ったある日、あちこち怪我をした少年たちとその親たち数人が帽子屋に乗り込んできて、子供たちがレイズに暴力を受けている、と大旦那様に文句を言った。

3年前に帽子屋に来て、近所の子供たちとはすぐ顔見知りになった。というか、向こうに顔を覚えられた。彼らの間で、当時あたしたちのことはちょっと話題になったらしい。ある日突然帽子屋にもらわれてきて（本当は奉公に上がったのだからちょっと違う）学校にも行かず、仕事をしている兄妹。裏口から出てくるときはいつも一緒で、手をつないで買い物に行く。兄妹とは言っても遠目で見て髪の色が全然違うことも、彼らの興味を引いたのだろう。

子供の世界において、「みんなと違う」と言うことは、それだけで十分いじめの対象になりうる。

学校に行っていないから勉強が全く出来ないバカなんだとか、実はウォルター様の隠し子だとか、本当は兄妹ではないらしい、などと根も葉もない噂が立ったことも知っていた。
…バカだなぁ。あたしたちとウォルター様は似ても似つかないのに。

仕事の合間に読み書きや礼儀作法は家で教えてもらっているし、銃や体術、家事、帽子作りの手伝いなんかもどんどん仕込まれる。他の子がどうだかはよく知らないけれど、学校に行っていなくてもあたしたちはその辺の子たちより、よっぽどいろんな事が出来ると思う。

だがレイズはそんな状況でも大人たちの追及をモノともせず、笑みさえ浮かべて飄々と言い返した。

「最初に仕掛けてきたのはそちらです、オレだって無闇やたらとケンカをしているワケではありません。オレがしたことは彼らが先にオレたち兄妹のことをからかったり、嫌がらせをしたりしてきたことに対しての仕返しにすぎません。オレだけではなく、妹のアゼルに対してのものも同罪です」

そう言って、親の背中に隠れている臆病者たちの所業を並べ立てた。これまで言われた悪口の数々、その中の少年の一人に追い越しざまにあたしが背中から突き飛ばされたこと、飲みかけのジュースをか

けられたこと、などなど。

「レイズが言ったことは本当なのか？アゼル」

レイズの後ろで出来るだけ気配を消して控えていたあたしは、大旦那様にいきなり話を振られてその場に凍りついた。部屋にいた全員の視線が一斉にあたしに注がれる。

視線は目に見えないけれど身体に刺さるし、刺さると痛いものだということを、あたしはこの時初めて知った。

「……はい……」

うなずくのがやっとだったな。

更にレイズは少年たちに向かって、ケンカのときは決まって自分一人対複数人なのに、こうも自分だけ責められるのは納得いかない、悔しかったらタイマンで来い、とまでのたまった。

まさか親を連れてきてまで旗色が悪くなるとは思っていない少年たちが青くなったのは言うまでも無い。

本当にその子たちに嫌がらせをされたかどうかなんてもうはっきりと覚えていないが、顔色を変えたところを見ると大体疚しいところがあったのだろう。

……あれにはすっごくハラハラしたな。あたしと大旦那様以外みんな恐い顔して、今にも誰か怒鳴りだしそうだったもん。

親たちはレイズの態度の悪さを大げさに非難したが、大旦那様はど

こ吹く風。

「仰りたいこともわからなくはないですが、うちのレイズだけが一方的に悪いというわけでも無いようですな」

至極のんびりとした口調でそう言い、パイプをふかした。

自分の子供たちの性根の悪さを認めようとしないバカ親たちを前にして、そもそも子供のケンカに大人が出るべきではない、と言うのが大旦那様の見解。

…謝る謝らない以前に、そもそも聞いていないのだ。

大旦那様がいる前でさらにケンカを吹っかけるレイズもレイズだが、そこでレイズの肩を持ってしまう大旦那様も大旦那様だ。

然るべき理由があるなら子供たちだけで解決するべきだ、とまだぎゃあぎゃあ文句を言っている親たちをさして相手にせず、あっさり追い返してしまった。ただ、モノには限度というものがある。その辺はレイズにもよく言い聞かせておく、とそれだけは親たちに告げて。

……結局レイズも大旦那様も、一度たりとも謝らなかった。いろんな意味ですごいと思う。

だが一団が帰った後、レイズは大旦那様に延々お説教されていた。

それは主に先ほどの年長者（親たち）に対してのレイズの態度についてであって、ケンカをしたことに対してではなかった。
ケンカについては、するなとは言わないが手加減しろ、と言い含められていた。するなと言っても不可能なのは、そのときにはもう大旦那様にもわかっていたんだと思う。それまでにも傷だらけで帰ってくる度に食事抜きだったり、納戸に一泊だったり、カイルに打たれたりと、いろいろな罰を受けていたが、懲りる気配は微塵もなかった。
そんなレイズ本人は全く悪いと思っていないので、頑として最後まで謝ることはなかったが、ケンカをしても「限度」は弁えるとだけ約束させられていた。

……その約束も、あまり、というか全然役に立たないということがすぐ発覚するのだが。

なぜなら大旦那様の言う「限度」と、レイズの言う「限度」にはクレスのウサギ足でも数時間かかるであろうほどの隔たりがあったのだ。

レイズの「限度」というのは、文字通りの「死なない程度に」というものだったのだから。

……結果、数日後にはまた凝りもせず買い物帰りに生傷をたくさん作って帰ってきた。

◆◆◆◆◆

そうやってしょっちゅうレイズは自分自身にも傷を作って、時には返り血まで浴びて帰ってくる。丸腰で帰ってくるみたいだけど、得物は何なんだろう？…考えない方がいいかな。

発覚した時にはもう時既に遅し。

今回みたいにケンカの前にあたしが止めに入れたのなんて……よく考えても初めてかもしれない。帰ってきてから誰がレイズを問い詰めてもほとんど口を割らないし、周囲が止めても、今までに効いた試しは無い。ケンカはしないでと何度頼んだか知れないが、アゼルは気にしなくていい、としか言ってくれないし。

さらにここ1年くらいの間で、相手に非がなくてもレイズがケンカを吹っかけているという話を聞くようになった。数少ない友達に聞くと、その子たちはレイズに怨まれる理由が思い当たらないらしい。無差別ではないはずだが、レイズの言っていた「兄妹に対するから

かいや嫌がらせ」がどこからどこまでの範疇を指して言っているのか、実際に兄がどうやって「獲物」を決めているのかは、アゼルにはよくわからないのだった。

…あたし一人のときに何かあってもレイズに話すことは無いから、レイズ一人の時に何かあるんだろうけど。

そんなことが頻繁に起これば、自然ともう最近ではこの近所であたしたち兄妹に声をかけてくる子供はほとんどいなくなってしまった。

閉じていた目を開けて、暗い室内を見る。月明かりに照らされて青白く光る一輪の薔薇が目に入ってきた。

生まれて初めて、薔薇の花をもらった。
ベッドの中でふっと笑みがこぼれる。

……前言撤回。

最悪……ではなかったかな。

そう思い直して、また目を閉じた。

Ｈｅｒ　ｏｌｄｅｒ　ｂｒｏｔｈｅｒ　ｉｓ．．．（後書き）

おはようございます。今朝コーヒーを淹れようとマグカップにお湯を注いだら、マグカップの底がさっくり抜けて落下、足の指に思いっきり熱湯を被った作者です。

マグカップの底って……抜けるんですね。。。。。

そこそこ生きてますが、初めて知りました。

みなさんもマグカップにお湯を注ぐときには気をつけてくださいね。

His first love

2日前のこと。

クレセント坊ちゃんが夕食後私の部屋に来て、太陽の日の予定を空けておけと言う。

事情を聞けば、先日の帽子屋の兄妹を家に呼んで、あの紅い髪のシスコンお兄ちゃんとお気に入りのアゼルを賭けて勝負するという。

あの兄の方…レイズと言ったか。

レイズが勝てば、坊ちゃんはもう帽子屋の兄妹に一切関わらない。

坊ちゃんが勝てば、レイズは今後アゼルの友達に暴力を振るわない。

……いつの間にそんな段取りをつけたんだ?

さらに驚いたことに、アゼルが二人の血を見るのを嫌がったので射撃で対決するという。

気に入らないヤツは問答無用で沈めるこのクレス坊っちゃんが。

「…明日は雪かしらねぇ」

ラティカは驚きのあまり左手を額に当て、しばらく言葉が継げなかった。

その幼少期からそのやんちゃぶりを如何なく発揮してきた目の前の少年が、あまつさえ薔薇の花を携えて気になる女の子に会いに行ったなどと、ラティカには想像もついていない。もし知ったら、雪どころか天変地異が起きて王都が崩壊する心配をしなければいけないだろう。

「どういう意味だよ？オレが負けるわけないだろ？」

不服そうに眉根を寄せて見上げられてしまう。

「…いや、そういう意味ではなく」

いろいろと意外過ぎる。

……否、成長したということか。

この三男坊はラティカが知る限り、売られたケンカや勝負は１００％その場で買っている。

一見普通の少年なのに速さが見た目を大きく裏切っているので、相手は何が起こったのがわからず仕舞いなこともしばしば。何も知ら

ず突っかかって、大抵その場で相手は地べたを舐めることになる。

数年前までは貴族同士の集まりなどでも、気づくと公爵家のご子息とケンカをしていたりした。頭より先に手が動くタイプの典型だろう。沸点が低いと言うか、何と言うか。まぁ話を聞くと9割方あちらに非があるのだが、爵位の上下など全くお構いなしなので、当面の伯爵夫妻の最大の悩みのタネの一つだった。

だがここ最近は集まりに顔を出す回数自体が減り、森の木の上で本を読んでいるか、一人で銃の練習をしているか。元来あまり大人数で騒いだりということは好まない性格ではあったが、周りの大人たちは思春期に差し掛かる少年にありがちな引きこもり傾向だと捉えていた。

それでも今回は違ったらしい。睨み合いにはなったが、アゼルの希望を汲んでその場で手を出さなかった上に、代替策まで講じて見せた。先日の帽子屋で、ほぼ初対面の紅い髪の少年に手を出さなかったことで遂に大記録返上かと思っていたのだが、やはりというかなんというか、件数は減ったものの、ケンカ買取率１００％は着実に更新されていた。

その勝負のジャッジを頼まれた。本来ラティカは太陽の日は非番なのだが、こんな面白そうなこと、断るわけがない。

「あぁ、ところでさ」

「何か？」

話は終わったとばかりに部屋を出て行きかけたクレスが、ドアの前

で振り向いた。

「ラティカ、どうしてあの帽子屋の連中がみんな揃って銃を使えるのか、知ってるか？」

「…そうなんですか？」

…初耳だが。

「アゼルまで練習してるらしいぞ」

「へぇ」

あの子も撃てるのか。

かなり意外だった。

「特にそんな話は聞いたことありませんが…」

「…ラティカでも知らないか」

ドアの前で腕を組んでなにやら考えこむ少年。

「普通の帽子屋に、銃は要りませんけどねぇ」

ラティカも頭をめぐらせるが、特に思い当たる理由も無い。

「調べといてくれるか？」

「わかりました」

……惚れた弱みかねぇ。しかしなぁ…

銀髪の少女に今までにない執着を見せる教え子を思い、クレスが部屋を出て行ったあと、一人でしばらく複雑な顔をしてしまったラティカだった。

これまでは子供だからと周囲もある程度の自由は容認してきたが、これから先クレスは将来を見据えて進路を決めないといけないし、年頃になれば然るべき縁談も持ち上がるだろう。

その時に平民の少女が、三男とはいえ伯爵家子息であるクレセントの中でお気に入り以上に昇格しているのも、それはそれで問題になるに違いない。

最終的に一番苦しい思いをするのは、クレセント本人なのだから。

先日の少女との初対面の様子で発覚したクレセントの女性の好みは、ラティカとしてはかなり意外だった。確かに、貴族の令嬢にはあまりいないタイプ。道理でこれまで周りの姫たちには全然目もくれなかったわけだ。いつもにこやかに、と躾けられている姫たちの多くは楽しくなくてもニコニコとよく笑う。その反面キャーキャーとよく騒ぎ、よくしゃべり、よく泣く。体よく言えば、結構、やかましい。

比べてあのアゼルという少女。銀髪に青紫の瞳を有した顔立ちは、大人になれば可愛らしいより綺麗という形容詞が付くだろう。大人しくて、おそらく普段表情は乏しい部類。一見無愛想にも見えるが受け答えもしっかりしていたし、語尾も優しい。先日の食事中にも一度も嫌な印象を受けることは無かった。

大人の目から見ても、貴族の子供社会の中でクレスはそこそこモテる方だ。父伯爵と同じ灰茶の髪と濃いグレーの瞳に、母譲りの整った顔立ち。気の強い性格と素行でどこまでも紳士とは言い難いが、彼の強さはなよなよした他の貴族の子息らと比べても、少女たちには逞しくてかっこいいと映るのかもしれない。これまでも可愛らしい姫君からアプローチを受けたことも少なくなかったが、残念なことに本人はさっぱり相手にしてこなかった。

だがそんな一見淡白な少年が、先日その少女の笑顔を初めて見た時の顔と言ったら。

……もう手遅れかもな。

それでも。

レイズの銃の腕は知らないが腕っぷしで勝負というわけではないので、的までの距離が延びてくれればあちらにも勝機はある。

年の離れた弟のような少年の初恋を応援したい反面、レイズに勝利の女神が微笑んでくれることを心の片隅で祈った。

◆◆◆◆◆

……しまったなぁ。

クレスは心の中で大きく舌打ちした。レイズがこんなに上手いとは思わなかった。

ここまで距離が延びる前にケリがつくと高を括っていたのだ。クレスとしてはそろそろ決着をつけないと確実に不利になる。

５メートルから始めた的当ては、両者譲らず距離がどんどん延びていった。今現在、目の前の的はラインから３０メートル先の樹に括られている。

実は遠隔射撃はあまり得意ではない。本来なら接近戦専門なのだ。

視力があまり良くないから。去年あたりから本を読むときなどは眼鏡が欠かせなくなった。

「……なぁ、お前。」

ラインに向かう前に、レイズに聞いておきたいことがあった。

「どうしてアゼルから友達を遠ざける？アゼルも嫌がってるんだろ？ちょっとくらいからかわれたって、気にしなければいいだけだ」
「……お前には関係ないだろ」
「あぁ、関係ないけどな。お前がアゼルから鬱陶しがられて口を利いてもらえなくても、オレの知ったこっちゃない」

いつからかは知らないが、見たところ今現在アゼルはレイズと口を利いていないらしい。
……たぶん一昨日オレが帽子屋に行ってからずっとだな。ニヤッと意地悪く笑って横目でレイズを見る。
カッと顔を赤らめて睨み返してきた。

「いくら兄貴だからって、いつかアゼルに嫌われるぞ」
「得体の知れないヤツをアイツに近づけるわけにはいかないんだ」
「……伯爵家の人間を得体が知れないなんていう奴はお前くらいだぞ」
「怪我をさせるヤツなんて、それ以前の話だな」

オレから目線を離し、的を見た。

「……お前、本当にアゼルが大事なのか？」
「は？」

意味がわからないというようにクレスに視線を戻した。

「お前が怪我して帰ってくるって話す時のアゼルの顔知ってるか？大事ならどうしてあんな悲しそうな顔をさせるんだよ？」
「余計なお世話だ」

このバカ、いい加減にしろ。紅い石頭にイライラしつつ再度言い募

る。

「せっかく出来た友達もお前のせいで離れてくんだろ?嬉しくないってこないだ言われてたじゃないか。」

言い返せないのか視線が更にきつくなった。

「お前がアゼルを不幸にしてるんだろ。お前がやってるのはアゼルの為じゃなくてただの自己満足だ」

クレスの脳裏に、渡したピンクの薔薇と青紫の潤んだ瞳が蘇る。

「…何も知らないくせに偉そうに言うんじゃねぇ!!」

そう言うなり、いきなりレイズはオレの胸倉を掴んできた。オレも反射的に持っていた銃をレイズのこめかみに突きつける。どうせ中の弾はインク弾だから打ってもたいした怪我にはならないが、至近距離で打てば衝撃で脳震盪くらいは起こすだろう。

「お前にアゼルの何がわかる!」

頭の銃口を気にもせずレイズが拳を振り上げた時、ラティカが背後からその腕をひねり上げていた。

…いつの間に来たのやら。いつも思うのだが、気配を消していきなり現れるのは勘弁してもらいたい。

「ほら、始めますよ?クレス坊ちゃんも落ち着いて。今日はソレで決着を着けるんじゃないんでしょう?」

ギリギリとレイズの腕を押さえたまま、ラティカがオレににっこりと笑いかけた。…目は笑ってないんだが。

二人とも拳を収めたところで、勝負再開となった。

Ｈｉｓ　ｆｉｒｓｔ　ｌｏｖｅ　（後書き）

今のところダークな要素薄めですが、タネはあちこちに蒔いているので、そのうち芽を出してくれることを切に願います（爆）

A duel and its' prize

ラティカの隣には、本日の唯一の観客であり、賞品である少女が草の上に敷いたブランケットにちょこんと座っていた。今日はお仕着せだったらしい深緑のワンピースではなく、藍色のコットンワンピースに白のカーディガン。決して高価な仕立てではないが、デザインはシンプルで好感が持てる。梳かしただけで背中に流してある銀髪の上には麦わらのカンカン帽が乗っていた。

第一印象とさして変わらず口数少なく、大人しく二人の勝負を見つめているが、なんとも不安そうな表情を浮かべていた。

「…どっちに勝って欲しい？」

聞いたところでどうなるものでもないのだが、ふと気になったのだ。少女の視線の先には、なにやら言い合いをしている少年二人。その声はここまでは届かない。

「……どちらかと言えば、クレスに勝ってもらいたいです。レイズにはあまりケンカしてほしくないので…。いつもあたしの知らないところで、怪我して帰ってくるから」

銀髪の少女は私を少し悲しそうに見上げた。頬にそばかすが浮いているが、そんなことは後回しになってしまう、大きな青紫の瞳。スミレと例えられているらしいが、ラティカにはスミレというよりは桔梗の花を連想させた。秋に咲く、星型の花。

「クレスには本当に申し訳ないです。あたしたちの兄妹ゲンカに巻き込んでしまって。ラティカさんも、付き合ってくださってありが

とうございます」

律儀に頭を下げてくる。

「私は坊ちゃんに頼まれただけだから。でもレイズが勝ったら」

「レイズが勝ったら、状況は今までと何も変わらないですね。…でも再度説得はしてみます。今まであまり面と向かって、止めるチャンスってなかったんですけど、いい機会ですし」

どちらに転んでも、この子の腹は決まっているらしい。

「クレスが勝ったら、あなたのお兄さんはおとなしく言うことを聞くかしら？聞いた話だと、今まで散々暴れてたんでしょう？」

「…聞かないときは、絶交です」

アゼルは当然だというように、少しだけ険しい顔をして見せた。

一番年下だが、この少女が子供たち3人の中で一番大人のようだ。

女の子の方が精神的成長は早いというが、本当だな。

どちらにしろ、そんなあっさりと坊ちゃんがこの子から手を引くとは到底思えないけどね。

確かにこの勝負の条件だけ見れば、クレスが勝てばレイズがアゼルの知り合いを手当たり次第に潰していくのを止める、それだけだ。

アゼルとクレスの関係には何も言及していない。

……坊ちゃんの思惑とは若干ずれている気がしなくもないが。がんばり次第というところか。

「クレスが勝って、これからも仲良くして欲しいって言ってきたら？」

アゼルは、お断りする立場にありません。と冷静に答えた。

「クレスがそうしたいと言ってくれるなら。でも、これからもあたしからはクレスに会いに行くことはないでしょうし、あたしの怪我が治ったら、伯爵家のお坊ちゃんと帽子屋の使用人に戻るだけです。…そもそも身分が違います。クレスはいいって言ってくれるけど、本当なら友達になんてなることはないじゃないですか。こないだお見舞いに来てくれた時にレイズがつっかかったから、こんなことになっちゃいましたけど。」

１０歳の、しかも平民の少女がこんなに理路整然と語ったことに、少なからず驚いた。

それにラティカさんも、と続ける。

「クレスと私たちが必要以上に仲良くしないほうがいいと思ってるんでしょう？」

私を見透かしたようにそう言って、諦めたように薄く笑った。

……こないだのランチの時から頭がいい子だとは思っていたけど。

１０歳の子がする顔じゃあないな。

ラティカはなんとも言えない気分になった。

◆◆◆◆◆

さっきの掴み合いで集中力が殺がれたのか、二人とも2発ずつ的をはずしていた。

勝負はこの一発で着くだろう。

深呼吸をしたがなかなか心が落ち着かない。発射位置に立ったレイズはぎゅっと目を瞑る。

いきなりアゼルに近寄ってくる野郎なんて、レイズから見れば仮にそれが伯爵でも信用ならない。

オレ抜きで会うなんて絶対だめだ。何かあっても守ってやれないじゃないか。

…あんなに仲のよかったアイツでさえ、アゼルを裏切ったのだから…再度あのときのようなことが起これば、今度こそアゼルは壊れてしまうだろう。

……そんなことは絶対させない。オレが守ってみせるんだから。

スッと目を開いたレイズは、昔自分が叩き潰した男の顔めがけて引き金を引いた。

インクは的のごくわずか上、的が括られた幹に毒々しいピンクの華を咲かせていた。

◆◆◆◆◆

賽が投げられたレイズは草の上に足を投げ出し、遠くの的に狙いを定めているクレスを睨んでいた。

レイズが的をはずしたので、クレスがこの最後の1発を当てればクレスの勝ちである。

この一発に全てがかかっているクレスは、インク弾入りの銃を構えて、若干ぼやけて見える的を見つめながらそよぐ風の音を聞いていた。

眼鏡の先に見える的を睨んで目を細める。周囲の音が消えたことにも、気がつかない。

ふっと的が鮮明になる瞬間。

迷わず引き金を引いた。

◆

数日後。

射的対決の前に坊ちゃんに頼まれていた調査の結果が、ラティカの元に上がってきた。

受け取った封筒の中身を確認し、想像だにしていなかったその内容にわずかに目を瞠った。

――帽子屋の、裏の顔。

裏、と言うのだろうか。ある意味、仕事の一部、公然の秘密、と呼べるものだろう。もしかすると隠してすらいないのかも知れない。帽子屋には水銀を始め薬品が大量に保管されていることも、周知の事実。ただ、決して自ら広めてもいない。だから一般的にはほとんど知られていない。そんな印象。

知られたから、騒がれたからと言って、黙らせる方法はいくらでもあると言うことか。

……コレは、坊ちゃんには言わないほうがいいだろうな。

報告書を引き出しに仕舞いながら、小さくため息をついた。

Ｂｒａｍｂｌｅｓ（前書き）

Ｆｒｅｅｃｅｌｌ　＝　フリーセル。
神出鬼没の番外編。
結構大事なエピソードだったり、どうでもよかったり。
本編でやり場に困った小話などをちょこちょこＵＰしていきます。

Brambles

クレスが朝起きて部屋のカーテンを開けると、空にはきれいな青空が広がっていた。待ちに待った太陽の日だ。

朝食を済ませると今日も森に行く振りをして、いつものように屋敷を抜け出す。
その足で帽子屋に駆けて行き、アゼルを迎えに行った。

帽子屋の勝手口を訪ねると、サーシャとマリアンがいた。サーシャは休日の朝よろしく、のんびりとお茶を飲んでいて、マリアンは相変わらず何やらケーキを焼いていた。

「あらぁ、おはよう、クレス。今日はデートなの？」
「おはよう、サーシャ。ピクニックだよ。サーシャこそ、彼氏とは上手くいってる？」

久々に出くわしたやや苦手な顔に、内心ゲッと思いながら笑顔を作って挨拶する。普段はサーシャも店で接客に付いているので、あまり顔を合わせることが無い。

大旦那の孫娘、サーシャ。父親のウォルターと同じ明るいオレンジ色の巻き毛に、亡き母譲りだというライムグリーンの瞳。くりっとした目が印象的な、美人と言うよりは可愛らしい顔立ちの、少し年上の少女。ただ、極度のおしゃべり好きなのが玉に瑕で、こいつの場合は文字通り「歩く拡声機」だ。周囲の人間は秘密にしたいことは決して彼女にしゃべってはならないと、強く肝に銘じている。

そんなサーシャも、確か男爵家の跡取りと付き合ってたんじゃなかったか。下級貴族と商家の婚姻は珍しいことではないが、政略でもなく見合いでもなく、純粋に本人たちが恋人同士だというのはかなり珍しい。そうは言っても、男爵家の嫡男と商家の中でも裕福な部類に入る帽子屋の一人娘、周囲も文句を言う人間は少ないだろう。

ちょっと待っておいでね、と言い残してマリアンがアゼルを呼びに行ってくれた。

「私たちはいつもと変わらずよぉ。それよりクレスって、」

顔を寄せてひそひそ声を出す。

「まだアゼルと付き合ってないの?」

「まだだよ。出来れば彼女の忠実なナイトを攻略してからと思うんだけど、そのうち…ね」

好奇心丸出しの視線を受け止めて、にっと笑った。

余裕ねぇ、とおどけた返事が返ってきた。

呼ばれてすぐ出てきたアゼルはいつものお仕着せではなく、白の半袖ブラウスに紺系チェックの膝丈スカートを着ていた。靴はいつもの黒の布張り。たぶんこれ一足しか持っていないのだろう。胸まで届く銀の髪は左の耳の下で一つに結われている。

一目見て、頬に少し血が上るのがわかった。やっぱり、可愛い。

マリアンがトマトのパウンドケーキを持たせてくれた。屋敷の料理人が作るより美味しいんだ、これ。礼を言って慌しく帽子屋を出る。

幸い、口うるさい赤毛にも出くわさないで済んだ。と言うか、バタバタと足音が聞こえたので、鉢合わせする前にアゼルの腕を掴んで勝手口を飛び出したのだ。
通りに出るとそのままケーキの包みを持ったアゼルを横抱きにして、いつぞやアゼルを見舞いに来たときのように向かいのアパルトマンの屋根に飛び上がった。逃げるが勝ち、だ。攻略するとか言ったばかりだが、今日のところはそんな暇は無い。

赤毛が何か叫んでいるのが聞こえた気がしたが、そんなのはどうでもいい。さっさと屋敷に戻ろう。捕まると面倒くさいし、午前中に目的地に着かないといけないから。
今日は家の裏の森に咲いている野薔薇を見せてやる約束だった。午前中だけ花が開く珍しい種類だ。
先日アゼルにその野薔薇の話をしたら、ぜひ見たいと目を輝かせていたからきっと喜んでくれるだろう。

◆◆◆◆◆

……またやられた。今度こそ一発ぶち込んでやろうと思ったのに。

赤薔薇の木戸から通りに飛び出したレイズは、本来屋根の上にあるまじき人型の影を睨みつつ、大きく舌打ちする。その間にも影は家々の向こうに消えていった。

確かにアゼルの付き合いに口は出さないという約束もある、家に来てアゼルとお茶を飲むのは1万歩譲って許してやるとしても。この間もアゼルに指一本触れるなと警告したはずなのに、アゼルを抱えてしかも屋根の上に上げるとはどういう了見だ。どうやらウサギ殿は物覚えが悪いらしい。

…知能もウサギ並みか。

再度影が消えていった方向を睨み、踵を返した。
万が一にも蹲いて屋根から落ちるようなことがあったらどうする。ヤツが屋根の上から落ちて潰れるのなんざどうでもいい。むしろ潰れろ。…恨めしいことにウサギの運動神経でそれは無いと思うが。

だがヤツの身はどうなろうが、アゼルを空中に放り出すようなことになったら、確実に生かしておかない。

イライラを奥歯で噛み砕きつつ、勝手口を開ける。

「あーぁ、またお姫様攫われちゃったね」

台所にはまだサーシャがいて、マグカップを両手で包みながら茶化してくる。細められたライムグリーンの瞳が無性に癪に障るんだが、口では未だ勝てたことが無い。イライラ復活である。だが絡むとまた面倒なので、さして相手にせずひと睨みして薬缶からお茶を淹れる。

「いいじゃない、そんなに目くじら立てなくたって。今までの中では一番イイ男だと思うけど？アゼルも懐いているみたいだし、あの子になら預けても大丈夫でしょ。それに」

あんたといろんな意味で対等に渡り合える子って初めてなんじゃないの？友達付き合いくらい、認めてあげたらいいのにぃ。

いつも能天気なサーシャの言葉には珍しく、心配の欠片が散りばめられていた。

……確かに、前回は不覚にも負けを喫したけれども。それでも、あの少年をアゼルに近づけることには強い抵抗があった。アゼルが抵抗無く懐いているから、なおさら。

ここ最近、あのバカウサギは三日に一度は帽子屋に入り浸り、午後のひと時をアゼルやマリアンたちと過ごしているらしい。これで仕事の邪魔をしようものなら追い返す口実になるのだが、決まってアゼルの手の空く時間にやってくる。

らしい、というのも自分は一日の大半を作業部屋で過ごす日々を送っているので、今までその場に出くわしたことはほとんど無い。あのバカウサギとアゼルが二人きりで一緒にいるところなんて目の当たりにしたら、頭で考えるより体が動いてしまうのは既に実証済みだ。

本当は前みたいに四六時中アゼルと行動出来たらいいのだが、今はそちらばかりにかまけていられないのも事実。まぁ他の人間も傍にいるし大丈夫だろう、と自分に言い聞かせて思い出さないように日々作業に没頭している。

「…信用出来るもんか」

一言だけ言い捨てて、カップを手に作業部屋に戻った。

◆◆◆◆◆

「ねーぇ、マリアン」

嵐が過ぎ去った帽子屋の台所で、帽子屋の孫娘がのんびりお茶をすすっている。

「あの三角関係、どっちが勝つと思う?」

…何を言い出すかと思えば。洗い物をしながら呆れた声が出る。

「どうなるも何も。三角って」

きゃははっ、と笑いながらテーブルに出ていたクッキーをつまむ。

「…アゼルとレイズじゃどうにもならないでしょうが」

確かにレイズの妹に対する溺愛ぶり、過保護っぷりは尋常じゃないが。

どこまで行っても、あくまでも、あの二人は血の繋がった兄と妹である。

テーブルの上に身を乗り出して、三角でしょぉ、と大げさに言う。

それはそれは楽しそうに、ライムグリーンの瞳がきらめいた。

「本人たちはアゼルを取り合って火花を散らしてるわけだしー。でもやーっとレイズと張り合える男が登場したわよぉ。楽しいじゃない？あのレイズが損所そこらの男に可愛い可愛いアゼルを渡すと思う？」

「渡したくないから、ああなんでしょう」

「…どんなに可愛くったって、所詮兄妹なのにねぇ」

足をブラブラさせながら、呆れたようにつぶやく。

「兄妹だからじゃない？」

二人きりだからこそ、

「…あの子達は、離れた方がお互いの為なのかも知れないねぇ」

「将来は絶対玉の輿を狙うべきよねー。アゼルもお坊ちゃんのことまんざらでもないみたいだし」

あー、でもあの子三男坊だしなー、などと姿勢を戻しながら勝手なことを言ってお茶を飲んでいる年頃の少女を尻目に、マリアンは心の中でつぶやいた。

勢い余ってまた流血沙汰にならないといいけど。

◆◆◆◆◆

「クレス…」

そのまま屋根の上を駆けていると、アゼルが声をかけてきた。

「ん？」

「やっぱり私、おんぶがいいんだけど…」

腕の中のアゼルはやや顔が赤い。

アゼルを抱えて屋敷に連れて行くのはこれが初めてじゃない。普通なら馬車を使う距離だが、オレの場合、アゼル一人なら抱えて走った方が倍は速いから。それこそ最初は申し訳ないだの恥ずかしいだの自分は重たいだの、散々ごねていたアゼルも、最近は諦めたのか素直に抱えられて運ばれている。

ちなみにアゼルは自分で言うほど重くない。他の子がどれくらいだか知らないが、明らかに平均よりは軽いだろう。１２歳の少年が抱き上げて運べるのだから。とは言え、口には出さないが長時間持ち上げるのはさすがのクレスでも辛い。それもあって、出来るだけショートカットでさっさと屋敷に辿り着きたいのだ。ウサギ足で駆け

ようとすると、人通りの多い道路を走るのはかえって危険だ。またいつぞやみたいに交通事故を起こしかねない。

その点、屋根の上なら障害物もないし、何より近道だ。屋根の上と言っても、何も切り立った崖の上を歩くわけではない。実はその頂点は結構幅があるので、普通の人でも十分歩ける。もちろん傾斜がきつければ危険度は増すが、アゼルを運ぶ時は一番安全で走りやすいルートを選んでいた。

体勢はその時々によって、今のように横抱きだったりおんぶだったりするのだが。いずれにせよ問答無用で抱き上げて屋根の上に跳んでしまえば、おとなしくするしかないのだ。自分一人じゃ地上に降りられないのだから。

立ち止まって顔を覗き込む。

「どうして？苦しい？」

「ううん、そうじゃないんだけど…」

さらに頬が赤くなってうつむいてしまった。

「この体勢、やっぱり恥ずかしいっていうか…」

なんだ、そんなことか。再び駆け出す。

「ちょっっ…クレスってば！」

「暴れたら落っことすよ」

「…〜〜っ」

顔を真っ赤にしてジタバタするアゼルに脅しをかける。もちろん間

違っても屋根の上でそんなことはしないけれど。
ふふっと笑ったのが聞こえたのか、大人しくはなったが思い切り睨まれた。自然と位置関係からして上目遣いに見上げる形になる。
うん、これからもコレだな。

クレスの中で、この体勢がデフォルトに設定された瞬間だった。

その帰りも、顔を真っ赤にしたアゼルをしっかりお姫様抱っこで送り届けたのは言うまでもない。

Ｂｒａｍｂｌｅｓ（後書き）

ｂｒａｍｂｌｅｓ＝野薔薇の茂み

小さい薔薇ってかわいいですよね＾＾

Ｒａｔｉｎｇ　ｔｈｉｒｔｅｅｎ（前書き）

Ｒａｔｉｎｇ　ｔｈｉｒｔｅｅｎ　＝　Ｒ－１３

新キャラ登場で舞台が変わります。帽子屋の人々は、あまり出てきません。

クレスが一つ年を取って１３歳になっているので、ババ抜きから数ヶ月後の話だと思います。

Ｃｏｎｃｅｎｔｒａｔｉｏｎ→神経衰弱

Ｒａｔｉｎｇ　ｔｈｉｒｔｅｅｎ

５歳くらいから、よく夢を見るようになった。

いや、夢自体はそれより前から見ていたんだろうし、誰でも見るものだ。

ただ――――

夢で見たものが、現実に起こるようになった。

◆◆◆◆◆

「今日は早いのね」

夢の残骸を引きずりながら、昼食とも午後のティータイムともつかない時間にサンドイッチをかじっている僕のところに、女公爵がやってきた。

「おそようございます」

「おはよう」

僕の自虐も意に介さず、後ろから椅子ごとふわりと抱きしめる。

「今日は夜から伯爵のところでパーティがあるから、ちゃんと起きていてね。…ダスクの方で」

「そうでした…食べたら、また寝ます」

「…ふふ。いい子ね」

細い指先で僕の顎のラインをなぞりながらくすくす笑った。

「今日は何の夢を見たの？」

「…今日は――――」

◆◆◆◆◆

何回着ても、やっぱりタキシードは窮屈で嫌いだ。
あちこち締付けられてる感じがして、全然安眠出来る気がしない。

…まぁこれを着させられた時は、寝ていられる状況ではないのだが。

今晩は、女公爵に付いてダイヤ地区はずれに位置する伯爵家でのパーティに出席させられる。一応、形式上は女公爵の養子なのだ。
本当は未成年が夜会に出ることはないのだが、今日は誕生日会なので、主役である伯爵夫人の親戚の子供たちも揃って出席しているらしい。なので今日の年齢制限は夫人の末の子に合わせて１３歳なんだそうだ。

……本当は家で寝ていたいのだが。馬車の規則正しい揺れが拷問だ。

「もうちょっとにこやかにしてらっしゃいな。今日は可愛らしいお嬢さんもたくさんいらしてよ」

女公爵はやる気無さげに向かいに座った僕を目を細めて笑った。今日はライムグリーンの生地にペールグリーンのレースがあしらわれた上品なスレンダードレスを着て、エメラルドの大きなピアスを着けている。彼女のエメラルドの瞳によく似合う。

……ちなみに、絶世の美女である。

「大丈夫ですよ。『役者』ですから」

ふっと笑って答えた。

「でも…早めに切り上げてくださいね。ドーンが出てくるといけませんし」

馬車がようやく止まる。

かなりの数の馬車が出入りしているみたいだ。爵位は格下だが、家業が好調で資産は公爵家に引けをとらないらしい。貴族階級の面々をはじめ各財界の有力者なども揃って顔を揃え、狐と狸の化かし合いを繰り広げるのだ。…いちいち面倒くさい。他にやることはいくらでもあるだろうに。

あくびを噛み殺しながら、女公爵について行った。

ホールに入ると周囲の注目を一気に集めた。まぁ女公爵が着飾ればいつものことなのだが、知り合いが次々に声をかけて来て、あっと

言う間に人垣が出来上がる。

一方、僕の方は視線だけでは大人気だが、そのほとんどが毒々しい色が付いているように見える。本来目に見えないものが見えそうだなんて、よっぽどだろう。女公爵を狙う男どもの嫉妬と、一回りも年上の女公爵と僕の関係を邪推する好奇の視線。そして、裏でまことしやかに囁かれる噂を知る者の……哀れみの視線。

そんな中でも、女公爵の新しい「赤ん坊」に声をかけてくる猛者は、まだ出ないようだ。

ふと目が合った貴婦人に笑みを送ってみる。顔を真っ赤にしてそっぽを向かれてしまった。

…だんだんあしらい方がわかってきたか。こればかりはドーンを見習いたいものだ。

小さく息をつく。

こうした社交場に出るのはこれで…4回目か。興味が無いと記憶が曖昧だ。…前3回は女公爵が主催だったので問答無用で出席させられた。その際は自邸での開催だったのでいざとなれば奥に引っ込むことも出来たが、今回はそうもいかない。

ただでさえ独身の女公爵がまた養子を迎えたと、恰好の噂の的なのだ。こんなところに出てくれれば、見世物以外の何物でもない。

「ダスク、こちらにいらっしゃい。皆様にご挨拶を」

「…はい」

……これだから、表に出てくるのは面倒くさい。

無理矢理笑顔の仮面を貼り付けて飼い主の元へ向かった。

◆◆◆◆◆

何だって今年はオレまで出ないといけないんだろう。どうせあと3年もすれば嫌でも出ないといけなくなるのに。こんなのは兄貴2人に任せておけば別にオレは要らないだろう。

今年は母の誕生日パーティにクレセントも出席を命じられた。まだ未成年であるにも関わらず強制的に正装を着せられて、自邸の大広間に引っ張り出された。夜会に正式に出席するのは今日が始めてだが、本来こういう格式ばったことが苦手なクレスはどこまでも仏頂面だ。

まだ酒も飲めないし、ダンスを踊りたい相手もここにはいない。

だが、母さんはゲストに失礼の無いようにと、不貞腐れた顔をしたオレに１００本くらい釘を刺して、来客たちに挨拶をしに行ってしまった。…そんなに言うなら出さなけりゃいいのに。

今夜のホストである母さんの挨拶が終わったらさっさと引っ込むつもりだったのが、珍しく着飾ったラティカがぴったり横に付いているのでなかなかチャンスが無い。

「……母さんか」

「最後まで逆エスコートさせていただきますよ」

母さんにオレが逃げないよう見張りを言いつけられたラティカがニッと笑った。普段オレの頼みなら大抵のものは聞いてくれるラティカだが、今夜ばかりはそうもいかないらしい。

クレスは前を向いたまま大きなため息を吐いた。マダム・ジーナならともかく、ラティカの目を盗むのは容易ではない。

広間を見やると同じような理由で招待されたのだろう、着飾った１０代前半の少年少女たちが保護者付で挨拶をしたり、談笑している姿があちこちに見受けられた。見知った顔も多いが、その背伸びをした姿は普段庭を駆け回っているそれとは似ても似つかない。親たちも社交界デビューの予行練習くらいのつもりで連れてきているのだろう。正式な夜会ではあるものの、子供たちがいるので雰囲気はそこまで堅苦しいものではない。

しょうがないのでトマトジュースを飲みながら、ホールの片隅からラティカに主要人物の説明をしてもらうことにした。

そのまま隅でおとなしくしているつもりだったのだが、ついには昔から鬱陶しい従姉妹のクローディアに捕まり無理矢理ダンスを踊らされ、今日のエネルギーは使い果たしてしまった。

……こんな時間だけど、抜け出して帽子屋に遊びに行こうかな。アゼルはまだ起きているかな。

ラティカには外の空気を吸ってくる、と言い、いつもより人が多いホールを抜け出し、バルコニーに出ると、既に先客がいた。

バルコニーのベンチに座り込んでいたのは、自分と同年代の少年だった。紅茶色の長い髪を後ろでひとつに束ねている。…さっき女公爵の後ろで薄い笑顔を貼り付けていたヤツだ。自分とそう変わらないであろう年齢には到底似合わない、シニカルな仮面。

…最初遠くから見て、なんで女がタキシードを着ているのかと思ったんだ。男にしては線が細くて、すごい女顔だったから。

うたた寝をしていたのか、オレがバルコニーに出ると、閉じていた目をうっすら明けた。

瞳は綺麗な金色だった。

「起こしちゃったかな」
「……ご心配なく、もうそろそろ帰る頃だから」
「君、確か女公爵のところの…？」
「ダスク。…新しい愛人だよ」
伸びを一つして、名乗った。かなり自虐的な自己紹介。

「僕らみたいな子供には、まだ早いよね」
オレを上目遣いに見上げて、なぜか少し悲しそうに笑った。

「…どれが？」
オレは眉をひそめて聞き返した。
今この場で、自分たちの年齢にまだ似つかわしくない物事なんて片手じゃ足りない。

「一つ目は、そもそも僕らみたいな子供が夜会に参加していること。二つ目は、こんな年で女公爵の愛人扱いされている僕。と、なぜかそれを驚きもしない人たち。…君もね。三つ目は、」

オレの目をのぞきこんで言う。

「……僕らが二人とも、タトゥーに運命を翻弄されつつあること…かな。クレセント君」

男のくせに、小首をかしげてくすっと笑うしぐさがすっごく板についている。

「っ！！！」

こいつも『役者』か。

驚いて軽く目を見開いたオレに、さらに続ける。

「いきなり台本も無しに、役を振られても、ねぇ？」

自分以外の『役者』で、普段面識があるのは『帽子屋』だけだった。タトゥーの存在自体は国中が知られている。だが実際はこの広い国に数えるほどしかいないし、普通にしていると見た目からはほぼわからない。『役者』でも一般人と特に何も変わらない者もいるよう

だが、自分のように特殊能力が出る者は、奇異の目に晒されることも少なくない。よって、特に必要がなければ自分から『役者』だと名乗ることは稀だ。
今日のパーティにだって、こいつのような『役者』が他にも来ているかも知れない。

…その稀な存在の一人が現『帽子屋』・レオナルドなのだが。彼の場合、王室御用達という肩書きと併せて、宣伝材料のひとつにしているに過ぎない。
オレも『役者』であることを公言したことはないが、特に隠しているわけではないので、知っている人は知っている、という具合だ。
どれだけの人がオレが『役者』だと知っているかなんて、正直、どうでもいい。オレはオレだし。

「……台本？」
「君は、台本が読めるかい？」

いぶかしげに聞き返すオレに、首をかしげたままさらに聞いてくる。
ベンチの上で胡坐をかいて片膝を立て、決して行儀がいいとは言えない。だけれどそんな様もどこか妖艶で、とても似合っていた。…さっきホールで見た時とは随分印象が違うな。

「ダスク、こんなところにいたの」
「あぁ、リリス様、今日も相変わらず綺麗だね」

二人きりだったバルコニーに現れたのは、女公爵だった。

「……ドーンね？」

女公爵は困ったように美しい顔を曇らせた。

……こいつの名前はダスクじゃないのか？

「だって、面白そうだったからさ。ちょっと無理言って、代わってもらったの」

そう言って金色の目を細めてクスクス笑った。

「いつ出てきたの。もうそろそろおいとましますよ」

「ついさっきだよ。ウサギさんにご挨拶したくてさ。広間にいたのはずっとダスクだから安心して」

ね、とオレに微笑みかけた。

同意を求められても、オレには何のことだかさっぱりわからない。

「ごきげんよう、クレセント様。…あなたも『役者』なのね？」

くらくらするような綺麗な笑みを向けられて、貴婦人に対する礼をしながら柄にもなくどぎまぎした。

「……はい」

「申し訳ないのだけれど、そろそろ失礼させていただきますね、この子も連れて帰らないといけませんし」

さ、行きますよ、とダスクと名乗った少年を促した。

広間に戻りざま、そうそう…モノクロだったから曖昧なんだけど、と独り言のように前置きしてダスクが振り返った。

「あの、白っぽい髪の女の子は、君の恋人？」

「！？」

白っぽい髪？…アゼルのことか。貴族同士での付き合いの中にも、明るい金髪やライトグレーの髪の持ち主を知っているが、恋人と間違われるほど親しいことはない。仲のいい知り合いで一番白っぽい髪をしている女の子は……帽子屋のアゼルだろう。生憎、まだ恋人ではないが。

そもそもなんでアゼルとオレが仲がいいことを知ってるんだ。

驚いて口を効けないでいると、クスクス笑いを止め、すっと目を細めた。

「宝物からは目を離さないほうがいいよ。傷がつかないように宝石箱にしまっておくべきだ。…また何か見えたら知らせてあげるよ」

またね、三月ウサギさん。

そういってまたクスクス笑いながら、少年は女公爵と共にホールへ

と消えていった。

謎に縛られたオレだけが、バルコニーに残された。

An uncomfortable tea party 1（前書き）

普段より少し長いです。

しかも前半です。

An uncomfortable tea party 1

「ドーン。クレセント様に失礼はなかったでしょうね?」

伯爵家から帰る馬車の中。

女公爵は紅茶色の髪をした少年を窘めていた。

ドーンと呼ばれた少年は馬車の中で足を組み、頬杖を付いて目の前にいる絶世の美女に笑いかけた。この様子を執事のキアランが見たら、また即刻説教部屋行きだ。…この彼がおとなしく話を聞く道理は欠片もないのだが。

リリス本人は始めこそ驚き呆れたが、もう慣れてしまったし、言っても無駄だということもよくわかっているので最早何も言わない。

そんな彼女も、貴族の中ではかなり変わった人種であることは間違いない。

ダスクはきちんと教えられた通り、礼儀作法その他を身につけたので、ある種の片割れであるドーンもその気になれば同じことができるのだろう。

…その気になれば、だが。

「大丈夫だよ。ちょっと挨拶しただけだって言ったじゃん?ほら、同じ『役者』さんには挨拶しとかないとさ。それに」

「それに?」

少年は窓の外を見やりながら続けた。その目はまたどこか違う世界を見ているのだろう。

「昼間の夢で会ってきたんだよね、彼」

少年の言葉に女公爵は軽く目を見開くと、すぐ目を伏せた。

「……そう」

「大丈夫だよ、ちゃんと生きてたから」

無作法な少年はさも愉しそうに笑うと、おもむろに目を閉じた。

◇◇◇†◇◇◇

見上げると、首が痛くなるほど高い天井。

ブルーサファイアとアクアマリンのシャンデリアが中心に下がる、豪奢な螺旋階段。

足元は濃青の絨毯が敷き詰められ、磨きこまれた手摺には等間隔にターコイズとラピスラズリが埋め込まれている。

上る。

青の空間を、ひたすら上る。

遥か上に目をやっても、階段の終着点はまだ見えてこない。

どうしてかはわからないが、絶対下を振り返ってはいけないこともわかっていた。

振り返っても、もう戻れはしない。

だから、ひたすらに上を見据えて一歩一歩階段を上る。

上っても上っても、いつ終わるとも知れない螺旋に目を回しそうになる。

案の定、突如視界がぐるりと回った。

◇◇◇†◇◇◇

クレスはまだ13年とちょっとしか生きていないが、気味が悪いと

いうか、落ち着かないというか、ともかく、こんなにも居心地の悪いお茶会には呼ばれたことが無い。これからもこれを上回るお茶会はそうそう無いだろうと、現在進行形で確信している。

あたりを見回すと、まるで別世界のような景色の中にいる。世界はもう葉を落とす木々が色を変えてきているというのに、この一面ガラスで覆われた温室の中は、春と同じ花が色とりどりの花をつけ、甘い香りを振りまいていた。

大きめのテーブルには洋梨のタルトとクッキー、ティーセットが載っている。アゼルがこの場にいたら、目を輝かせて喜ぶだろう。そしてテーブルを挟んで向かい合うのは、カップの中身と同じ色の髪をした少女のように華奢な少年。

こう表現すると、クレスがこの「お茶会」に対して最初に挙げた形容詞たちの当てはまる項目は皆無だ。

だがそれは、テーブルより上だけ見ていればの話である。

この温室に入ってからというもの、足元をちょこまかと、あるいはのんびりと移動している連中を踏んだり蹴ったりしないように、かなり神経を使って下ばかり見て歩いていた。

なので、気が付かなかった。ふと目を上げてテーブルが視界に入れた途端、思わず足が止まって固まる。これから対峙する得体の知れない少年と、その足元でくつろいで（？）いる、ラスボス。

……超大型のグリーンイグアナに。

ウソだろ、なんだあのデカさ。あからさまにオレより大きいだろうが。

温室に入ってから散々避けたり跨いだりしてきた大小のトカゲたちはまだ許容範囲内だとしても。

いくらなんでもコイツは反則だろ。尻尾までいれると2メートル近くあるんじゃないか。

思わず顔が引きつるのが自分でもわかる。

「障害物が多くて申し訳ありません。彼らも女公爵にとっては立派な家族の一員なのですよ」

踏まないようにしてくださいね、後が恐ろしいですから、と既にテーブルに着いていたダスクがにっこりと笑いながら立ち上がった。

笑えないだろ、と内心突っ込む。

「あぁ、ここにいる子達はみんな草食なので、おとなしいですよ」

若干固まっているオレにそう言って笑いながら、向かいの席を勧めた。

ちなみにこの大きい子はキャサリンといいます、とご丁寧に紹介までしてくれた。

…その厳つい顔で、キャサリンてお前。

どうにか席に着いたが足元を見やると、本来ならば冬眠の準備を始めているはずの女公爵のペットたちが相変わらず元気よく動き回っている。

そんな人工的に季節感のない空間で、今日オレが訪ねた少年は、二人でお茶をするにはやや大きめのテーブルにトランプを広げていた。

そしてこれだけ語っても、この場で今の季節を正確に物語るのは、テーブルの上にある洋梨のタルトのみだった。

◆◆◆◆◆

「わざわざお越しいただいてありがとうございます。本日は女公爵の仕事で屋敷の方が立て込んでおりまして、こちらの方が落ち着いて話も出来るかと思いましたものですから。温室は珍しいですし、

面白いかと」
「いいえ、お心遣い感謝致します」
と、口では慣れない社交辞令を言ってみるものの。
屋敷内の一室の方がよっぽど落ち着くかと思うんだが。
「…あぁ、屋敷の中も足元はこんな感じですよ」
まぁ、慣れですね、と見透かしたようにオレが口を開く前にそう付け足して、手ずから紅茶を淹れてくれる。使用人も皆下がらせているらしく、人の気配は自分たち二人きりだけだった。その足元では相変わらずラスボス…もといキャサリンが微動だにせず侍っている。オレは極力膝から下には意識を向けないように、目の前の少年をひたと見つめた。
「…近いうちにまたお目にかかれると思ってましたよ、クレセント君」
「お忙しいところお時間を作っていただき、ありがとうございます」
丁寧な口調と、金色の瞳を細めてオレを見てくる様子は、先日バルコニーで会ったと同一人物とはとても思えなかった。服装が違うのもあるのだろうか。今日は髪を下ろして、白のプルオーバーシャツと裾を絞ってある濃いブルーのゆったりしたパンツ姿。オレはといえば、白シャツに黒のジャケット、グレンチェックのハーフ丈パンツに黒のレースアップブーツ。一応公爵家に赴くということで、出かける直前、侍女に捕まってあれこれ着せ替えられたが、結局いつものスタイルに余所行きのジャケットを羽織っただけだった。

「……なんと、お呼びすれば？」
「ダスクでいいですよ。先日申し上げたでしょう。ちなみに敬語も要りません。窮屈でしょう。二人きりのときは、普段どおりで」
どこかで聞いたような台詞だったが、言った本人が敬語だった。
そう言ったあとお互い黙って見つめ合い…もとい腹の探り合いをすること数秒。
ダスクの方が耐えられなくなって吹き出した。
「あいにく男と見つめ合う趣味はありませんよ」
よく勘違いされますけど、と肩をすくめた。
「……お前、誰だ？」
外見は同じだが、絶対別人だ。口調が違うだけでは済まない。イマイチ上手く表現できないが……空気が違う。裏に潜んでいるモノが違う。今目の前にいる少年もとても普通とは言い難いが、夜会で会ったときには、もっと何か、底知れないものが瞳の奥底に覗いていた。
いきなり敬語も吹っ飛んだが、まぁ本人がいらないって言うんだからわざわざ使わなくてもいいだろう。眼鏡越しにかなり鋭い視線を送ったつもりだが、ものともせずまだクスクス笑いながら目を細めている。
それにあの時、女公爵は彼のことを、「ドーン」と。
「女公爵の新しい養子。女公爵に拾われて5年前にこのお屋敷に来

ました。正式に養子縁組をしたのは半年ほど前ですが…僕が、本物のダスクですよ」

にっこり笑うと、クッキーを一つつまんで口に放り込んだ。

…どうやら生まれは貴族出身ではないらしい。

「……本物の？」

「先日夜会でご挨拶したのは、僕の……影と言うか、分身と言うか。そんなモノです。そちらの方はドーンと呼ばれています。まぁ自分で名乗ってるからなんですけど。…あれも一応僕なので、」

仲良くしてやってくださいね？、と女のような仕草で首をかしげる。容姿からして違和感が無いが、げんなり感を煽ってわざと相手の戦意を殺いでいる気がしてならない。

テノールの声で言われても、気色悪いだけだ。

…二重人格とかいうやつか？

またもやよくわからないことを言いながら、ダスクは頬杖をついてテーブルの脇に広げられたカードを一枚手に取る。

めくられたカードは、

――ハートのジャック。

「でも、」

ハートのジャックで口元を隠しつつ、

「聞きたいのは、こんなことじゃないでしょう?騎士さん?」

細めた瞳の中に、あのときの、ドーンの影がちらついた気がした。

そうだ。オレはまだコイツに問い詰めなきゃいけないことがある。

オレが次を継ごうとした、そのとき。

足元で影が　のそり、と動いた。不意のことに体がビクッと反応する。

今までダスクの足元で飾り物のように動かなかったラスボス……もとい、キャサリンが、マイペースに温室の奥のほうに歩いていった。

…心臓に悪い。

小さく息をついたオレを見て、本日二度目、一度目より豪快にダスクが吹き出した。
それはもう腹を抱えて笑っている。

あぁ、こう見るとちゃんと男だな。

「……爬虫類は苦手ですか？」

目に浮かんだ涙をぬぐいながら聞いてきた。…今さらかよ。

「いや、うんと嫌いってわけじゃないけれど…ここにいる数と、アイツのデカさにちょっと引いてる」

素直に感想を言うと、うんうん、と頷きながらまた笑い出した。

「いい加減にしろよ。大概失礼だぞ」

さっきまでとはまた違った意味で腹が立ってきた。

「失礼、申し訳ない…自分がここにきた当時はもっとビビッてましたよ。あはは、あ、でも」

肩で息をしながら、続けた。

「外の林の方には、肉食のもいるので、近づかない方がいいですよ。もうだいぶ寒いので、大して動きはしないでしょうけど」

サラッと重要なこと言いやがった。

「さぁ！お茶を淹れ直しましょう。このタルト、おいしいですよ」

今までの値踏みするような、挑発するような視線がウソのように、年相応に屈託無く笑った。

An uncomfortable tea party 1（後書き）

実は爬虫類好きな作者はグリーンイグアナを飼いたいと思っていたことがあります。ですが、ネットでしばらく調べて、断念しました。……冗談でも何でもなく、とんでもなくデカくなるんですね、イグアナって。結構本気で育てればキャサリンもリアルなサイズらしいです。

ウサギ小屋と称される日本の住宅事情では、よほどの覚悟が無いと飼えないですね。

…泣く泣く、動物園、水族館で眺めるだけで満足することにします。

このお茶会は次話に続きます。

読んで下さっている皆様、いつも本当にありがとうございます。

An uncomfortable tea party 2（前書き）

お茶会後半です。

An uncomfortable tea party 2

数日中に必ず連絡が来るだろうと踏んでいたが、案の定、伯爵家の三男坊から話がしたいということでお茶の招待が来た。

招待を受けたらそちらに出向くのが常識なのだが、僕の場合いつ睡魔に負けるかわからないので、執事のキアランに相談したところ、その日は他にも所用があるのでこちらにお越しいただけないか、と返信してくれた。

そして、そう日を置かずに『三月ウサギ』と再会を果たすことになった。

先日の伯爵家の敷地は広大で、バルコニーから見えた森はほぼ見渡す限り伯爵家の領地だと聞いた。だが、屋敷自体は大きくないが、領地が無駄に広いことを言えば、女公爵邸も負けてはいない。しかも伯爵家はあれが本邸だが、女公爵にとってここは別荘である。本邸はダイヤ地区のど真ん中にあるのだが、女公爵は一年のほとんどをこの別荘で過ごしている。

ダイヤ地区でも先日の伯爵家の真反対側に位置するこの屋敷は、街にも城にも遠く、何かと付き合いの多い女公爵の生活の拠点としてはあからさまに不向きである。しかしどれだけ不便でも、彼女はこの温室のある別荘を離れる気はさらさら無かった。

「街の真ん中では、この子達が生きづらいでしょうから」

そう言って膝の上のトカゲを撫で回す。その部屋のバルコニーでも、成人女性と大差ない大きさのグリーンイグアナが紫外線を浴びてご満悦だった。

そうして今は数多の花々と冷血動物に囲まれながら、灰色の『三月ウサギ』と二人で洋梨のタルトをほおばっている。

◆◆◆◆◆

はじめ足元を見ながらおそるおそるやってきた彼は、キャサリンを見た瞬間固まってしまいました。キャサリンを初めて見た人は誰もが似たようなリアクションをしてくれますが、まぁ逃げ出さなかっただけ、肝は据わっているのでしょう。

席に着いてからは、ずっと僕を探るような目を外してくれません。それもそうですね。初対面はドーンの方ですから。僕本人と会話するのは今日が初めてですし、別人みたいなんでしょう。とは言っても、先日も大広間にいたのは僕の方なんですけどね。

それにしたって、いきなり誰だ?とか聞かれました。お茶に招待しておいて、それはないでしょう。ちょっと笑えます。

キャサリンが足元からいなくなって少し余裕も出来た様ですし、に

らみ合っていてもあんまり長くなると眠くなっちゃうので。
サクサク先に進みましょうか。

「…それで、お話とは？」
ティーカップから口を離し、勧めるままタルトを食べていたクレセント君に話を振りました。

「君が、…ドーンが、この間言ってた白っぽい髪の女の子のことだけど」
「ええ」
「オレとドーンが話したこと、ダスクは知ってるのか？あれは一体どういう意味だ？あと、モノクロってなんのことだ？」
おや、さすがウサギ、耳がいいですね。感心しました。

「彼の言動はほとんど僕も把握してますよ。その真意を測りかねることは多々ありますが。…あれは言葉のままの意味だと思います。大切なら大事に仕舞っておけ、ということでしょうね」
ドーンは嘘はつきませんよ、と紅茶を継ぎ足しながらそう返しました。
ですが、そんな答えじゃご納得いただけなかったようです。

「なんでアゼルを知ってるんだ？」

へぇ、あの子はアゼルというんですね。あの服装だと貴族階級ではないと思いますが。

「つい先日、確かな色はわかりませんが白っぽい髪をしたの女の子と、あなたが一緒にいるところをドーンがお見かけしまして」

「どこで？」

「あなたがそのお嬢さんを横抱きにしているところです」

「……」

黙ってしまいました。心あたりはあるんでしょうか？

……あれは、いつの出来事なんでしょう？

「その‘アゼル’という方と、僕の言う女の子が同じ人物だとは限りませんよ？夜だったみたいですし。おそらく白に近いグレー、ベージュ、金、銀…くらいの髪色だと思います。他にも候補に上がるような方はいらっしゃいますか？」

まぁ周囲も含め、あんな状況そうそう無いと思いますが。

金髪なんて珍しくもなんともないので、髪の色だけなら他にも該当しそうな知り合いはいるでしょう。

テーブルに並べたカードの右から2番目をめくる。クラブの3。

「僕もあなた方両方と直接面識はありませんでしたから、なんとも言えませんけど。先日の夜会であなたのお顔を拝見して、あの時の少年の方だと気づいたんです。……それでアゼル嬢は、クレセント君の恋人ではないんですか？」

この間もかなり焦ってましたよね、と冷やかしてみました。
驚いたように目を見開いたと思ったら、次の瞬間耳まで赤くなってしまいました。
…面白いですねぇ。百面相です。

「ち、違うっ…まだ」

そこまで言って黙ってしまいました。まだ、何なのかは…推して知るべし、ですね。

「まだなんですか？ではこれからがんばらないとですね」

笑いながらもう一枚カードをめくる。スペードの９。

「おいっ…そうじゃなくて…」
「別に隠さなくたっていいですよ。」

…おや？大丈夫かな。

「しかしドーンの見た女の子をあなたが‘アゼル嬢’だと思うんでしたら、いろいろな意味で彼女の傍にいられるように努力した方がいいと思います。‘仕舞っておけ’と言ったドーンの意図するとこ

ろは僕にもわかりませんが。……きれいな方でしたので、ライバル出現かも知れませんね」

しばし難しい顔をして…盛大にため息をつきながら無言で頭を抱えてしまいました。
これは心当たり大有りみたいですねぇ。

「ため息をつくと、幸せが逃げますよ?今度機会があればぜひ紹介してくださいね。」

心底嫌そうに睨まれてしまいました。…本当に面白い方だ。

もう一枚めくる。クラブの6。

……おそらくは彼女も、

ドーンの言うところの『登場人物』の一人でしょうね。

しかもエキストラなどではなく、きちんとパンフレットに名前が載る主要人物クラスで。

◇◇◇†◇◇◇

――――あぁ、また世界から色と音が消えた。

色の無い世界は、ボクから色彩を奪うことで、

僕を守ってくれているのかも知れない。

音の無い世界は、ボクを世界から隔絶することで、

僕を救ってくれているのかも知れない。

でも僕は

その世界を守ってあげることなど出来はしないし、
ましてや救いの手を差し伸べるなんて、

◇◇◇†◇◇◇

目の前の少年は、とっくに冷めてしまった紅茶を一口すすっていきなり話題を変えた。

「……ところで、クレセント君は何歳のときにタトゥーが出たんですか？」

話が飛んでついていけない。

「…3歳の時」

訝しみながらも答えた。何を聞いてくるのだろう。

「3歳…ではそれ以前のことはほとんど記憶にないでしょうね」
「はっきりと思い出せるものはほとんど無いけど。…なんでいきなり？」

そういえば、こいつも『役者』だったんだった。…こいつは『何』なんだ？

「クレセント君は、なぜ自分が『三月ウサギ』になったか、わかり

ますか？」

言いながら、いきなり大あくびしやがった。失礼、と言いながら目をこすっている。

「なぜも何も、先代の『役者』が死んだ時点で15歳以下の子供の中で、ランダムだろう？」

「ええ。しかしこの国に数多いる子供たちの中で、なぜ自分が選ばれたのか、それがなぜ自分でなければならなかったのか、考えたことはありませんか？」

それこそ考えても無駄じゃないのか。ランダムなんだから。国中の学者が知恵を絞っても、未だ法則のようなものは見つかっていないらしい。

クレス自身は籤に当たったようなものだと思っている。それが宝籤なのか、貧乏籤なのかは今のところ判断がつかない。

「んー……ないと言えば、ウソになるけどな。もしそんな理由があったとしたって、知ってどうするんだ？」

選ばれてしまったものはどうしようもない。嫌だと言ってみたところで、タトゥーが消えてくれるわけではない。考えても栓の無いことだ。

そう答えると、ダスクは興味深そうな視線を向けてきた。しかしさっきよりわずかだが目元がとろんとしてきたのは、気のせいじゃないだろう。

「もし、自分がタトゥーが無い普通の人間だったら、とは？」
「今こうしてこんな変なヤツとお茶したりはしてないだろうな」
タルトの最後の一片を口に放り込みながら、意地悪く笑ってやった。
「ダスクは、タトゥーが出なければよかったのにと思ってるのか？」
「…無ければ、もっと平穏だったとは思いますね」
答えながら紅茶をすすっていたが、伏せた目に一瞬影が差した気がした。
しかしカップから顔を上げると、そんなものはおくびにも出さずにっこり笑った。
「自分と同じような『役者』とお会いする機会は滅多にないので、他の方がどう思ってらっしゃるのか、聞いてみたかったんです」
他意はないですよ、と言ってまた欠伸を一つ。
…そんなに眠くなる時間じゃないけどな。
「寝てないのか？」
「…いえ、寝てはいるんですが、いくら寝ても寝足りないというか。…不便なことです」
そう言って、のろのろとテーブルに広げていたカードを片付け始めた。
ふと外を見やると、空が紅葉と同じ色に燃えていた。
「随分話し込んでしまいましたね」
「あぁ、そろそろ失礼しないと」

「夕食に遅れますね。馬車を用意させましょう。」

今から馬車で帰るとなると時間がかかりすぎるけど、しょうがないか。

席を立ち、また足元にいつもの１０倍以上の注意を払いながら、温室の外に向かう。

暖かい温室から一歩外に出ると、日の落ちた外気の冷たさは本来のそれより数倍鋭くなる。

「…なぁ」

帰り際に、数歩前をややおぼつかない足取りで歩くダスクを呼び止める。

「お前、『何』なんだ?」

一拍置いて、またクスクス笑い出した。…何かにつけて笑うのは、こいつの癖だな。

「誰だ、の次は『何』だ、ですか?」

ダスクはオレの質問には答えず、笑いながら背中を向けて屋敷の方へ歩き出した。

正面玄関の前でダスクと屋敷から出てきた初老の執事が見送ってくれる。ダスクはもう本格的に眠いらしく、執事の袖に捕まってやっと目を開けている感じだ。

余所行きの顔で暇を告げて、用意された馬車に乗り込む。

「クレセント君」

扉を閉めかけた馬車に近寄ってきて、金色の瞳がオレを射抜いた。そして今まで眠そうにしていたのがまるでウソのように、とても小さいがはっきりとした口調で、こう告げた。

「ボクもまだわからないことが多いけど、気をつけて。『眠りネズミ』の予知夢は、よく当たるんだ」

アゼル嬢によろしくね。

夕闇の中で、それまでずっと笑顔だった少年の顔がひどく悲しそうに歪んだのは、眼鏡越しでもきっと見間違いじゃないと思う。

The doubtful adopted child

我が主、女公爵が連れてきた今回の「坊や」は、ちょっと…いや、だいぶ変わっている。

この子の前の子も、その前の子もそうだったが、押し並べて皆きれいな顔をしていた。我が主本人も誰もが認める絶世の美女だが、間違いなく面食いで、下世話な言い方をすれば若干…否、かなりのショタコンだと使用人は口を揃える。…見たところ、好みの系統に一貫性はないようだが。

そんな中、今度のダスクという少年も、最初見たとき女の子かと思った。…ショタコンではなく、ロリコンだったのかと疑った一瞬だった。

紅茶色の長い髪に自家で取れたレモンのような濃い金色の瞳で、身長はそこそこあるが何しろ線が細く、成長期前の面差しは少女のそれと大差ない。来た当時はあからさまに栄養失調だったが、屋敷に来てからも身長は伸びたものの、その様はさして変わることはなかった。現在だと少し前に変声期を越したため少年だと知れるが、それでも口を開けばその見た目と声のギャップに違和感を覚える者も多い。

更に屋敷に来た当時からの悪い癖（？）で、その顔と声でクスクス笑いながら時々意味不明な謎掛けをして回っていることがあり、陰では気が触れているのでは、と根も葉もない事を言い出す者まで出る始末。

――あぁ、思い出した。「彼」が私に投げかけた、初めての「質問」。

芋の皮を剥いている私のところへやってきて、こんなことを聞いてきたのだ。

「ねぇ、ヘレイナ、どうして足踏みミシンは鋸と仲が悪いの？」

…そもそもなんで足踏みミシンと鋸が知り合いなのかをお教え願いたい。

気が触れていることはないだろうが、何を考えているのかとても掴みづらいのは、今も昔も間違いない。

そんな質問をされた後、彼に付けられた家庭教師に聞いてみた。彼曰く、頭は正常でむしろいい方らしい。居眠りが多すぎるが。

中身はともあれ、そんな彼は華奢な少年少女がお好きな我が主の好みどストライクであろう。あの飽きっぽい女公爵が名前で呼ぶことを許し、5年もお傍に置くなんて。

「あら、短時間でも傍に置くんだったら、見目は良い方がいいでしょうに」

そう悠然とキアランに言ったとか、言わないとか。

もういつのことだったかきちんと思い出せないくらい前の話になってしまった。確か、前の子が「お仕置き」されてから、2週間後の

こと。女公爵がストリートチルドレンを拾ってきたと聞いてかなり驚いた。

女公爵はよく道端で子供を拾うらしいが、普段なら女公爵が主宰する団体が運営する孤児院に放り込んで仕舞いである。そしてその帰りに孤児院にいた子を適当に一人、屋敷に連れ帰ってくる。そうしてその子が「お仕置き」を受けると、また次の子がやってくるのだ。

拾って直接自邸に連れてきて、家庭教師を付けて教育を受けさせる、なんて事は本当に稀だった。自分より長く勤める執事のキアランに聞いても、ここまで入れ込むのは過去1度しか記憶にないそうだ。結局はその子も「お仕置き」されたらしいが。いずれにせよ、ダスクのことはよほど気に入ったのだろう。

…あんなにガリガリでは「お仕置き」はまだ当分なさそうだ。

そんな彼は目下、女公爵邸滞在記録を現在進行形で更新中である。

◇◇◇†◇◇◇

室内に足踏みミシンがあった。

…昔はミシンなんてなかったのに。

外は明るくて、家には自分以外に人の気配は無い。

足元には色とりどりの布地が散乱している。

窓際のトルソーには、作りかけの服が着せてある。

紺色のワンピース。誰の為の服だろう。

そもそも、この家に服を作れる人間なんていなかったはずだ。

近寄って服に触れようとした瞬間。

玄関のドアが開いた。

◇◇◇†◇◇◇

我が主、女公爵が連れてきた今回の「坊や」は、ちょっと…いや、だいぶ変わっている。

まず、一日のほとんどを寝て過ごしている。怠けている、という意味ではない。文字通り本当に眠っている。本人によると、だいたい一日１８時間くらいは寝ているらしい。いくらなんでも寝過ぎだろうと思うのだが。

そして昼夜関係なくようやく起きてきたと思えば、使用人部屋にやってきて、お腹が空いたという。

…何時間寝ようと勝手だが、その協調性の欠片も無い生活リズムに周りを巻き込むのはやめて欲しい。

最初のうちは的はずれな時間でも仕方なく彼が食べ損ねた食事の残りなどを出してやったが、それが毎日のこととなると、いくら主が迎えた子と言えどもいい加減にしろと言いたくなってくる。週に４回も深夜にたたき起こされる私たちの身にもなれ、というものだ。

もしこの調子で夜中に起こされる事態が続くのなら、深夜手当てなどの待遇改善を交渉しようと他の使用人たちと話していた時分。小さな事件が起きた。

あれはダスクがやってきて3ヶ月ほどたったある日のこと。夜中に手洗いに立ったところ、台所で物音がした。

また「Ｒａｔ（ネズミ）」が入り込んだか、と廊下の隠し抽斗からナイフを取り出し、その場に灯りを置いて台所に向かった。その前数週間に渡って、朝になると食料が減っていることが度々あった。物取りの仕業かと思われたが、金品などには目もくれず、ただ食料だけがなくなっていた。

夜中に屋敷内を歩き回る、という点で一番に容疑がかかるのはダスクだが、問いただしても頑なに「自分ではない」と言い張った。確かにこの少年が起き出すと、誰かしら叩き起こしていた。

とは言っても、出自がストリートチルドレンということもあり、来たばかりのダスクを完全に信用していない人間も屋敷内に少なからずいた。実は警護という名目で夜中見張りを付けてもあったのだ。

それまでのところ被害は食料品のみだったが、何かがあってからでは遅い。屋敷全体で警戒を強めていた。

閉まりきっていないドアをそっと押し開け、台所の床に置かれた灯りが映す影の本体に向かってナイフを一本放った。

空気が動いた瞬間、そいつが反応した。投げたナイフが別の何かに当たったのだろう、鈍い音が響くが手ごたえは無い。思わず舌打ちした瞬間、代わりにわずかな光を反射して何かが飛んできた。咄嗟にドアを楯に身を引く。

タンッと小気味よい音を立ててフォークがドアに突き刺さった。

「誰！？」

ドア越しに小さく誰何の声を上げた。

「……なんだぁ、ヘレイナか。びっくりしたぁ」

暗がりから気の抜けた少年の声がした。
床に置いていた灯りを取り上げ、こちらに向けた。

「……ダスク様？」

灯りに照らされたのは、女公爵が連れてきた少年だった。

「フォーク投げてごめんねー。お腹空いちゃったんだ」
「どうしてここに？ご自分ではないと言い張ってらしたでしょう？」

外見は、先日無実を頑として主張していたダスク……なのだが、何かがおかしい。
それに見張りはどうしたんだ。

「うん、ダスクじゃないからね、ボク」

少年は訝しむ私に向かってニコニコ笑って見せた。

…なんだって？

「ほら、ダスクがいっつもみんなのこと夜中に起こして、悪いなぁと思ってさ。なんか食べられるものないか、自分で探してたの」

眉根を寄せる私にお構いもなくニコニコと話し続ける。

胃の辺りがざわつく。

普段のダスクは礼儀正しくおとなしい少年なのに、言葉使いといい、クスクス笑う表情といい、まるで別人のような豹変振りだった。いや、目の前の少年はその口ではっきりと自分はダスクじゃないと言い切ったではないか。

「じゃあ、あなたは誰なんですか」

――私の問いに、この無作法な少年はドーンと名乗った。体は一つだがダスクの片割れだと言う。二重人格なのかと思ったが、本人曰く、世に言う二重人格とはまた別物なのだそうだ。チャンネルが少し変わっただけで、どちらのときの記憶もお互いちゃんとあるのだと。

まぁちょっとややこしいから、二重人格でいいよ、と笑いながら肩をすくめた。

年端もいかない子供のそんな態度にむっとして眉をひそめたちょうどそのとき、先ほどフォークが突き刺さったドアから見張り番のはずの使用人が顔を出した。

「ヘレイナさんどうしたんですか、こんな時間に……って、ダスク様、どうしてここに！！」

部屋からいなくなったダスクを見つけて目を丸くする。

「ちょうど廊下でダスク様とばったり会って、夜食を」
「目が覚めてお腹が空いたんですけど、あなたはドアのところでうたた寝してらしたので、起こさないで来たんですよ」
二人揃って口裏を合わせる。お互い先刻のことがバレては何かとマズイのだ。
うたた寝をしていたのは本当だったのか、やや疑いのこもっていた眼差しが急にオロオロし出した。
「え、…そ、そうだったんですか、なら、いいんですが。…遅くならないうちにお戻りくださいね」
そう言うとそそくさとドアの向こうに消えた。
この少年にナイフを投げたことが女公爵に知れればどうなることか。首が飛びかねない。
私は安堵の溜め息をつき、ダスク…もといドーンはクスクス笑った。
……この子は事ある事に笑うのが癖なのだろうか。
イマイチ納得いかないところもあるが、要するに、だ。
睡眠不足の頭を無理矢理動かす。
今目の前にいる食料泥棒は、体は同じでも私たちが今まで知っている「ダスク様」とは中身が別人の「ドーン」である、と。
「……だから、ダスク様は‘自分’じゃないと」
台所に忍び込んでいるのはドーンであって、ダスクではない。だから彼は‘自分じゃない’と言った。

「そして、ドーンのことを言わなかったのは、誰も‘じゃあ誰なんだ’とあの子に聞かなかったから」

当ったりー、と目の前の少年は口角を上げてニッと笑った。

真相を思い当て、思わず溜め息が出た。いろいろな意味で。

「へレイナって、ナイフ投げるのうまいね。コックさんって、みんなナイフ投げ出来るの？あんなに暗い中で頭の上すれすれだったよ」

今度教えてよ、と目をキラキラさせて無邪気に笑った。料理人が揃ってナイフ投げが出来るわけではないが。

まさか侵入者がこんな子供だとは思わない。手元が狂ったかと思ったが、単に的が低すぎただけだったらしい。

「もうお教えしなくても出来るのでは？」

さっき投げたフォーク。１０歳やそこらの少年の技ではない。

…本当にただのストリートチルドレンだったのか？さっきはあんなことを言っていたが、この様子だとあの見張りにも気付かれずにここまで来たのかも知れない。それに、女公爵はこのドーンの存在をご存知なのだろうか。

「今まで隠してたんですか？」

「ううん、別に隠して無いよ。普通に昼間もボク出てるし」

ダスクって呼ばれても返事しないよ、とさらりと言った。…なんで３ヶ月間誰も気付かなかったんだ。頭を抱えたくなった。

「ねぇところで、こないだの答えわかった？」

笑う少年を前にこめかみを抑えて記憶を辿る。

先日、ダスク様―今思うとドーンだった―がクスクス笑いながら聞いてきたこと。

「あの、足踏みミシンが鋸と仲が悪いとか―」

「そう！それ！」

頭が痛くなってきた。いきなり何を聞いてくるのかと思ったのだ。普段のダスク様はそんな奇妙なことを言い出す子ではないのに。だが、このドーンなら合点がいく。

「わかりません。そもそも足踏みミシンと鋸が出会うきっかけがわかりません。出会わなければ仲がいいも悪いもないでしょうに」

ぐったりしながら答えると、さも不服そうに唇を突き出した。

「えー、鋸が家に来てたのに…」

またよくわからないことを。どうやって鋸が家を訪ねてくるんだか。

ドーンの言うそれが二重人格とどう違うのかは、一介の料理人に過ぎない私には知る由もないが。

ひとまず考え込んでいるドーンに、冷蔵室に夜食用のサンドイッチを常備するから、今後夜中に台所を漁るような真似はしないことを

約束させた。

お互い今夜のことは他言無用で、と再度口裏をあわせ、ダスク…もといドーンを部屋に帰す。これで私の首は当面大丈夫…だろうか。

再度大きな溜め息を一つ吐いて一人ごちた。

「全く、とんでもなく大きなＲａｔ（ネズミ）だこと」

そうして、公爵家の使用人はダスクによる安眠妨害からあらかた開放され、それ以降、朝起きて食料が無くなっていることはなくなった。

ちなみに後日お伺いしてみると、女公爵様はドーンの存在もとうにご存知で、食料泥棒がドーンであるということも勘付いていらっしゃったそうな。

どうして教えてくださらなかったのか、と思わず非難の視線を送ってしまったが、そんなものはどこ吹く風でこうのたまった。

「だって、面白いでしょう？」

さすが、我が主である。

The doubtful adopted child（後書き）

今回は公爵家の使用人、ヘレイナさん目線でした。彼女はコックさんです。原作をよくご存知の方なら、なんとなくわかっていただけるかと。

Ｎａｕｇｈｔｙ ｂｏｙｓ' ｄａｉｌｙ ｌｉｆｅ

―女公爵邸、クレスが温室を訪問した次の日の朝。

「おはよう、リリス様。よく眠れた？」

リリスが朝食のため食堂に向かうと、この時間にしては珍しい姿があった。

彼女の養い子の少年がきちんと室内着に着替えて朝食の席についていた。

白のプルオーバーシャツに濃い青のパンツは幅広で裾が絞ってある、貴族の服装にしてはかなり砕けたそれ。何かの本で見たという体の締め付けを最小限に抑えた意匠。使用人が用意した服には目もくれず、彼自身が仕立て屋に注文したものだ。いつでもどこでも睡魔に襲われる彼の場合、そのまま寝ても苦しくなくて良いのだとか。

寝間着にもなり得る、彼専用の普段着。正式に公爵家の人間として外出する際には相応しい格好をさせるが、それ以外は放任している。普段着なのだから、見苦しくなければ特に咎める理由も無い、とリリスは思う。ごく一部の使用人にはやや不評のようだが。

…一緒に朝食を摂るなんて、どのくらい久しぶりのことだろう？

その口調は。

「おはよう、ドーン。この時間にあなたがいるなんて、珍しいわね」
「うん、夜明け前から起きてはいたけど」
…自分では「起きている」と言うのか。
周囲の使用人たち数人がさも迷惑そうな顔をしているのを見て、苦笑が漏れる。
言った本人は周りの視線などどこ吹く風だ。いたって真剣な顔でトーストにクリームチーズを塗って…というか載せている。そのクリームチーズの層は、トーストより厚い。
「あまり皆に迷惑を掛けてはだめよ？…昨日は、何をしていたの？」
席に着くと同時にティーカップに紅茶が注がれ、アールグレイのいい香りが立ち上った。
「温室で、ダスクが伯爵家のクレセント君とおしゃべり」
さらりと出た言葉はリリスにとって少し意外だった。
キアランから、先日の伯爵家の三男坊からダスク宛に招待が来て、逆に家に呼んだことは聞いてはいたが、まさか温室に通したとは。
キャサリンたちは大丈夫だったのかしら。
この少年の場合、周囲から聞くのと本人の口から聞くのとでは内容が全く違うことがままある。過去に本人が大丈夫だと言っても、客観的に見れば全然大丈夫ではなかった出来事は、数知れない。
少年は更にスライスチーズを2枚つまんで、トーストの…もとい最終的にトーストの1．5倍の厚さになったクリームチーズの層の上に乗せる。

「あら。どんなお話を？」
「こないだボクが言ったことが気になってたらしいよ」
「初対面があなたではね」

あの少年も可哀相に、意味不明だったろう。この子は嘘は吐かないが、ほとんどの場合話の内容が要領を得ない。
……出自からして致し方ないのだが。

「うん、睨まれた。せっかく忠告してあげたのに」

嫌われたみたい。とクスクス笑って肩をすくめながら、‘チーズを載せたトースト’なのか‘トーストを下敷きにしたチーズ’なのか最早判断不可能になった物体を、さも嬉しそうに一口齧った。

「…でもあの子、カンがいいね。ボクたちのことすぐに見破ったんだ。耳もいいし、度胸も据わってる。キャサリンを見ても逃げ出さなかったんだよ！さすがウサギさんだね」

かなりびっくりはしてたけどねー、と愉快そうに笑う。相当楽しかったらしい。
確かに、リリスとしてもそれは嬉しい。

「まぁ、それは嬉しいわ。今度私からもお茶にご招待しましょう」

キャサリンを嫌わないでいてくれる人は貴重なのだ。あんなに大人しくて可愛いのに。

「うん、ダスクも気に入ったみたい。ご褒美に『役者名』教えてあげちゃった」

満面の笑みで返ってきた言葉に驚いて、ロールパンに伸ばしていた手が止まった。この少年が出会って数日の他人に自分のタトゥーを明かすなんて、おそらく初めてではないか。養母である自分ですら、寝ている間に湯浴みを手伝った使用人から話は聞いていたものの、本人の口から詳細を聞いたのはこの屋敷に連れてきて2ヶ月ほど経ってからだった。

「よほどお気に入りなのね」

「今度こそ、ボクが遊びに行こうと思ってるんだ」

「…ダスクの時にして頂戴」

釘を刺された少年は、えーっ、と口を尖らせて足をバタつかせた。

どうにもこのドーンは発言や態度、仕草が見る者に違和感を与える。年齢の割に幼いというか無邪気な振る舞いが、時折金の瞳に宿るひどく底知れない光と相まって、対峙する相手に不気味な印象を与えてしまうのだ。そしてそれらがかなりの確率で支離滅裂であるから、余計性質が悪い。

ダスクの言動が相当に大人びていることを思えばその反動とも取れるが、やはり外に出すには不安が残る。

二人の精神年齢を足して2で割れば、実年齢に似つかわしくく…なるのではないだろうか。

……いずれにせよ、どうせ聞き分けはしないだろう。金色の目が笑っている。

リリスは内心呆れてため息を吐いた。

「ドーン、チーズばかりでなくきちんと野菜もお食べなさいね」

◇◇◇†◇◇◇

地上の生き物たちが、世界の主導権を手放した時間帯。

小さいけれど征服欲を剥き出しにした月が、森の上でさも満足げに嗤う。

闇の上に己が漆黒の軍隊を従えて、この世界の覇権を握る。

木々は己が影にその命を取って代わられ、なす術も無い。

身の程を弁えず闇一色の世界に目を開けているボクは、急に恐ろしくなって頭上の覇者を振り仰ぐ。

葉の隙間から見えるそれは、無彩色の白銀。

―せめて、金だったらよかったものを。

――――ざわり

肌が粟立つ。

色は、

この世界に、色は。

色を求めて駆け出した。

◇◇◇†◇◇◇

レイズはこの現状をどうしようか迷っていた。

ケンカするなと言われても、こういう場合はどうしたものか。

場所はハート地区の商店街から2本ほど奥まった通りの行き止まり。

背中は壁。

目の前には自分より2、3才上であろう少年二人。…ご丁寧にそれぞれ得物付き。

左手に買い物籠。ちなみに野菜大盛り。

せっかく午前半休日の午前に、外出着を着て出かける気満々のマリアンに捕まったのが運の尽き。買い物籠とメモを押し付けられ、朝市に駆り出されたのだ。

今日は半休なんだけど、というレイズの主張はマリアンの次の一言にやり込められた。

「じゃあアゼルに頼もうかね。こないだ果物屋の旦那がアゼルのこと褒めてくれてたから、おまけしてもらえるかもしれないし」

あそこは夫婦で朝市の立つ日のみ出張してくる店だから、さほど目くじらを立てるほどではないが、レイズとしては面白くないことには変わらない。

レイズは澄ました顔のマリアンをひと睨みすると、苦虫を噛み潰したような顔で籠を引っつかんで、勝手口を乱暴に開けた。

…今日は厄日か。

無意識のうちに大きな溜め息を吐く。

それが合図のように、目の前の二人が動いた。

左からわき腹めがけて横なぎにしてきた相手の得物を屈んで避ける。もう一人は更に物騒なことに、屈んだレイズめがけて果物ナイフのようなモノを振り下ろしてきた。咄嗟に横っ飛びに避けるが、特に訓練を積んだわけでもないらしく、構えも太刀筋も何もあったものじゃない。勢い余って背中ががら空きなのだが、どうしてくれようか。

とりあえず打開策を考えながら、めちゃくちゃな攻撃をとりあえず籠に当たらないように、右に左に後ろに、ひたすら避けていた。返り討ちにするのは簡単だが、そうもいかない事情もある。

「っ……ちょこまかと、っいい加減にしろっ」

さっきから聞いていると、どうやら昔伸した連中らしいのだが。

目の前の顔に覚えは……うん、無い。

「こないだのっ…借りをっ…返してやるっ」

こないだっていつだ。

息切れしながらそんなこと言われても、さっぱり説得力がない。

思い当たる節がありすぎて、レイズは1秒で目の前の顔の特定を断念した。

あー、どうしようか。イラつくな。

そもそもオレにやられたってことは、アゼルに近付いたってことだろ？

……ある程度は、正当防衛か。

自分に都合よくそう結論付けて、二ッと笑う。見たら後悔する類の笑みだった。

とりあえず刃物はよろしくないので、まずソレを手放してもらわないと。闇雲に突いてきた手首を横から右手で掴み、思い切りひねり

上げる。そうしてがら空きになった胴に手加減無しで蹴りを入れて、その背後で錆びた鉄棒を振り上げていたもう一人にぶつけてやった。ささやかだが今朝からの憂さ晴らしだ。

げぇっとか、ぐあっとか、そんな類の変な音を出しながら二人まとめてひっくり返る。

…ったく、年下相手に二人で得物付きで勝てねぇって、どんだけ弱いんだよ。

籠から一つ転がったオレンジを拾いながら呆れる。

銃と併せてある程度の体術も習っているレイズは、その辺の普通の子供たちとやりあってもまず負けることはない。おそらくこの界隈の子供社会ではトップ3に入る強さだ。

そして、そのやや反則的な強さでこれまでアゼルに近付いてきた（とレイズが見なした）ごく普通の近所の少年たち、時には頭一つ二つほど大きな年上の男たちまでも容赦なく潰してきた。

「無理だよ、あきらめな」

これ以上は止めといてやる。ケンカしないって約束があるからな。

…アゼルに感謝しろよ。

時間の無駄だし、オレもそんなに我慢強くないんだ。

まだ若干のイライラを抱えた少年は、この出来事も元はと言えば自分が蒔いた種だということを遥か頭上の棚に上げている。引っ張り出すには、身の丈より高い脚立が必要だろう。

地べたで唸っている二人にくるりと背中を向け、スタスタと通りへ向かう。去り際に相手が振り回していた鉄棒とナイフを反対側の表通りの方へ蹴り飛ばしておくことも忘れない。

少年たちがようやく起き上がると、もう紅い髪は大通りの角を曲がっていくところだった。

これまで「容赦」という言葉とは無縁だったレイズが、止めを刺さずに相手に背を向けたのは、これが初めてだったかもしれない。

An unbirthday present

星が瞬いてもにぎやかな通りをわずかに入ったところに、ごくごく小さな、テントとすら呼べないような張が闇に紛れて立っていた。隙間から、ごく僅かに漏れる薄明かりが無ければ、通りかかる人もその存在自体を見逃してしまいそうな、小さな、小さな帳。

若い娘は恐る恐る、その小さな帳の中を覗き込む。

暗いカンテラが一つ天頂から下がっており、ぼんやりと空間を照らしている。

中には小さな卓と、対の小さな椅子が二脚。卓の上には、これまた小さな時計と呼び鈴が一つずつ。

その奥にはフードを目深に被った人物が、一人。

その人物は、娘が幕をめくって中を覗き込んだにも関わらず微動だにしない。

意を決して、ごく小さく声をかけた。

「…あの……」

座っているので身長がわかりづらい上に、フードで顔も見えないので、声を発するまでその人物の性別も年齢も、確信が持てなかった。

「おねえさん、何が視たいの？」

ふいにフードの下から、驚くほど若いテノールの声が響いた。

◇◇◇†◇◇◇

――――――どくん。

心臓が跳ねる。

夜。

暗い室内に銀の月光が降り注ぐ。

そんなモノクロームと見紛うその世界で、闇を撥ね返して唯一鮮やかに映える、

赤。

自分の手を染める鮮血の、

朱。

背を向けて蹲る少年を中心に広がる、

紅。

周囲を取り囲む、頭蓋骨の群れ。

赤、朱、紅。

あぁ、お願いだから、
振り向かないで。

『あか』だけが映える、モノクロの世界。

◇◇◇†◇◇◇

毎週樹木の日はショッピング・デーだ。

普段17時の鐘と同時に店仕舞いをするこの国の商店も、毎週この日だけは夜分まで店を開ける。

レイズは屋根裏部屋を抜け出して、夜の商店街を何の気無しにぶらついていた。

気分転換だ。

街灯と店の明かりに浮かび上がる町並みは昼間と全く違う表情を見せ、少年の心を浮き立たせた。如何にかしてそのうちアゼルも連れ出そう、と心に決める。

若旦那のウォルターに師事して帽子製作の修行を始めて以来、昼間はほとんど作業部屋に缶詰の生活が続いている。

苦痛ではない。むしろ望んでいたことだ。当面の目標は、自分の作った帽子がＨａｔｓの店頭に並ぶこと。道程はまだまだ遠いのだが、それでも大きな夢に一歩近付いた。

ただ一つ気がかりなのは、オレが作業場に篭るようになってから一人で買出しに出ているアゼル。毎晩その日一日何事もなかったか、問いただして確認するのが夕食後の日課となっている。尋問される方は明らかに鬱陶しそうだが、ここは頑として譲れない。幸いここ数ヶ月、街の連中に絡まれたり、言い寄られたりはしていないらしい。オレの努力の賜物だろう。

それが終わると、夜はそのまま復習をするかベッドに沈んでしまうかなので、時々は息抜きがしたくなる。

週末も外には出るが、昼間だとかなりの高確率で過去に一度は伸したことのある連中に出くわしてしまう。伯爵家での射撃勝負に負けて以降、もうケンカはしないとアゼルと約束させられた手前、そいつらと会っても向こうから突っかかってこない限り、相手にしないように努めていた。

だが一度だけ、もう名前も覚えていない命知らずがリベンジを挑んできて、あっさり返り討ちにしてやったことがある。もちろん、オ

レからは仕掛けてない。どこも傷にならなかったし、服も調えて帰ったのに、アゼルはなぜか帰った途端に見破った。
正当防衛だとどれだけ言っても聞く耳を持たず、その後優に二週間は口を利いてもらえなかった。

…全く、誰のためだと。

幸か不幸か、それ以降レイズに勝てないことがわかってる連中のほとんどは直接ケンカを売ってくることは無いものの、遠巻きに癇に障る視線を送ってくる。…息抜きどころか、ストレスが溜まる一方だ。

結局2、3週に一度、そこそこ人も多くて暗くて、遠くから顔の判別しにくいショッピング・デーの日の夜に外に出るのが習慣になりつつあった。その方が、大通りのウィンドウもゆっくり眺められる。

――帽子は常に装いの鍵を握っている。洋服に付き従うだけではいけない。ただの形式美に埋もれてしまってはその意義は半減する。パートナーである洋服やジュエリーを引き立て、尚且つ身につける人自身の第一印象をも引き上げる存在でなければならない。
仕上げに帽子や髪飾りを飾ることで、初めて装いが完成するんだ。
相応しいヘッドアクセサリが決まらないコーディネートなど、イチゴの載っていないショートケーキのようなものなんだよ。

パートナーを知ることは、とても大事なことだよ。帽子以外のことも、大いに学びなさい。

いつかの夕食での大旦那様の言葉は、帽子屋の仕事に対しての情熱に満ち溢れていて、この帽子屋で働いていることがとても誇らしくなったものだ。
その夜は、アゼルと二人で将来の自分たちの店について夜中まで語り合った。

一通りウインドウを眺めると、昼間と違う顔の見慣れた町並みをぶらつき、ジュース片手に店先を冷やかしたり、大通りの広場の噴水前で人間観察をするくらいで時間が過ぎる。
しばらくそうして過ごしてから、遅くならないうちに、何事もなかったかのように窓の傍にある枝を伝って屋根裏に戻るのだ。

大通りから一本入った通りで、普段は見向きもしない小間物屋で足が止まる。

店先に並ぶ髪留めが目に入り、先日アゼルが、髪が伸びてきて邪魔だから切ってしまおうか、なんてとんでもないことを言い出して慌てて止めたことを思い出した。

レイズは妹の髪がとても好きだった。

一つ下の妹は自分と同じ青紫の瞳をしているが、髪は自分のそれと違って、月の光を吸い込んだような銀色をしている。太陽の下できらめくそれもまぶしくて好きだったが、夕暮れ時に紅紫色の光を受けて染まったアゼルの髪は、この世のどんな銀糸にも負けないくらい綺麗だと思う。

部屋が違ってもレイズは毎朝アゼルを起こしてやるつもりだったが、最近はさすがに一人で起きなければと気が入ったのか、レイズが朝部屋に行くともう起き出している。それでも髪だけは、レイズが毎朝櫛を入れてやるのが変わらない日課だった。

だから、出来るだけ伸ばしていてほしいと言うのは、レイズの我儘だ。

…特に誕生日でもなんでもないけれど、アゼルに髪留めでも買ってやろうか。確か一つしか持っていなかったはずだし。

色とりどりに並ぶ髪留めを眺めていると、その中の一つが目に留まる。

薄いピンクの小さな花がいくつか寄っている周りに緑の葉が3枚ついているデザイン。嵌め込まれた色付きガラスが灯りを反射して煌めいた。これなら店の深緑の制服にも合うだろう。

髪留めの値段の相場なんて知らないが、ざっと他の品物と見比べると中の上くらいの値段。

…まぁ、たまにはいいか。

代金を払うと、大事にジャケットのポケットに仕舞い込んだ。

◆◆◆◆◆

そろそろ今日は閉めようか。

自分と客一人しか納まらない小さな帳を解体する。

いつもならショッピング・デーは掻き入れ時だが、普段ハート地区には立たないせいか、どうも客足は鈍かった。場所を見誤ったらしい。

次回はハート地区に立つ時は、もう一本上った通りが良いかも知れないな。けれど、

「やっぱり‘ストレートフラッシュ’が一番だな…」

一人ごちて荷物をまとめていると、

左手奥の角から、少年が現れた。片手にビンを持って、もう片方の手はジャケットのポケットに突っ込んでいた。
この通りは商店街を一本入った道。喧騒はここまで響くものの、実際の人通りの少ない。当然こんな時間にこんな所でなにやら荷物をまとめている自分はこの辺の人間じゃないし、かなり怪しいだろう。
すっ、と遠巻きにすれ違われる。

ボクも横目でその姿を確認したその瞬間。
手にしていた椅子を取り落としそうになる。

目の前で再生される、忌まわしい真紅の映像。
心臓がいきなり自己主張を始めた。

――あぁ、忘れたかったのに。

…本当にこの少年なんだろうか。体格からして、若干年齢差があるけれど。

確証は、何も無い。

……あれは、いつのことだ？

ただ、その髪。…暗闇に浮かび上がる、その髪の色。

「……君っ…」

気がついたら呼び止めていた。

ボクの顔は、闇とフードでわかるまい。今のボクは、一体どんな顔をしているだろう？

暗闇に慣れた目にも、少年にしてはやや長めの髪が、わずかな月光りで暗赤色に浮かび上がった。闇の上に影が入って、その顔はほとんど見えない。

その色。

真紅の中心。

終ぞ顔はわからないけれど。

呼ばれて振り返った少年。

――――あぁ、お願いだから。

振り向かないで。

「…何か？」

世界の狭間に立っていたボクは、初めて聞くその声で、こちらの世界，に引き戻される。

おそらく訝しげな表情でボクに目を凝らしているのだろう。当然だ。

こんな夜道でいきなり呼び止められて、警戒心を持たないワケがない。

しかもこんなフードを目深に被った不審者に。

なんと、言祝げばいいだろう。

血の海に沈む少年に。

「凶暴な満月には、くれぐれも気をつけて……ね？」

いつも通り口角を吊り上げながら口をついて出た、いつも通りの遠回りな嘘のない言葉は、

祝福ではなく、警告だった。

Between Sun and Moon（前書き）

Between Sun and Moon

――歓楽街。

月の支配に屈しない、煌びやかで刹那的な夜の街。

月よりも明るく、太陽よりも暗いその街は、世界が一日を終えようとするこの時間に目を覚ます。

今は、まだ宵の口。表通りを一本入ったところにある、さして大きくない酒場。開店準備中の札に構わず、戸をくぐる。

「おはようございます、マスター」

この街では、日が落ちた後でも「おはよう」と挨拶をする。そんな街は、彼の性質によく馴染む。この世界の太陽には束縛されない。…目覚めた時が、‘朝’なのだ。

「おう坊主、来たか。今日は早くないか?…先週はどうしたんだ。エッタがむくれて帰ったぞ」

2週間ぶりに顔を出した人物に、店の主が開店準備をしながら声をかける。厳つい身体つきに灰緑色のくせの無い長髪を一つに括った姿は、実年齢よりかなり若く見えた。

「すみません。先週は気分転換に出張してみたんですけど…ダメで

すね。やっぱりココが一番居心地が良くて、営業しやすいです」

カウンターの隅に腰掛けながら、被っていた黒い外套のフードを背に落とした。

左耳の下でまとめられた長い髪は、濃い紅茶色。

「出張だぁ？どこまで」

「ハート地区の方です」

聞いた主は顔をしかめて首を振った。

「やめとけ。あんなところ、夜に客なんて取れんだろう」

「そうですね。…さっぱりでした」

そう言って苦笑する表情は、なぜかどこか愉しげだ。

数年前、ふとしたことで知り合った少年。時折店の片隅で飯を食わせてやっていたが、ある日他の客と話をしていたと思ったら、カウンターに来てトランプはあるかと言う。賭け事はするなよ、と釘を刺しながら奥から出してやると、話していた男の客に対して何やらカード占いを始めたようだった。忙しい店内でその顛末を見守ることは出来なかったが、後日、彼のいない日にその客が上機嫌で他の客に話していた。

失くしたと思っていた結婚指輪が見つかった、この店の小僧が言った通りの場所にあった、と。

ジョッキを握る左手の太く無骨な指に、華奢すぎる銀の輪。

これで嫁に面目が立つ、次に会ったら礼をしないとな。麦酒を煽って、そう笑っていた。

少女のような風貌の少年が、夜の盛り場で占いをしている。
このなんとも珍しい光景は、知る人ぞ知る‘ストレートフラッシュ’の名物となった。

「飯は」
「まだです」

主は慌しく開店準備をしながら、成長期真っ只中の先読み師の少年に賄いのシチューと丸パンを出した。

「今日はちょっと、早めに切り上げるかも知れません」

―起きたのが早かったので。
パンを飲み込んでから、そう告げてきた。

きれいに平らげる頃、主は表の看板の上のカンテラに灯を入れる。

パブ‘ストレートフラッシュ’の開店時間である。

◆

王都レイシーの北側に位置するスペード地区。
このエリアは、東と西で全く別の顔を持っている。

大通りの西側は国営の劇場や音楽ホール、美術館などが立ち並ぶ知識と文化の中心地。この国で城の次に大きい建造物である国営図書館もこの地区の一角にある。自然と学生や研究者もこの地域には数多く住んでおり、文化人が足繁く通うカフェやバー、レストランも多数点在している。

一方、大通りの東側に足を踏み入れると雰囲気が一変する。西側の高尚な空気とは打って変わって、大通りから遠ざかるにつれて徐々に雑多で俗物的な街並みに変わっていく。行き交う人々もごく普通で、街の纏う気配は大衆文化のそれである。西側と同じように劇場や飲食店が立ち並び、一見すると他の街とさして変わらない。

だが西側と大きく違う点が一つ。世界が明るいうちは、立ち並ぶ劇場や店の半数以上が軒並み閉まっていることだ。

しかし、営業していた店のほとんどが店仕舞いをした後、それまで沈黙を守っていたそれらの看板が一斉に目を覚ます。瞬く星に対抗するかのように煌々と照らされ、街は昼間とは違う喧騒に包まれる。一日の労働から解放された人々が束の間の娯楽を求めて集い、酒を酌み交わし、歌と踊りに酔いしれる。

太陽より月に親しむこの街の素顔があらわになる時間。
裏の顔、ではない。

こちら側が、‘表’だ。

◆

夜も更けて月が中天に差しかかろうという頃。

「あーーーっ坊や見ぃーっけ！！」

入り口の方から、店内の酔っ払いの喧騒に負けない大声が聞こえた。
今日３人目の客が終わってカウンターの端で大人しくジンジャーエールを飲んでいた僕は、声のした方に顔を向ける。顔を見なくとも声の主はわかっていたが。
声をかけてくる酔客をあしらいながらこっちに向かってくる、一目で夜の商売とわかる雰囲気の女が二人。麦酒と簡単なつまみを注文して、断りも無く僕の隣に腰を下ろした。

先週僕に会えずに終わってしまった、ダルシーとエッタ。二人とも年齢は２０歳そこそこ。近くのシアターでダンサーをやっている彼女らは、もう付き合いの長い常客だ。

「お久しぶりです、ダルシー、エッタ。先週はすみませんでした。今日はもう上がりですか？」
「ううん、今日はお休み。先週はどうしたんだい？」
「あたしずーーーーっとここで待ってたんだよぉ？」

ねぇ、マスター？と、紅紫色のまっすぐな髪と茶褐色の瞳をしたエ

ッタが、カウンターの向こうにいる主に甘えた声で同意を求める。

「先週坊主は忙しかったらしいぞ」

マスターがにやりと笑いながら助け舟を出してくれる。だがその声音は微量の嫌味も含まれていた。

…店に来ず出張なんてするから。

僕も無言で唇を歪めて返す。

「でもでも、週に一度も来ないなんて今までなかったのにぃ」

「その辺にしときな。素面のうちから絡んでどうする」

横にいた、柳色の髪と蒲公英のような黄色の瞳という少々珍しい取り合わせの色彩を持ったダルシーが、頬を膨らませたエッタをなだめにかかる。

数年前から大体週に一度、この店の客を相手に商売をさせてもらっている。昔は週に三、四度通っていたが、公爵家に入ってからはその頻度は落ちた。夜抜け出すのが少し面倒だからだが、周りには辻に立つ回数を増やしてると話していた。ここの人間には公爵家のことは一切話していないので、先読み師の少年はスペード地区のはずれからやって来るのだと思っているが、実際にこの少年の現在の家を知っている者は皆無である。

「そういえば、ちゃんと彼をディナーに誘えたんですか？」

手元にあるトランプをシャッフルしながら、先々週視たことを聞いてみた。

片思い中の男性にどうアプローチすればいいか、だったかな。

聞いた途端、エッタの顔がほころんだ。

「そうなの！成功したの！遂に二人で食事したの」

「それで、先週はそのお食事に何を着ていけばいいかを聞きたかったんだよね」

ダルシーが苦笑しながらつまみのナッツを口に放り込んだ。

「そういうことはカードに訊くより、女性同士で相談された方がいいんじゃないですか？」

少し首をかしげてそう返した。

…カードも訊いたところで答えてくれるだろうか。

「結局あたしが選んでやったんだ」

「ダルシーが、濃いピンクのドレスがいいって。本当は黒でシックにキメたかったんだけど」

「エッタが黒を着ると葬式になっちゃうんだよ。あれでいいの、似合ってたから。褒められたんでしょ？」

「うん」

語尾にハートマークが付きそうな声音でエッタがうなづく。

ダルシーが、本当にしょうがない、とでも言うように目を細めてジョッキに口をつける。同い年だというが、ダルシーの方がだいぶ落ち着いた雰囲気だ。生まれ持った色彩の印象は、まるで逆なのに。

一見全然合わなそうなこの二人は、郷里が同じ幼馴染。１５の時に二人で田舎から王都に上り、トップダンサーを目指している。

本人たち曰く、幼馴染兼、親友兼、ライバル兼、戦友なのだそうだ。

ダルシーは姉御肌のしっかり者だが、エッタは少し心配性の気が強

く、もっぱら先読みの依頼をしてくるのはエッタの方だ。こと恋愛となると、どうにも右往左往してしまうらしい。最近は意中の彼を振り向かせるためのあれこれをよく訊いてくる。

ジョッキ片手に初デートのことを話し出したエッタに相槌を打ちつつ、玩んでいたカードをそっとテーブルに置いた。

今日はダルシーと二人で、エッタの無料恋愛相談になりそうだ。

◇◇◇†◇◇◇

東の空から太陽が顔を出す。

空気が、木々が、動物たちが、月の支配から開放される瞬間。

見覚えのある路地。

見覚えのあるドア。

ボクはゆっくりとそのドアを開ける。

生まれ育った家の居間で、こんな早朝からカードタワーを組む子供。

開けたドアから風が舞い込み、組み上がったカードがハラハラと散った。

◇◇◇†◇◇◇

眠い目をこすりながら、喧しい通りを歩く。
フードを目深に被り、早歩きの足を更に動かす。

――尾行られている。

さっき角を曲がった辺りから、男二人が一定距離を保ってついてくる。気配を丸出しにしているから、おそらく素人の物取り。
すっと路地に入り、積み上がった木箱を踏み台にして屋根に上がる。
バタバタという足音と狼狽する声が聞こえたが、まぁ追ってはこれないだろう。

今日はこのまま屋根の上を行ったほうがいいな。もう相当眠いから、相手をしている余裕はない。

早く家に帰り着かないと。夢に堕ちる前に。

月明かりに照らされて雲がグレーの影を浮かび上がらせている。誰に憚ることなく大あくびをしながら、屋根の上を歩く。自然と顔が上向き、思い出した。

あぁ、あの夜もこんな半月だっけ。

一目で貴族のものとわかる高級な馬車から降りてきた貴婦人の背後に浮かぶ、金色の半月。
逆光に浮かび上がるシルエットが、鈴の声で僕に尋ねる。

「…あなた、お名前は？」

絡んできた恐喝犯たちの呻き声が周りに響く中、あれ、ここはどの世界だろう、と思い返す。

そのときの僕は。僕の名前は。

「……ダスク」

まだそこは、‘僕の世界’だった。

A young fortuneteller

先読み師と言っても、自分の未来まで視通せると言うわけではない。断片は視えていたとしても、それはその時がこないとわからないことがほとんどだ。

その日の出来事も、そんな‘視たことがあるのに前もってはわからなかった事’の一つだった。

◆

あれは、確か5年前のある春の夜。
春を告げる小振りのピンクの薔薇が、街中に咲き乱れていた。

その日も僕は、いつもと変わらず路上で先読みをしていた。
春が来たとは言えど、夜はまだ底冷えする。それでも石畳の上に小さな帳を建てて、日が落ちてから夜更けまで客を待つ。
それしか暮らしていく術がなかったから。それでも、自分は恵まれていると思っていた。物乞いや盗みをしなくても、トランプ一組さえあれば日銭は稼げる。

「お姉さん、何が視たいの？」

トランプを使っての先読みは恋愛運、金運、仕事運、人生相談、果ては失せ物探しまで。客が視たいと言うものは何でも視る。

…「視る」、と言うのは正しくないのかも知れない。「視る」のは「夢」、相方の専売特許だ。

カードには「訊く」と言う方がしっくりくるか。

けれど。カードは多くを語らず、「答え」そのものを与えてくれるわけではない。あくまでも手がかりやイメージを与えてくれるだけに過ぎず、最終的な解釈はあくまでも占者と依頼者に委ねられる。

が、自分はカードが示す意味、与えてくれた情報をそのまま加工せずに依頼者に伝える。時に難しい言葉は平易に言い換えて。それは自分は単なる媒介に過ぎず、解釈は依頼者自身がするべきだと思うから。

結果、口をついて出るそれらはすごく抽象的な単語の羅列ばかりが大体を占め、ともすると核心から逸れているような言葉も多く含まれる。否、正確には逸れているのではなく、それらは全て進むべき指針であり、心に留めておくべき警告であるのだが。

聞いたその時には意味がわからなくとも、最終的には「あぁ、そういうことだったのか」と納得させられる。

わかった時には、時既に遅し、と言えども。

当たっていると思うかどうかはその依頼者自身だが、カードは決して嘘は吐かない。意図的に明かしてくれない事実もあるように感じることはあるけれど。

なんとなくそう感じるだけで、こうと言う説明は出来ないのだが。

中には当然、自分で依頼しておきながらカードの言葉を信じない者もいる。
そしてそういう連中は、人を詐欺師呼ばわりして代金の支払いを渋ったり、気に入った言葉が出るまで何度もやり直しを迫ってきたり。ちなみに状況が変わらない限り、その場で何度やり直しても結果は何も変わらない。

それを見てようやく納得するならまだしも。
その日の男女二人連れの客は変わらない結果をこそ、インチキの証だとのたまった。帳の中は大人一人が入ればもう一杯なので、男は外で幕を半分上げて話を聞いている。
何を言っても聞く耳を持たないなら、こちらとしてはどうしようもない。もうお帰り願おう、と口を開こうとした時。

いきなり帳の幕が乱暴に捲くられる。逆光で顔などはよく見えないが、気配から外には複数人の男がいることが窺える。

「よう、何やってんだよ、こんなとこで」

幕を捲った男が客に声をかける。客の知り合いのようだった。

「あー、ちょっと聞いてぇ？この子の占いよく当たるって友達が言ってたから来てみたんだけどさぁ」

先ほどまでむすっと口を尖らせていた女の方が身を捩って振り返る。

「このガキ、俺たちが×××だと言いやがるんだ」

信じようが信じまいが、カードの答えは同じなのに。
……あれ、何を視たんだたっけ。将来お金持ちになれるかどうかと

かなんとか、だったかな。内心、カードに訊くまでもない、と思った気がするけど。思い出せないや。

どうでもいいことだったし。

散々僕のことを詐欺師呼ばわりした挙句、最後はこれか。様子を見ながら僕は卓の上に広げていたカードをそっと集めて懐に仕舞いこんだ。

「ほーぉ。よう、お嬢ちゃんの占いはよく当たるんだな」

…しかも‘お嬢ちゃん’かよ。

フードは目深に被っているから顔はよく見えないはずなのにどうして女だと決め付ける。

「今日は何人占ったんだ?結構稼いだか?え?」

どいつかの手が伸びてきて、僕のフードを取ろうとした。

パンッと勢いよくその手を払った拍子に、図らずもフードが落ちて、蝋燭の薄明かりに顔があらわになる。

そいつらがみんな揃って僕の方を向いた。まったく。いい大人が寄ってたかって。

自分の目が不機嫌に細くなるのがわかる。

男たちから下卑た笑いと歓声が起こった。

追い討ちをかけるように、僕の神経を逆撫でする。

「嬢ちゃん、もっと稼げる方法教えてやろうか」

あと、本当にごく稀にだが、僕がカードの言葉をわざと伝えないこともある。

例えば。

さっき、一番最後に出たカード。

何事も無ければ、帰り際に伝えようと思ったけれど。

――――――目の前の‘脅威’に気をつけろ。

金色の瞳が危険な光に染まる。苛立ちを吊り上げた口角の端に滲ませて。

「……今ここにいる大人たちの財布を、ごっそりいただくとか？」

別にそんなこと、いくらお金が手に入るとしてもしたくはないのだけれど。

……まだ、そこまでは堕ちてない。

僕の台詞を聞いて一瞬呆気に取られた後、大爆笑する大人たち。

「お嬢ちゃん一人で俺たち全員相手にしようってかい？」

「マジで売っ払ってやるか？この顔だったら高く売れるだろうよ」

「その前に俺たちで慣らしてやればいいんじゃないか？」

「ねぇ、やめなよぅ、こんな子ども相手にさぁ」

口々に言い募る男たちの言動がエスカレートするにつれ、女が止めに入るが、もう手遅れだ。
こいつら、タダじゃ置かない。

僕は急に立ち上がり、帳の天井を支えていた紐を引いて解く。振り返り様に目の前にいた女の首を手刀で叩いて意識を落とす。女を傷つけるつもりも無いが、騒がれたら面倒だ。
一気に天蓋が落ち、落ちてくる布を避けて後ろに飛ぶ。

年端もいかない、しかも自分で言うのもなんだが周囲の大人には7割くらいの確率で女の子に間違われる顔立ちの少年が一人で夜に商売をするのなら、トラブルは常に身近なものである。

それでも、夜の辻に立ち続けられるということは。

布と共にくず折れた女の名を呼んで、まず同伴していた男が飛び掛ってくる。
怒声と共に伸びてきた手を、袖口から引き抜いたナイフで切り裂く。
血が吹き出た両腕を押さえた隙を突いて全体重を乗せて腹を蹴りつけた。
頭二つ分以上大きな男だが、つぶれた蛙のような声を出して後ろにひっくり返った。

自分の身一つくらい、守れないでどうする。

相手は計5人。その様子を見て、思い思いに汚い言葉を吐きながら飛び掛って来る。そのうちの一人が天蓋の下にいる女に蹴躓いた。その倒れこんできたところに頭を下げて脇をくぐって無防備になっていた脇腹に思いっきり肘を入れる。多分肋骨が何本か逝っただろう。

「相手が…‘僕’だったことを感謝して…くださいねっ」

言いながら、もう一人左から殴りかかってきた男の腕をかわして、屈んだ流れで脛を切りつける。動きが止まった隙に背後に回って飛び上がり、女と同じように手刀で意識を落とした。

全て致命傷には至らないように。

…相方だったら、確実に命は無いだろう。

こいつらから離れるまで、交代しないようにしないと。止めを刺しかねない。

…残り二人。

夜の繁華街にケンカなんて日常茶飯事だから、野次馬もほとんどいない。しかも大通りから1本入った路地。むしろ係わり合いになりたくないとばかりに、数少ない通行人もさっさと通り過ぎていく。よほど大騒ぎにならない限り喧騒にかき消されてしまう。

相手は子供一人に仲間三人までがやられるとは思っていなかったに違いない。だが、ここで引くわけにはいかないのだろう。それこそ、

こんな子供相手に。ありえない光景を目の当たりにして、最初ぽかんと口を開けていた連中も、頭に血が上ったらしい。

「…てめぇっガキだと思って手加減してやったら調子に乗りやがって！！」

調子に乗るも何も。

心底呆れて吠えたやつの方の動きを目の端で捉えた瞬間、縦に跳躍した。発砲音が響き、間髪置かず今しがた自分がいたところを銀の銃弾が通り過ぎる。

そのままくるりと回って路上に高く積み上げてあった木箱の上に着地すると、すかさず銃を持った男の肩めがけてナイフを投げつけた。うわぁっとか声を上げて銃を取り落とす。突き刺さったナイフが月明かりを反射してギラリと光った。

いくら僕は夜目が利くとは言え、そんな何発も発砲されたら分が悪い。他の人に流れ弾が当たるかもしれないし。

地べたに這っていた男も、意識がある連中は木箱の上を見上げて、更に輪をかけてありえない光景に呆気に取られていた。暗い夜の路上でも、明らかに動揺している様が手を取る様にわかる。

積み上げられた木箱は優に男たちの身長以上の高さである。どう考えても普通の人間が飛び乗れる高さではない。

木箱の上にしゃがみこんで、醜態を晒している男たちを見下ろした。

「……まだ、やる？」

ただ一人、まだ無傷の男に向かって、首をかしげて聞いてみた。

……そろそろ眠くなってきたんだけど。あぁ、どうして僕は笑って

いるんだ？

月に照らされる男の顔にはっきりと浮かぶ、驚愕と、恐怖。

「う、うわぁぁぁぁぁぁーーー！！」

そいつは仲間を見捨てて一目散に逃げ出した。

「ひぃっ」

もう一人、肩にナイフが刺さったままの男も僕と逃げる男とを交互に見やると、僕から目を離さず尻込みしながら距離を取り、ある程度離れると、一度も振り返らずよれよれと後を追っていった。

His odd adoptive mother

◇◇†◇◇

奇妙な部屋だ。

視線が痛い。

一段高くなったところに鎮座する、

大きな錫杖。

更に遥か手の届かない先には、

青薔薇と、赤薔薇。

――じゃらっ…

重い音。

心臓が跳ねる。

それまで全く気づかなかった、

すぐ隣に立つ存在。

本当の、視線の的。

冷や汗が頬を伝う。

心臓の音がどんどん早くなる。

怖い。

振り向くのが。

僕は嫌でしょうがないのに、
ボクはゆっくり右を向く。

…やっぱり顔は、見せてくれないんだね。

まだ、被った血が、落ちていないのか。

◇◇†◇◇

辺りが急に静かになった。大通りの喧騒が聞こえてくる。

「いよっ…と」

木箱から飛び降り、意識のない置いてけぼりの連中と見事に大破した自分の商売道具を見やる。

「言っておきますけど、僕、男ですから」

誰も聞いちゃいないけど。

大あくびが出る。もう眠いし、さっさと代金を徴収して帰ろう。

「先読みの代金と、帳や卓を買い換えるお金はもらいますからね」

さっきのは冗談で、財布ごと持って行ったりはしないけれど。

かがみこんで一番最初に客として来ていた男の懐をまさぐる。動かされて意識は戻らないまでも、うめき声が漏れた。

…足りないし。

しょうがない、他の人からももらうか。

遠くから急に馬車の音が聞こえてくる。角を曲がって来たのだろうか。

どんどん近付いてくる馬車の音。

この道を通るようだ。つと路上に転がった連中を見渡す。大通りとまではいかないが、そこそこ広い路。

轢かれることは…ないか。

気にせずもう一人の傍に寄って、同じように財布を探る。

案の定、右の方から馬車がやってきた。そして……すぐ脇で止まる。

…なんでここで止まるんだ？

隠れてやり過ごすべきだったか。

傍から見たら火事場泥棒みたいに見えたかな。でも、悪いのはこいつらだしね。

ひとまず手を止めて馬車の方を見上げる。その辺の辻馬車かと思いきや、近くで見たら飾り気はないがかなり高級な馬車だとわかる。

そんな馬車に乗れる人間が、何だってこんなところに。

眉をひそめる僕の目の前で、馬車のドアが開いた。

◆◆◆◆◆

――ダスクがストレートフラッシュにて、エッタの初デートの話を延々聞かされている頃、時を同じくして女公爵邸では。

「ご主人様、またダスク様が見当たりません」

「…あら、いつごろから？」

「わかっている限りでは、今日の夕食の前までは寝室で寝ていらっしゃいました」

窓から望む月は中天に近い。

主人がまだ起きているとメイドに聞きキアランが私室に向かうと、リリスは残っていた仕事を片付け、就寝前のワインを飲んでいた。

報告を受けたリリスはワイングラスから口を離し、悠然と微笑む。

「いつものことでしょう。戻ってきたら、教えてね」

まぁ、帰ってきたら必ず本人が「ただいま」を言いに来るけれど、と独り言のようにつぶやいた。

それも、いつものことである。

一泊、またはそれ以上屋敷を空けた後、何事も無かったかのように平然とした素振りで主人のところに挨拶に行く。そして迎える主も、特に何の違和感も無く「お帰りなさい」と言葉をかける。

あまりにも自然すぎてうっかり日常の風景と化しているが、無断外泊をした子と、それを迎える保護者の光景ではない。断じてない、とキアランは思っている。これが貴族の家であっても、なくても、だ。

「リリス様、お言葉ですが、ダスク様の外泊癖もそろそろお考えになった方が」

もう再三申し上げておりますが、と語尾を濁す。

「あれは今更治るものでもないでしょうに。‘二人とも’ちゃんと説得できれば、どうかわからないけれど」

大丈夫よ、そう言って執事の進言を意に介さず、またグラスに口を

つけた。
週に一度の恒例行事に、執事は辟易した様子で続ける。

「でしたら、リリス様から‘お二人’を説得してください。何度も言って聞かせてはおりますが、私共の言葉には耳を貸さないのです。私とて、彼の身の危険を言っているのではありませんが」
「キアラン」

数本の蝋燭と窓から降り注ぐ月明かりの下、絶世の美女と謳われる面の眼差しが細められる。
その美しさによって、表情の冷たさは自ずと3割増しに見えることを、自らの主人をしてよく知っている公爵家の使用人たちである。

申し訳ございません、失言でございました。と謝罪の礼を取った後、執事は更に続けた。
「彼がご自身の身をご自身で守れることはよく存じ上げております。私が心配しているのはそういう問題ではなく」

そんな悠長な女主人の様子に、初老の執事は内心ため息を吐いた。

彼女の父である先代の頃よりこの公爵家に仕えてきた。今目の前にいる彼女のことは、幼少期の頃からまるで年の離れた妹のように思っている。
忠誠を誓った先代からも今際の際に、くれぐれも、と託された大事な一人娘だ。
彼女の成そうとすることには惜しみなく協力し、常に彼女を影ながら支えようと尽力してきた。

彼女が他家へ嫁がず自ら爵位を継ぐと決心した時も、自ら団体を主宰して国全体の孤児院の整備に乗り出すとした時も。

だからこそ。

「もう子飼いとしてただ屋敷に置いていた頃と違います。公爵家の養子として社交界にも出しているのですから、外にいるところを顔を知った者に見られでもしたら」

いくら主のお気に入りと言えども。足を引っ張るような真似は見過ごすわけにはいかない。

「ありがとう、キアラン」

リリスはグラスを置き、椅子の上に足を上げて膝を抱え込んだ。他の者の前ではこんな行儀の悪い格好はしないけれど、時折、幼い頃から傍にいる年の離れた兄のような執事の前でだけ。

でもね、と膝の上に頭を乗せてキアランの方を向く。緩く一つに結わえた栗色の艶やかな髪が重力に従ってサラリと流れた。

「あなたが調べても、わからなかったんでしょう？それに夜に辻を出し続けるのは、この家に迎えるときの条件だったから、何の理由も無く無理にやめさせることは難しいわね」

使用人たちがいくら言っても、リリスが黙認しているので聞き入れやしないのだ。

当初、キアランは無断で外に出て行くダスクに尾行を付けて不審な行動が無いか調べさせていた。否、そもそも夜自室の窓から外に出

て一日二日帰ってこないこと自体、ものすごく不審なのだが。

もう以前のように路上で稼ぐ必要はなくなったのに、どうして毎週のように夜の街に出て行くのか。本人に問いただしても、「僕を待ってくれているお客さんがいますからね」と笑うだけだ。

他の貴族と裏で通じている、あるいは闇世界に関わっているなど本当の意味で危険なことはこれと言って報告されていない。ただ、わかったことは主にスペード地区で辻を立てていることと、その客たちをしても特に怪しげなところは見受けられず。行き着けのパブがあるが、そこでもやはり酔客相手に先読みをしているだけで、帰ってきたときの様子を見ても飲酒の痕跡は見られず、報告も無い。

本当に言葉通り、ただ先読みをするためだけに外に出て行っているようだった。

「養子になってからでしょう？窓から出て行くようになったのは。あなたがダメだと言ったからでしょうに。それをわざわざあなたの目を掻い潜ってまで外に出て行くなんて」

なかなかやるじゃない、とクスリと笑った。

「ですから、リリス様からやめるように言ってくださいと申し上げているんです」

キアランは口元を引き結び、わずかに渋面を作った。

小僧に出し抜かれているようで、面白くないことこの上ない。

なんて面白いのかしらね、と執事のしかめっ面を見てコロコロ笑う。

頭を起こして、ワイングラスを取る。傾けたグラスの中で血のような液体がゆるりと揺れた。

「だから手放さずに置いているんじゃない。もう今更周囲の評判なんて気にしないわ」

確かに、あの少年はいろいろな意味で他の子供と違う。そして目の前の我が主も、いろいろな意味で他の貴族連中とは異なる性質を持ち合わせた人物だ。

「いろいろな世界を渡り歩いているあの子だから面白いんじゃない。それが私があの子を傍に置く理由であって、もしあの子が他の子と変わらなくなってしまったらそれこそ」

お仕置きよ。

エメラルド色の瞳が妖しく光った。

グラスを空にすると、膝を椅子から下ろしおもむろに立ち上がる。

「おやすみ、キアラン」
「おやすみなさいませ」

深々と礼をして寝室に向かうリリスを見送る。

「あ、そうだわ」

ドアのところでリリスが振り返った。

「何でございましょう」

キアランも身を起こして応じる。

「もうそろそろ冬眠に入るわよね。明日にでも冬眠前最後の食事をさせましょう」

「…かしこまりました」

そう言い置いたリリスは再度礼をしたキアランを置いて、今度こそ寝室のドアに消えた。

◆◆◆◆◆

もう西の空に沈みかかった月を見やりながら、器用に家々の屋根を渡り歩く少年。

その速度が、徐々に落ちていく。

5年も前だってのに、よく覚えてるな、僕。

自分で感心する。記憶力がいいのは、僕じゃなくてドーンの方だと思っていたけど。

…あぁ、もう眠いや。
目の前にある煙突に寄りかかってずるずると座り込んだ。
寄り道しないで帰ってくれるといいけど。
そんなことを思いながら、相方の世界に引きずり込まれた。

Ｈｉｓ　ｏｄｄ　ａｄｏｐｔｉｖｅ　ｍｏｔｈｅｒ（後書き）

ダスクの思い出話、あと1話くらい続きます。。。

Under the half moon

――5年前の、ある夜。

この時もボクの相方は、飄々と、でも必死に生きていた。

いつだって相方の目を通して見た世界は、どんな夢よりも幸せで、哀しいんだ。

◆

逆光に黒く沈む馬車、その上で煌々と輝く上弦の半月。

あぁ、なんか視たことあるぞ、この画。

多くの映像に埋没して、さして気にしたことは無かったけど。

そんなことをぼんやり思いながら、馬車から降りてきた貴婦人を見上げる。

やはり逆光で顔立ちはよく見えない。暗い色の髪をして、青っぽい色のドレスを着ている。華奢な印象だが背は平均より少し高いだろうか。年齢は、これだけの視覚情報ではよくわからない。

無言で見上げていると、一歩近付いてきた貴婦人が、声をかけてきた。

「あなたが、倒したの？」

鈴が、鳴ったのかと思った。

「…そうだと言ったら？」

はっと我に返り、身構える。硬い声音で突っぱねると、傍らに控えていた従者が腰に差していた細身の剣に手を伸ばした。それをわずかに手で制し、辺りを見回す素振りをして、すごいわね、とつぶやいた。

意識も無く倒れている大人たち、壊れた帳。確かにこんな惨状を築ける１１歳はあまりいないだろう。

声の感じからすると、年は２０代半ばくらいだろうか。最初は大人の年齢なんて全然わからなかったけど、たくさんのお客を相手にするうちに、なんとなくわかるようになってきた。

顔は見えないけれど、きっと美人なんだろう。

「強い子は、好きよ。でも、どうしてこんなことに？」

それにしても、きれいな声。かん高くない、耳に優しいソプラノ。うっかり気を許してしまいそうになる。

でも油断したらいけない。貴族の馬車が、どうしてこんな時間にこんな路地を通りかかるのか。

「…先読みの結果が気に入らなかったようで、モメたんです」

「まぁ、そんなことで未来は変えられやしないのに」

少し呆れたように、残念そうにつぶやいた後、黒く塗り潰された貴婦人は今度ははっきりと僕に向かってこう言った。

「先読み師さん、私の未来も占っていただけるかしら？」

「…生憎、今は商売道具が使い物にならないので」

「あら、占いの道具も壊れてしまったの？」

小さく首をかしげて心配そうに聞いてくる。

「…トランプだけは、無事です」

じゃあ大丈夫ね、と嬉しそうに言った。

「場所がここでなくてもいいのなら、私の家にいらっしゃいな」

さ、乗って、とこちらの返事も聞かずに踵を返しかける。

一瞬月に照らされた横顔は、絵から抜けて来たのかと思うくらい綺麗だった。

…今のぼくは、どっちだ？

「…今から、ですか？」

もう結構遅い時間だけれど。この貴婦人も、屋敷に帰る途中だったんだろう。

「帰る家はあるの？」

振り向いて意外そうに聞いてくる。路上生活者（ストリートチルドレン）だとでも思われたのだろうか。

そうでなくたって、いきなり初対面の人間にそんなことを言われてホイホイついて行く程、子供じゃないんだけど。今時５歳児だって、ついて行かないと思う。

「帰る家は……ありますけど」

帰りたい家は、無い。

僕の警戒も意に介さず、こちらを向いてまた影に埋もれた美貌は微笑んだようだった。

「そう、失礼な事を言ってごめんなさいね。じゃあ、後日にしましょう。…そうね、明後日の夕方はどうかしら」

明後日の夕方。…どっちが出ているだろう。どうせ今からついて行っても、そろそろドーンが出る時間だから、同じことか。

僕が予約を取らない、取れない理由。
予約した時間に僕が出ているか確証が取れないから。ドーンでもカードは出来るけれど、彼に客商売は無理だ。

「…いいですよ。しかし、なぜ僕に?」

どうしてこの貴婦人は、夜道で出くわしただけの子供にここまで構うのか。

「前々からちょっと気になることがあってね、機会があれば視てもらいたいと思っていたの。…それに、あなた自身にも興味があるわね」

言ったでしょう?強い子は好きよ。

そう言ってクスっと笑った。

別に断っても良かったんだけど。
その時、僕の口から出た言葉は。

「……どちらに伺えば?」
「こちらから迎えを寄越させるわ。お家はどちら?」
「…馬車も入れない路地裏ですよ。表の通りにいつも行くお店があるので、そちらに来て下さい」

家の前にこんな馬車で来られても困るから、知り合いのオーナーがいるストレートフラッシュの前で待ち合わせを指定した。

時間を確認した後、では、またね。と貴婦人は今度こそ踵を返して馬車に向かう。
そしてステップに足を掛ける直前、何かを思い出したかのようにピタリと止まった。

そう言えば…

半分振り返って、零れた月光に縁取られた形のよい唇が最後に尋ねる。

「あなた…お名前は？」

◇◇†◇◇

噴き上げる朱に、照り返る赤薔薇。

この喜劇を天上から嬉々として見下ろしている、満月。

あたり一面の朱に身が竦む。

早く、早く。

誰かが叫ぶ。

どこかで、何かがガラガラと崩れる音がする。

あいつがまだ来ない。

何をしてるんだ。

……あいつって、誰だ？

逃げろ。

逃げろ。

朱に飲み込まれる前に。

闇に取り込まれる前に。

月に見い出される前に。

◇◇†◇◇

屋根の上で、少年が寝ていた。
座り込んで伸ばした足を組み、煙突に寄りかかって。

フードを被った頭がもぞりと動く。
頭を動かした拍子に、外套のフードがずり落ちる。紅茶色の前髪がフードに引っかかってはね上がった。
寄りかかっている煙突の端に留まる鳩たちが、下を覗き込んでいる。

「ん……」

眉間にしわが寄り、金色の瞳がゆっくりと開いた。
だがその瞳は焦点が合わず、寝惚けていると言うよりはどこか違う世界を見ているようだった。

ここではない世界を彷徨って数分、ようやく視線が定まってくる。

「う～、寒っっ」

屋根の上で、目を覚ました少年は外套の襟をかき合わせ、ぶるっと身震いした。
東の空はうっすらと紺とオレンジのグラデーションを見せている。

「ったく、こんなところで寝るなっつーの」

風邪引くじゃん。もうそろそろ寒いんだからさ。

さっきまでとは打って変わって軽い口調で一人ごちる。もう朝晩は冷え込む秋の日に、あろう事か屋根の上で寝落ちした相方に文句を言った。面と向かって言うことなんて絶対出来やしないのだから、所詮愚痴の域を出ないのだが。

「まぁ、昨日はエッタが長かったからしょうがないか」

早めに帰るつもりだったのに、エッタとダルシーに捕まって帰れなくなってしまったから。

それにしても。

「5年も経つっていうのに、混じり物も少なくて、キレイだこと」

ねぇ？と鳩に話しかけ、感心したような、呆れたような口調でクスクス笑った。

記憶というものは時間が経つに連れて細部が曖昧になり、他の記憶が混ざり、夢が軸を歪め、正体を失くしていく。

だが、ついさっきまで思い出していた記憶は、他のものとは比べ物にならないくらい純度が高かった。元々物覚えはいい方だと思うけ

ど、それだけ印象が強かったのだろう。
運命を大きく変えた、あの夜が。

「さ、て、と。どうしよっかなー」

うーん、と伸びをして立ち上がって辺りを見渡した。

今日は何をしよう。朝方からボクが活動できるなんて久しぶりだし。限られた時間は有効に使いたいものだ。タイムリミットは、約6時間。ランチの前には落ちる。

刻々と色味を変える空を眺めながら、屋根の上でしばし悩む。

…相方はまっすぐ家に帰って欲しいようなことを思ってたけど、このまま帰ったら、朝食には早過ぎる。
そしてキアランに捕まったら朝食までの時間、延々お説教されるのがオチだ。ヘレイナは食事の準備中だとかまってくれないしな。

寒い屋根の上で考えていても埒が明かない。

喉がざらつく。案の定、風邪の引き始めか。

「とりあえず、あったかいの、飲もう」

早朝から開いているカフェに向かうべく、屋根の上を歩き出した。

There is no smoke without fire.

結局ドーンが家に帰り着いたのは、いつもリリスが起床する時間の少し前だった。

屋敷の前でしばし立ち止まってなにやら考える素振りをすると、その足でリリスの部屋に向かう。

より詳しく客観的に言うと、女公爵邸の敷地に入ってからそのまま庭を突っ切って、リリスの私室の窓の脇に生えた樹によじ登り、どうやってか鍵のかかっている窓からリリスの寝室に乗り込んだ。

要するに面倒な面々に会いたくないので、自分の家なのに玄関を無視して最短ルートでリリスの元に直行したのだった。

……そして、現在に至る。

「…リリス様、リリス様ってば。朝だよー」

身体に圧し掛かる重みと耳元で自分を呼ぶ声に、リリスの水底に沈んでいた意識が気泡を巻き込みながら浮上する。

「……」

「おはよう、リリス様」

目を開くと、案の定視界いっぱいに養い子の笑顔があった。

窓は閉めて寝たはずなのに、朝のひんやりした風が頬を撫でる。

「…今帰ってきたの？」

「うん、ただいま」

寝起きのかすれ声に答えて、放蕩息子の金色の瞳が愉しげに光った。

…鍵はちゃんとかけたはずなのに。

昨晩の記憶を確認しながら、麗しい眉間に小さな皺が寄る。

「また、キアランに怒られるわよ？」

こんな風に寝室に上がりこんできたりするから、あらぬ噂も立とうもの。

火の無いところに煙は立たぬ、と言うが、火を出している当の本人たちはお互い周りに何と言われようがもはや気にもしていない。

とは言ってもキアランはじめ使用人たちはそうもいかないらしく、昨夜も有り難い小言を頂いたばかりだが。

「だって、朝からキアランに捕まったらせっかくの朝ご飯が不味くなるって」

ヘレイナに悪いでしょ？

最大の火元はそんな的外れなことを言って、人差し指でリリスの栗色の髪をくるくると玩びながらクスクス笑う。

「早く支度して一緒にご飯食べようよ。…次はいつになるかわかんないんだしさ？」

早くも何も、自分が上に乗っかっているから動けないというのに。

ドーンと前回朝食を食べたのはつい最近のことだが、その前は…すぐには思い出せないくらい前のことだ。ダスクの時を合わせても、養い子と朝食を共にするのは、週に2回あればいい方だろう。昼食はリリスが仕事だとビジネスランチで外に出ることが多い。夕食も然りで夕食会や夜会に招待されることも日常的な彼女は、自邸で、更に養い子と一緒に夕食を摂ることは稀だった。

ね、早くっ、と言いながら少年は養母に圧し掛かっていた身体を起こし、続いてリリスの背に腕を回して軽々と上半身を起こした。寝起きにいきなり頭を動かされて軽いめまいを起こしたが、その安定感にリリスは内心感嘆の声を上げる。この5年での彼の成長を改めて感じずにはいられない瞬間だった。

出逢ったときは少女と見紛うばかりだった風貌は…あまり変わっていないものの、声変わりもしたし、線は細いがこの1年で背も急に

伸びた。最近は女性と間違われて軟派される回数が激減したと、先日ドーンが嬉しそうに話していた。ダスクも同意見だろう。

キアラン辺りにすると、そもそも勝手に出歩いたりしなければ軟派されることもない、とか何とか渋い顔で言われそうだが。

貴族の礼儀作法も身に付き、勉強を教えている家庭教師も賢いと褒めてくれる。素地がしっかり出来てきてなお、涼しい顔をして飄々と夜の街に出て行くダスク。

そして今目の前にいる彼の相方は、その成長を角度のずれた合わせ鏡のように乱反射し、斜に構えて世界を自由奔放に渡り歩く。口を開けば謎掛けと皮肉と冗談ばかりだが。

普通の子供とは違う部分も多く初めのうちは戸惑いもしたが、リリスにとっては育ち盛りの息子が二人いる気分だった。

「今日は何をするの？お仕事？」

いよっと、とベッドから降りながら今日の予定を聞いてくる。

「今日は、…孤児院回りかしらね」

ようやくドーンがどいてくれたので、リリスもベッドから起き出した。

窓から入り込む冷気に身震いが出る。

「ふぅーん」

窓を開けっぱなしにした張本人は、自分で聞いておきながら興味無

さげな声を出してくるりと踵を返した。

「ドーンは、今日あと何時間くらい？」

窓を閉めながら、椅子に掛けてあった外套を取って部屋を出て行こうとするドーンに声を掛ける。

「…2時間くらいかな」

待ってるから早くねー。

と、打って変わって愉しそうに言い残して、朝の闖入者は寝室を出て行った。

養い子と入れ替わりに、朝の支度を手伝ってくれるメイドが入ってくる。

「おはようございます、ご主人様」

寝室と続きの部屋でドーンと鉢合わせしたはずだ。いつも通りの挨拶だったが、その目には好奇の色がありありと浮かんで見える。噂は本当だったのか、と。

「少し急ぎましょう。あの子が起きているうちに朝食を済ませないと」

美貌の主は侍女の視線も意に介さず、いつもと同じ調子で朝の支度に取り掛かった。

◆◆◆◆◆

今日の説教はいつもより長い。

目の前の少年の辞書に「時間帯を弁える」という文言が一切載っていないということは既に熟知しているキアランはじめ女公爵家の面々だったが、今日という今日は大目に見るわけにはいかなかった。

いくら形式上は母と子とはいえ、リリス様の寝室に窓からあがり込むなど。

警備担当にはきつく言っておかねばなるまい。いくら相手がいろいろと規格外だったとしてもだ。

ダスクとドーン、それぞれに問題児ではあるのだが、ドーンはダスクの比ではない。ダスクは家庭教師をつけていろいろ勉強させているが、ドーンはそれらしいものをほとんどしたことがなく、言葉遣いも礼儀作法もダスクと違って全く身につかず女公爵家に連れられてきた頃と未だ全然変わらない。

日中ドーンが出ているときに家庭教師を呼んだことがあるが、気分

が乗らないと気配を察知してさっさと逃げ出すか、教師と向かい合っても相変わらず意味不明な質問ばかりを繰り出しているか、のどちらかだ。
かといって無学で無教養なのかと言えばそうでもなく、ダスクが習ったことは一応ドーンの知識としてもあるらしい。

「キアラン、ボクたち二人だけど脳みそはひとつなんだよ？」

そう言ってこの小生意気な小僧にクスクス笑われたのはいつのことか。
本当にそうならその態度も言葉遣いも、わざとやっているということになる。

―出来るなら、ダスクと同じように振舞えばいいものを。

そう苦言を呈するキアランに、この少年はなんと答えたか。

「リリス様の養子になったのはダスクでしょ？」

けど、ボクもリリス様が傷ついたり本当に困ったことになるようなことはしないから、安心していいよ？

階段の手摺を滑り降りながら言われても、説得力は皆無であった。

そんなドーンの素行をダスクに注意すれば、彼曰く自分ではどうしようもないと言う。
‘彼ら’は記憶として相方の活動を認識するが、お互いの行動に干渉することは一切出来ないらしい。こうしてダスクがキアランに文句を言われているという事はドーンも‘知っている’が、それを聞き入れるかどうかはドーン自身の判断に寄るもので、ダスクの側も

同じだという。まるで、他人事、のように。

だから何かあるとそれぞれが、直接本人に、言ってくれ、と言うのだ。

しばらく不謹慎にもキアランの小言をクスクス笑いながら聞いていたドーンが、おもむろに口を開く。

「ねぇ、もう寝てもいい？」

キアランのイライラに油を注いだその一言で、そうはさせるかとさらに小言に拍車がかかる。それはこの女公爵家の不肖の息子お得意の逃げ口上だったから。

ダスクになってからでは遅い。ドーンに言わないと。

ただでさえ効き目が疑わしい説教が、本当に無意味なものになってしまう。

だがキアランの努力がこの5年間、実ったとは手放しでは言い難い。

特にドーンについては。

キアランの口調は厳しさを増したが、当の本人は馬耳東風と言った風で大きくあくびをしている。

「そもそも」

更に輪をかけて続けようとしたとき。
本当にその場でパタリと倒れて、事切れたように寝入ってしまった。
今回は前回のような逃げ口上ではなく、本当のタイムリミットだった。

その場に倒れこんで寝入っている少年を見やり、キアランは大きなため息を吐く。
この状態になると、その後は呼べど叩けど数時間は決して目が覚めることはない。

本音を言うとその場に放置しておきたいくらいなのだがそうもいかないので、使用人二人ががりで全く起きる気配の無い少年を寝室まで運ばせると、キアランは朝から口をへの字に曲げて通常の業務に戻るのだった。

◇◇†◇◇

目の前の青年を追いかけて、城下の屋根の上をひた走る。

その後ろ姿も。

頭上の空も。

眼下に広がる城下町も。

…あぁ、また色が無い。

自分はこの青年を知ってる。

知っているけれど。

……

誰だろう？

ちょっと待ってよ。

全力疾走とも言えるスピードで駆ける青年に声を掛ける。

言葉を紡いで、ようやく気が付く。

この世界には、音も無かった。

ボクの声も届かず、青年が息せき切って生垣の中の木戸を開ける。

木戸の中に広がる小さな世界には、

翻る洗濯物と、洗濯籠を抱えた少女が一人。

いきなり飛び込んできた青年とボクの方を振り返った瞬間。

突風で籠の中の洗濯物が舞った。

◇◇†◇◇

There is no smoke without fire.（後書き）

There is no smoke without fire.
＝火の無いところに煙は立たぬ。

Search for Crimson

――――――あれ？

目を開いて、驚いた。

……どうして、またボク？

珍しいこともあるものだ。
て言うか初めてじゃないかな。二回連続でボクが出るのって。

ダスクの奴、どうしたっていうんだろう。

もう日の落ちかかる時間だろう、自室はだいぶ薄暗く、カーテンの隙間から差す茜で朱に染まっていた。

…とりあえず、まずはシャワーかな。さすがに気持ち悪い。

寝てる間に運ばれたベッドから出てお湯を使う。

久々だな、シャワー浴びるのなんて。

もちろんボクが、である。

ダスクがシャワー好きでほぼ毎日お湯を使ってるし、本当だったら今だってダスクが出ているはずだから、特にそこまででもないボクはタイミングも必要も無いっていうだけなんだけれど。

お湯を被る感覚がなんだか新鮮。

こんな気持ちいい夢、最近見てなかった気がするな。

本当の貴族のお坊ちゃんだったら、お湯から着替えから全部使用人の手を使うのが当たり前なのだけれど、そもそもが庶民の出で人に裸を見られるのも抵抗があるし、手伝ってもらう程のことでもない。更にいろいろと時間も定まらない少年の部屋は、四六時中使用人が控えているわけではないので、その度に忙しい彼らを呼び立てるのも悪いなと思うし、そもそも呼びに行くのが面倒なのだ。

……タトゥーもあんまり人に見られたくないしねぇ。

―タオル類と石鹸さえ用意しておいてくれたら、後は一人で適当にやるから。

使用人達にはそう言って、ダスクもドーンも基本的にその辺のことは自分で済ませていた。

上がってタオルで髪を拭きながら、クローゼットを開けていつものシャツとボトムを取り出す。

一部の使用人には不評のようだが、ダスクのいつも着ている特注普段着はドーンもお気に入りだ。我が相方ながらなかなかセンスがいい。動きやすいし、寝やすいし、それなりに自分たちの容姿に似合っているとも思う。だからドーンも基本的には相方と同じ格好をしていた。

あんまりコロコロ服装の趣味が変わると、ボクを知らない人に不審がられるしね。

ただ一点違う点が、ドーンの左手の親指に光る金色の指輪。

彼が身につけている唯一のアクセサリーである。

ダスクは基本的にアクセサリーを着けないから、いつも寝落ちする前にはずしてチェーンに通して首から下げておく。本当はネックレ

スも好きじゃないみたいだけど、ダスクもそこは譲歩してくれているみたいだ。

ダスクが目覚めてリングがそのままだと、ちょっとイラッとしてるんだよねぇ。

クスッと笑って身支度を整えながら鏡を見やる。

本当はリングもいっぱい着けたいし、ピアスホールだって開けたいんだけど。

共有財産だからね。大事にしないと。

お互いの行動には一切干渉出来ないが、自分が何を考えているのかは記憶として相手に残る。普段はそれぞれ好き勝手にやっている二人だが、身体についてのことだけは二人の意見が一致しなければ行動に移すことは無かった。

だからピアスホールはダスクが嫌がっているのがわかるから渋々開けないで我慢しているし、髪を切るか否かについても二人揃って切ろうと思わなければ、行動には移さない。

ボクとしてはそろそろ短くしてもいいと思うんだけど。長いと乾くのに時間がかかるから、これから先寒くなったら風邪を引きそうだ。それに背に届く紅茶色の髪は結っておかないと邪魔でしょうがない。

それより何より、体調が悪くなると夢見も悪くなる。

ダスク的にはどうかな。

「どうだろう？切っちゃっていいかな？」

今頭の中で考えたことはダスクにも記憶として残るけれど、わざと声に出して鏡の中の『相方』に問いかけてみる。

鏡の中から微笑み返してくる少年は、何も答えない。

クスリ、ともう一度鏡の中の少年に笑いかけて、ドーンは部屋を後にした。

◇◇†◇◇

なんでこんなに真っ暗なんだろう？

ここには月も星もない。

真っ暗だが、闇ではない。

その証拠に、

目の前には、箱がひとつ。

両手で抱えられるくらいの、真っ黒な、大きな銀の鍵がついた箱。

何が入ってるんだろう？

――開けるな。

頭の中で警鐘が鳴る。

それでも。

怖いもの見たさ。

伸ばした指が触れる寸前、目の前から箱が消えた。

呆気にとられたボクの前方に、しゃがみこんだ子供が一人。

泣いているのか？

――――真っ暗な中で浮かび上がる、銀灰色の髪。

年の頃は、7、8歳くらいだろうか。

両膝と胸の間に消えたあの箱を抱え込んで、顔を伏せている。

いつの間に？

誰もいなかったはずだけど。

ねぇ、君。もしかして…

アゼル？

恐る恐る声をかけたら、

◇◇†◇◇

部屋を出たドーンは、その足で台所に向かう。

昔相方がフォークを投げた跡がある木製のドアを開けると、ヘレイナが夕食の準備を始めていた。

「あら、ダスク様お目覚めですか」

「ううん。ダスクはまだ寝てる。お腹空いたんだけど、なんかある？」

口を開くと、ヘレイナが少し驚いたような顔をする。

「ドーン様ですか？」

あら珍しい、と呟いてこちらを向き直る。

「今日はご主人様が晩餐会にお出かけですし、まだ夕食の時間には早いのできちんとしたものをお出しするには少しお時間をいただきますが」

すぐ出かけたいから簡単でいいよ。

そう言うとヘレイナはかしこまりました、と返事をしてチーズトーストと野菜のスープを用意してくれた。

わざわざダイニングに移動するまでもなく、台所にある木のテーブルで時間はずれの食事にありつく。

「これからどちらに？」

ヘレイナが使用人たちの食事の支度をしながら聞いてくる。

「ちょっと人探し、かな」

トーストを飲み込んで答える。

「人探しですか？」

背中越しに会話をしていたヘレイナは手を止めてこちらを振り返った。

「どこの誰かわかるなら、人を使わせばいいじゃないですか」

「それがわかんないから探しに行くんだよ」

クスクス笑いながらティーカップに手を伸ばすボクを見て、ヘレイナは解せないという顔をする。

「なんの手がかりも無しに？」

「紅い髪をしてるってくらいしかわかんないんだけど」

「それだけですか？なんでそんな顔も名前もわからない人を探すんです？」

「だからそれを突き止めるために探すんだってば」

特徴らしい特徴と言えば、あの髪の色くらい。

鮮血を思わせる、赤でもなく、朱でもない、紅。

けれど、言葉で「あかい髪」と言ってしまえば、特にうんと珍しい

わけでもない。

「ずいぶん大雑把ですねぇ。…実在してるんですか？」

呆れた、と言わんばかりのヘレイナの口調に思わず笑ってしまった。

そもそもそこからか。

ボクだって、向こうの世界の住人であって欲しいと心の片隅で願っていたけれど。

あの夜までは。

「してるよ。この間ダスクが一度会ってる」

「会ってるのに顔も覚えてないんですか」

でもやっぱり顔はわからなかった。

「よく見えなかったんだ」

このレイシーで名前も顔もわからない少年一人探すのは砂浜でダイヤのピアスの片割れを探すようなものだ。

とはいえ、あの夜の時間帯にあんな路地を歩いているんだから、おそらくあの近所に住んでいるんだろう、というくらいはなんとか絞り込める。

それに。

一度視界に入れば間違いなく気付ける自信はある。

後ろ姿なら、よく知ってるから。

お茶を飲み干すと、ご馳走様、と立ち上がった。

「まぁ、他に探す伝手もなくはないんだけど」

何かしら関係があるのは間違いないと思うけれど。

直接訊いていいものだろうか迷ったから。

そっちとこっちは別ルートで探すことにしたんだ。

探すことが‘正解’なのかはわからない。

見つかったところで、何も変わらないんだろうとも思う。

迎えるのは、同じ結末。

―リリス様が寝る前には帰ってくるよ。

そう言い置いて、台所の勝手口から一番星が見下ろす街へ出かけていった。

――どうせ、引き合わせてはくれないんでしょ？

東の空に顔を出した白い月に話しかけて、可笑しそうに笑った。

Ｓｅａｒｃｈ　ｆｏｒ　Ｃｒｉｍｓｏｎ（後書き）

どうにかこうにか、神経衰弱〆ようと思います。
読んでくださっている皆様、ほんとにありがとうございます。
次からはまた兄妹とウサギさんのお話…です。たぶん。

A Rainy Morning

―アゼルもアゼルで、あのバカウサギに正直にスケジュールを教えるな。

ある朝、いつものように銀の髪を梳かしながらそう責めると、座っていたアゼルは正面の鏡越しにオレの顔を見て、こう言い募る。

「どうして？嘘はダメだって、大旦那様もマリアンも、みんな言うじゃん。クレスは伯爵様のご子息なんだから、もっと嘘は吐けないでしょう？お屋敷にいると周りがうるさいから、気分転換したいんだって」

…バカ、気分転換だけにわざわざこんなところまで週3回も4回も来るヤツがあるか。

呆れてついたため息に、アゼルは口を尖らせた。

「それに、ほとんどが庭か台所で一緒にお茶を飲んだり本を読んだりしてるだけだよ。いつも急に来るから、全然お相手できないこともあるし」

クレスは何も悪いことしてないんだから、ケンカ売っちゃだめだよ。と眉間に少ししわを作って見上げてくる。

…今のはお前に呆れたため息だったんだけど。

だがこの返事を聞いて、少しだけ安心した。バカウサギに会いたいが為にスケジュールを教えているわけではない…んだよな？約束して会っているわけでもなさそうだし、まぁこの家にいる分には大丈夫だろう。

昔からだ。人見知りする一方で、一度気を許した人間には警戒心を全然持たない。

だから、あんな悪夢が起こってしまったのに。

あの時のレイズは、何としてでも妹に元に戻って欲しいと願った。その為には、世界中全て敵に回しても構わないと思って。何事も無かったように、とまではいかずともせめてまた、以前のように笑ってくれるなら何でもしようと。

誰も守ってくれなくても。

ずっとオレが傍にいて、守ってやればいいことだ。

平均より笑顔は少ない方だと思うが、誰彼かまわず笑顔を振りまく必要なんて無いし、むしろ悪い虫が近付かないように接客の時以外は仏頂面でいればいい。

オレが帽子作りの技術を身につけて、いつの日か独立出来れば。兄妹で小さな店を出して、普通に生活出来ればそれで十分。

多くを望んでなんていないつもりだけれど。

窓の外は、今の時期には珍しく雨だった。
…今日はまとめ髪にしよう。

アゼルの細い髪は、雨だとウェーブが少しきつくなって広がってしまう。

高めの位置で一つに結い上げて、緩い三つ編みの団子を作った。
後れ毛をピンで留めて、ふと思いつく。

「アゼル、あの髪留めは？」

以前レイズがアゼルに買ってやった、ピンク色のガラスの花。
手渡したときにはものすごく喜んでくれたが、なぜか実際にはなかなか着けたがらない。いつも朝髪を結う時に仕上げに着けようとすると、なぜか「今日は着けなくていい」と言う。

「今日は」じゃなくて「今日も」という頻度で。

今日だって団子の根元に飾ろうと思ったのだけれど。
本人曰く、

大事だから仕舞っておきたいの。

と言って、机の一番上の引き出しに仕舞いこんでいる。

「ううん、今日はいい」

ほら、今日も。

「どうして。あれ可愛いじゃん」

「うん。でもいい」

「モノは使えって言ってるだろ」

大事にしてくれるのはいいんだが、モノは使わなければ存在意義が半減するとレイズは思っている。駄目になったら、また新しい、その時気に入ったものを買えばいい話だ。

そう言っても、鏡の中のアゼルは口を尖らせる。

「だってー」

「だってじゃない」

一歩踏み出して件の髪留めが仕舞ってある引き出しを開ける。

「あっ」

座っていたアゼルは一歩レイズに遅れをとってしまった。

レイズの手の中に納まったガラスの花が、決して明るいとは言えない雨の日の室内の光を集めて煌めいた。

「もぉ、仕舞っといてー」

「ほら、座って」

ぐずる子供のような声を出すアゼルに命令口調で言い、アヒルのような口をしたままの顔をぐいっと鏡に向けて、肩を押し下げて無理やり座らせる。

「よし、完成」

バレッタ型の髪留めを斜めに着けて、鏡越しの仏頂面に微笑みかけた。

◆◆◆◆◆

雨の日の、数日後のこと。

小休憩を入れようと台所に下りてドアを開けたオレは、その場で固まった。顔からごっそりと表情が抜け落ちるのが自分でもわかる。

ダイニングテーブルにはアゼルと、このレイシーで、今オレが一番会いたくないヤツがいた。

何やら話ながらあのバカウサギが左手で頬杖をつき、右手の指をアゼルの髪に指を絡ませていた。髪の毛をいじられていることを気にもせず、アゼルはテーブルの上の本を眺めるばかり。嫌がっている素振りもない。

あの瞬間ほど手元に銃が無いことを後悔し、また安堵したことはない。

…もしあの時手元に銃があったら。

いくらアゼルと約束したとは言っても、確実にあの灰色の頭をぶち抜いていたに違いない。

二人もオレが入ってきたのに気づいて顔を上げる。…否、ウサギの方はとっくに気づいていたに違いない。目が笑ってやがる。

「お兄ちゃん」

一気にその場の気温が下がったのがわかったのだろう。休憩？お茶飲む？と聞きながら慌ててアゼルが立ち上がろうとする。ヤツの指に絡んでいた銀がするすると解けて、揺れた。

その手触りを一番良く知っているのは、このオレだ。

「おい」

「ケンカはダメなんだろ？お兄ちゃん？」

オレの方を見て勝ち誇ったように笑ってきやがった相手に、堪えきれなくなって詰め寄った。胸倉を掴もうと無意識に伸ばした手は寸前であっさりと捕まれ、膠着状態になる。

「お兄ちゃんっ」

アゼルがおろおろした声を出した。

「話がある」

「あぁ？」

バカウサギは笑みを消して、アゼルには届かないくらいの声で言った。

「アゼル、兄貴借りるよ」

バカウサギはアゼルに向かってそう言うと、掴んだオレの手をそのままぐいぐい引っ張って勝手口を出た。

◆

オレの手首を掴んだまま無言で赤薔薇の木戸を抜け、どんどん歩いていく。

少し行くと細い裏路地に向かっているのがわかった。

いつぞやどこぞの馬鹿を叩きのめしたことがある行き止まり。

行き着くと、それまで掴んでいた手をパッと離して数歩進んでこちらに向き直る。
振り返ったダークグレーの瞳はやや細められ、疑わしげに聞いてきた。

「お前、本当にアゼルの兄貴か？」
「？…どういう意味だ」

何を今更。

「アゼルと血は繋がっているのかと聞いてるんだ」

当然、オレとアゼルは同じ両親から生まれた正真正銘の兄妹だ。
髪の色と男女の差こそあれ、顔の造作などは自分でも結構似ていると思う。

「当たり前だろ。父親も母親も同じだ」

こいつやっぱりバカか？
呆れたという口調で言い返した。

「…じゃあ、もう無駄なことは止めろよ」
「何が言いたい」
「兄妹じゃあどんなに好きでも結婚は出来ないんだぞ」

何を当たり前の事を。それがどうしたって言うんだ。

「アゼルはお前の気持ちには応えてくれないし、周りも絶対認めてくれないぞ。いい加減束縛するのは止めろって言ってるんだ。誰と一緒にいたって、アゼルの自由だろう」

…オレの気持ち？

「オレは束縛なんてしてない。妹に悪い虫がつかないように気をつけてるだけだ」

特にお前みたいな奴が。

何を勘違いしてるか知らないが、損所そこらの野郎がオレのアゼルに近づこうなんて１０万年早い。

「悪い虫かどうかはお前が決めることじゃないだろ」

「アゼルは警戒心が薄いからオレが気をつけてる。何が悪い」

妹に寄ってくる危険の芽は早めに摘み取るのが、親がいない今、保護者たるオレの務めだろう。

だが目の前のバカウサギは、そう言ったオレを呆れてものも言えない、とでも言いたげな目で見やると盛大にため息を吐いた。

「…お前、アゼルのこと全然信用してないのな」

その一言にオレの苛立ちは3割増しになる。

「アゼルが自分を害する人間を見抜けないと思ってるだろ？仮に襲われたって、アゼルなら自分の身は自分で守れるぞ」

「そんなことはわかってるっ。アゼルを信用してないんじゃない、お前を信用してないんだっ」

バカウサギを睨み、更に指差しながら怒鳴る。
わかってないのはお前の方だ、バカウサギ。

アゼルはああ見えてその辺の素人よりは強い。確かに自分の身はある程度自分で守れるだろう。

だけれど。

警戒を解いた所で不意を突かれれば。

また、あんな事が起こったら。

絶対に許せない。

……許さない。

妹を傷つけたその男も、

守れなかった自分も。

脳裏に繰り返し再生される、紅。

「オレが怖いんだ…」

思わず本音が口を突いた。

「怖い？」

バカウサギが訝しげに眉を顰める。

「お前には関係ない話だ」

口を滑らした自分の迂闊さに小さく舌打ちして顔を背けた。

「とにかくっ」

追及される前にもう一度振り返り、思い切り目の前の少年を睨みつける。

「遊び半分でこれ以上アゼルに近づくな。二人きりになるな、指一本触れるな、て言うかもう家に来るなっ」

さっきの台所での映像が頭を過ぎる。『役者』に腕っ節じゃ敵わないだろうが、やはり一発ぶん殴ってやりたい。

アゼルに何かしようものなら、本当になんとしてでも殺してやる。

「遊び半分なんかじゃないさ」

心外だとでも言うように、バカウサギが片眉を上げる。

「貴族のお坊ちゃんがどうして帽子屋の使用人を真剣に相手にするっていうんだ」

どう考えたって、遊びだろう。アゼルが気を許した所でこっぴどく傷つけるに決まっている。

例え本人にその気が無くたって。こいつの周りだって、こんな平民と馴れ合うのを良しとはしないだろう。

どちらにしろ、最終的にはアゼルが傷つくことに変わりは無い。

「オレだって、遊び半分で大人たちの目を盗んで屋敷を抜け出してなんて来ないさ」

バレたらヤバイんだぜ？

全然ヤバくなさそうにそう言って、ヒョイと肩を竦めて見せる。

…やっぱり周りは認めてないんじゃないか。

「お前が心配するようなことはしないから安心しろよ。オレだって望んでないしな」

お前が敵わないような奴が近づいてきたって、オレがやっつけてやるよ。

不敵に口角を上げる少年に、胸の奥がジリジリと焦げ付く。やっぱり、全然わかってない。

「まーだわかってないようだからもう一度言うけど、オレはお前の

敵じゃないぜ？…もしお前がアゼルの兄貴じゃなかったら、完全にライバルだけどな」

超強いガーディアンが増えたと思って喜べよ。

そう言うと規格外のバカウサギはいきなり目の前の塀に飛び乗った。

グレーの忌々しい瞳がオレを見下ろして不敵に笑う。

「またな、オニイチャン？」

オレが何か言う間もなく、屋根の上に飛び上がってその姿は見えなくなった。

……あの塀、身長の二倍以上あるぞ。

「はぁ？ふざけんな。誰がオニイチャン、だ」

取り残されたオレは胸の奥にくすぶる木炭の火のような苛立ちを抱えて、バカウサギのセリフを反復する。あんな憎たらしい弟をもった覚えはない。

言外に眼中に無いと言われているようで、イラつく。

出会って数ヶ月の奴がでかいこと言うな。

今のレイズに妹以上に近い存在なんてない。同じようにアゼルにとって兄である自分以上に近い存在はないはずだ。

生まれたときからずっと傍にいて、一緒に育ってきた。たかが１０年、されど１０年。ずっとオレが傍にいて周りの悪い奴らから守っ

てきたんだ。

……一度だけ、致命的なミスを犯したが。二度は無い。絶対に。

これからだって帽子屋で一緒に修行して、二人で店を出すんだ。他人がオレたちの間に入って来られる余地なんて、これっぽっちも無い。

自分の思考回路の危うさに全く気づいていない少年は、敵と認めた少年が乗っていた塀の上を睨みつけ、踵を返した。

A Rainy Morning（後書き）

久々にあとがきを。
またもや番外編です。と言うか入れるタイミングを見極められず、フリーセル扱い。汗

とある日の一幕でございます。。

こいつらいつもガキのくせにマセたこと言ってんなーと思われているかも知れません。。。が。

小学校高学年とかそのくらいって（ネズミさんはもうちょっと年上ですが）、世界が狭い上に子供過ぎることもなく、更に面倒なことに大人になったつもりで背伸びもしたがる頃なので、大人から見れば「そんな大げさな」となってしまうような事でも、本人たちの間では痛いくらい真剣に難しくこんな会話をしてることがあると思うんです。めんどくさいお年頃ですねー。
作者の子供時代も、今振り返るとそんなエピソードいっぱいあります。恐ろしくて公表なんてできませんが。滝汗。

なので登場人物たちの年齢にしてはチョイ大人めで、大げさで、一生懸命な会話をさせています。子供らしい面も併せて出していきたいとは思っているんですが、追い追い。なにしろ作者の力量が。。。あわわ。

まぁこの世界の住人は皆さんどこか様子おかしいですがね。あはは。

読者様方も体調にはお気をつけて。

Ｍｉｓｓ　Ｍｏｍ（前書き）

Ｋｌｏｎｄｉｋｅ＝クロンダイク。

完全番外・リリス様編。

時間は少し遡って。

どうやってか早朝にリリスの部屋に乗り込んできたドーンが、朝食後恒例のキアランのお説教中に寝落ちしてしまった後、リリスは孤児院の視察に出かけた。

レイシーに１３ヵ所ある孤児院。現在はその全てをリリスが主催する団体が運営している。

かつてその地域ごとに宗教家や慈善活動家によって独自に運営され、生活環境や教育レベルもバラバラだった国内の孤児院。地方のそれらは各領主に委ねられているが、レイシーにある１３箇所に関しては数年前に全て買い上げ一括管理し、将来自立できるように身寄りの無い子供達に一般水準の衣食住および教育を与えようという趣旨の元、一孤児院につき平均２００人程度の規模で運営している。

自ら各孤児院を回り、子供たちの様子を見て歩く。管理官達から現状を聞き、要望や改善点を話し合う。

部下に一任している定期的な視察以外でも、時折リリス本人が足を運んでいた。しかも抜き打ちで。その方が現場の人間も気を引き締めて仕事に従事し、あってはならない不正や虐待を見抜ける確率も上がるからだ。

リリスが手を掛ける以前の一部の孤児院内部の惨状を、繰り返さないために。管理官一人ひとりは採用時にリリス自身も面談し、身元も確かな人間のみを採用していた。

孤児院の門に馬車をつけると、年嵩の女性管理官が慌しく外に出迎えに出てくる。

「女公爵様、ご機嫌麗しゅう」
「出迎えなど不要だと言っているでしょうに」

他の管理官達は子供たちを玄関前に呼び集めて整列させている。がやがやと騒がしい子供たちの声が門の外まで聞こえて、リリスはそう言いつつもふふっと微笑んだ。

◆

久しぶりに、自分たちの養母がやってきた。

管理官がけたたましく持ってきた知らせに、やる気無さ気に芋の皮を剥いていた少年は軽く瞠目して視線を管理官の方に向けた。小さくため息を一つ吐いて、持っていた剥きかけの芋とナイフをバケツの中に放り込んで立ち上がった。

正確には養母代表、といったところか。実際のところ、自分たちの生活は大勢の貴族やお金持ちが寄せてくれた寄付金で賄われているらしい。そして音頭をとってその寄付金を集め、孤児院を運営して

くれているのが、

この別世界の人。

管理官たちは、自分たちが雨露をしのげ毎日の食事にありつけるのはこの女公爵の、更に寄付をしてくださる貴族の方々のおかげなのだと、毎食前に子供たちに話して聞かせていた。ある種の刷り込みにも近いそれは、それまでの生活で多かれ少なかれ人間不信のきらいのある子供たちの心に、どの程度浸透しているか。

少なくとも、少年はこの孤児院には絶対何か裏があると信じて、いつでも逃げ出せる準備を怠らない。外への抜け道も見つけてあるし、ベッドの下には必需品を詰めたリュックサックを隠してある。

でもそんなのはストリート上がりの中でもほんの一部の連中で。そもそもここへ来たのも去年の大寒波の際、仲間の一人が風邪をこじらせて死に掛けたから、仕方なくだった。あの時ここの管理官に拾われなかったらそいつは助からなかっただろうし、それについては感謝もしている。

だけれど。

言葉には出来ないけれど、脳内では絶えず「ここにいてはいけない」と警鐘が鳴る。毎日の寝床も食事も保障されているここで一年以上月日が流れてもそれは止むことなく、他の連中がどんどん警戒心を無くしてこのぬるま湯に浸かっていく中で、自分と相棒だけがここにやって来た当時と同じようにいつまで経ってもこの組織集団に馴染めず、浮いた存在だった。

理由なんてはっきりとは言えない。

空気が、歪なんだ。

玄関ホールに着くと、もう大部分の子供たちが集まっていた。
自分と相棒がそんな凍った目で周りを眺める中、時折訪れる美貌の貴婦人に、ある子供はキラキラとした羨望の眼差しを向け、ある子供は惚けたように口をポカンと開けて見入り、ある子供は自分たちと同じように不信感を内包した視線を向けた。

そんな子供達の多くは、自分達の現在ある環境を整えてくれた雲の上の存在に、感謝と敬意と、畏怖を多分に込めてこう呼ぶ。

ママは来ると時折、目をかけた子を孤児院から連れ出した。その子らはストリートで生活していた頃の名残が消えない素行の悪い問題児であったり、決して贅沢とは言えない孤児院の食生活にあってなぜか肥満体型である子だったり、逆に容姿も成績も優れた評判のよい子であることもあった。

ただ一つわかっていることは。

養子に出されるわけではない。

養子に出される時は、必ず子供を引き取りたいという夫婦が孤児院に一度は孤児院を訪れる。そして希望に適う子供を品定めして、気に入った子がいれば申請を出して後日引き取りにやってくる。この時は必ず養父母が迎えに来るので、女公爵自らが連れて行くことはない。養子縁組は引き取り側にいろいろ条件があるらしく、条件に満たなければ破談になることもあるらしい。

だからこそ、どこに行ったのか、という話になる。

前者二者の場合は環境を変えるために孤児院へ転院させたのだとか、後者はママがお屋敷で直々に面倒を見てくれ、貴族様のような生活が出来るのだとか、模範として他の孤児院に転院したのだとか、様々な噂が子供達の間に上っていた。

なぜ噂なのかと言うと。

ママに連れられていった子らのその後を、どの大人に尋ねても誰も答えてくれないからだ。

「女公爵様」

恒例の全員挨拶が終わって、子供たちがそれぞれ与えられた仕事や勉強の続きに戻っていく中、女公爵を呼び止める。

口元を引き結び、今日こそは、そう意を決した表情で貴婦人の前に立った。

以前、一番の親友がママに連れて行かれたっきり連絡がつかない。

誰に聞いても、行方を知らない。

嫌だとはっきり断ったのに、問答無用で連れて行かれた。

今頃どうしているんだろう。元気でやっているんだろうか。

この孤児院に入る前、ストリートで生活していた頃から一緒に生きてきた仲間だ。いざとなったら二人で逃げ出せるように、外への抜け道も自分とあいつしか知らない。

家族以上の仲である自分に、あいつが連絡を寄越さない訳がない。

もし連絡がくれば、こんなところさっさと抜け出して会いに行くのに。

闇雲に探しても、王都は広い。子供の足で探せる範囲など高が知れ

ている。

なら、連れて行った本人に聞くしかないではないか。

あのクラクラする程綺麗な笑顔に騙されちゃいけない。

「前に女公爵様に連れて行かれたザックは、今どこにいるんですか？」

「ザック……？ごめんなさい、どんな子だったかしら」

ママは、覚えてもいなかった。

少年はカッとして言い募る。

「ママが自分で選んで連れて行ったんじゃないですかっザックは」

聞きつけた管理官が慌てて駆け寄ってくる。

「女公爵様に謝りなさい！失礼な口を利いて！」

少年を叱りつけた管理官に、貴婦人は「いいのよ」と悠然と微笑み、少年に問うた。

「…ザックに会いたい？」

◆◆◆◆◆

その日もいつもどおり、午後の日課である院の裏手にある小さな菜園の手入れをしていた。
だいぶ涼しくなったとはいえ、日中畑で作業をするときには半袖で十分だ。

そうでなくても僕は一年の大部分を半袖で過ごしている。冬場に他のみんながセーターを着込んでいても、自分だけはシャツ1枚だったりすることはザラだった。
幼い子たちに寒くないの？と聞かれると、はにかみながらこう答えるのが常。

「肉が分厚いから大丈夫だよ」

そう言いながら、キャッキャと笑い声を上げて順番にぶつかってくる子を持ち上げて部屋ならベッドなり、庭なら干し藁の上なり、近くの落としても痛くない場所にポンポンと落としてやるのがお決まりだった。

そしてその光景を遠巻きに見る一部の子たちから聞こえよがしに囁かれる、根拠のない疑い。

「この間の××協会がくれたパン、保存庫から無くなったらしいぞ」
「あぁ、どおりで腹回りが」

証拠も、何もない。
本当は誰がそのパンを盗ったのかなんて、知らないけれど。

人と同じものを同じ量食べて、体に蓄えた脂肪の量は人の倍以上。

疑われてもしょうがないのは、自分でもわかってはいる。
元々太りやすい体質なんだろう、どうしてこんなに太っているのか自分でも不思議なんだから。
何かの病気…でもないと思う。特に痛いところも無いし。

「女公爵様がいらっしゃったので、全員急いでホールに集まりなさい」

菜園まで管理官が呼びに来たのでそれまで一緒に作業していた子供たちと泥のついた手を洗い、急いで玄関ホールに向かう。

女公爵様が孤児院を訪れると、子供たちが総出で出迎えをし、揃って挨拶をする。

あの人はいつも突然やってくる。だいたい2，3ヶ月に一度。こちらの都合はお構い無しだ。
その度に管理官はあたふたと走り回り子供たちを玄関ホールに集め、自分たちはその時やっていた作業を中断させられる。

自分たちがホールに着くと、もう他の子供たちは粗方揃っていた。
孤児院の子供たちの大半は、絵から抜け出てきたように綺麗なあの人に憧れを抱いている。女の子たちは特に。
自分は女の人のファッションなんて全然わからない。ましてや貴族のなんて尚更だが、たぶんあの人にとってはとても地味な格好をして来ているんだろう。
ここに来る時の女公爵は大きな宝石を着けているわけでもないし、着て来るドレスは色自体は自分たちの服の色と差して変わらない。
今日は飾り気の無いモスグリーンのドレスを着ていた。レースも付いてないし、スカートも仰々しく膨らんでいない。それでも、あの

人は何を着ていようとも、自分たちとは別世界の人だった。

女公爵を嫌っている奴らは「大人は、特に金持ちは皆敵だ」と信じて疑わない一部の連中で。そういう連中のほとんどは、ここに来る以前大人にひどい目にあわされていた経験を持っている。

彼らはあまり当時のことを人に話すことはないが、彼らの体にある傷跡や、何よりその瞳の奥にある暗い光が、それ以外の子供たちとの間に目に見えない溝を刻んでいた。

自分も、あの方のことを悪く思うなんて罰当たりなことだと思う。あの方のお陰で毎日ご飯と今晩の寝床があるというのに。

2年前に両親が流行り病で死んだとき、まだ10歳だった自分がここに引き取られることがなければ、路頭に迷って今頃生きているかどうかも怪しいと思う。

ここにいる子供たちの多くが自分と同じような境遇の子だ。親がいなくなったか、親に捨てられたか。

いずれにせよ、自分の帰る家が無くなってしまった子供たちの寄せ集めだ。

全員挨拶が終わって皆がバラバラと解散し始め、さて自分も菜園に戻るか、と足を向けた時、背後で大声が上がった。振り向くと、見覚えのある少年が女公爵に食ってかかっている。他の子供たちも何事かと足を止めていた。すぐに管理官が駆け寄ってきて仲裁に入る

のが見えた。

あいつ、確か…

管理官に連れられていく少年を目で追いながら、普段接点のほとんど無い彼の名前を思い出そうとしたが、喉元まで出かかったそれは終ぞ出てこなかった。

Ｍｉｓｓ　Ｍｏｍ（後書き）

２ヶ月空いて番外編かよ…本編進めろよ。。。ｏｒｚ
謝罪＆言い訳は活動報告にて。

To see Zack again

「キアラン、ここで二人だから十分だわ。帰りましょう」

女公爵は御者台に座る黒服の男にそう声をかけ、馬車に乗り込んだ。

あの後、管理官に自分の身の回り品をまとめるように言われた。ザックのいるところに連れて行ってくれるらしい。孤児院を移ろうが、ザックと一緒なら楽しくやっていける。もうこの孤児院には未練はなかった。

ようやくザックに会えると嬉しく思うを同時に、様々な疑問が頭をもたげる。

連れて行ってくれるとは言われたが、やはり具体的な場所は告げられない。

女公爵に食ってかかって、むしろ処罰対象になるはずの自分の願いをどうして聞き入れてくれたのか。

ザックを覚えてもいなかったのにどうして居場所がわかるのか。

…用心するに越したことはないな。

手荷物をまとめて外に停めてある馬車の前に行くと、そこには帰り際の女公爵と黒い服を着た男、それに自分と同じように荷物を持った少年がもう一人。この孤児院で一番太ってる奴。特に普段絡むことも無いから、名前も知らないし、必要も無い。デブ、と言えば奴のことだから。

奴の方も自分一人だと思っていたらしく、チラチラと怪訝そうに向

けてくる視線が鬱陶しい。

所在無さげに荷物片手に佇む二人に、キアランと呼ばれた男が声を掛けてきた。

「お前たちはこっちだ」

男は自分が座っていた御者台を顎で指し、荷物を屋根の上に上げる。

…十分って、何のことだ？

女公爵の台詞が気にかかったが、ひとまず荷物を男に手渡すと御者台に上がる。

初老の男は、無言で御者台に上がると窮屈そうに自分らの間に身を収め、馬車を発進させた。

◆

王都は広い。

ザックと会えても、またそこで一緒に暮らせるという保証も無い。荷物もまとめてきたからもうあの孤児院に帰ることはないだろうが、自分が次にどこに移ることになるのかなどは何も聞かされていなかった。

どうせ、ザックもいないあんな場所に未練は無いけれど。もしまたザックと離れ離れにされるようなら、二人で脱走して、ストリートに戻ろう。ザックだって、賛成してくれるはずだ。

孤児院での、管理され監視される生活はどうしても自分たちは馴染みきれないものだったから。

窮屈な御者台に乗せられ、連れていかれるのは女公爵自身の屋敷らしい。始めの頃はデブが黒服の男に二言三言話しかけていたが、手綱を握る男は少年と会話をするつもりは毛頭無いらしく、移動している間は終始無言。その内デブも諦めたのか、何も言わなくなった。その間そんな二人には目もくれず、自分はひたすら周りの風景を眺めて、頭に叩き込もうとしていた。

いざとなっても、自分の住んでいたエリアに戻れるように。

馬車はどんどん見知った風景から遠ざかって、やたら大きな家が増えていく。

…もう孤児院を出てから一時間は経っただろうか、太陽が中天に近い。貴族のお屋敷をいくつも通り過ぎ、いつしか周りに大きな木が増えてきた。

角の目印になるものだけでも目に焼き付けておこうと、座った右側ばかりを向いていたから、その屋敷に気が付いたのは鉄の門をくぐる直前だった。

馬車が止まったのは、森の中に建っている、と言っても過言ではない木々に囲まれたこじんまりとした屋敷。いや、これでも十分大きいのだが、ここに来るまでに並んでいた大邸宅を見た後では、小さく感じてしまうのも無理は無いだろう。

…公爵って、貴族の中でも偉い方じゃなかったか。

これが数ある別邸の一つに過ぎないのだと知らない少年は、心の中で首をかしげる。
そして屋敷の後方に木々の合間に見える、キラキラ光る…建物？
温室というものを初めて見た少年には、それが何なのかが判別することが出来なかった。

痛くなった尻を押さえて周りをきょろきょろと見渡す自分たち二人を置いて、さぁ着いたわよ、と馬車を降りてスタスタと一人屋敷の中に入っていってしまう女公爵。
ふと視界に入ったその横顔の冷たさに、警戒の数値が一気に跳ね上がった。

そして今。

女公爵は、ザックに会わせてくれると言ったのに。未だその気配はない。

更にランチだと呼ばれて、今までの人生で一番豪勢な昼食が目の前に並べられている。
てっきりすぐに別の孤児院のどこかに移されるものだと思っていたので、この状況の意味がわからない。

見返りはなんだ。

目の前のご馳走を見ながら考える。

タダより高いモノはない。
他人からの無償の親切なんてものは有り得ない。

ザックと二人でストリートで生きてきた時に学んだこと。

絶対こんなに必要ないだろと思うくらい長いテーブルには、大分離れた右側にデブ、左の遠い端には女公爵がお誕生日席に着いていた。

どうしてこんな。

目だけ右に向けると、デブが小さい目を可能な限り丸くしてテーブルの上のご馳走を食い入るように見つめていた。

ご馳走は確かにすごく魅力的だけれど。

肝心なのはそんなことではなく。

……ザックはこの家にいるのか？

少なくとも、今まで連れて行かれた子供たちがお屋敷にいるという噂は嘘なんだろう。この家には、子供がたくさんいる気配がしない。おそらくザックもここにはいない。確たる証拠も無いが、そんな気がする。直感、とでも言ったらいいだろうか。

「お腹いっぱい食べなさいね」

ひどく遠いのによく通る声で女公爵はそう言って、紅い飲み物が入った変な形のグラスを笑みを刷いた口元に運ぶ。

それを合図に、後ろに控えていた制服の女の人たちがグラスにオレンジ色の飲み物を注いでくれる。

「女公爵様」

横では気忙しくいつもの食事の前のお祈りの型を取って、デブがさっそく目の前の大きな肉にかぶりついていたが。

今日二度目、料理に手をつける前に女公爵に挑むような視線を向け、問い詰める。

「ザックはこのお屋敷にいるんですか」

「ここには、いないわね」

のんびりとした返事に眉間にしわを寄せる自分に向かって、グラスを置きながら憎らしいほど綺麗な、警戒心をやたらと掻き立てる笑みを浮かべ、続ける。

その絶世の美貌に向かって、喉まででかかった言葉をどうにか飲み込む。

ふざけるな。約束が違う。

怒鳴りつけてやりたい衝動を抑え、ぐっと押し黙る。
ここで拗れたらザックに会えない。

「まずはお食べなさいな。心配しないでも、午後にはまたここからザックのいるところに移動しますよ」

なだめるようにそう言うと、横のデブに向かってこう言った。

「最後にデザートが出るから、その分のお腹は残しておきなさいね」

さぁ、あなたもお食べなさい。おいしいわよ。

再度女公爵にそう促され、更には不覚にも腹の虫にも催促され、渋々という態度を全面に出してフォークを手に取った。

食事の最後に出されたのは、まるで絵本に出てきそうな、宝石のような苺の載ったケーキだった。

腹が満たされたことで落ち着きかけていた心拍数がまた跳ね上がる。

……ケーキは嫌いだ。

記憶が正しければ、デコレーションケーキを食べるのは5年ぶりのことで。

最後に食べたのは、まだ両親が生きていて、帰る家があって、自分の家族が普通の親子だった頃。

年に一度だけ、自分の誕生日に父さんが一切れだけ買ってきてくれる、白いクリームと真っ赤な苺のケーキ。

決して高いものではないことは知っていた。

近所のケーキ屋で二番目に安いそれは、だが年に一度にしか食べられない特別なものだった。

…見ているだけで胸がジリジリと焦げつく感じがする。

あの頃を思い出すから。

テーブルの上の食事はどれもこれも悔しいくらいおいしかったけれど、ケーキだけは、手を付けなかった。

「苺のケーキは嫌い？」

渋い顔で目の前のケーキを睨む自分に女公爵が声をかけてくる。

「…嫌い、です」

「そう、残念だわ」

なぜ、とは聞かず、形のいい眉を少しひそめてそう言うと、デブに向かってこう言った。

「随分と食が細いのねぇ。あなたくらい身体が大きければ、たくさん食べるのかと思ったけれど」

「別に大食いってわけじゃないんです」

デブはケーキを飲み込んで返事をした。

テーブルを見ると食べきれずに残している皿がいくつかある。

それほど大量だったわけではない。現に自分は特に苦も無く完食した。…ケーキ以外は。

「昔から、なぜか太ってるんです」

「孤児院でも皆より大きかったわよね？」

「！…違います！食べ物を盗んだりしたことなんてありません！」

「嘘付け」

誰もそんなことは言っていないのに、慌てて言い訳を始める。

新しい紅茶が注がれるカップを見ながら思わず横から口を挟んだ。

疚しいことがあるから慌てているんだろうに。

「違うんだ！いっつも皆僕が盗ったって言ってけど！お父さんもお母さんも太ってたから僕も似ただけなんだ！僕は…」

デブが自分に向かって焦ったように言い募る。

「お止めなさいな、二人とも」

冷ややかに口元だけ歪めて横目でデブを見やる自分と、身体ごとこちらを向いて唾を飛ばしてくるデブ。
女公爵はフォークを置くと、自分たちの言い合いを諫める。

「…そうなの。それは辛かったわね」

デブに向かって同情するような、しかしなぜかどこか嬉しそうな顔をする女公爵。

「これから行くところは、そんなことを言う人は誰もいないから安心なさい」

お茶を飲んで落ち着いたら、出かけましょうね。

そう笑顔で言って、少年たちに食後の紅茶を促した。

そして最後にお茶を飲んだ直後。

横でカップが割れる音が聞こえたのが、最後だった。

Duke's strange daughter

最初は、ただの冗談だったのよ。

紅の光景を眺めつつ、美貌の貴婦人は口元を覆った扇の下で呟く。

その呟きは左に控える執事まで届くことなく、紅葉の中に吸い込まれた。

◆

――昔々、女王様の治める国の公爵家に、一人のお嬢様がいらっしゃいました。

透き通るような白い肌に、栗色の艶やかな巻き毛と宝石を嵌め込んだような深い緑色の瞳は、見るものをみな虜にし、どこぞの貴族のご子息様から初めての求婚をお受けになったのは、わずか４歳のときのことでした――――――――

そんな御伽噺の主人公になれそうな、未来の社交界の華。

だが実際は友人も少なく、着飾るよりも少年のような格好をして、動物の世話ばかりをしている少女。

物心ついた時から大の動物好きで、様々な動物を飼ってきた。

屋敷で飼っていた馬や犬猫に始まり、ウサギやネズミ、小型の猿などの小動物、南方の国から取り寄せた色とりどりの珍しい魚や鳥、更にはカブトムシやクワガタなどの昆虫の類まで。

本来なら動物の世話などは使用人に任せておけばよいのだが、周りの、特に侍女たちは魚が気持ち悪いだとか、蛇が怖いだとか、きゃあきゃあ言って全く使いものにならず、必然的に一日の自由時間の

大半を公爵令嬢自らが動物たちの世話に費やすことになった。

そんな中でも特に熱を上げたのが爬虫類。カサカサした感触、無表情だけれど愛嬌のある顔立ち。

自分がどんな気分でいても、日光の下で我関せずと言わんばかりに飄々として。

足の無い蛇たちも動きがユーモラスでかわいいが、小さい足をチョコチョコ動かして歩くトカゲ類は堪らなく愛らしい。

気がつくと数は増え、当初異国の動物たちの為に別邸に作らせたガラス張りの温室は、トカゲたちの楽園になってしまっていた。

◆

「動物好きの天使ように愛らしい姫」

度々貴族階級の人々の口の端に上るまだ幼い公爵家のご令嬢。生まれついた家柄と妖精と謳われた母から受け継いだ容姿で、貴族社会全体からその将来を注目され、当の本人の与り知らぬところで熾烈な許婚争いが繰り広げられることになった。

大人たちの思惑が絡み、リリスの幼い頃から父である公爵と政治的に近しい貴族の親に連れられて、少年たちが遊び相手として連れて

こられる。最終的に娘であるリリスの嫁ぎ先を決めるのは公爵だが、子煩悩で知られる父公爵と共にリリス本人の心象も良いに越したことはないのだ。いつからかそう計算した貴族がリリスと年の近しい息子を連れて、公爵邸に仕事の話をしに来るようになった。

だがどうしてか、父はそんな貴族たちに対して自慢の娘を紹介することはなく、むしろ仕事などにかこつけて娘目当てに屋敷を訪ねてくる親子を積極的に娘に会わせようとはしなかった。そして中途半端に隠そうとするほど、人の耳目を惹きつけようというもの。自分の不在時に尋ねてくる輩は丁重にお帰りいただくように、と執事にきつく言いつけてあったこと、そうでもしないとリリスのご機嫌伺いに列を成す貴族の数はリリスにお目通りの叶った親子の数倍にも上ったという事実は、リリスがたいぶ後になって知った事柄の一つだった。

そうは言っても一人で過ごしているご令嬢の遊び相手に…と言われると無碍にも断れない。確かに兄弟姉妹のいない彼女にとって年の近い遊び相手は貴重だったが、不運だったのは、幼いながらも自分の息子を紹介してくる大人たちの、こんな年端もいかない少女に媚を売る打算に満ちた笑顔の裏を読み取れてしまうだけの賢さを備えた少女だったこと。そしてそんな親の息のかかった息子たちも、少女の目には嫌悪の対象にしか映らなかったが、そんな心の内はおくびにも出さず、天使の笑顔で親子に挨拶をした。

一緒に遊んできなさいと言われて、下がり際に父がちらりと寄越す心配気な視線の真意を汲み取ることは出来なかったが、それでも目だけで大丈夫、と笑ってみせるのだった。

その時は、パパは私が男の子と仲良くするのが面白くないんだわ、

くらいにしか思っていなかった。

貴族の娘として生まれたからには、将来は家が決めた相手のところに嫁ぐのだと物心ついたときから言い聞かされてきたし、最終的に自分の意思なんてその決定には介在できないのだということも幼いながら理解はしていた。

そうは言っても。

―将来の旦那様候補として引き合わされた相手だとしても、せめて自分の小さな可愛い友達とも仲良くしてくれる人じゃないと嫌。

少年たちを試し、むしろあちらから断ってくるように仕向けようと、ささやかな抵抗を試みた反抗期真っ只中の希代の美少女は、その少年たちに屋敷で世話をしている犬や猫、小動物たちに水槽の中の色

とりどりの魚たち、自慢の友達を次々に紹介していった。何も知らない無邪気な少女の仮面を着けて。

最初は美貌に笑顔を載せて説明する少女に見惚れていた少年たちだが、その動物たちの種類の多さに呆気に取られ、仕舞いには彼らがそれまで会った中で一番可愛らしい令嬢が喜々として気味の悪い蛇やトカゲたちを抱っこしつつ紹介する様に、顔を引き攣らせることになる。さらに紹介されるだけならまだしも、「抱っこさせて差し上げますわ」と華奢な腕の中の一抱えもあるそれらを手渡されようものなら、半べそをかいて逃げ腰になってしまうのだった。
そしてそんな少年に一転、長い睫を悲しげに伏せ、こうつぶやく。

「私のお友達と仲良くしていただけないなんて…」

そんなことが続くうち、「動物好きの天使ように愛らしい姫」が「爬虫類をこよなく愛する変わった姫」にすり替わるのに、さほど時間はかからなかった。

それは図らずとも、父の杞憂を払拭する一材料となってくれたのだが。

それも、大分後になって知る事実。

当時の少年たちの顔を思い出し、クスッと笑いがこぼれる。

先ほどのつぶやきは届かなかったが、今の思い出し笑いはキアランの耳にも入ったらしく、怪訝な顔を向けてきた。

「いかがなさいました」

水の撥ねる音と粘着質な音が響く中、目の前の情景にはおよそ似つかわしくない柔らかな笑顔を古参の執事に向けた。

「結局あなただけね、一緒にこの場にいてくれるのは」

◆

そんなことを続けて数年。

他所の年近い令嬢たちは次々と婚約を発表し、世間の目はいやが応にも美貌の公爵令嬢に向けられる。

嫌々デビューした社交界では、姫たちの嫉妬の視線と若い貴族たちの熱い視線を一心に浴び、夜会に顔を出せばあっという間に周囲を取り囲まれる。たとえ「変わり者のトカゲ姫」だとしても、その美貌と身分を目当てに擦り寄ってくる人間は後を絶たなかった。人が嫌いなわけではなかったが、向けられる笑顔の奥にある欲に当てられて、気分が悪くなることもしばしば。

毎日公爵家にはどこかの夜会の招待状が届けられるも、リリスの足は自然と夜会から遠のいていった。

そろそろ、リリスも本当に嫁ぎ先を決めないといけない時分だったが、父は一向に花盛りの娘を嫁ぎ先を決める素振りを見せなかった。

渦中の本人もさして焦ることもなく、相変わらず勉強と動物の世話に勤しんでいたある日のこと。

家庭教師の授業の合間に回廊を歩いていたら、侍女たちのおしゃべ

りが耳に飛び込んできた。

「あー、腰が痛い」
「何、今日アレ？」
「そー、二日目なのー。あー、もう！ホント女って損よねー」
「あんた重たいんだっけ」
「そう、量も多いし。薬飲まないとやってられないのよ。毎月毎月もうイヤッ」

何の話をしているんだろう？
腰が痛いと言っている侍女は病気なんだろうか。アレとは何のことだろう。
具合が悪いなら無理に働かせるのはよくない。侍女長はそんな無体なことをする人間ではないはずだ。

「来たら来たでだるいし、来なかったら来なかったで問題だし」
「このときばかりは女やめたくなるわねぇ」

おしゃべりに花を咲かせている侍女に近づき声を掛けた。

「あなた、具合が悪いの？」

突然現れたお嬢様に驚いて、侍女二人はビクッと身を震わせた。

「お嬢様！申し訳ございません。すぐ仕事に戻りますので」

慌てて礼をとり、その場を去ろうとする侍女二人。その二人を引き止めて、なお言葉を掛ける。

「具合が悪いなら、無理はいけないわ。侍女長に言って休みなさい

な」

リリスの言葉に侍女二人は顔を見合わせて、なぜか笑顔で、少し申し訳なさそうにこう言った。

「お心遣いありがとうございます。ですが、ご心配には及びません。彼女のはただの生理痛ですのよ」

「薬も飲みましたので、大丈夫ですわ」

「そうは言っても、毎月薬を飲まないといけない病気なんて放っておいてはいけないわ。きちんと治さないとダメよ」

心配してそう言ったのに、どうしたことか笑い出す二人。

「お嬢様、どんなに優秀なお医者様でも生理痛を無くすなんて出来ませんわ」

「そもそも生理は病気ではありませんし。よっぽどでなければ生理が理由で仕事を休むことはありません。お嬢様はお辛くないんですか？」

ちょっと、そんなこと聞いたら失礼よ、とだるいと言っていた侍女がもう一人を肘でつつく。

少しイライラしてきた。この二人は何を言っているのか。私のことをからかっているのではないか。

「生理なんてもの、私はかかったこと無くてよ。病気ではないなら、一体なんなの？」

生理にかかったことがない。

え、まだ？リリスの言葉に二人は驚いたような顔を見合わせる。

「あー、ほら、アレです。毎月女性に来る月のものですわ」

「生理」にかかっている方の侍女がなぜか声を落として言ってきた。

ほら、貴族様は呼び方が違うのかも知れないじゃない。

小声のままそんなことを言い合っている。

「…月のもの？」

だから一体何の…

苛立った声でそう続けようとした時。

「お前たち、何を油を売っているのです」

回廊に侍女長であり、リリスの礼儀作法の先生でもあるフィリーネが姿を見せた。

◆

フィリーネに今の話題を掻い摘んで説明する。するとなぜか聞いていた侍女長の顔が急激に青くなった。

知らぬ間に何か拙いことを言ったかと、その様子を見た侍女二人に

も青が伝染していく。

「ねぇ、フィリーネ」

フィリーネにも「生理」という病気ではないモノは何なのかを問いただそうと口を開きかけるが、言葉を被せるようにフィリーネが声を上げた。

「お嬢様、お部屋でお話致しますのでお茶にしましょう。この話題はお嬢様が無闇に口にするものではありません。女史の講義は後日に振り替えていただきます」

あなたたちは仕事に戻りなさい。…今のことは、他言無用で。

青くなっていた侍女たちにそう言い付けて背を向けると、参りましょう、お嬢様、とリリスに口を挟む隙を与えず部屋に促した。

Not sick, But XXX

フィリーネは部屋付の侍女にお茶を用意させて、リリスを残しまたどこかに行ってしまった。

用意されたお茶をすすりながら、頭の中で先ほどのことを反芻する。

説明するとは、何についてか。

「生理」とかいう病気ではないモノについて。

あの侍女たちは、私も「生理」とやらに罹っていると信じて疑わない風だった。

そんな不治の病、聞いたことがない。そして知らなかった私を、信じられないような目で見ていた。

そんな庶民の間では常識の一つであるらしい事柄、どうして今までの講義で教えてもらえないでいたのか。

一般常識はそれこそ貴族社会のものから一般庶民のそれまで一通り教えられてきたはずだ。

多くの民を預かる公爵家の人間として。この領地で誰より多くのことを知っていなければならないのだと、まだ幼いリリスに言って聞かせていたのは、先代公爵である祖父だったか。

いつも冷静で、歩く作法指南書のようなフィリーネが珍しく顔色をあれほど青くした理由。

もう今となっては自分と父公爵しかいない公爵家で、リリスの師を務めたのは乳母であり、侍女長であるフィリーネだ。

教え忘れていた事柄に思い至り、自分の落ち度に愕然としたか。

いや、それはないだろう。

常識の範囲に入るような基本的なこと、彼女が忘れるわけがない。

或いは――――

故意に教えないでいた事が露見して、焦ったか。

そうだとしたら、なぜ教えなかったのか。

思考に沈んでいたリリスを、ノックの音が浮上させる。

先ほど出て行ったフィリーネが戻ってきた。

ずいぶん顔色は良くなったようだが、その表情は沈んだまま。

「リリス様、公爵様がお呼びです」

◆◆◆◆◆

父が苦しそうに語る事柄が自分のことだと、頭に沁み込み腹に落ち着くのに、どれくらいの時間がかかっただろうか。

つい先ほどまでお茶を飲んでいたというのに、カラカラに渇いた口内で舌が貼りつく。

「……では、私は、子供を作ることができないと……？」

否。

子供を作る以前に。

私は。

女ですら、ないらしい。

「女」とは何か。

学者ではないリリスにはきちんとした定義なんてわからないけれど、少なくとも貴族の女に求められることは、

嫁いだ家の跡継ぎを産むこと。

それに当てはめると、どうやらリリスは貴族の女としては不合格らしかった。

生まれたときに既に発覚していたそれを、どうして今の今まで隠しておいたのか。

「…お父様。私を…一体どうなさりたかったのです？」

一通り詳しい説明をした専属医師を下がらせてから、とても、とても苦しそうに、まるで懺悔でもするかのように執務机に肘を付く父に向かって、ソファに沈みこんだリリスは弱弱しい声音で問うた。眩暈を覚えながら、大きく息を吐く。

「心臓の弱かったそなたの母に、このことを知らせるわけにはいかなかったからな。世話はほとんどフィリーネに任せて、そなたの裸を見せることはしなかった。そなたが生まれた際に立ち会った数名の人間にも徹底した緘口令を敷いてある、世間には女の子が生まれたと公表したのだ」

全ては母に、私が女の子だと言う”嘘”を突き通すため。

確かに「女」ではないものの、かと言って「男」でもない。

「どちらかといえば女寄り」であったから、「女」として育てた。事実を知るのは父と医師、それにわずかに限られた使用人のみで本人にすら伝えられることはなく。

妖精と謳われた母は、文字通り命懸けで産み落とした「一人娘」を思う存分可愛がり、リリスが8歳の時に家族に看取られて旅立った。そしてその後も、公爵家の「最高機密」はそのまま秘され、その性質からしても公にされることはなかった。現在もこの事実を知るのは父公爵とフィリーネとリリス付の侍女数人だという。

延々隠し通せるものでもないだろうに。

父に告げられた真実と迫られた選択は、リリスの人生を大きく変えた。

子は望めないが「女」として他家に嫁にいくか、

「女」として婿を取り夫に爵位を継がせるか、

貴族籍を離れ聖職者となるか、

あるいは、

自ら爵位を継ぎ、女公爵となるか。

「どうしたい？」

あまりにも無責任にそう振られ、リリスは右手で目を覆い、ため息と共にようやく一言告いだ。

「…少し、考えさせてくださいまし」

侍女がお茶を用意して退室するドアの閉まる音で我に返った。

父の部屋からどうやって戻ってきたのか思い出せない。

あぁ、ショックだったんだわ、とまるで人事のように思い、一人苦笑する。

温かいお茶を口に含んで、何とか頭を働かせようとする。

…確かに、他の家の子達と違うところはいろいろあったけれど。今になって思えば、父にしてみれば娘として育てつつも心のどこかで娘…もとい、息子…否、我が子の将来を案じたのだろうか。貴族の

娘が一般的に習う礼儀作法以外にも家庭教師を付け、男の跡取りと変わらない教育を受けさせた。そのおかげでリリスは動物たちの世話以外の時間はほぼ勉強の時間となってしまっていたが、リリスが当たり前の教養として受けていたその状態が普通ではないと気づいたのは、珍しく同年代の少女たちとのお茶の席に着いたときのことだった。

国の歴史も、数学も、剣術をはじめとした護身術も、一般的には男子が身につけるものであった。

「なぜリリス様はそんな難しいことをお勉強なさっているのです？跡取りとはいえ、いずれはご結婚なさるのでしょうに」

心底不思議そうに可愛らしく首をかしげて聞いてくる父の友人である伯爵の令嬢。普段からどうも会話がちぐはぐするなと思ってはいたが道理で、と納得がいった。

そして、あの時自分はなんと答えたか。

もう、はっきりとは思い出せない。確か、

「お父様がリリスは覚えがいいから、たくさん勉強しなさいっておっしゃるの」

くらいのことを言っていた気がする。

子供の頃から動物の世話にかまけていたが、本を開けばリリスは賢かった。

リリスを娘だと思い込んでいた母も、よく

「リリスが男の子だったら我が家も安泰でしたね」

でも私はこんなにかわいい娘を授かって幸せですわ。
と、自分好みのドレスを着たリリスを幸せそうに抱きしめた。

もし、母が生きていたら、実は出来損ないだった私をなんて言うだろう。

机に顔を伏せていた父は、ノロノロと顔を上げると自分の今後について「どうしたい？」と聞いてきた。
言われた瞬間は、なんて無責任か、と言葉を失ったが。

一呼吸置いて考えると、それは本来貴族の令嬢には与えられることの無い「人生の選択」だった。

貴族同士の結婚など所詮は権力の道具にしかならず、リリス自身も幼いころから、大人になったら家の為に好きでもない然るべき貴族のもとへ嫁ぐことが自分の未来だと、漠然と思い描いていた。
幼い頃は反抗期も相まって、キャサリンたちを楯に少年たちをいじめたりもしたけれど。そんなことで、その時点では好きでもない、下手をすると顔すら知らないような男と結婚させられるという事実は避けられるものではない。
そしてそれと同時に、夫がどんな人であろうとも、嫁ぎ先には今飼っているトカゲたちを全員連れて行き、授かった子供たちと一緒にトカゲたちを愛でて暮らすのだと心に誓っていた。

それが自分の行く末にある、爬虫類好きの平凡な貴族の女として待ち受けている、なんてこと無い未来だと。

諦めつつも達観していたのに。

そんなことも、杞憂に終わってしまった。

最早自分には平凡な女の幸せは望めないと宣告された瞬間。

自分の中で、音も無く何かが壊れた瞬間だった。

◆◆◆◆◆

夜毎どこかの夜会に、美貌の公爵令嬢の姿があった。

その長身とスレンダーな身体を瞳と同じグリーンのドレスに包んで、人々の中心でリリスは笑っていた。

それまで避けていた分を取り戻すかのように、毎夜シャンデリアの下でよくしゃべり、よく笑い、よく踊った。

元々の家柄と美貌に併せて機転の利いたおしゃべり。引っ込み思案で変わり者と囁かれた彼の人とはまるで別人のように振舞う彼女に、今まで陰口を叩いていた者たちも何食わぬ顔で擦り寄ってきた。

可笑しかった。

全てが可笑しかった。

自分も、

自分の容姿に羨望と嫉妬の眼差しを向けてくる女たちも、

自分に言い寄ってくる男たちも。

何もかもが笑えてしょうがなかった。

何かに憑かれるように、リリスはその交友関係を広げていった。

その数ヵ月後。

現公爵の一人娘リリスが家名を継いで次期公爵となることが、正式に発表された。

The order of priority（前書き）

後半、ぼかしてはありますが残酷描写あり。

ご注意を。

The order of priority

正式に女公爵となることが決まったリリスの元に、一時期下火になっていた求婚者の大行列が復活している。窓の外のそんな呆れた光景を見下ろしつつ、リリスはキアランの読み上げる今日の予定を聞き流していた。

「あの方々はいかが致しましょう」

予定を読み終わったらしい執事が昨日と同じように主に問う。

「丁重にお引き取り頂いて」

昨日と一字一句違わない返事を返し、窓から離れた。

「ですが」

昨日もあの列を解散させるにはかなりの時間と労力を要し、キアランの通常業務に大幅な支障をきたしていた。

また今日もそれこそ箒で追い払いたいのは山々だが、それなりに、いや、かなり身分もあり財もあるから邪険にも出来ない、我が主の魅力に惹きつけられて来たどうしようもなく面倒なアブラムシたちを、一つ一つピンセットで丁寧に排除する作業に半日以上を費やさねばならないと思うと、コメカミに血管の一本も浮こうというもの。

「今はお相手はしていられないけれど、パーティーにはあの方たち全員ご招待しますから、きちんとお名前は控えておいてね」

キアランにそう言いつけてリリスは部屋を出た。

求婚を受ける気はさらさら無いが、窓の外の彼らの協力なしではリリスがこれから着手しようとしている事業は立ち行かない。

確かにリリスの爵位継承式までの向こう3ヶ月の予定はキアランのスケジュール帳が黒くなるくらい埋まっていた。現に今日も、これからリリスが新たに買い上げた孤児院の視察に行く。

先日父公爵からの引継ぎを兼ねて、貴族会の会議に初めて参加した。様々な議題の提出、現状報告が繰り返されていく中で、最後に挙がったのが兼ねてから延々方針が定まらないでいたらしいいくつかうちの一つ、城下の孤児院の維持管理だった。

現在レイシーに13ヵ所ある孤児院。その地域ごとに宗教家や慈善活動家によって独自に運営され、生活環境や教育レベルもバラバラで、養子に出す際も里親にこれといった基準は無い。結果、引き取られた子のその後が杳として知れなくなってしまうケースも後を絶たないらしい。

そんな現状を口では何とかしなければと言いつつ、誰も手を挙げて取り組もうとはしないらしい。
どうでもいいのだろう、市井の末端で喘ぐ孤児たちのことなど。

現状の報告だけ為され、おそらく幾度となく繰り返されて来たのだ

ろう閉塞感が漂う会議場に、ふいに鈴を転がしたような声が響く。

「私がやりましょう」

重苦しい沈黙が支配する部屋中の視線を一度に集め、形の良い唇が弧を描いた。

「父から領地を受け継ぐ以外、新しく何か私に出来ることはないかと思案していたのですよ」

改善方針を練って後日ご報告致しますわ。

リリスはそう言うと、後ろに控えていた次官に議題の詳細を寄越すよう指示を出した。

ひとまず公爵家の私財を投じてレイシーにある全ての孤児院を買い上げること。

団体を新設し、身寄りの無い子供達が将来自立できるように一般水準の衣食住および教育を与えること。

一孤児院につきその収容人数を定め、大幅に超えての受け入れをしないようにすること。

里親を申し出た者の身元や職業確認、子供がその後生活する環境や仕事をさせる場合はその内容の確認をきちんとし、規定に満たない者の元には里子に出さないこと。

これらの内容をまとめ議会に提出すると、あれこれと質問が噴出する。

一番の問題はその運営資金。税を投入するでもなく、公爵家が私財で王都中の孤児を養うというわけもなく。

「策がいくつかございます。ご心配には及びませんわ」

美貌の次期公爵は、議会に居並ぶ狸爺共に悠然と微笑んで見せた。

馬車の中で、同行させた従者のガルトからこれから向かう孤児院の現状報告を聞く。

2年前から公爵家で働くようになった青年。本当ならキアランが同行するのだが、今日は行列にかかりきりで屋敷を離れられないので、キアランが代理を指名した。何か代理が必要な時にはキアランはこの青年を使うことが多い。

深い緑色の髪を短く刈り込み、切れ長の薄茶色の瞳は冷ややかで沈着。若いが優秀な男だった。何よりリリスに好色な視線を一切向けない点が、キアランが彼を重用する理由だった。

報告を聞き終わったリリスが形の良い唇をへの字に曲げて窓の外を見据える。

これまでの中で一番状態の悪い孤児院だった。

場所がスラムに近いことも大きな要因だろう。

買い上げたときには警備隊を配備し、管理官らを全員逮捕した。闇組織との繋がりが濃厚だったからだ。

現に里子の失踪率が驚くほど高かった。というより、その記録さえまともに録っていなかった。
ここから辿って組織壊滅を目指すのは軍の仕事なので、報復を警戒してリリスの周りも警備が増強されたが、もう直接は関知しないことにする。
現在は他の孤児院の管理官を臨時で派遣しているが、新しい管理官の採用が急務だった。

ここで育った子供たちは、何もしないでいれば将来のスラムを形成する一端となるのだろう。不の循環を止めなければ、堕ちてしまったものを底辺から引っ張り上げるのは容易ではない。

レイシーの底辺の底上げが、治安、景気、全てにおいて必須である。

……というのは建前で。

別に、何でも良かったのだ。

ただ、滑稽だと思っただけで。

男としても女としても失格で、どう在っても子を生せない自分が好きでもない他人の子の面倒を見ようなどと。
もとより取り立てて子供が好きというわけでもない。普通に生活していれば、人間の子供がリリスの日常に入り込んでくるなど、そうあることではないだろう。

「無いものねだり、なのかしら」

人はそれがなかなか手に入らないとなると、いらないものでも欲しいと感じてしまうものらしい。あの会議場で手を挙げてしまった自分を、まるで他人のように分析する。
何らかの理由で親を失くしたあの子供たちに同情し、哀れみこそすれ、愛着など沸くはずも無かった。その必要も、無かったが。

窓の外の荒んだ町並みを眺めつつこぼした言葉に、資料に目を落としていたガルトが顔を上げる。

「まぁ忙しくしていれば、いろいろと言い訳も立ちやすいわよね」
「…言い訳、でございますか」

女公爵の位を戴いても、それすなわち結婚せず独身でいても何も言われなくなるというわけではない。ただ結婚しなくても肩書きと仕事を得ることができる、というだけだ。隙あらば女公爵の夫の地位を狙うロクデナシはこれからも後を絶たないだろうし、リリスの次の代の跡取りはどうする、といった問題はこれからもずっと付いて回る面倒事には違いない。

ならばと、リリスは自立して一代で何か事業を築き、文字通りの独身貴族になる道を選んだ。その後は父の末弟である叔父か甥辺りの血縁者で、才能のある人間を選抜して事業の継承者として爵位を継がせればいい。それならば結婚せず年を重ねても後ろ指を差されることは少なかろう。
結婚せずとも身が立つのであれば、リリスにとって結婚は無用の長物であり、面倒なお荷物にしかならなかった。

ここまで考えて、今更世間体を気にしている自分に気が付き、リリスはクスクスと笑い出した。

「いかがなさいました」
「いいえ、可笑しいな、と思って」

ガルトは自分の秘密を知らない。目の前に座るガルトの怪訝な顔を見やり、なんでもないのよ、と笑ってみせた。

◆◆◆◆◆

孤児院に着くとトラブルが起きていた。

それまでの管理官を排除して他から人を寄越したのはわずか3日前のこと。

その短い間に、他から派遣されてきた管理官たちはぐったりと疲れきっていた。

ガルトがここに足を運ぶのは2度目だが、その度にこれで最後にしたいと心底思う。

それほどどこの孤児院は荒廃し、子供たちは一様に死んだ目をしていた。

聞けば、トラブルの無い日は無いこの院でもあまりにも目に余るので、これまでの院内での罪状を軍に報告し、大人と同様一度城の牢に入れるべきとの意見も出ている大問題児だった。

その罪状のほとんどが盗みであったが、更に悪いことにその際度々人を傷つけることもあったという。どんな罰を与えてもものともせず、闇組織から引き合いの手がこなかったのが不思議なくらいだという。

管理官の制止も聞かず、お嬢様は犯人の少年を呼び寄せた。

ガルトは目の前に引っ立てられて来た少年を苦々しい思いで見ていた。こんな汚らわしい小僧がお嬢様の前に立つなど、腹立たしいことこの上ない。本当に牢にぶち込んでしまえばいいと、心から思った。

呼び出された少年はまるで囚人のように後ろ手に両手を拘束され、ガリガリに痩せているのに目ばかりが爛々と光っていて、一種異様な雰囲気を放っていた。お嬢様を前にしても、臆することも無く唇を歪めて薄く笑っている。

お嬢様はそんな刃物のような少年を興味深そうに眺め、一言だけ聞いた。

「どうして、ここを出て行かないの？」

その少々的外れとも聞こえる問いに、少年は歪めていた唇を凍りつかせ、一瞬目を見開いた。

「言うことを聞かない悪い子は、頭からバリバリ食べられてしまうのよ？」

「……」

「…そう。じゃあ、一緒に行きましょうか」

無言で答える少年とガルトに向かってそう言うと、お嬢様は優雅に立ち上がるなぜか嬉しそうに笑いながら部屋を出て行った。

部屋を出て、たまらずお嬢様に声をかける。

「お嬢様、あの少年は…」

「連れて帰るわ」

「……本気ですか？」

前をスタスタ歩きながら信じられないことを言い出すお嬢様に、思わず一歩踏み出し間を詰める。

「悪い子には、お仕置きが必要でしょう？」

振り向いたお嬢様は、その綺麗な顔に心底楽しそうな笑みを浮かべていた。

「…当然、同席はさせられませんよ。後ろの荷台に括りつけていきますからね」

主の望みを叶えるのも、危険から遠ざけるのも、使用人の務め。一歩下がり、思わず大きく息を吐いた。

到着する頃には今朝方からの大行列は綺麗に片付けられていた。リリスは出迎えたキアランに、ご苦労様、と声をかけ、すぐに屋敷には入らず少年を連れて林に向かった。

キアランは荷台に括りつけられた少年を見て最初目を見張ったが、お嬢様が、林に連れて行くわよ、と言うと更に目を丸くし、ガルト自身も我が耳を疑った。

まさか。

そんな使用人たちを見て、お嬢様は不思議そうに小首を傾げた。

「どうしたの？管理官たちがこの子に手を焼いていたから、お仕置きをしようと思って」

「ですが、リリス様…」

「大丈夫よ、結果がどうなっても、困ることはないわ」

…どうなっても、構わないらしかった。確かにこの小僧がどうなろうが、さしたる問題にはならないだろう。

結局あの後、いつもはトランクなどを載せる馬車の屋根の上に気絶させたまま文字通り括りつけて運んできた。院長室から連れ出す際、暴れられては困るので気絶させ目と口を塞ぎ、手だけでなく足も拘束した。そうまでしないと危険だと、この数日を目の当たりにした管理官たちが口を揃えて言うからだ。

そして今は、楽しそうなお嬢様といつも通り澄ました顔のキアラン、件の少年を担いだ下男とガルトの４人で公爵家別邸の裏に広がる林の中を歩いている。

下男に担がれた少年は先ほど目を覚ましてからしきりに何かを訴えているが、口を塞がれていたので唸り声しか漏れない。どうせ聞いたところで罵詈雑言だろうから、外してやる素振りは誰も見せなかった。

「お嬢様はどういうつもりなのでしょう」

いつもとなんら変わらなく見えるキアランの横に並び、小声で聞いてみた。

「…お前の想像している通りだろうよ」

こちらを向くことすらなく、キアランはぼそりと返してきた。

「っ…ですが…っ」

「何？どうしたの？」

思わず大きくなった声に、数歩先を行っていたお嬢様が振り向く。

「なんでもありませんよ、リリス様。お足元にお気をつけて」

そつなく答え、キアランは楽しげに前を行くお嬢様を眺めながらまた小声で言った。

「……優先順位の問題なんだ。あの方に仕えるつもりなら、心しておくことだな」

蓑虫状態の少年を担いで、一行は林の奥にある大きな池に辿りつい

た。

到着するとお嬢様は下男に向かって、目隠しを外してあげて、と言った。

下男は少年を地面に降ろし、言われた通りに少年の目隠しだけ外す。いきなり明るくなった視界に顔を顰めつつ、少年はせわしなく周りの状況を見渡した。

そんな少年の前に屈んで、お嬢様は楽しそうに話しかけた。

「あなたはこれまでに、どれだけの人を傷つけたのかしら?」

「…」

「言ったわよね?悪い子には、お仕置きが待ってるのよ?」

「…」

喋ろうにも口を塞がれている少年は、ギラギラとした目で威嚇するようにお嬢様を見上げている。そんな視線もまるで気付かないように、お嬢様は楽しそうに続ける。

「お仕置きが済んだら、あなたは自由よ。行きたいところに連れて行ってあげるわ。どこか行きたいところがあればそこに、あの孤児院に戻りたいのなら戻してあげる。あ、あなたのお友達のところでもいいわよ?」

にっこり、という形容がふさわしい笑顔を向ける。

それに反比例するかのように、少年は見る見る青ざめ、ガタガタ震えだした。

「少しは反省する気になったかしら?」

脂汗を浮かべてカクカクとうなずく少年に、お嬢様は天使の微笑みを浮かべた。
そして、下男に目で合図をする。心得た下男は少年と一緒に担いできたロープを少年の腰に括りつけ、さっきと同じように少年を担ぎ上げた。
声にならない唸り声を上げて少年は暴れるが、何しろ身動きが取れないので為す術もなく、池に向かって運ばれていく。

「大丈夫、たった3分よ」

地獄に一歩一歩近づいていく少年に、お嬢様は明るく声をかける。

「3分経ったら、引き上げてあげるわ」

がんばってね。自業自得よ。

その小さいつぶやきは、林の中に突如上がった大きな水音にかき消

された。

まさか五体満足で少年が3分後を迎えられるとは思わなかったが。

激しい水音が辺りに響く。それに混じる、硬いものを砕く音。

直視出来ず、目を逸らして吐き気を抑えるのがやっとだった。

3分後。

赤黒いマーブル模様を描く水面には、指一本、浮かんでこなかった。

―言うことを聞かない悪い子は、頭からバリバリ食べられてしまうのよ？

愛する肉食ワニたちの食事風景を見届けた貴婦人がくるりとこちらを振り返る。
その天使と讃えられる美貌に歓喜を乗せて、ガルトの美しい女主人はこう言った。

「孤児院に手をつけて正解だったわ」

公爵位継承式の、３ヶ月前のこと。

The order of priority（後書き）

このサイトをご利用の地震の被害に遭われた皆様に、深く、深くお見舞い申し上げます。

雪白はひとまず元気でやっております。
関東在住の私も11日には震度6を体験しましたが、有難いことに身内や周りにさしたる被害も無く、またこうしてお話の続きを更新できました。

この不思議の国の住人たちが、ほんの少しでも皆様の気休めになれば幸いです。今後は少し時間が持てそうなので、更新速度も上げていきたいと思います。

クロンダイクはひとまずこれでひと段落です。本当は3話くらいで収めようと思ってたのに思いがけず長くなってしまいました。。。
このリリス様編に関しては「目指せ！グリム童話」でしたが、自分の文才の無さに改めてぐったりです。。。。
シリーズにして切り離そうかとも思ったんですが、ひとまず、この状態で行きます。
行き当たりばったりで申し訳ない。。。。orz

次はアゼルやクレスたちのお話に戻ります。

Ｃａｓｔｓ　ｏｆ　Ａｂｓｔｒａｃｔ　Ｗｏｒｌｄ（前書き）

連載が長期になるにつれて作者が混乱してきたので（爆）登場人物をとりあえず羅列してみました。↑ヲイ
レイシーの詳細などもこれから整理していこうかなと。

２０１１年３月２５日現在

クロンダイク終了までの登場人物を記載してあります。
ここまで読んでない方は、順番に読んでからこれを読んでいただけるとよろしいかと。
まぁ、知らないほうが幸せなこともあるんですよ、あはは。

これからも増えるたびにここに書き足していこうと思います。

……何か、用かね？

なんじゃ、おぬし。

見ない顔だな。

国営図書館の迷宮に迷いなすったか。

なに、この国のことがよくわからんだと？

わからんのに、ここまでどうやって来なすった。

――――――。

……まぁよい。

それにしてもおぬし、変わった色をしておるのぉ。

ひっひっ

どうしたらそんな色になる？

黒髪はたまに見るがのぉ、その黒い目はそこそこ長く生きてきたが、初めてじゃな。

何、わしか？

わしは、

ただの本の虫じゃがの。

ほーおぅ、この国のことが知りたいとな。

……知らない方が、幸せなこともあるらしいがね。

そうだ、おぬし、

どうしてシルクハットのブリムの上には頭蓋骨が載っているのか、知っているかね？

@　帽子屋Ｈａｔｓ

Ａｚｅｌ　アゼル

レイズの妹。ゆるくウェーブのかかった銀髪。瞳は青みの強い紫。７歳の時、兄レイズと共に帽子屋に奉公に上がる。朝が弱い。口数が少なく表情が表に出にくい。クレスが横にいても黙々と仕事や勉

強をしている。宝物は大事に仕舞っておきたいタイプ。
外に出るとケンカばかりしている兄と、おそらく一方的にやられているであろうケンカ相手を常に心配している。

Ｌａｚｅ　レイズ

アゼルの一つ年上の兄。ゆるくウェーブのかかった紅い髪。瞳は青みの強い紫。重度のシスコンで、アゼルに近付く男を悉く排除しようとする。アゼルに対しては優しい兄だが、妹に悪い虫がつかないように、影に日向に目を光らせている…多分。クレスを目の敵にしている。

Ｌｅｏｎａｒｄ　レオナルド『Ｔｈｅ　Ｈａｔｔｅｒ』

王室御用達の免状を頂くＨａｔｓの現オーナー。現『役者』の一人。３年ほど前にアゼルとレイズを引き取った。アゼルとレイズの憧れの的。実はいろいろな意味ですごい人物なのだが、普段の本人は至ってのほほんとした普通のおじいちゃん。足が悪く、杖を使っている。

Ｍａｒｉａｎ　マリアン

アゼル、レイズの母的存在。帽子屋の家事担当責任者。ダークチェリーケーキは絶品。
昔は某貴族の館でメイドをしていた。とある有名なメイドさんがモデルだったりする。

Ｗａｌｔｅｒ　ウォルター

現在Ｈａｔｓの主人である、レオナルドの息子。サーシャの父。

妻はサーシャを出産後、死亡。

Ｓａｓｈａ　サーシャ

ウォルターの一人娘。ミーハーで、かなり口が達者。アゼルとレイズとクレスの三角関係（？）の行方が気になって仕方がない様子。主人公に押されて本編では影が薄いが、彼女こそがＨａｔｓの看板娘。オレンジの巻き毛にライムグリーンの瞳。男爵家の嫡男と交際中。

Ｊｅｍ　ジェム

帽子屋の住み込み職人。アゼルたちには銃の扱い方や、薬品の扱い方などを教えている。無口で仕事に厳しい。
がっしりした体格に刈り込んだ焦げ茶の髪に赤茶の細い瞳といった風貌も相まって、帽子職人と言うよりは大工か何か肉体労働をしているガテン系な風貌。ちょっと不機嫌な顔をして立っていれば、かなりの威圧感を醸し出せる。だがその手から生み出される帽子は繊細で上品。人は見た目に寄らない。
アゼルたちの親と知り合い…だったらしい。

＠　伯爵家

Ｃｒｅｓｃｅｎｔ　クレセント　『Ｔｈｅ　Ｍａｒｃｈ　Ｈａｒｅ』

茶色の混じったグレーの髪。瞳は濃いグレー。やや近視で、本を読むときはメガネ。耳と鼻は人の何倍も利く。脚力はウサギ並み。伯爵家の三男。３歳のときに『三月ウサギ』のタトゥーが出る。アゼルに一目惚れして以来、レイズの妨害もものともせず猛アタック中、というかストーカーばりに帽子屋に入り浸っている。パーティ会場でダスクに会って親しく？なる。

Ｌａｔｉｋａ　ラティカ

黒金色の髪、藍色の切れ長の瞳。女性にしては長身で肌は浅黒い。医術の心得がある。
クレスの家の用心棒兼、３兄弟の格闘技の先生。

Ｍａｄａｍ　Ｇｉｎａ　マダム・ジーナ

クレスの家庭教師。いつも講義を聴かないクレスに手を焼いている。なんとなくイメージはロッテンマイヤーさん。

Ｃｏｕｎｔｅｓｓ　伯爵夫人

クレスの母親。クレスの髪と瞳の色は母親譲り。誕生日に子供も交えての夜会を開く。

Ｃｌａｕｄｉａ　クローディア

クレスの従姉妹。クレス曰く、鬱陶しいらしい。

@　公爵家

Ｄｕｓｋ　ダスク／Ｄａｗｎ　ドーン　『Ｔｈｅ　Ｄｏｒｍｏｕｓｅ』

紅茶色のロングヘア、金色の瞳。女顔で、体格も一見すると女みたいに線が細い。いつも寝巻きのようなだぼだぼの服を着ている。ストリートチルドレンとして占いで先読みを生業にしていたが、不良を伸しているところに女公爵が通りかかり、拾われ養子になる。

Ｌｉｌｌｉｔｈ　リリス

現女公爵。独身。栗色の髪、瞳はエメラルド。中性的な魅力を持つ絶世の美人。無類の爬虫類愛好者。
普段は本邸ではなく、ダイヤ地区のはずれにある別邸にて自分と養子、料理人、執事、数人の召使と共に暮らしている。ストリートチルドレンらを拾ってきては自分の運営する孤児院で面倒をみている。

Ｃｉａｒａｎ　キアラン

公爵家の古参の執事。リリスが心を開ける数少ない存在で一番の腹心。

Ｈｅｌｅｎａ　ヘレイナ

公爵家別邸の専属料理人。ナイフ投げが得意。

Ｐｈｉｌｅｎｅ　フィリーネ

公爵家の侍女長、リリスの乳母で教育係だった。

Ｄｕｋｅ　公爵

先代公爵。リリスの父。妻はリリスが８歳の時他界。リリスの美貌は妖精と謳われた母親譲り。

Ｇａｌｔ　ガルト

公爵家に仕える若い従者。深緑の髪に薄茶色の瞳。有能。時折キアランの代理に指名される。

＠　城下町

Ｄｕｌｃｉｅ　ダルシー

柳色の髪と蒲公英のような黄色の瞳。ダンサー。姉御肌のしっかり者。

Ｅｔｔａ　エッタ

紅紫色のまっすぐな髪と茶褐色の瞳。ダンサー。ダルシーと同郷。少し心配性の気が強く、ダスクの先読みの常連。

Ｔｈｅ　Ｍａｓｔｅｒ　ｏｆ　Ｓｔｒａｉｇｈｔ　Ｆｌｕｓｈ　ストレートフラッシュの主人

スペード地区にあるダスクの行きつけの店、ストレートフラッシュのマスター。

@　国立図書館

Ｔｈｅ　ｗｉｓｅ　Ｃｈｒｙｓａｌｉｓ　クリサリス　『Ｔｈｅ　Ｃａｔｅｒｐｉｌｌａｒ』

国立図書館に住み着く本の虫。本名、年齢不詳。国一番の知識人で、哲学者だが、なぞかけに答えないと質問に答えてくれないらしい。見た目よれよれのおじいちゃん。だが決して好々爺ではない。

Ｃａｓｔｓ　ｏｆ　Ａｂｓｔｒａｃｔ　Ｗｏｒｌｄ（後書き）

こんな話の途中でいきなり登場人物紹介いれるなよ。

と一番に突っ込んだのは他でもない作者自身です。

Exotic blossoms called SAKURA（前書き）

桜開花記念。

いつもより短めです。

Exotic blossoms called SAKURA

ある早春の午後、女公爵邸にて。

「お待たせー。……わ、リリス様、どうしたの？これ」

珍しい花が届いたから一緒にお茶にしましょう。
そう言ってお茶の席に呼び出した養い子は、リリスの私室のドアを開けるなり金色の目を丸くして声を上げる。

その視線の先には、薄いピンク色の花を大量に付けた大振りの木の枝が何本も、この屋敷で一番大きな花瓶に挿してあった。

「侯爵様が下さったの。なんでも、ものすごく遠い国から取り寄せたとか」

その国のことは、リリスも今まで聞いたことが無かった。

「サクラ、という名前だそうよ」

リリスも最初見たときは驚いた。茶色い枝の先の、新緑の葉と同じところに小さなピンク色の花が直に付いている。それも一つや二つではなく、どっさりと。

‘花’と言えば色を問わず薔薇のことを指すレイシーでは、それ以外の花はあまり重用されない。好まれないというわけではないが、

どちらかと言うとメインの薔薇の引き立て役として用いられることが多かった。こんな風に薔薇以外の花だけが花瓶に活けられるなど、滅多に無いことだ。

初めて見る花に興味津々といった体で花瓶の傍に置かれたチェストの上に寝そべり、枝の一振りを摘んで目の前に引き寄せた少年に声をかける。

「ドーン、お茶は？」
「飲むー」

そう返事はするものの、少年は一向に花の傍を離れる気配が無い。

「温室で育てられないの？これ」
「私もそう思ったんだけれど、その国とここではだいぶ気候が違うようだから、難しいでしょうね」
「ふぅん、残念だねー」

花を至近距離で観察しつつ、最後はいつも通りのどうでも良さそうな声音で残念がった。

「ねぇ、お茶とって」
「こちらでお飲みなさいな」

チェストの上から侍女に声をかける少年に、リリスは珍しく母親らしいことを言った。
ドーンはちらりとこちらを見るも、またすぐ視線をサクラに戻す。

「ここでいいよ、チャーリーがいるし」

目をやると、サクラと反対側のもう一脚のソファにはいつの間にかエリマキオオトカゲのチャーリーがちゃっかりと居座っていた。

「…そうね」

うん、と空返事はしつつもやはり花から目を離さない少年とサクラを眺めつつ、膝に抱いたイグアナを撫でながらリリスもしばらく無言でお茶を飲む。

「リリス様って、ピンク色のドレス持ってる？」

飽きずにサクラを眺めていたドーンが、不意に口を開く。
リリスはカップをソーサーに戻して、自分のワードローブを思い返した。

「…いいえ」

普段は比較的濃い色目ばかりを選ぶリリスのワードローブの中には、薄いピンク色は無かったはずだ。
今日来ている家着用のドレスも赤紫色だった。

「じゃぁ、今度ドレスを作るときはピンクにしなよぉ」

こんな感じの薄いピンクで。ひらひらのやつー。

華奢な花びらをつつきながら、ドーンは楽しそうに言った。

「私に似合うかしら」

ピンクなんて、まだ母が生きていた頃に着せられたきりだ。

「似合うよ」

そう言いきると、少年はむくっと起き上がってイグアナを膝に抱いた養母の座るソファの背に逆向きに腰掛ける。

「ピンクのドレスに、茶色の髪に、緑の瞳。こんなに綺麗じゃない」

手折ったサクラの小枝を栗色の髪にそっと挿した。

―ボクは、嘘は吐かないよ?

金色の瞳が楽しげに光った。

女公爵がとある夜会にサクラ色のシフォンドレスを着て現れ、その場にいた全員の感嘆の視線を攫ったのは、その少し後のこと。

I wanna go shopping with U 1（前書き）

新章開始です。
帽子屋に戻ります。
さてはて、どうなることやら。

I wanna go shopping with U 1

「ねぇマリアン、今度の休みの日にアゼル一日借りていい？」

ある日、帽子屋の台所でのこと。

いつものようにアゼルの銀髪の先を弄りながら、アゼル本人ではなく横にいたマリアンに確認を取った。レンタルを申し出られた本人のマグを持っていた両手が止まって、不思議そうにオレの方を見る。

ちょうどお昼時だったこともあって、テーブルには他の使用人たちも何人か顔を揃えていた。さして広くもないテーブルでベーコンとキャベツのスープにパンを浸して食べている。

「はぁ？ダメに決まってんだろ」

ふざけんな、と手に持っていたフォークをそのままクレスに向けてレイズが睨む。

「レイズ、お止め」

マリアンがすかさず釘を刺す。

「借りてどうするの？」

興味津々にサーシャが聞いてきた。

「ちょっと買い物に付き合ってもらいたいんだ」

「へぇ？何買いに行くの？あたしも一緒に付いてってあげよっか」

とてつもなく面白そうに、サーシャが立候補してくれたが。
一瞬目を合わせると、目は口ほどにものを言うとはよく言ったもので。
…こいつ、わかっててワザと言ってるな。

「知り合いの女の子に誕生日プレゼントを用意しないといけなくて。でも」

何がいいのかわかんないからさ、と困った素振りで肩を竦める。ちなみにただの口実なんだが。
サーシャがわぉっ、と声を上げて目を丸くする。他の面子もちょっと意外そうな視線を向けてきた。
…何なんだ？

「クレス、それならあたしじゃなくて、サーシャに見立ててもらった方が」

援護射撃と思いきや、がら空きだった背後にざっくりと矢を射してくれたのはそれまで黙っていたアゼルだった。レイズが我が意を得たり、と言った風でうんうん、と頷く。
思わずぎょっとして、振り返る。テーブルの向かいでサーシャがそれを見て盛大に笑い転げた。他の従業員たちもクスクス笑ったり、苦笑してちらと同情の視線を寄越したりする。
大人たちにはオレがアゼルと二人で出かけたいことなんてお見通しなんだろう。帽子屋の中ではサーシャは面白がってちょっかいを出してくるものの、他は静観を決め込んでいるといったところで。今のところあからさまにオレの邪魔をしてくるのはこの紅い髪の兄貴だけだ。
それが最終的に最大で最凶の障害だったりするんだが。

そんな周りの反応を見て、一人だけわかってないアゼルは不思議そうな顔をする。

「え、ほら、こないだ話してたやつだよ、アゼルと同い年の女の子でって」

「…あぁ、…そう言えば言ってたね、そんなこと」

慌ててこの間話していた話題を繰り返す。

オレの心拍数を一気に引き上げといてそんなことは露ほども知らない本人は、ほんの少し首をかしげて、ようやく思い出したらしい。

「あたしでいいなら、他に予定もないけど…」

「おい、サーシャと行けばいいだろう、アゼルは忙しいんだ」

クレスがいることでデフォルトになっていた不機嫌が3倍増された体で、レイズが横から口を挟んだ。

「知ってるよ、だからこうしてマリアンに話をしてるんじゃないか」

そう、休みと言っても、帽子屋の使用人であるアゼルが丸一日仕事が無い日なんて滅多に無い。何かしら当番で台所仕事やら何やらと分担があって、こういう小さい家の使用人にとっては本当の意味で一日休みとはすごく贅沢なことなのだと以前アゼル本人に聞かされた。更にアゼルは下っ端だから、勉強の時間以外には急に何か用事を言いつけられること多く、休みが休みで無くなるようなことも少なくないとか。

現に休みだと聞いてアゼルを訊ねても、ずれ込んだ勉強時間に充てているか、何かしら急に増えた仕事をしていることが多い。だからクレスは帽子屋に来ると、本を読んでいるアゼルと一緒に本を見た

り、せっせと手を動かしているアゼルの仕事を眺めたりするのが常となっていた。それはそれでクレスにとっては楽しい時間なのだが、やはりアゼルの側からしたら忙しないだろう。
加えてこの面倒な赤毛が乱入してきた日には、全然話も出来ずに終わってしまう。

そんな日がずっと続いて。

ゆっくりアゼルと話をしたい。何かをしながら、ではなくちゃんと自分に意識を向けていて欲しい。
何度かアゼルを帽子屋の外に連れ出したことはあったけれど、ここ最近特に忙しそうな帽子屋の様子を見て、中々誘えないでいた。

でも、どうしても話さないといけないことが出来たから。

「休みだからって、いないならいないと予めわかってた方がいいだろう？」

そうマリアンに同意を求めると、マリアンもそりゃあそうだわね、とうなずいてくれた。

「じゃぁアゼル、夕飯の代わりに朝食の当番やってちょうだい。そしたら夕飯までに帰ってくればいいわ」

マリアンに許可を求めたのは、アゼルを一日外に連れ出すことで一番のしわ寄せが来るのがマリアンだと思ったから。万が一、休みとはいえほぼ一日出かけたことに対して、後でアゼルが怒られたりしたら元も子もない。とりあえず、第一関門クリアだ。

「ダメだって言ってるだろ！？」

「どうしてよ？」

頭ごなしにダメと言われ、いつものようにアゼルが過保護な兄に反論する。

「どうしてってお前っ…このウサギと二人でなんて危険過ぎるだろうがっ」

「何が危ないのよ？」

顔を真っ赤にしてわぁわぁと危険な理由（オレ自身が危険人物だという主張はもちろんアゼルに相手にされず、それ以外も誰と出かけても大差ないような、むしろオレが付いていた方が安心だろうというようなものばかり）をあげつらう兄と、聞き流して相手にしない妹。

恒例の兄妹ゲンカが始まったが、帽子屋の面々はいつものことだと言わんばかりに仲裁にも入らずそのまま食事を続けていた。

「アゼル、その日はオレと」

「その日お前は俺と資材の買出しだろうが」

理由が何であれ、目の中に入れても痛くない妹が危険人物と二人で出かけることをなんとしても阻止したいらしい。急に思いついたようにアゼルに詰め寄ったレイズに、向こうでパンを齧っていたジェムが横槍を入れる。

ちっと盛大に舌打ちをして不貞腐れたレイズがガタッと椅子を蹴倒さん勢いで立ち上がった。

レイズ、とその行儀の悪さを見かねてまたマリアンが注意する。

「ご馳走様」

そんな声も無視してガシャン、と乱暴に食器を流し台に片すとこれまた乱暴にドアを閉めて台所を出て行った。
まったく、とマリアンが呆れてため息を吐いた。
アゼルも肩を竦めてごめんね、と申し訳なさそうに見上げてくる。
見た目だけ難関の、第二関門クリア。

「ま、とりあえずレイズの言ってた‘危険’からはばっちり守ってあげるからさ。それに」

クスクス笑って頬杖をつきながら柔らかい銀髪を撫でる。

「サーシャの気持ちはありがたいけど君と買い物なんて、」

…物凄く疲れるのが目に見えてる上に。

「君のボーイフレンドに申し訳ないから、遠慮しておくよ」

知られたら、思いっきり面倒くさいじゃないか。て言うか付いてくるなよ。

予想外に立ちはだかった最終関門ににっこり笑いながら目線で圧力をかける。だがその笑顔とは裏腹な視線を真っ向から受け、サーシャはライムグリーンの瞳を可笑しそうにくるくる回した。
そうでなくても男爵家のサーシャの彼氏は知っているが、面倒事は起こしたくなかった。向こうもサーシャに聞いて、自分が帽子屋に出入りしていることはとうに知っているのだろうが、今のところ家の大人たちの耳には入っていないようだから（知られたら即呼び出しだろう）サーシャが止めてくれているか、あえて黙ってくれているんだろう。ならば、不興は買いたくない。

まだ、家族には知られたくないんだ。

「そぉ？ヤキモチ焼くかなぁ？」

「うーん、まぁ他の男と二人で出かけること自体面白くはないでしょうねぇ」

「二人じゃないわよ、三人よ」

「なんか本末転倒になってきてますねぇ」

「プレゼント一緒に選んであげるって言ってるだけじゃない」

「お嬢さん、自分が１１歳のときに何が欲しかったかなんて覚えてるのかい？」

「えー、お洋服とか、靴とか？」

「それは今のお嬢さんが欲しいものでしょうが」

粗方食事が終わった帽子屋の面々のそんな勝手なやり取りを聞きながら、その中に引っかかる単語があった。

「……１１歳？」

言ったジェムとアゼルを順番に見る。アゼルがこくん、と頷いた。

「あたし、こないだ誕生日だったから」

１１歳になったの。なんでもないことのようにマグの中身を飲み干して淡々と言う。

衝撃の事実に、思わず固まった。

台所にいた全員の手が止まり、視線がオレに集中する。

いきなり黙りこくった周囲を見渡して、どうかした？とでも言うよ

うにアゼルが首を傾げる。

「…」
「……」
「……」

「……もしかして、知らないでアゼル誘ってたの？」

唖然としたサーシャの顔に、信じられない、と極太字で書いてあった。

I wanna go shopping with U 1（後書き）

うわー、やっちゃったよ、クレスってば…orz

I wanna go shopping with U 2

そしてその数日後。街の商店が開くより大分早い時間。
クレスはサーシャと帽子屋の台所でお茶を飲んでいた。

先日のここでの出来事を思い出してまた大笑いしているサーシャの横で、張り切って予定よりだいぶ早く来過ぎたクレスはアゼルが朝食の後片付けをしてから出かける支度が終わるのを待っている。

「だぁってぇ！あの時のクレスの顔ったら！あはははは…あー、お腹痛い」
「いい加減にしてよ、サーシャ」
「みんなアゼルの誕生日に託けて一日デートに誘ってるもんだと思ってたのに、最後にあれなんだもん！！可笑しくって！！」

しかもアゼルわかってないし！！

目に涙まで浮かべて腹を抱えているサーシャをじろりと睨み、少なからず好意を寄せている女の子に対しての有るまじき失態をこれでもかと笑われているクレスはどこまでも仏頂面だった。
あれからアゼルはみんなが唖然とした理由が良くわからなかったらしく、私の誕生日がどうかした？と不思議そうに聞いていた。そんな二人を見て台所では大爆笑が起こったのだが、アゼルの問いにどうにか自分を取り戻したクレスはアゼルの誕生日プレゼントも探そうね、とぎこちなく笑って場を取り繕ったのだった。当の本人にはその場で目を丸くして、プレゼントなんていらないよ、と返されてしまい、またみんなに苦笑されてしまったのだが。

「あら、お友達のプレゼントって言うのは、ホントだったの？」
「……嘘」

すごく面白くなさそうに、クレスはプイッと横を向いた。
あっははははははっ、とまた苦しそうに笑い出すサーシャ。

「そもそもさぁ、なんであんな皆がいるところで誘ったわけ？いつもみたいに勢いで連れ出しちゃえばいいのにー」
「ちょっと作戦を変えてみようと思ってさ。大人に揃って許可をもらえば、あの兄貴も少しはぎゃあぎゃあ騒ぎづらくなるじゃないかと踏んで」
「んー、あの子は周りがああだこうだ言ってもそうそう変わらないと思うけどねぇ。ここに来たときからずっとああだし…」
「でも最近はあれでもだいぶマシにはなってきたんだろう？」
「あなたとの約束はどうにか守ってるらしいけどねぇ、いつまで保つことやら」

みんな結構感心してるのよぉ、そう言って、ようやく笑いを引っ込めた帽子屋の孫娘はポットからお茶を継ぎ足した。

いつもばたばたとレイズから逃げるようにアゼルを連れ出し、遅くなり過ぎない時間に裏の木戸まで送り届ける。アゼルは何も言わないが、その夜毎ケンカになっているのは想像に難くない。
いつまでもそんなことをしていても環境は全然進展はしないし、やっぱり堂々と迎えに行って、送り届けたかったから。自分と会うことが彼女の負担になるのは心苦しい。かと言って会うのを控えるという選択肢は存在しないのだが。もうクレスにとってここに来ることは生活の一部になっていた。
それより差し迫っての問題は。

「本当に一日中付いてくるつもりなのか？」
「まっさかぁ。…あたしも今日はデートだもん」
笑い過ぎた喉を潤しつつ後の方は小声で囁き、ニッと笑ってウィンクを寄越す。
「でも家は一緒に出るわ。とりあえず穏便に出発出来るでしょうよ」
後は別行動ね。
そう言ってクスッとサーシャが笑った時、廊下に続くドアが開く。
「お待たせしてごめんなさい」
それまでの不機嫌が一気に引っ込んでそちらに満面の笑みを向ける。
準備が出来たアゼルが台所に下りてきた。その変わり身の早さに、サーシャが呆れたと言いたげな声を上げるがもちろんスルーだ。
急いだのだろう、廊下からパタパタと可愛い足音をさせてやってきたアゼルは、やや色の褪せたオレンジ色のダッフルコートと、白黒のチェックのマフラー、下は黒の厚手のスカートを履いて、いつもの黒い靴。長い銀髪は頭のてっぺんで大きなお団子になっていた。
「ううん、オレが早く来過ぎただけだからさ。こっちこそごめんね」
「あら、懐かしいの着てるじゃない」
「うん、このコートがね、一番暖かいの」
サーシャが懐かしいと言ったのはアゼルが着ている少し草臥れたコートで、どうやらサーシャのお下がりらしかった。
確かに、このオレンジはサーシャの色だろうな。

小さな黒のポシェットを斜めにかけて、トコトコとクレスの前に寄ってくる。

「いいプレゼントが見つかるといいね。行こう?」

その台詞にまたサーシャの発作が再発した。

大笑いするサーシャにどうしたの?と不思議そうに聞くアゼルに向かって、出来る限り優雅に右手を差し出す。

「忙しいお嬢さんと貴重な休日を過ごせること、身に余る光栄です」

「…」

芝居がかった台詞と仕草に大きな青紫の双眸を数回瞬かせたあと、寒さと急いでたのとで元々赤みが差していた頬を更に染めて、恥ずかしそうに俯きながら差し出された手を取った。

あたしには無いのー?ひどーい、と横でわざとらしく拗ねるサーシャを置いてアゼルの手を引き、勝手口の前まで導く。

「とんでもない」

ドアの前でアゼルを待たせ、さっきの仏頂面が嘘のように綺麗な笑顔を貼り付けてサーシャがコートを着るのを手伝う。着終わると同じように右手を差し出した。

「単純に優先順位の問題だよ」

「まぁ、失礼ね」

完璧な笑顔でさらっと小声で言ってのけると、手を引いて勝手口の

ドアを開ける。サーシャもサーシャで別段気を悪くした風でもなく、そのままエスコートされて外に出た。
サーシャを通したあと、再度アゼルの手をしっかり取って、勝手口のドアをくぐらせる。

それからおそらくクレスが帽子屋に出入りするようになって一番静かに、平和に赤薔薇の木戸から表に出ることが出来た。

……と思ったのも束の間。

出た途端、ぴたりと3人の足が止まる。

「オレも行く」

木戸を出たすぐの所に、紅い髪の少年が仏頂面で腕を組んで立っていた。
クレスは無意識にアゼルを庇うように一歩前に出た。

「レイズ、あんた仕事でしょう？」
「…こいつとアゼルを二人きりにするくらいなら」
「あたしが一緒に行くんじゃ足りないわけ？」

サーシャが心外だと言うように腰に手を当ててため息をつく。

「どうせ途中から別行動するんだろ」

ずばり突かれてサーシャの肩がピクリと動いた。

「たかがプレゼントひとつ選ぶのに夕方までなんてかからないだろう」

お見通しなんだよ、とジロリと雇い主の一人娘を睨む。元々この帽子屋で上下関係が薄いことは知っていたが、改めてアゼルが絡むと怖いもの無しらしい。

「サボってないで働けって。夕食までにはちゃんと帰ってくるからさ」

アゼルを背後に一歩前に出て直接対峙する。

「さっさと用事を済まして帰って来るぞ。ジェムとの買出しはそれから行く」

立ちはだかるクレスには目もくれず、ずんずん近寄ってきて後ろに隠れていた妹の手首を掴んで引っ張った。

ほら、行くぞ、とレイズが踵を返そうとした時。

「レイズ、お前仕事放り出してどこ行く気だ」

木戸からドスの利いた低い声が聞こえた。

そこにいた全員が振り返る。

「ジェムっ」

「ジェム、この子どうにかしてよぉ」

帽子屋のジェムはがっしりした体格に刈り込んだ焦げ茶の髪に赤茶の細い瞳といった風貌も相まって、手先の器用さを要する職人と言うよりは何か肉体労働をしているイメージがする男だ。そんな彼が無表情で仁王立ちしていれば、かなりの威圧感を醸し出せる。

そして今も。

「買出しは午後からって言ってただろ」
「ふざけるな、誰が半休にしていいと言った。買出しの前にも仕事はあるぞ」
「聞いてねえよ、昨日の分はもう終わらせてあるんだからいいだろ」
威圧感ものともせず、食って掛かるレイズ。本当に、こいつは妹が絡むと見境がなくなる。

「ジェム、レイズ連れてっちゃって。せっかくのお出かけが台無しになっちゃうから」
先ほどのレイズの物言いが気に食わなかったのか、サーシャが不機嫌な声を出す。
言われずとも、とジェムは片眉を上げるとスタスタとこちらに歩いてくる。

「仕事をすっぽかすたぁ、覚悟はできてるんだろうなぁ？」
そう言ってレイズの前に立ってじろりと睨みを利かす。さっきから表情は全然変わっていないのに、目だけが怖い。兄の手を振り解いてアゼルがオレの方に身を寄せてきた。
普段はかなり無口で、台所で顔を合わせても挨拶くらいしか交わさないことが多いが、以前アゼルに聞いたら、見た目は怖いし仕事には厳しいけど普段はとっても優しいよ、と言っていた。
…とりあえず、怒らせてはいけないということはよくわかった。

「バカウサギの用事を済ましてくるだけだよ。すぐ戻ってくる」
「それが仕事をサボってまでついて行く程大事な用事か？」

「そうだよ、アゼルがわざわざ付き合うような用事じゃないんだ」
「それはお前が決めることじゃないだろうが」
「おい、アゼルも今日は一日家にいろよ。こないだのビーズ付け終わってないんだろ?」
「…あたしは今日はクレスとサーシャとお出かけするの。邪魔しないで」

アゼルがオレのコートの袖をぎゅっと掴んでくる。その強張った声音に振り向くと、案の定大きな目をきゅっと細めて兄を睨んでいた。ほんの少しだけ震えるその手に手を添えて、

「だそうだ。お兄ちゃん?今日は大人しく仕事しとけよ」

心配するようなことはないからさ。そうジェムにも請け負った。だが本人のはっきりした拒否にもめげず、レイズは猶も言い募る。

「おい、ジェムも何とか言ってくれよ?アゼルに何かあったらどうするんだよ!?」
「アゼルは今日休みだし、坊ちゃんもきちんとアゼルを誘って出かけるんだから、俺が引き止める理由は何も無いな」

レイズはぎりっと歯軋りをするとアゼルの腕を強引に引き寄せた。もう片方の手には、銀色のナイフ。
その煌めきにアゼルが無言で目を見開き、サーシャが横で心底呆れたように大きくため息を吐く。

「…レイズ、お前いい加減にしろよ?」
「っ……とにかく!絶対だめだ、男と二人で出かけるなんて、絶対許さないからなっ」

そう啖呵を切ってアゼルの手を引き、再度踵を返そうとした、その時。
いつの間に動いたのか、背後に立ったジェムの手刀がレイズの首に落ちる。ナイフが乾いた音を立てて石畳に転がった。

「坊ちゃん、妹のことに関してこいつを下手に弄るのはやめとけ。ヤブヘビだから」

ジェムはやはり出てきた時と変わらない無表情でそう言うと、ぐったりしたレイズを小脇に抱えて木戸の向こうに消えた。

I wanna go shopping with U 2（後書き）

どうしてこう、なかなか出かけられないのは何でなんでしょう？ｏｒｚ

一番書きたいシーンになかなかたどり着きません。。。

仕事をサボるのはよくないですよー、レイズくん。

大きな余震が続いてます、皆さんお気をつけて。

I wanna go shopping with U 3－1（前書き）

漸く出かけられました。
アゼル視点です。

I wanna go shopping with U 3－1

「アゼルだったら、どっちがいい？」

目の前に差し出された二種類の栞を眺め、アゼルはしばし悩む。

クレスが右手に持っているのは、長方形の銀板に薔薇の透かし模様が施してあり、ピンクの紐がついているもの。

左手にあるのは銀のかんざしのような形で、猫の尻尾のように曲がっている先端に揺れる薔薇と蝶のモチーフがついているもの。

どちらも細工が繊細で、見ているだけでうっとりする。アゼルには到底買えない高級品だった。

「あたしだったら…」

どちらをもらってもすごく嬉しいけど。でもクレスが欲しいのはそんな答えじゃないのはわかっている。何しろ、先程からこの店の中であれこれ一時間以上悩んで、漸くこの二つに絞り込んだのだ。いい加減お店の人の視線が痛い。

サーシャはずいぶん前に、ボーイフレンドと約束あると言って店を出て行ってしまった。去り際、クレスに向かってがんばってねー、と手を振っていたが、サーシャはクレスの優柔不断ぶりを知っていたのだろうか。

顔も知らない女の子の誕生日プレゼントを自分が選ぶのは申し訳ない気がしたが、これはもう自分が決めてあげた方がいいんだろう、とアゼルは腹を括った。

「この、かんざしみたいなのが好き」

そう言って、揺れる薔薇をちょん、とつついた。

「じゃあこれにしよう」

そう言って、なぜか最後の最後でアゼルが選ばなかった透かし彫りの方を取り上げた。

「そっちにするの？」

「うん」

どちらも素敵だとは思うものの、それならあたしが選んだ意味ってあったのかな。

釈然としないが、いずれにせよ決まったらしい、やっとクレスはレジに向かった。

その後姿を見送り、ほう、と息を吐いて、改めて店内を見回す。外のウィンドウは覗いたことはあったが入るのは初めてだった店内には、銀細工の小間物が整然と並べられていた。アクセサリーはもちろん、ちょっとした置物、筆記具や銀食器やカトラリー、中には何に使うのかアゼルには見当も付かないものもたくさん置いてある。だが共通して言えることは、どれも丁寧に細工がしてあって、職人の腕の良さが窺えるということ。値が張るのは当然だ。

それらを眺めながら、我知らず口角が少し上がる。

――――結構、優柔不断なんだなぁ、クレスって。

普段は何でもサクサク決めて、思い立ったら即行動、といった風な

のだが。読書が好きだというその女の子に何をプレゼントするかを決めるまでも、帽子屋を出てから商店街の中心に来るまでサーシャと3人でずっと頭を捻っていた。サーシャがしきりとアゼルに何が欲しいかと聞いてきたが、同い年だからと言って貴族のお嬢さんとあたしの欲しいものはかなり違う気がするし…、と言うとそれは答えになってない、と口を尖らせて文句を言われた。

そう言われても、現に誕生日のプレゼントにこんな綺麗な銀細工なんて、想像もつかない。

普段のクレスの様子を見ていると時々忘れそうになるけれど、あたしとは住む世界が違う人なんだと実感する。

「ごめんね、長くかかっちゃって」

いつの間にかクレスが後ろに立っていた。

待ちくたびれて嫌になることはない。帽子屋のお客さんでも何時間も悩みに悩みまくる人はいる。

「ううん、終わった？」

「もうちょっと。ラッピングしてもらってる」

「そう。よかったね、いいのがあって」

「アゼルが選んでくれたからね」

「最後は違うのにしたじゃない」

「その過程までがさ。オレ一人だったら日が暮れてたよ」

そう言って肩を竦めるクレスに、笑っちゃいけないと思いつつ、ふふ、と笑ってしまった。クレスの表情が一瞬固まったかと思うと、ふと顔を背けた。

「何か気になるのある？」

アゼルが眺めていたケースを覗き込む。ケースの中にはさまざまな色石が嵌まった髪留めたちが並んでいた。

「髪留めか。アゼル持ってないの？」

「ううん、持ってるよ。お兄ちゃんが買ってくれたやつ」

こんな感じでピンクのお花がついてるの、とその中でもピンクの色石が嵌まったものを指差した。

「ふぅん、今日はつけてないの？」

「うん、……いつもは大事だから、仕舞ってあるの。見せたこと無かったっけ」

「初めて聞いた。今度着けて見せてよ」

どうやらクレスが来た日にあの髪留めを着けていたことはなかったらしい。

うん、いいよ、と頷いたところで、背後からお待たせしましたと声がかかる。

二人はありがとう、と包みを受け取って店を後にした。

「クレス、これからの予定は？」

店から出た途端に息が白くなり、外していたマフラーをぐるぐる巻きながらこれからどうするのかを聞く。一応予め聞いていた今日の目的は達成した。だがクレスは夕方まで、とも言っていたので、ま

だ何かやることがあるのかも知れない。

「そうだね…、どうしようか。アゼルはまだお腹は空かない？」

「うん…、空いたと言えば、空いたかな」

ランチには少し早いが通りのカフェや食堂ではもうランチメニューの看板が出ている。

「じゃあ、混んでくる前にどっか入っちゃおっか」

行こう、とクレスはあたしの手を引いて歩き出した。

今日は一日ずっと手を繋ぎっぱなしだ。確かに表通りのだから人は多いけれど。

……そんなに迷子になりそうかな、あたし。

それに、どことなく。

うろうろと店先のメニューを眺めつつ、何か食べたいのある？とアゼルを振り返って聞いてくる。でも、なんか。

「なんか、暖かいのがいいな。シチューとか」

「うーん、じゃあさっきのところにしようか」

またふいっと前を向いて半歩前を歩き出した。

…なんだろ、なんか変な感じがする。

手を引かれながら、アゼルは今日のクレスの違和感の原因を悶々と考えていた。

◆

実は、あたしはこれまであまり外食をしたことがない。

帽子屋で仕事をしていればご飯は食べれるし、お金だって節約したい。

…何より、一緒に出かける友達が全然いない。

これまではクレスに誘われて出かけてもそのほとんどが行き先は伯爵家の森で、帽子屋からケーキやお茶のポットを持参したり、クレスが伯爵家の厨房からこっそりもらってきたサンドイッチなどを分けてもらったりしていた。だから、アゼルにとってこうして男の子と二人で店で食事をするのはほぼ初めてに等しい経験だった。

入った食堂は表の看板にシチューの定食が書いてあったところ。他にはパスタだとか、オムレツだとか、ありふれたメニューが並んでいた。

値段も他の店の外看板と比べてもさして高くもなく、普通の町の食堂といった感じ。

「いつ見てもすごい量食べるよね…野菜」

とりあえず決めていたシチューの定食を二人前注文すると、クレスが追加で野菜サラダの超大盛りを注文した。

シチューを食べながら目の前の野菜の山が小気味良く切り崩されて

いく様を眺める。

「ほんとに、いつでもどこでも野菜は必須なんだね」

「んー、やっぱり体が欲してるって言うか。とりあえず、野菜サラダがあれば大盛り」

言いながら豪快に食べる仕草は、だけれどなぜか上品だった。さすがといったところだろう。

正直、かなり意外だった。

クレスは伯爵家のお坊ちゃんだし、こんな大衆食堂なんて馴染みがないんだろうと思っていた。

かと言っていきなりお金持ちが行くようなレストランに連れて行かれても困るのだけれど。

そう言うと、クレスはいたずらっ子の笑顔を見せる。

「時々抜け出してはその辺ウロウロしてるからね」

「そうなの？」

「帽子屋に行くようになってから、結構。最近家にいても、退屈だからさ」

あ、また。

今日、ふとした瞬間にクレスに感じる違和感。

何だろう。どうしたんだろう。

「さて、これからどうしたい？どこか行きたいところとかある？」

ランチ一人前はもちろん、あれだけ大きかった野菜の山を綺麗さっぱり片付けて、あぁお腹いっぱい、そう言って満足そうにお腹をさする伯爵家のお坊ちゃんは、目の前の帽子屋の一使用人ににっこりと笑いかけてくる。

…こういう仕草が、貴族っぽくないんだろうな。なんとなく。だからこの目の前の少年が雲の上の人だという事を時々忘れそうになる。

「クレスはどこか行くところがあるんじゃないの？」

「ううん、オレの買い物はこれで終わり。次はアゼルの番だよ」

あたしの番と言われても。

今日は特に買い物をするつもりもなかったから、お財布の中はここのランチ代を出せば残り僅かだ。

「今日はクレスのお買い物に付き合うだけのつもりだったから…お金もランチ代とちょっとくらいしか持ってきてないよ」

だからクレスの用事が終わってしまえば、もうこれと言って行きたいところもなければ、今日中にしなければいけないこともない。

そう伝えると、クレスはお茶のカップを片手に頬杖を付いて大げさにため息を吐いた。

そして急に不機嫌そうに目を細めて口元を歪める。それまであまり見たことのないその表情に、どき、と心臓が跳ねた。

「何を言ってるのさ」

「？何って」

「オレが女の子に食事代を出させるような男だとでも思ってるの？」

あたし、何か気に障ることを言った？
奢ってもらいたいと言ってるように聞こえたのだろうか。

「そ、そんなつもりで言ったんじゃ…」
「じゃあどんなつもり？」
「…自分の食べた分は、自分で払おうって思っただけで…」
「それは僕が甲斐性無しって言いたい訳？」
「甲斐性無しって、何？」
「…まぁ、いいや。とにかく、ここの支払いはオレね」

最後はやれやれ、と言った風でそう言うとカップを置いて、ウェイターを呼んだ。
甲斐性無しって、何だろう？

「え、でも」
「いいから」

強く言われて口をつぐむ。ぐっと押し黙ったあたしに、ふ、と表情を緩めてにこっと笑いかけた。

「いい？こういう時女の子は、ただ笑顔でご馳走様って言えばいいんだよ」
「……本当に？」

毎回それじゃあ、男の子は大変だろう。そうは思ってもそれを違うと否定できるだけの経験も知識もアゼルは持ち合わせていなかった。
だから、申し訳なさと居た堪れなさを滲ませつつ、ぺこりと頭を下げる。

「ありがとう。ご馳走様です」

「どういたしまして。……笑顔が足りないけど」
「だって…」
「ま、いいや。特に用がないんだったら、その辺ぶらぶらしようよ」
支払いを終えると、灰色の少年は笑顔で立ち上がった。

◆

それからは大通り沿いのショーウィンドーを眺めて、いろいろなお店を見て回った。

自分が着ることなんてないであろう、かわいい服を取り扱っている洋服店。
色とりどりにラッピングされた石鹸がウィンドーに飾ってあるお店。
難しそうな本だけでなく、お洒落な表紙の雑誌がたくさん置いてある本屋。
午前中の店ほど高級ではないが、いろいろなアクセサリーがところ狭しと並んでいる店。
宝石みたいなケーキがキラキラとケースの中から誘惑してくるお菓子屋。

あたしとしてはいつも通り外から眺めるだけで十分だったんだけれど、あたしがウィンドーの前で足を止めるとクレスはあたしの手を引っ張ってずんずんお店の中に入っていってしまう。店によっては場違いに入ってきた子供二人に怪訝な視線を向けられることもあったが、自分一人では入りづらかったお店にも入ることが出来てとても珍しかったし、楽しかった。

食堂を出た後ウィンドーショッピングをしている間も、ずっとあたしの右手はクレスの左手に捕まったままだった。さりげなく解こうとするとぎゅっと力を入れて握り直される。
一人で歩けるから離してと頼んでみたが、眺めるのに夢中になるとはぐれちゃうから、と離してもらえなかった。

「クレスもお兄ちゃんと同じこと言う」

つい、と目を逸らして拗ねた台詞が口からこぼれる。
なんだか子ども扱いされているようで面白くなかった。

「アゼルが迷子になったりしたら、そのお兄ちゃんに殺されるからな」

おどけた口調にちら、と睨みつけるように視線を向けると、口調とは全然違う、優しく細められた灰色の瞳と目が合った。そんなことを言った自分がすごく子供っぽく思えて、気恥ずかしさからアゼルは再度つい、と目を逸らしウィンドーに見入るふりをした。
意識を向けると、クレスの手がなんだか汗ばんでいるのに気がつく。
そこまでして繋いでなくてもいいのに。

午前中から胸につっかえていたもやもやが再燃して、アゼルは内心首を傾げた。

「そろそろ休憩しない？もうすぐお茶の時間だし。」

さっき話してたケーキ屋さんに行こう、そう言う声も、もうずいぶん見慣れたはずの彼の笑顔も、心なしか硬い。

やっぱり、今日のクレスは何かが変。

I wanna go shopping with U 3－1（後書き）

こんな長くなる予定はなかったんですが…この日一日だけであと3話？4話？くらい続きそうです。。。。

I wanna go shopping with U 3－2（前書き）

前話のクレス視点です。

I wanna go shopping with U 3－2

ジェムがレイズを担いで木戸に消えた後、サーシャが重くなった空気を払拭するかのように、さ、行くわよ！と笑顔で声を上げたのを合図にして、ジェムに言われた一言を考えていたクレスもとりあえずそれを頭の奥に押しやり、アゼルの手を取った。

行きすがら、アゼルにプレゼントはどんなものがいいか聞いてみる。アゼルは、同い年だからと言って貴族のお嬢さんとあたしの欲しいものはかなり違うと思うよ、などともっともらしいことを言っていたが、オレは相手が貴族のお嬢さんだなんて一言も言ってないけれど。

最初は今日の予定をこじつける口実でしかなかったが、クレスの中では遅ればせながらアゼルの誕生日プレゼントを買うことが急遽今日の目的になっていた。サーシャも大笑いしながらも、結局アゼルの欲しいものを聞き出すべくあれこれ遠まわしに探りを入れて協力してくれている。

「その子の趣味とか、どんなことが好きとか、わかる？」
「お茶会が好きなんだ。それに勉強熱心で暇ができると本を眺めてるね…大人しい子だよ」
「アクセサリーとかはどう？」
「普段あんまり着けてるところは見たこと無いな」

挙げる特徴はアゼルのそれで。言わなくてもサーシャはわかったらしく面白そうに乗ってくるのだが、アゼルはよもや自分だとは気付かないらしく真剣に考え込んでいた。

お茶会かぁ……本……

反すうしながら少しだけ唇を尖らせて考え込むアゼル。お菓子を作ってる時によくする顔だ。ぱっと見全然変化が無いように見えるが、そんな僅かな表情の変化も最近はわかるようになってきた。

「アゼルは誕生日プレゼントに何が欲しいの？」

「え？」

横からサーシャが直球でアゼルに聞いた。

聞かれたアゼルはどうして自分のことに話を振られたのかわからなかったらしく、ぱちぱちと瞬きをした。

「あたしは…」

「そうだよ。アゼルの誕生日プレゼントも選ぶんだよ？」

「あたしにプレゼントなんていらないよ。それよりクレスのお友達でしょ」

当の本人にはどうでもいいことのようにあっさり話を流されてしまった。アゼルは尖らせた唇に左手の人差し指を当ててまた、んー、と考え出す。

そんなアゼルにサーシャと顔を見合わせる。

「くれるっていうんだから、もらっておけばいいのよぉ」

サーシャはクスクス笑いながらアゼルを肘でつつく。つつかれたアゼルの方は困ったように手をもじもじさせていたが。

「そうだよ、来年のオレの誕生日にもプレゼント頂戴」

「でもあたし、お返しできるようなものも何もないし…」

「そういうことは気にしなくていーのっ」
「アゼルの選んでくれたものならなんでもいいよ」

笑ってそう言ったが、来年のオレの誕生日を思うと、心臓にまた棘がチクッと刺さるのを感じた。
顔に出てしまっただろうか、アゼルが無表情に小首を傾げた。

その後入った店でプレゼントを選んでいる間に、今朝方の言葉通りサーシャは途中で彼氏とデートだと言って去っていった。
がんばってねー、などと意味ありげな言葉を残して行く。
ヒヤッとして横のアゼルを盗み見たが、その一言に対してさしたる違和感は持っていないらしかった。

漸く二人きりになれたのはいいが、肝心のプレゼントがなかなか決まらない。
3店舗目で銀細工の店に来たものの、クレスにはどれがいいのかなんて見当もつかないし、焦りも出てくる。無いだろうが、もしやアゼルに勘付かれないかと思うと必要以上に緊張した。
まぁそもそも表向きの相手が嘘だし、本当の相手は目の前で一緒にショーケースを覗き込んでいる。

女の子にプレゼントを買うなんて、人生初だ。

しかも本人の目の前で、バレないように。

……我ながら初めてにしては結構ハードル高いと思うんだが。自

業自得か。

そんな内心はかなりいっぱいいっぱいなオレの横で、アゼルは相変わらずあまり表情を変えずに店内のケースを眺めては、あまり派手でないデザインの小物をいくつか選んでくれていた。

その中でも目に留まったのが、いくつかの栞。

「栞かぁ。使えるし、いいかも」

「…本が好きだって言ってたから」

そう言ってケースを覗き込むアゼルの横顔をそっと盗み見る。店内が暑いせいか、頬が上気してピンク色に染まっている。

…可愛いなぁ。

うっかり見蕩れそうになったが、頭を現実に戻してアゼルの視線の先を追う。

「これも可愛いね」

「え…」

「すみません、その細長い、薔薇と蝶の付いてるやつも」

先程選んで出してもらった以外にも、アゼルが見入っていた栞もケースから出してもらう。

そしてトレーに並ぶ、5枚の栞。

うち3枚が長方形の銀板に透かし模様を入れたもの、2枚がアゼルが見ていたかんざしのような先に飾りが付いているものだった。

どれがいいだろう？

５枚の中からとりあえず二つに絞り込む。

まずはさっきアゼルが気にしていた一つと、それ以外に他に長方形型の薔薇の透かし模様のものを一つ。

最後に、どっちがいい？とアゼルに二択で聞いてみる。

アゼルはしげしげと二つを見比べて、あたしだったら、と前置きして気に入っていたかんざし型の方を選んでくれた。

◆

アゼルがシチューを食べたいと言ったので、ランチはシチューを出している店に入った。

普段外食はほとんどしないと言い、食堂に入るときょろきょろと珍しげに店内を見渡し、それからメニュー表のスイーツの欄に釘付けになった。その一生懸命な様子が可愛くて思わず噴き出してしまい、それで漸くどうしたのかとメニューから顔を上げた。

「午後のお茶の時間にはおいしいケーキのお店に連れて行ってあげるからさ」

そう言うと、青紫の瞳をキラキラさせて頷いた。

今日は少しずつだけれどアゼルの笑顔をたくさん見られてとても幸

せだ。

アゼルは笑うと、目を細くして口角をきゅっと上げる。
よく見ないとわからないくらい、ほんの少し。それだけで小さな花が咲いたような空気になる。

いつか、満面の笑顔が見られたらいい。

ズキリ、と心臓にまた一本棘が刺さる。

食事もあらかた終わって、支払いを自分ですると言い出したアゼルに内心苦笑する。

外食もほとんどしないと言っていたアゼルは、こういう時は男を立てるということを知らないらしかった。
アゼルの性格だと、単純に申し訳ないとか、そんなことを思っているんだろう。
目の前の少女は、面倒を見てもらって当たり前だと思っているクレスの周りの令嬢方とは違う。もちろん身分が違うので当たり前だが、たとえ相手が貴族だとわかっていてもそれを崩さず、金を出させるのを申し訳ないと言う。少しだけ、嬉しかった。

ランチ代を得したと喜ぶタイプでもないのは承知の上だ。
もちろん割り勘でも問題はないけれど、やっぱりちょっとはかっこつけたいし、これからのことを考えるとこれをスタンダードにしておきたい。
…まぁかっこいいと思ってくれるかはかなり微妙なラインだと踏んでいるが。

だからわざと気分を害したように振舞って、男と食事をした時は大人しく奢られろと釘を刺す。

…オレ以外の男と二人で食事なんて、そんな機会これから先も無くていい。

また一つ、心臓に棘が増えた。

◆

ランチの後は、二人で手を繋いでぶらぶらウィンドーショッピングをすることにした。

特に予定があるわけではなかったが、せっかく二人きりなのだ。もう少し一緒にいてもいいじゃないか。

それに、この期に及んでまだ心の準備が出来てない。

…我ながら、なんて意気地無しだ。

途中で手を離してくれと言われたが、はぐれたら赤毛の兄貴に殺される、そう言って離してやらなかった。
実際、アゼルは一つに集中すると周りが見えなくなることがしばしばあるので、店を眺めている間にはぐれてしまうことは十分に考えられる。
言わずもがな、オレが離したくないというのが一番の理由なんだけれど。

基本的に表情が乏しいアゼルだが、興味をそそられるものの前では足が止まる。そんな店には必ず立ち寄った。冷やかしに入った店内でも、アゼルが目を留める商品たちを記憶に留める。意外なものもあれば、納得の品もある。その都度それまで知らなかったアゼルの一面を垣間見た気がして嬉しかった。

アゼルが仕事以外では何に興味があって、どんなものが好きなのかを知りたかった。

クレスが知っているアゼルは、帽子屋で仕事をしているか、お茶をしているか、本を読んで勉強しているか、運ばれて森で薔薇を眺めているか。
帽子屋にいるときは基本的にお仕着せを着ているし、森に行くときの私服はその多くが自身が選んだものではなく今日のコートのようにサーシャのお下がりであったり、いまいちサイズの合っていない古着であったりした。以前赤毛の兄貴と射撃対決したときに着ていた服は一番のお出かけ服なのだとか。それさえマリアンが選んだと

言っていた。アゼルのことだから、与えられるものなら文句の一つも言わずありがとうと言って受け取るんだろう。
観察していてもそんな調子で、女の子なら興味があるだろうおしゃれや装飾品の類などに到っては、どんなものが本人の好みなのかなんてさっぱりわからないままだった。

…まぁ自分もその辺のことはてんで疎いので、こういうのが好きだと口で言われても、それがどんなものだかはわからないだろうが。

とにかく。

アゼル個人の情報が少ない。

否、少なくはないんだろうが。

もっと、もっと知りたいのだ。

アゼルと手を繋いで石畳の通りを歩く。それだけで心臓までウサギになって飛び跳ねるのに、ガラスに映りこむ自分とアゼルの手を繋いだ姿に更に気分は高揚する。
近いうちに必ずまた連れ出そうと心の中で固く誓った。

クレスの左手の先で、アゼルはいろいろな店を覗き込んだ。

女の子らしい洋服やアクセサリーはもちろん、きれいな包み紙の石鹸や色や香りのついたキャンドル。

アゼルは楽しそうに眺めていたが、これらは人より鼻がいいオレには結構キツかった。

オレの顔が険しくなってるのに気がついたアゼルが慌てて店を出る。

気付かなくてごめんね、と店の前で申し訳なさそうに目を伏せるので、たまに家に来る母さんのお仲間たちの香水の方がよっぽどキツい、と言ったら目を瞬かせてクスッと笑った。

本好きのアゼルらしく、本屋では店主に咳払いで追い出されるくらいの時間居座っていた。帽子の本や最新のファッション誌、この間帽子屋のお客さんが話してたと言う話題の恋愛小説なども手にとってパラパラとページを繰る。

そして最後に一番長い時間ずっと眺めていた分厚いお菓子のレシピ本をそっと本棚に戻し、名残惜しそうに背表紙を指で撫でた。

その後のケーキ屋のショーケースの前で芸術作品みたいなケーキを眺めていた時、広場の時計台にお茶の時間だと知らされる。

今日のオレにとっては、

タイムリミットを知らせる鐘だ。

いい加減、腹を括れよ。男だろ？
どういう結果になろうが、なるようにしかならないんだから。

一つ大きく息をして自分にそう言い聞かせると、ショーケースを覗き込むアゼルに声をかける。

「そろそろ休憩しない？もうすぐお茶の時間だし。さっき話してたケーキ屋さんに行こう」

I wanna go shopping with U 3－2（後書き）

なんか切羽詰った感じがしてますが。その原因は次話で明らかに！？
…がんばります。。。

I wanna go shopping with U 4（前書き）

さぁ、クレスは何を言い出すやら。

I wanna go shopping with U 4

時間的にも、もうこれ以上引き伸ばすわけにはいかないだろう。

通りの店をぶらぶら見て歩いているうちにお茶の時間になり、ランチのときに話したカフェに落ち着いて、早３０分。

向かいの席で運ばれてきたモンブランを幸せそうに平らげ紅茶を啜っているアゼルに、意を決して声をかける。

「……アゼル」

自分でもわかるくらい硬くなった声音に、手に持っていたカップをソーサーに戻してアゼルはこちらに向き直る。

その青紫の視線を真っ向から受けて、テーブルの上に両肘を付いて手を組むと口元を隠すようにして一つ大きく息をした。

「オレさ」

「うん」

「春から学院に行くことになったんだ」

「学院？」

無表情なアゼルの頭の上にクエスチョンマークが浮かぶ。

「そう、ローレンシア学院って、聞いたことない？貴族とか、平民でも特に勉強の得意な子供が女王様からの奨学金で入ることが多いんだけど」

「…あぁ、子爵様のご長男が確か」
「そう、それ」
「すごいね。クレス頭いいもんね。何を勉強するの？」
「最初はいろいろかな。向き不向きがわかると一年後に専攻を選ぶんだけど」
「何かやりたいこと、あるの？」
「……」

アゼルの何気ない問いかけに、何と答えたものか。心が重くて、その重さがそのまま思わずため息として表に出た。
言い澱んでため息を吐いたオレの手にアゼルの華奢な手が添えられる。
今日一日繋いでいた手は、台所仕事で荒れて全体的に赤くなっていた。それも手を離して欲しい理由の一つだったらしいが、アゼルが毎日真面目に働いているのを知っていたからカサ付いたそれもちっとも気にならなかった。
帰りがけにクリームを買ってあげよう。あ、でも逆に気にさせちゃうかな。

「行きたくないの？」
「行かなきゃいけないから行くけど、うんと行きたいわけでもない…かな」
「どうして行かないといけないの？」
「オレ、三男だから将来家を出ないといけないからさ」

伯爵家は一番上の兄貴が継ぐことになっている。二番目の兄も上の兄と同じく家業を手伝っているが、オレは別の道を進もうと思っていた。
いくらがんばっても将来は三番手止まりなのが見えているし、あれらはどうもオレには向いていない気がする。

となれば、何か職を見つけて家を出るしかないのだ。そして、その一番の近道が学院で自分の適性を見極め、学ぶこと。

「そっかぁ。じゃぁ頑張らないとね」

簡単に言ってくれる。
オレはアゼルの中でその程度の存在なのか。
…それとも知らないのか。

「アゼル…学院がどこにあるか知ってる？」
「？…わかんないけど…レイシーのどの辺り？」

どこ？と首を傾げて聞いてくるアゼルに少しほっとする。

「レイシーの中じゃないんだよ」

ここからが肝心なんだ。心臓がまた少し早くなった気がする。
生きて帰れるだろうか。
オレの手に添えられた荒れた手を逆に両手で包み込んで、唇を押し付ける。

「レイシーから馬車で何日もかかる。しかも全寮制で長期休暇の時しか帰ってこれない」
「っ…そうなんだ…」

驚いたように一瞬目を見開くと、頬をさぁっとピンクに染めて長い睫毛を伏せがちにアゼルは小さく呟いた。

「だから今までみたいに、帽子屋に遊びに行ったり、一緒に野薔薇を見に行ったり出来なくなるよ」

「そうだね…卒業はいつになるの？」
「４年かかる」
「…そっか」

俯いて寂しげな表情を見せるアゼル。しかしこれまでの内容では野薔薇を見られなくなるから寂しいのか、オレに会えなくなるから寂しいのか、判断は難しかった。それでも力なく落とされた肩に一筋の光を求めてその先を紡ぐ。

「ほとんどの子が１３歳になったら入学するんだけど、みんな従者を連れてくるんだ」
「従者？」
「うーん、ほら、貴族とか、商家にはアゼルみたいな使用人がいるだろ？寮で生活することになるから、自分専属の使用人をそれぞれ一人、家から連れて行けるんだ」
「へぇ。すごい」
「実家にいた年の近い使用人や将来の執事候補を連れて行くことが多いんだけど。全部じゃないけど一緒に授業も聴いて、ほぼ一緒に生活することになるから相性はいいに越したことは無いね」
「そうだね。仲悪い人とずっと一緒は、しんどいね」

感心したように相槌を打ち、オレに拘束されたままの右手から意識を逸らすように冷めた紅茶のカップの淵を左手の親指でなぞる。

「だからさ、」

捕まえた右手を握り直して、青紫の瞳をこちらに向けさせる。ひたと見つめて、今日一日、いや、帽子屋で今日の話を出すずっと前から腹の底で消化不良を起こしていた一言を、祈るような気持ちで口にした。

「オレの従者として、一緒に学院に行ってくれない？」

◆

決死の思いで口にした言葉に、無表情のままいくらか瞬きをしたアゼルはほんの少しだけ眉根を寄せて、

「大旦那様がなんて言うか…」

至極真っ当な、でもオレの欲しかった答えとはずれたことを言った。

本当に一緒に連れて行けるかどうかは、五分だと思っている。

アゼル本人だけならいくらでも説得する自信がある。

けれど、それだけじゃダメなんだ。

オレの両親を説得して了承を取り付け、

アゼルの雇い主であるＨａｔｓの大旦那に話を通し、

ついでに大暴れするであろうシスコンの兄貴をだまくらかし。

あちこちで大人たちの首を縦に振らせないと、実現できない。

オレたちが、まだ子供だから。

でも、今一番重要なのは。

「そうじゃなくて」

やや赤い顔のまま俯いて大旦那様が、とかお兄ちゃんが、とか言ってるアゼルの右手を握ったまま、うっすらそばかすの浮いた頬にもう片方の手を伸ばす。

もう一度、一対の青紫を捕まえた。

今欲しいのは、

大人たちの了承ではなく、

彼女の意思。

「…もし、大人たちにいいよって言ってもらえたら、アゼルは、オレと一緒に来てくれる？」

うん、と言うまで引き下がるもんか。

全ては、そこからなんだ。

I wanna go shopping with U 4（後書き）

一世一代の…まだ早いって。

まぁ、日帰りでピクニックとはわけが違うのよね。
ていうお誘いでした。
アゼルはなんて答えるのでしょうね。
わー、学院の名前、入れ忘れてました（爆）すみません。。。

I wanna go shopping with U 5（前書き）

クレス結構がんばりますが。。。アゼルから見るとこうなります。

I wanna go shopping with U 5

今日の午後喫茶店で、その日一日挙動不審気味だったクレスがついに爆弾を落とした。
おいしいケーキを食べて幸せ気分で紅茶を飲んでいたのに、そんな気分もいっぺんに吹き飛んでしまった。

祈るようにあたしの手を包み込んで指先に唇を寄せて。
更にはひたと見つめられて、思いがけず心臓が跳ね上がる。
いつもと違う真剣な、なぜだか必死な視線に何事？と思ったら、この台詞だ。

「オレの従者として、一緒に学院に行ってくれない？」

しばらくは言葉が接げなかった。

この人はいきなり何を言い出すんだろう？

まず頭に浮かんだことは、お兄ちゃんのこと。

お兄ちゃん一人、帽子屋に残していって大丈夫だろうか。
あたしが自分の目の届かないところに行くなんて、あの心配性のお兄ちゃんが賛成してくれるわけがない。

それに。

大旦那様はいいと言って下さるだろうか。

誰がいいと言ってくれても、大旦那様が許可してくれなければどうにもならない。
それにあたしたちは帽子屋の皆に返しきれないほどの恩がある。
その恩を仇で返すように自分の都合で出て行くなんて、言い出せるはずも無い。

あたしだってうんと仕事が出来るわけじゃないけど、今あたしがやっている仕事はほとんどがマリアンの手伝いだ。
あたしがいなくなったら、マリアンは今でさえ毎日忙しいのに、もっと忙しくなってしまう。
ちょっと考えただけで次々に浮かんでくる数々のことを思って、視線を宙に彷徨わせた。

でもクレスはそんなあたしの思考を中断して。

温かい両の手と、綺麗なチャコールグレーの瞳であたしを拘束した。

「…もし、大人たちにいいよって言ってもらえたら、アゼルは、オレと一緒に来てくれる？」

どうしたっていうんだろう。もう一度、心臓が大きく跳ねた。

４年間の寄宿舎暮らし。

帰ってこれないわけではないけれど、帽子屋を離れて。

お兄ちゃんと、皆と別れて。

実際に可能かどうかではなく。

もし行けるとしたら。

あたしは。

どうするんだろう？

「……今、決めないと、ダメ？」

「うん、今」

じっと見つめられて再度顔に血が上るのを感じながら、不意に今日一日の違和感の原因に思い至った。

今日一日、この話を切り出すまで、全然目を合わせてくれなかったんだ。

「…よく、わかんない。帽子屋を離れるなんて、考えたこと、なかったから…」

だからって、今更その分を取り返そうとしなくてもいいんだけど。

意思とは関係なく急激に上がる心拍数に戸惑いながら、しどろもどろに言葉を紡ぐ。

「…従者って、何をするの？」

「たぶん、オレの身の回りの世話…って言っても、食事の用意や洗

濯はやってもらえるから、部屋の掃除とかと、お茶を入れたりとか、かな。今よりはずっと楽だと思うよ。あとはオレたちと一緒に、授業受けたり」

「…どうして、あたしを？」

そう、それがわからない。

伯爵家には優秀な使用人がたくさんいるんだろうから、気心の知れた人を連れて行けばいいだろうに。わざわざ他所からあたしを連れて行く必要があるとは思えない。

「今家にいる使用人て、大人ばっかりなんだ。大人でもダメじゃないけど一緒に遊べないし、つまんないだろ？」

口調は幾分軽くなったけど、静かな熾火のような視線はそのまま。なんだか居心地が悪い。

気恥ずかしくてなんとか視線を逸らそうと目を伏せる。が、その時のクレスは容赦してくれなかった。

頬に添えた手の親指で顎をくっと上げてアゼルの視線を持ち上げる。じわじわと低温火傷を起こしそうな視線に再度捕まった。

息が苦しくなってくる。

「アゼルの好きな本だって、学院にはたくさんあるから好きなだけ読めるよ。将来に役立つことだって、いろいろ勉強できると思うし」

利き手も目も絡め取られて、身動きが取れない。動揺する心に覆い被せるように言葉を畳み掛けてくる。

確かに、勉強するという点においては学院に勝る場所はないだろう。将来の独立に役に立つのであれば、願ってもないことだ。

唯一熱視線から逃れる手段、ぎゅっと目を瞑って、大きく息をする。
それでも、脳裏に浮かぶのは、自分と同じ瞳の。

「今すぐになんて、決められないよ。て言うか、行けるかわかんないのに、なんで」
「もし行けるとしたら、だよ」
「…明日まで、待ってもらえない？」
「どうして？アゼルが行けるなら行きたいかどうかを聞いているだけだよ。本当にそうなるかどうかは、これから大人たちがなんて言うかなんだし」
「…うん…」

あたしの躊躇いの種を探し出そうとするように、優しいけれど、明らかにいつもとは違う熱を持った声が耳を撫でる。

例え話だとしても、迂闊に「行きたい」なんて答えてはいけない、気軽に適当に「行けない」なんて答えてはいけないと思わせる温度だった。
もしかしたら、の話なのに喉が引っかかって返事がうまく出てこない。

「じゃあ、逆に、迷っている理由は？」
「…あたし、学費なんて、払えないよ？」
「オレの従者なんだから、伯爵家が出すよ。お金のことなんて気にしなくていい」
「…あたしだけ学院に行ったら、お兄ちゃんが」
「アゼルが学院で勉強したら、兄貴の役にも立てるよ。兄貴は帽子作りをやってるんだから。店を開くんだろう？いっぱい勉強しないと、店を持つのは簡単なことじゃないよ」

ね？と頬に添えたままの手で、そっと撫でた。

「うん…」

ふぅ、と息をつくのが聞こえて、それでも目を伏せてしまうあたしの頬から温かい手が離れていく。

釣られるように視線を上げると、クレスが困ったような表情を浮かべていた。

さっきまでの正体不明な熱は消えて、あたしのよく知る優しいクレスに戻っていた。

「ごめん、困らせること言った」

「…ううん…」

ここで行きたいと言っても必ずしも実現するわけじゃないのに。

なぜか行きたいとも行きたくないとも返事が出来なかった。

「明日までに、行きたいかどうか決められそう？」

「……がんばる」

「じゃあ、今晩ゆっくり考えておいて」

困った表情のまま、今だ捕まっていた右手を優しくさする。

「お願いだから、そんな目をしないで」

「…？」

目？思わず首を傾げたあたしに、クレスは苦笑して二、三度首を振った。

「あと一箇所、行きたい場所があったんだった。付き合ってくれる？」

吹っ切れたように笑いながら、伝票とコートを取り上げた。

「肝心のアゼルの誕生日プレゼント、買ってなかったしね」

◆

いらないと言い張るあたしの手を引いて、いいからいいから、と連れて行かれたのは栞を買った銀細工の店よりずっと安価で、種類ももっとたくさん置いてある店。

「さ、アゼルもいいの選んでよ」

そう言ってクレスはまた一つあたしに当てながら、午前中のプレゼント選びであんなに時間がかかっていたのが嘘みたいに商品を手にとってはあたしに合わせ、自分も候補を次々鏡の前で試していった。そんなクレスに釣られてあれこれ迷って似合うだの、似合わないだのと言ううちに、いつの間にかさっきまでの気恥ずかしさも消えていた。

「これなら、おあいこでしょ？」

店に着いたときにクレスの言い出した提案に最初は驚いたが、最終的には先日のあたしの誕生日プレゼントと、実はもうとっくに終わってしまっていたクレスの誕生日プレゼントをお互いに買ったのだった。

火が点いたみたいにジンジンして痛かったけれど、友達と何かをお揃いにするなんて初めてで、すごくうれしかった。

冬の太陽は寒さを嫌ってさっさと身を隠してしまう。

だいぶ薄暗くなった道を手を繋ぎながら歩く。

クレスはいつものように薔薇木戸までアゼルを送って、別れ際に、

「明日、返事を聞きに来るからね。そしたら、ウチの親と大旦那に話をするから」

またあの、低温火傷しそうな眼差しで、あたしが行くという返事をすると決め付けたようなことを言った。

「今日はありがとう。また明日ね」

にっこり笑って寒さで赤くなっているだろう頬をひと撫ですると、いつものように向かいの屋根に飛び上がって帰っていった。

結論から言えば、「行けない」になるのだろうけど。

「行きたい」のか「行きたくない」のかと問われれば、あの熾火を宿す一対の黒炭色に向かって「行きたくない」と告げるのは至難の業だと、心のどこかで気付いていた。

その後ろ姿を見送りながら、付いて行けない理由は数あれど彼と一緒にいくこと自体が嫌なわけではない自分に気付いていたアゼルは、自分の意外な一面に驚きながら木戸をくぐった。

Ｉ ｗａｎｎａ ｇｏ ｓｈｏｐｐｉｎｇ ｗｉｔｈ Ｕ ５（後書き）

いつも読んでいただきありがとうございます。

ハイ、今回のＮＧワード↓

「好き」・「一緒にいて」・「付いてきて欲しい」ｅｔｃ

素直じゃないお年頃です。

普段飄々としてるように見えても二人きりでいざとなるとこの辺が精一杯。

経験値不足は否めません。。。イマイチ腹黒になりきれず。将来に期待（作者含）↑ヲイ

子供だからハードルがたくさんあるのもわかってます。

でも、もうちょっとうまい誘い方があるだろうがよ、クレス少年…

ｏｒｚ

アゼル困ってるだろうがよ。。。

中途半端なことするなよ。。。

まぁ最後はなんとかご機嫌直してくれたからいいけどさー。

まぁご想像は付くでしょうか、誕生日プレゼント。

必死の熱い視線もなんだかいまいち伝わって…るかな？

アゼルちゃん・ちょいニブ子疑惑浮上。

後で活動報告に無駄小話載せようと思います。

I wanna go shopping with U 6

その夜。

レイズが屋根裏部屋のベッドで傾いた天井を見上げていると、アゼルが夕食の残りを持ってやってきた。

「お兄ちゃん、起きてる？」

恐る恐る梯子から首を出す妹に、返事をする気にはなれなかった。

階下で大人たちに何か言われたのだろう。

今日の自分は何を言われても仕方ないくらい、仕事が手に付かなかったから。

自分じゃどうしようもないんだ。アゼルが気がかりで何も手に付かない。

ちょっと目を放した隙にまた誰かに泣かされているんじゃないかと思うと、気が気ではなくなる。

実際には、今のアゼルは滅多な事では泣かない娘だ。

あの日以来、表情も涙腺も凍りつかせたままだから。

それがここ最近、少しずつだが感情を表に出すようになった。

あの悪夢を無意識にでも尾を引く妹にとって、それがどれほど重く貴重な変化かはレイズが一番良くわかっている。

だからこそ、悔しくて堪らない。

その変化を齎したのが自分ではなく、あの灰色の少年だということに。

同じくらい、心配で堪らない。
溶けかけた氷が、またあの小さい手が信頼して伸ばした先で、無残に砕かれてしまわないかと。

心配が募るのと同時に、時々無性に腹立たしい。
自分の心配を他所に積極的に外に出て行こうとする、全てを忘れてしまった青紫が。

それでも、忘れたままでいて欲しいと願わずにはいられない。

守るためなら、何だってする。

明かりの点いていない部屋で兄がベッドに横になっているのを見とめると、アゼルは足音を立てないように部屋に上がってきた。
机の上に皿の載った盆を置き、また忍び足で部屋を出て行こうとす

る。

「アゼル」

不意にはっきりした声で名を呼ばれて、ビクッと肩が跳ね上がる。

「起きてたの？」

むくりと起き上がると、おいでと言うように手を伸ばす。
その手に釣られておずおずと近づいてくる様子に苦笑が漏れる。

「怒ってないから」

そう言うと下がっていた手を掴み、横に座らせた。

「……何もされなかった？」

妹の銀色の髪をそっと撫でる。石鹸の匂いがする、洗いざらしの湿った髪が差し込む細い月光を乱反射した。きちんと乾かさないと風邪をひくと何度も注意しているのに。

「うん、何も」
「必要以上に触られたり、くっ付かれたりしなかった？」

無表情に小首をかしげる妹を抱き寄せ、肩に顔を埋める。

こんな自分より、ずっと、ずっと大事な。

「大丈夫だよ、…クレスは優しいよ？面白いし。お兄ちゃんがもう一人増えた感じ」

妹の言葉に思わず腕に力が入る。

「お前のお兄ちゃんはオレ一人だろ？だからオレ以外のヤツともう二人で出かけるなんて絶対しないで」

他のヤツにこんな風にくっ付かれたり、ぎゅっとされたりしたら逃げるようにって言っただろう？

何度も言い聞かせてきた台詞が再度口を吐いて出る。

うん…とわかったようなそうでないような返事をして身を捩る。

くすぐったいよ、と頭の下から肩を引き抜き、無理やり体ごとレイズに向き直る。

「クレスは全然怖くないもん。逃げなくても大丈夫」

「いつ変わるかなんてわかんないだろう？」

あいつは、お兄ちゃんじゃないんだぞ。

今度お前に何かあったら、オレは。

仏頂面のレイズを宥めるように、妹は紅い頭を引き寄せ額をつけて囁いた。

「心配しなくても大丈夫だよ。…もう、そんなに来れないって、言ってたから」

苦しげな兄の声を遮るようにアゼルが囁いた。

「…なんだって？」

「春から、学院に行くんだって。だから、休暇の時くらいしか遊び

に来られないって」

思いがけない朗報に、銀色の睫毛に縁取られた自分と同じ色をした瞳を至近距離から覗き込んだ。
そこに寂しげな、何かを思案するような色を見つけて、複雑な思いが湧き上がる。

正面から額を合わせようと両手でアゼルの頭を包んだその時。左手に慣れない硬いものが触れた。ぐいと妹の顔を右に向けて右耳をまじまじと見る。痛っと声が上がるが気になどしていられない。

暗がりでそれまで気付かなかったが、耳たぶに一石、銀色の台にムーンストーンがついたピアス。

「お前、これどうした」
「開けたの。可愛いでしょ？」

顔の向きを戻して、珍しく、すぐわかるほどの笑顔を浮かべる妹。

「どうして両耳開けなかった？」
「……お金が足りなくて」

ほんの少し泳ぐ目を見逃さなかった。薄暗い中でもこの至近距離だ。

…じゃあ、もう片方は。

「外せ」

途端に声音が剣呑になる。

「どうして」
「どうしてもだ。新しいの買ってやるから。どうせなら両方開けたらいい」
「嫌だよ。すごく痛かったんだもん。またやるの嫌だ」
「痛いなら外せよ」
「それこそ嫌だよ。せっかく痛い思いして開けたのに」

どうやらアゼルはこの片耳のピアスに込められた意味を知らないらしい。
…もしくは知っていて、受け入れたのか。
大きくため息を吐いて再度最愛の妹を腕の中に閉じ込め、耳元で囁いた。

「頼むから、外して」
「しばらくはずっと外さないようにって言われたの。穴塞がっちゃうから」
「外して即付け替えれば大丈夫だって」
「でも、これ気に入ってるから」

頑なに拒否を示す妹のこの一言に、焦がした鍋から黒煙が燻るような苛立ちを感じ、吐き出すように言い捨てた。

「気に入ってるなら、大事に仕舞っとけよ。髪留めみたいに」

気に入ってるからといって、引き出しに大事に仕舞いこんでいる髪留め。
語気が荒くなってぴくっと肩を震わせる。
その肩を優しく撫で、猫撫で声で耳元で囁いた。

「…あいつとお揃いだから？」

きつく抱き寄せた体が、強張るのを感じ取った瞬間。
がばっと右手で両腕ごと体を拘束し、左手で耳たぶの後ろに手を伸ばした。
兄が何をしようとしているのか気付いたアゼルは、イヤイヤをするように首を振る。

「やぁっやめてっ……はな…してっ…」

辛うじて動く肘から下でレイズを引き離そうと押し返してくるが、うまく力が入らないのかびくともない。
こめかみに口付けるように頭で頭を押さえつけ、どうにか右耳を捕まえて裏のキャッチを摘む。

「お兄ちゃん…っ」

思い切り首を動かし兄の手を振りほどこうとするが、ガリっと言う音と共に力任せにピアスのキャッチをむしり取った。

「痛っ……いやあぁっ」

ついに泣きが入ったアゼルの声に、はっと我に返る。
その拍子に緩んだ腕を振りほどき、ばっと距離をとって梯子に駆け寄る。

「……お兄ちゃんのバカっもう知らないっ」

逆光で顔は見えなかったが、涙声でそう言うとバタバタと梯子を降

りていった。

呆然とアゼルが出て行くのを見送り、手の中に残された小さなキャッチを見る。
暗がりの中でも指先に付いた赤黒い汚れが見て取れた。

ふと脳裏に甦る、あの、赤。

茹だるような暑さ。

干草に混じる、鉄錆の臭い。

表情が消えた妹。

思い出すな。
思い出すな。

「…っ」

急に悪寒が走り、キャッチを投げ捨てシーツで指先の染みを乱暴に舐り取る。

「……くそっ」

悪態を吐きながら頭を抱えて、レイズはベッドに倒れこんだ。

I wanna go shopping with U 6（後書き）

レイズは相当ご機嫌斜めだったらしいです。

ファーストピアスって、先が尖ってるし、キャッチが異様に固いし、嫌いです。

「返事、聞いていい？」

朝食が終わって、すぐ走ってきたんだろう。

クレスは朝食が終わったばかりの帽子屋の台所に現れるや否や、問答無用で後片付けをしていたアゼルの手を引いて赤薔薇の木戸を早足でくぐり、そのままのスピードで向かいのアパルトマンの路地に入るといつも通りひょい、と抱き上げて屋根の上に飛び上がった。

まさかこんなに早く来るなんて思っていなかったから、アゼルは内心、まだ心の準備が出来てないよー！と叫びつつも、表面上は少し顔を赤らめた程度で大人しくクレスの腕の中に納まって運ばれていた。どうしても視線は上げられない。

そうしてクレスは数件分屋根の上を移動すると、煙突のそばにそっとアゼルを下ろした。

「……」

気まず過ぎて、目を合わせられない。

でも。

どう切り出そうか俯くアゼルを見て、クレスは右手をポケットに突っ込み、左手で顔左半分を覆うと、ハッと短く息を吐いた。

その音に心臓が捻り上げられる。喉がカラカラになるのがわかる。

クレスといて、沈黙が痛いのは初めてだ。

「…やっぱり、兄貴が心配？」

この声はあたしの喉から出たものじゃないのに、どうしてこんなに掠れているんだろう？

「……ごめんなさい」

それもそうなんだけど、あたしが言いたいのはそんなことじゃなくて。

「それとも」

どうやって言えばいいんだろう。

両手を胸の前で組み、もじもじと動かしながらあたしが言葉を出しあぐねていると。

「…オレの従者になるの、嫌？」

降ってきたその苦しそうな声音に、弾かれたようにバッと顔を上げる。

その顔は声の通り眉を顰め、また昨日と同じ出所不明の低温火傷しそうな目でじぃっとこちらを見つめていた。

なんだか居た堪れなくなって、その視線を振り払うかのようにまた下を向いてぶんぶんと首を左右に振った。

昨日の夜、いっぱい、考えたの、

そう前置きして、深呼吸を一つ。

「従者には、帽子屋での奉公が終わったら、なってみたい…かな。やっぱり帽子屋は、きちんと勤め上げてからでないと、無理。途中で出て行くなんて、申し訳、なさ過ぎるから。それに…」

ふと影に入ったと思ったら、両頬に手を添えられて上を向かされる。いきなり至近距離に現れた灰色の瞳にぎくりと体が強張る。

「それに？」

言ったら、友達やめるって言われたらどうしよう。でも。言わないと、きっと苦しいし、悲しい。

「それに…ちょっと、怖い、かな。それに…誘ってくれて、嬉しかったけど、ちょっと…うぅん、すごく、悲しかったし」

切れ切れに言葉を紡ぐ。

「悲しい？」

火傷覚悟で、灰色の瞳に向き直る。

「ほんとは、クレスの‘使用人’じゃなくて、‘お友達’がいいの」

あぁ結局、口に出しても悲しい。

ひゅっと息を飲む音がした。火が点いたままの石炭色の瞳が大きくなる。

顔が動かせないから、その熾火のような瞳から逃れるにはぎゅっと目を瞑るしかない。

だから、文字通り目と鼻の先にある少年の顔が瞬間ひどく驚いて、次にとても苦しげに、切なげに歪んだのを、あたしは知らない。

こんなこと、言い出せる身分じゃないのは良くわかってるつもりだけれど。

クレスは昨日、「あたしがどうしたいのか」を聞いてきた。

昨日の晩、一生懸命考えた結果だ。

最初からあたしに敬語も敬称も許してくれなかったこと。

三日に一度は帽子屋にやってきて、レイズをかわしながらも一緒に過ごしていたこと。

あたしの焼いたクッキーを横からつまみ食いして舌を火傷したこと。

一緒に本を眺めて意味のわからない言葉をいろいろ説明してくれたこと。

忙しくて相手も出来ないのに、なぜかあたしの横で楽しそうに仕事を眺めていたこと。

時折あたしの暇を見てはお姫様抱っこ（あの恥ずかしい横抱きをそう呼ぶのだと最近になってサーシャに聞いた）で屋敷まで運んでくれて二人で森の中を散歩したこと。

そして昨日、一緒に街に買い物に行って、二人でプレゼントをしあったこと。

友達のいないあたしが心ひそかに憧れていたたくさんのことを、（中にはちょっと違うのも混じっているけれど）一緒になって楽しそうに叶えてくれたのがクレスだった。

長らく空き地だった心の一角に、いつの間にかクレスは確固たる居場所を築いている。

レイズや帽子屋の皆のような家族でもなく、仕事で接するお客様でもなく、

ただ純粋に、友達として。

そして心の中のこの場所がまた空き地になることが、あたしには心臓が痛くなるくらい寂しくて、悲しいことだった。

「クレスが友達になろうって言ってくれたの、すっごく嬉しかったんだよ？でも」

クレスの使用人になったら、そうもいかなくなっちゃうんじゃないかと思って…

そう言うと、なぜか自分の唇がわななくのを感じ、きゅっと口元に力を入れる。

「いつになったら、帽子屋から下がれるの？」

「……わかんないけど、十七歳になったら…かな」

じっとあたしの言葉を聴いていたクレスは、静かにこう切り出した。

いつまで、と言われたことはないけれど、とりあえず十七歳になって成人したら一度進路を考える機会は与えられるだろう。

そう言えば、いつが期限なんだろう。

「あと、六年…か」

続いて何か独り言のように呟くと、そっと頬に添えていた手を撫でるように動かした。

視界を遮断下途端、右頬に意識が集中する。その左手の先には。

わざと耳が隠れるように下ろした髪を耳にかけようとする手が、触れて欲しくなかった場所につ、と触れてしまう。

「？……アゼル、ピアス、どうしたの？」

昨日二人で片方ずつ開けて、一セットを分け合ったピアス。
クレスが左耳で、アゼルが右耳。

銀の台にムーンストーンが一石ついたスタッズタイプ。

友達とお揃い。

そもそも友達と呼べる人がほぼ皆無に等しいあたしにとって、それはとても甘く、幸せな響きだった。
もちろんあたしの周囲には、親しくしてくれる人たちがたくさんいる。
毎朝行くパン屋のご主人とおかみさん。市場の八百屋さんやお肉屋さん、他にもマリアンのお使いで行くお店の大人たちは、あたしが籠を下げて店に行くと温かい笑顔で接してくれる。
けれど。

彼らは、決して‘友達’ではないのだ。

絶対失くさないようにしようね、と昨日約束したばかりなのに。

それなのに。
今あたしの右耳に付いている銀は。

「…どうしてピンなんて」

一番小さい型のブローチピンだった。帽子につける飾りをつける前の、ピンだけのもの。

「失くしてないよっ…ただ」
「なんで外したの」
「…キャッチが、飛んじゃったから。石が付いてる方は、ちゃんと仕舞ってあるよ」

レイズにキャッチを毟られて部屋に逃げ帰った後、我に帰って、辛うじて耳たぶに引っかかっていた血塗れのピアスにどれだけほっとしたか。
とは言えキャッチ無しでそのまま着けてもいられないから、何か代わりになるものを部屋中探し回ってどうにか見つけたピン状のもの。
今朝は髪の毛はレイズがやってくれなかったから下ろしていたし、たぶん誰にも気付かれてない。
昨日の夕食時になぜかみんな良くわからない意味深な視線を寄越してきて、とても居心地悪かったから、というのもある。

「本当に、それだけ？」
「うん、それだけ……どうして？」
「…目を見てくれないから」

両手で顔を固定されているから、視線だけを左下に泳がせる。
元々熱かった顔にさらに熱が上る。背後の煙突みたいに頭のてっぺんから煙が出そう。
心臓がうるさ過ぎて、耳ががんがん鳴る。
絶対クレスにも聞こえているに違いない。

「新しいキャッチは、今度の休みに買いに行くから」

そうしたら着けるよ、そう説明したら、何もおかしなところは無いはず。
はずなのに。

「痛っ…」

クレスがおもむろにブローチピンを動かした。

「こんなの着けてたら髪の毛に引っかかるだろう?後で買ってきてやるから」
「え、いいよ、自分で…」
「ダメ、あのピアスでないと」

顔を上げると真剣な眼差しに射抜かれた。

「う、うん…」

気圧されて頷くと、ふっと笑って髪を撫でられた。

「よし、じゃあそれはそういうことで」

そう言うと、話は終わったとばかりにここに来た時と同じようにひょいと抱き上げられ、来た道…屋根の上を戻り始めた。

薔薇木戸まで送り届けてもらって、さっさと木戸を開けて中に招き入れられる。
そこで一旦帰るものだと思ってたのに、クレスはあたしの手を引くとどんどん進んで台所の勝手口を開けた。

◆

「あ、アゼル、あんたどこ行ってたんだい」

ちょっと怒った声音でマリアンが声をかけてくる。

「ごめんマリアン、もうちょっとアゼル借りるよ」

あたしに続いて中に入って来たクレスがその足を止めることなく台所を突っ切りがてらマリアンに声をかけた。ちなみにあたしの手をぐいぐい引っ張りながら。

「あら、坊ちゃん、どうしたのこんな朝早くから」

「ねぇ、今大旦那いる？」

「大旦那様？今たぶんウォルター様の作業部屋にいるかも」

「ありがと」

それを聞くと、廊下に続くドアを開け、そのウォルター様の作業部屋にずんずん進む。

そしてそのドアの前に着くと、ためらいも無くノックをした。

「ちょっと、お聞きしたいことがあるんです」

「どうしたんだね？こんな朝から」

「すぐにでも確認したいんです。ちょっとお時間いただいても？」

「あぁ、大丈夫だがの」

いきなりやってきたあたしたちに、正確にはこんな朝早くからアポイントも無しに乗り込んできたクレスに腹を立てることも無く、そう答えて、大旦那様はあたしたちの方に向き直った。

大旦那様の目の奥に少しおかしそうな色が覗いているのは気のせいだろうか。

「アゼルが帽子屋を下がれるのって、いつぐらいになりますか」

前置きも何も無く、いきなり本題に入った。

「どうしていきなりそんなことを？」

「アゼルを帽子屋から貰い受けたいんです」

さらりと言った一言に、大旦那様とウォルター様の目が丸くなる。

次の瞬間、大旦那様の爆笑が部屋に響き渡った。

「大旦那、オレ、大真面目なんですけど」

不敵にも不機嫌をこれでもかと前面に押し出したクレスに、大旦那様は椅子の肘掛を叩きながらすまんすまん、と全然悪いと思ってない呈で謝った。

「こりゃあ驚いた」

あご髭を撫でながら、のう？と、横にいたウォルター様に振る。

まだ口元は緩んだままだ。

振られたウォルター様もびっくり眼を元に戻して頷いた。

「アゼルがここで働かないといけないのは、あとどれくらいなんですか？」

深呼吸を一つして、再度大旦那様に問いかけた語尾が少し震えていた。

あたしの手を握ったままの手に力が入る。

「ふーむ。それもきちんと決めてはおらなんだのう」

「っ…じゃぁ」

「アゼルは、どう思ってるんだい？」

弾かれたようなクレスの声に被せるように、ウォルター様がクレスの影に隠れるようにしていたあたしに聞いてきた。

いつも通りのオレンジ色の髪に縁取られた優しい笑みが深くなる。

「あたしは…ここでのお勤めが終わってからなら、クレスと一緒に行きたいと思ってます」

また顔が熱くなるのを感じながら、大旦那様の足元を見ながら答えた。

「そうさのう、だが今すぐとはいかんぞ。まだ食い扶持もないクレセント坊に、アゼルをおいそれとやるわけにもなぁ」

「父上、食い扶持があったとしたって、まだ若すぎるでしょうが」

…二人の発言がどこかずれている。

クレスを見やると、クレスも違和感を感じ取ったらしく、怪訝な顔を向けてきた。

「今すぐじゃないですよ、春からです。それに食い扶持なんて関係ないでしょう、ローレンシア学院にアゼルを従者として連れて行きたいんです」

その発言を聞いて、あたしたちと同じように大旦那様とウォルター様が顔を見合わせ、…再度噴き出した。

…今度はウォルター様も。
あたしはハラハラしながらなかなか笑いが収まらない二人と、仏頂面のクレスを交互の見守った。

「あぁ、すまないね、クレセント坊。…そうか、そういうことじゃったか」
「…悪いね、私も父上もてっきり…」
「てっきり？」

どうにか笑いを引っ込めたウォルター様が、とんでもない爆弾を落とした。

「クレセント君が今すぐアゼルを嫁に欲しいと言っているのだと思ったものだから」
「っ！？」

嫁！？

突拍子も無い単語に一瞬思考が停止する。

何を言い出すんだろう。
ただの使用人のあたしと貴族であるクレスが結婚だなんて、あるわけないのに。
友達でさえ、時々無性に居た堪れないのに。本当なら、許されないのに。
て言うか、なんでそんな話になるの！？
頭の片隅でそう冷静に考えるものの、ただでさえ熱かった首から上に更に血が上る。
さっきは未遂だったけど、これはもう確実に頭から煙が上がっているに違いない。

恥ずかしくてさっきから顔を上げられないでいるが、確実だと思う。

「さすがにそれは今すぐは無理だってことくらい、わかってます」

仏頂面のままクレスがそんな返事をする。なんだか台詞が棒読みだけれど。

クレス、その返事違うと思うよ。

どうにか顔を上げてそう訴えたかったけど、開いた口は空回りするだけで言葉が出てこない。

視界に入った彼の顔も、大分赤くなっていた。

「まぁ、いずれにせよ、すぐ、というわけにはいかんのぉ」

「さっきいつまでか決めてないって」

「それはそうなんだがのぅ」

だったらいいじゃないですか、と声を上げるクレスをのらりくらりとした態度でかわし、大旦那様は思案気にあご髭を撫で回す。

「アゼル、今十一歳か」

「え、あ、はい」

大旦那様に名前を呼ばれて、開閉するだけだった口からどうにか声を出す。

「坊、あの学院に入学するのは」

「十三歳からです」

「ならば、あと二年じゃな」

「従者に年齢制限はありません」

クレスは畳み掛けるように口を挟む。

「うむ。知っとるがの……とは言え、今のアゼルはまだ学院の授業や生活についていくのは大変じゃろう。だから今のクレセント坊と同じ十三になるまでは、ここで修行じゃ」

その時まだアゼルがクレスと学院に行きたいのなら、そこで帽子屋を下がってよろしい。いいね、と大旦那様はあたしに向かって言い聞かせるように言った。

「…はい」

二年、と明確に示された期間に、こくん、と頷いて返事をした。

「坊の気持ちもわからなくは無いが」

そう言うと大旦那様は、よっという掛け声と共に椅子から立ち上がり、あたしたちのように歩み寄ってきてその大きなしわしわの手でクレスの頭を撫でた。

「何、反対している訳じゃない。アゼルは学業の基礎も勉強し終わっていないし、マリアンのお菓子作りの極意を伝授されてからの方が、坊も嬉しかろう？だから」

二年経ったら迎えに来なさい、とまだ納得しきれていないような表情のクレスに、優しく言い聞かせた。

Ｉ　ｗａｎｎａ　ｇｏ　ｔｏ　Ａｃａｄｅｍｙ　ｗｉｔｈ　Ｈｅｒ（後書き）

皆様お忘れかも知れませんが、タイトルの帽子屋さんは、大旦那様です（逃）

影薄すぎ…ｏｒｚ

The distance of ・・・（前書き）

ひっさびさに出ました。ネズミさんたち。

The distance of ・・・

もうさっさと寝てしまおう。

寝仕度を整えて自室に戻ると、誰もいないはずの部屋で金色の瞳に出迎えられた。

紅茶色の髪をした少年が、人の部屋の暖炉の前でのんびりと商売道具のカードで遊んでいた。

窓の外に広がる漆黒の森は遥か天上の主を仰いでざわめいている。

屋敷の中も寝静まり、もう真夜中になろうかという時間。

「…いつからいるんだよ？」

「ついさっきですよ？」

その口調から目の前にいるのが「どちらか」なのかを知る。

「誰にもお会いしていませんから、ご心配なく」

なんてこと無いかのようにこちらを見もせずにそう言うと、慎重にカードタワーの天辺に二枚のカードを乗せた。

クレスは精神的に疲れた一日の締めがこれか、と一気に疲労を二割り増しされた気分でソファにごろりと横になった。

…まだ「もう片方」でないだけマシだったか。

いずれにせよ、ため息も出ようものだ。

よりによって今日来なくても。

「つれないなぁ、心配してたんですよ？」

ため息の元凶は楽しそうにそう言うと、全然心配した風でもなく肩を竦めた。

残念ながらどう贔屓目に見ても両の手じゃ足りないくらいの項目で規格外判定が下っている目の前の友人に、常識という枠を嵌めること自体が間違っていることを悟っているので、最初こそ驚いたが二回目以降はもう何も言うつもりもなかった。

曲がりなりにも公爵家の人間がなぜこんな時間にぐだぐだと我が物顔で人の部屋の暖炉の前を占領しているのか、とか、侍女がきっちり戸締りをしていった後でどうやって誰にも見つかることなくこの部屋に侵入出来たのか、など、もはや聞く気も起きない。

―「ネズミ」はどこからでも入ってこれるんだよ？

初めてやってきた時にそう言って心底楽しそうに笑っていたのは今は「眠っている」であろう相方の方だったか。

以前公爵家の温室に逆招待されてから、その後も数回公爵家には足を運んでいた。

どうにかこうにかその前よりは上手にトカゲたちを避けることも出来、偶然同席した女公爵にはなぜかいたく気に入られた。

始終直視に耐えないほどまばゆい笑顔だった女公爵曰く、

「この子達を嫌わないでくれる人に、悪い人はいないわ」

だそうだ。

そうは言っても、招かれっぱなしというわけにもいかない。

お返しに再度ダスクを伯爵家に招待したいと申し出ると、女公爵は「タイミングが合えばね」と困ったように柳眉を下げた。

そして現在に至るまで伯爵家でのお茶会は実現することもなく、その全てが招待したその時間にダスクが寝ていたというなんとも彼らしい理由で流れていた。

本当に寝ていたのか相方の番だったのかは知らないが、毎回毎回翌日には招待した「本人」からの丁寧な詫び状が届く。

クレスとしても、どうやっても無理やり起きているということが出来ないらしい「彼ら」を責める気は無いが、とは言えこれではいつまで経っても埒が明かないので、最後の招待状には起きているならいつでも、どちらでもアポイントなしで構わないから遊びにおいで、と添えておいた。

その招待状を出した数日後の夜、突然、しかもバルコニーから直接部屋にやってきたのはドーンの方だった。

「どっちでもいいってヒドイよねぇ。あ、でもどっちともって言われるよかマシかぁ」

無理だろ、そう突っ込んだクレスをひとしきり可笑しそうに笑って、至極嬉しそうな顔をする。

「ボク、招待状なんてもらうの、初めてだよ」

ダスクはよくもらってるけどね。

その時ももう後は寝るだけという状態だったが、蜂蜜色の瞳を輝かせてそんなことを言われては無碍に追い返すわけにもいかず、延々夜半過ぎまでカードに付き合わされたのだった。

それが余程楽しかったのか、それ以降、ダスクの方もたまに不意打ちでこうして本人の予定も確認せずに部屋に直接やってくるようになった。

今日みたいに。

「で、首尾はどうだったんですか？」
「…可も無く不可も無く」
「上々じゃないですか」

アハハッと声を上げて笑った拍子に、出来上がっていたカードタワーがパラパラと崩壊した。

「上々なもんか」
「不可も無くってことは、ＯＫが出たんでしょう？」
「……二年待ち」
「…可も無く、ですねぇ」

カードタワーは飽きたのか、散らばったカードを集めて手際よくシャッフルし始める。

「それで、結局二年待つんですか？」
「…しょうがないだろ」
「じゃあ二年は従者無しなんですね」
「それ自体はどうってことないけど」
「まぁそれでも、その間全く会えないことはないでしょうが…遠距離恋愛は、大変らしいですよ？」
「したことも無いのにわかった風に言うな」

数枚のカードを捲ると、また性懲りも無くタワーの土台を組み始める。

「だから、らしいって言いましたよ」

ダスクは暖炉の前で腹這いに寝そべったまま、顔だけこちらを向けた。
暖炉の逆光の中、金色の瞳だけが楽しそうにキラキラ光っている。

「あぁ、でも付き合っているわけじゃないから遠距離片想いですか……あ、」

動いた振動か、まだ土台だけだったカードタワーがぺしゃんこになる。

「…もうお前帰れよ」

クレスも今日ばかりは相手にする気力も無く、ソファに行儀悪く寝そべって不機嫌も露わにそう言い投げた。

◆

今日はいろいろあり過ぎた。

帽子屋の奉公を下がったら、と言うアゼルの言質を取ると、朝一で大旦那にアゼルを連れて行きたいと詰め寄った。

最悪、アゼルが十七になるまで待たないといけないかと思ったが（もし本当にそう言われたら今頃オレは誘拐犯になっていたかも知れない）思いのほか短く、提示された期間はあと二年。

煙が出そうなほど真っ赤に染まったアゼルの顔に免じて渋々引き下がったものの、それでも二年だ。

「その子が来るまでの二年はどうするつもりだ」

「従者なしでいいです」

「一人で大丈夫なの？」

「何とでもなります」

事の次第を報告すると、両親は始めの二年間オレが従者なしで学院に行くことを心配したが、最終的には気に入らないヤツを連れて行くくらいなら一人がいい、というオレの主張を通してくれた。

母は既に面識があるものの（最初首を傾げていたがオレがぶつかって気絶させた子だと言ったら漸く思い出した程度で）、父はオレがどうしても連れて行きたいといった少女が帽子屋の使用人であることをかなり意外だと捉えたらしく、近々大旦那にアゼルを伯爵家に

連れてこさせると言った。

父は仕事に関しては身分に関係なく実力主義だ。
アゼルが貴族でないこととよりも、彼女自身がどれだけ有能かで可否を判断するだろう。
その点に関しては心配していない。
損所そこらの連中に比べてもアゼルは働き者だし、礼儀作法もきちんと出来ているし、頭も悪くない。
大きく問題になるような点はないだろう。

だからこそ、アゼルの意思と大旦那の許可が最難関門だったのだ。
気持ちの上で耐えられるかはともかく、二年という待機期間はまぁまぁの出来だと言えるだろう。

父の部屋から出たところで、ラティカに捕まった。

「私は、あの子はやめておいたほうがいいと思いますけどね」

いつもオレが帽子屋に行くのを黙認してくれていたラティカが、そんなことを言う。

「なんて言って説得したのかは知りませんが」

なぜかラティカは苦しそうな顔でオレを見た。

「将来的に辛い思いをするのは、坊ちゃんですよ?」

辛い思いってなんだ。
アゼルの顔が見られないことより辛いことなんてあるかよ。
そこまで言うなら目の前に連れてきて欲しい。
アゼルより耳に障らない声を持っている子。
アゼルより笑んだ瞳が綺麗な子。
アゼルより優しい空気を持っている子。
アゼルより本が好きで勉強熱心な頭のいい子。
アゼルより、オレが一緒にいたいと思える子を。

◆

「そうですね、もういい時間だ」
悪びれもせずカードを手際よく片付け、傍らに落としてあった外套を羽織る。
バルコニーに続くガラス戸をに手をかけたところで、ふと振り返った。
「いくら体は離れても、心まで離してしまってはダメですよ?」
二年は短いようで、長いですから。
心配そうに、しかし真っ直ぐ見つめてくる金色の瞳に、ぐっと心臓

が絞られる。

お邪魔しました、と最後は微笑んで出て行った不法侵入者を見送って、クレスは漸くベッドに潜り込む。

「言われなくてもわかってるよ、そんなこと」

暗い天井を睨みながら苦いものを噛み潰すかのように呟いた。

寝返りを打ってシーツを引き上げると、目を瞑る。

新しく買ってやったキャッチを渡した時に、お揃いのピアスを付け直して嬉しそうに細められた青紫が、目蓋の裏からなかなか離れてくれなかった。

The meteoric shower 1（前書き）

作者の一大記念日を自分勝手に祝って投稿します。今日一日で三回に分けて出しますので読んでいただけたら喜びます。

時系列的には、Gin Rummyのちょっと前くらいだと思っていただければ。

The meteoric shower 1

今日はなんだか寝付けそうに無い。
明日も早いから、早く寝ないといけないのに。
アゼルはシーツの中で寝返りを打った。

毎年、冬のこの時期には空から星が降ってくる。
今日昼間、お客さんが昨日の晩星が降ったと話していた。
夜会の途中バルコニーに出ていた時に見たとか。
量が少なかったからもう今年は仕舞いかも、とも言っていた。

その年によって期間も量もばらばらで、何日も大量に降る年もあるし、一晩に数個降っただけで終わってしまう年もあると言う。
毎年何月何日とも決まっていないので、レイシーの人々はだいたいこの時期になると寝る前に夜空を見上げるのが慣習となっていた。

大人たちの話には聞いていたけど、アゼルはまだ実際には観たことが無かった。
星が降るのはいつも子供たちが夢の中にいる時間だったから。
毎年、毛布に包まってレイズと窓辺に陣取るのだが、気がつくと寝てしまっていて、空は明るくなってしまっている。
そうして二人揃って風邪を引いて、マリアンに怒られるのだ。
去年は休みの日の前の晩にジェムが外に連れ出してくれたが、その前日まで降っていたという星は、その日に限ってアゼルたちの頭上

に降ってはくれなかった。
今日はまだ休みが明けたばかりだから明日の仕事に差し支えるわけにはいかないし、今年は大人たちも兄妹を夜連れ出してはくれないだろう。

夕食の席で、今夜男爵家に招待されて恋人と一緒に星を観るのだ、とサーシャが楽しそうに話していたことを思い出す。

…いいなぁ。

そっとため息を吐いて、枕に顔を押し付けた。

先日クレスが来たときにもこの話題になった。

遊びに来たときアゼルが仕事をしていると、大抵横でその仕事を眺めている。その時は庭の隅にあった空き樽を自分で引っ張ってきて座っていた。
北風が冷たい庭で洗濯物を干していたアゼルにそれまで他愛も無い話をしていたが、いきなりこう聞いてきた。

「アゼルは星が降るの、観たことある？」
「ううん、まだない」

そう聞かれて、思わず洗濯物を干していた手が止まる。
この話題が出るときにはどうしても除け者になってる気がして、声が小さくなった。

「絶対観たほうがいいよ！オレも去年初めて観れたんだけどさ、すっっっごく綺麗だから！キラキラしたのがぶぁーーーって降るんだよ」

すっっっごく、に思いっきり力を入れてクレスは興奮気味に力説した。
その笑顔に更に気分が暗くなって、アゼルは思わず下を向いた。

「ねぇ、今年はアゼルも一緒に観ようよ」

今まで樽に座っていたはずのクレスが、ばっと冷たくなったアゼルの手を握る。
下を向いていたアゼルは驚いて顔を上げて、更にいきなり目の前にあったクレスの顔にぎょっとする。
至近距離で覗き込んでくるグレーの瞳を直で見返すのはいくらなんでも気恥ずかしくて、また視線を逸らして下を向いてしまった。

「観たいけどっ……でも、星が降るのっていっつも夜中でしょう？次の日仕事だと、起きていられないし…」

俯いてごにょごにょと返すと、クレスは明るい声でアゼルの言い訳を突っぱねた。

「大丈夫だって、遅くならなきゃいいんでしょ？」
「でもマリアンがいいって言ってくれるか…」
「平気だよ」

尻込みするアゼルの両手を自分の胸に引き寄せて言い募る。
そして口から飛び出したのは、いつもの台詞。

「バレなきゃいいんだろ？」

バレたら大変だよ、そう返す前に超至近距離で畳み掛けられる。

「今年星が降ったら一緒に観よう、バレないように、こっそり迎えに来るからさ」

オレ得意だから、そう言って自信満々に笑うグレーの瞳に押し切られた。

「てめぇ、何してやがるっ離れろっ」

勝手口から顔を出したレイズの怒声が庭に響く。

わ、と二人して声のした方を向く。

クレスは握っていた手をそっと放して、

あ、兄貴にも内緒だよ？

そう耳元で囁くと、またね、と笑ってウサギ跳びであっという間に隣の家の屋根に跳んでいってしまった。

すぐにレイズが走り寄ってきて、クレスの跳んで行った方を睨んで舌打ちする。

そして駆けてきた勢いそのままにアゼルを振り向いて両肩を掴んでまくし立てた。

そのままがくがく揺さぶるものだから、それに合わせてアゼルの首も前後に揺れる。

「おいっ、あいつに今何された！？何でまた手なんか繋いでたんだ、

何かおかしなことされなかったか！？」

その勢いに押されつつ、クレスに握られたままの形になっていた手を解いて肩に置かれた兄の手に添える。

「何も無いよ」

「嘘付けっ何も無くてあんなにくっつかなきゃいけないことなんてないだろ！？」

「ほんとだってば」

「ったく、油断も隙もない…やっぱり今度来たら一発ぶち込んで…」

「お兄ちゃん」

ブツブツと物騒なことを言い出した兄を硬い声で諫める。

「何にも無いんだから、ケンカはだめ」

自分と同じ青紫の瞳をひたと見据えて言い含めた。

そのまま3秒。

ふう、と息を吐いてレイズの目に落ち着きが戻ってくる。

レイズは重ねていた手をそのまま移動させてアゼルの頬を包む。

そうしておでこ同士をくっつけて囁いた。

「頼むから、必要以上にあいつに近寄らないでくれ。危ない目に遭ってからじゃ遅い」

「そんな危ないことなんて、ないよ」

兄が真剣に自分を心配してくれているのは良くわかっていたが、クレスはいつも自分に対して紳士で優しいし、おしゃべりも面白い。

確かに屋根の上に上がるのは危険と言えば危険かもしれないが、少

しも危なげなくアゼルを抱えて走るクレスにいつしかアゼルは全幅の信頼を寄せていた。

ただ、お姫様抱っこだけはいただけないのだが。

諦めたのか、兄は大きくため息を吐いて手を離した。

「なるべく、あいつと二人きりにはなるな」

「どうしてよ」

「っ…何かあっても助けてやれないだろう！」

「何かって何よ？」

友達を悪く言われるのは面白くない。

アゼルは洗濯物干しを再開するべく、レイズから顔を背けてそっぽを向いた。

「何って…あんまり近づくな。危ないから」

「危ないことなんて無いってば」

レイズが何を言い澱んでいるのかさっぱりわからないが、いつもの堂々巡りする会話にうんざりしつつ最後の一枚を干し終えたアゼルは、また地団駄を踏んでなにやらわめいている兄を無視して空になった籠を抱えて勝手口に向かった。

本当に、迎えに来てくれるだろうか。

……クレスはきっと約束…というか一方的に誘われて押し切られただけだが、言ったからにはきっと来てくれるだろう。

否。

……こんな遅い時間に、貴族のお坊ちゃんが家を抜け出してこんなところまで来るわけがない。

心のどこかで期待はしていたけれど、頭では有り得ないとわかっていた。

もう寝ないと、明日起きられない――――――。

アゼルがもう一度寝返りを打って寝に入ろうとした、その時。

――――――――――コンコンコン。

窓が小さく鳴った。

ここは3階。

頭が動くより先にがばっと毛布を撥ねて飛び起きる。

音のした窓を振り向くと、月の逆光に見覚えのあるシルエットが浮かんでいた。

うそ…っ

口の中でそう呟くと、ベッドから降りて靴も履かずに窓に駆け寄る。

窓をそっと開けると冬の夜の冷たい空気がざぁっと部屋に傾れ込んだ。

いきなり吐く息が白くなり、ぶるっと身震いが出る。きゅっと自分を抱きしめつつ、目の前の大木の枝に腰掛けた少年に小声で呼びかけた。

「…クレスっ…あなた、どうやって」

しーーーっ

口元に人差し指を当て、それから手で窓から離れるよう指示された。

そうして数歩窓から離れると、なんとも身軽なことに音も立てずに少年は部屋の中に飛び込んできた。

「お待たせ」

アゼルはそう囁く少年を信じられない思いで見つめた。

ほんとに来た。

来てくれた。

こんな時間に家を抜け出してくるのだって大変なんだろうに。

そんなびっくり眼の少女をクスリと笑って、その頭をくしゃりと撫でた。

コートを着込み、首にはマフラーを巻いた姿で少年は少女を急かした。ひそひそ声で。

「さ、早く支度して。急がないと星が降り終わっちゃうよ」

その言葉にはっとしたアゼルは大急ぎで、しかし音を立てないように気をつけてクローゼットを開けて靴下とセーターとコートを引っ張り出すと寝巻きの上から着込んだ。

また別の意味でも大慌てだった。こんな寝巻き姿をレイズ以外の男の子に見られるなんて。でも今ここで全部脱いで着替える訳にはいかないし、その時間も惜しい。

胸がどきどきしてボタンがうまく留められず、いつもより手間取ってしまう。

たぶん顔が赤くなっているだろうけれど、暗闇に紛れて見えていないことを祈った。

最後にいつもの靴を履き、椅子の背にかけてあったマフラーをぐるぐると口元まで巻いたのを確認すると、少年はやっぱり小声で、さ、行こう、と窓辺に手招きした。

足音を立てないように、うんと気をつけて窓に急ぐ。

「ほら、早く」

そう囁かれ、しゃがんで向けられた背にしがみついた。
あんまりにもどきどきしていたから、心臓の音がクレスにまで聞こえちゃうんじゃないかしらと心配になったけれど、これだけ厚着をしているんだからそれはないか、と思い直した。

クレスはアゼルをちゃんと背負えたか確認すると、じゃ、しゅっぱーつ、とやはり小声で囁いて窓枠から飛び出した。

外は、雲一つない星月夜だった。

The meteoric shower 2

クレスはトマトジュースを飲みながら、タイミングを計っていた。

母さんが今朝思い立って急遽開いた、星空鑑賞会。

昨夜、今年初めて星が降ったらしい。

朝食の席で使用人たちが朝の支度の時に話していた話題が上った。

「今日も降ってくれるかしら?今夜は皆で鑑賞会にしましょうよ」

この鶴の一声で、今日の伯爵家の使用人たちは予定外の仕事に追われることとなった。

昨日降ったからと言って今日また振るという保障は何もないのだが、何かにつけて大勢で食事をしたがる母さんは、とりあえず何か口実が見つかればそれでいいらしい。

結局、父さんの仕事仲間やら叔母一家やら兄貴の彼女やらで総勢20人弱の、身内だけだがちょっとした集まりになった。

今夜はこれから、まだ星が降るのを観たことがないと言っていたアゼルをこっそり連れ出そうと思ってたのに。

食事会自体は適当に挨拶をして、適当に野菜中心にテーブルの上を片付け、適当に相槌を打ちながらトマトジュースを飲んでいればいい。

粗方食事が終わって、みんなが好き勝手にだらだらし始めたくらいでさっさと引っ込んで、自室のバルコニーから抜け出して帽子屋に行けば間に合うだろう。

それはいいんだ。問題はそこじゃない。

目下の問題は…

「それでね、ガーネット嬢ったらね、……」

だるそうにソファに沈んでいるオレの右側で、先日のお茶会での出来事を延々喋り倒している、朱い髪。
黄みが強いからあいつの色とはまた違うけれど。

…どうしてこう、「あかい髪」に邪魔されるんだろう。

さっきから一度も相槌すら返してないのに、どうやったらこうも一方的に喋れるんだか。

おしゃべりな女は、苦手だ。
というか、煩い女が苦手になったのはこのとにかく喧しい従姉妹のせいな気がする。
昔からこのニンジン頭が家に来ると全然落ち着かないし、やたら声が大きくてかん高いから耳が痛くなる。人より耳がいいからなおさらだ。
苛々とトマトジュースのストローを噛みながらわざと気だるく突っぱねる。

「……クローディア、オレ、そろそろ眠いんだけど」

内容は最初っから九割方聞いていないので、どこで途切れようがどうでもいい。

そんなことよりそろそろいい加減抜け出さないと、遅くなりすぎてしまう。

そうでなくても、そろそろ本気でこいつの傍を離れたい。

「えぇっ？今日はこれからが本番なんでしょう？寝るなんて勿体ないわよぉ！」

「そんなこと言ったって、昨日降ったからって今日も降るっていう保障はどこにも無いじゃないか」

そうだよ、だから急いで帽子屋に行きたいのに。

こればかりは年によって差がありまくるのでその時間になってみないとわからないから、お前の相手なんかしてる暇は無いんだ。

内心そう毒づいて、一つあくびをしてみせた。

「降るわよ！昨日は結構数が降ったって言ってたし、晴れてるし、」

「…わかった、わかったから。…とにかく今日は」

ちっとも眠たくなんてないけど、お前のおしゃべりに付き合うくらいなら寝る。

目障りなニンジンみたいな色の三つ編みをピンっと指先で弾いてやって、そっぽを向いた。あー、苛々する。

……ニンジンが嫌いなのも、これのせいか？

以前はあまりにも苛々して、本気で邪険にしてはよくわんわん泣かれていた。

泣くとさらにうるさくなって、更に苛々してくるしで悪循環もいい

ところだ。
母さんにもこっぴどく叱られたが、その時だって確か庭先でモグラと飼い犬がケンカした話を三十分以上聞かされていたのだ。
興味の無い話を延々聞かされるこっちの身にもなって欲しい。

オレとしてはそのまま嫌われても全く問題なかったし、むしろ寄ってこられないほうが清々する。極力会いたくないんだが、最悪なことに中途半端に近い親戚だったりするから何かにつけて顔を合わせることになる。
そして泣かせた本人も、次に会ったときにはケロリとしてまたオレにとってはどうでもいい話を一人で楽しそうに話出すのだ。

最近はもう諦めて、基本的には相手にせず勝手に喋らせておくことにしている。
…オレの時間と気持ちに余裕があれば、の話だが。

帽子屋のサーシャが苦手なのも、たぶんオレの中でこいつと同じ「とにかくよく喋る女」っていうカテゴリーに分類されるからだろう。
サーシャの方がちゃんと会話が成立するだけずいぶんマシだが。

一緒にいるなら、横にいて落ち着く子がいい。

傍で聞くなら、優しいメゾソプラノがいい。

該当者は、ごく限られているが。

コメカミを親指の腹で揉みながらふと目をやると、向こうで壁際に控えているラティカと目が合う。
勘弁してくれよ、と目で言うと、唇の片端を上げてふっと笑われた。
そのくらいご自分で何とかしなさいよ、と言われた気がして、口の中で舌打ちした。

…くそっ。楽しんでるな、あいつ。
それにしても。

「…なんだか頭も痛くなってきたし」

これ以上ここにいたら本気で頭痛がしてきそうだ。
このかん高い声を至近距離で聞くのには限界がある。

「まぁ、大変っ風邪でも引いたのかしら!?」
「大丈夫、横になればすぐ治るって」

慌てて侍女を呼ぼうとする喧しい従姉妹をなんとか制し、だるそうな演技をして立ち上がった。

「クローディアはせっかくなんだからここでみんなと星を観ればいいよ。オレは部屋に戻るから」

付いてこようとした従姉妹をソファに押し戻し、大人たちが談笑しているテーブルに向かう。
父さんと母さんに今日はもう寝ると伝えると、二人とも残念そうにしていたがしょうがない。
大丈夫かと聞かれたので平気だと答えようとしたら、

「私がついていきますのでご心配なく」

といつの間にか後ろに立っていたラティカに語尾を引き取られた。

「及第点ですねぇ。仮病なんて」

廊下を歩きながら、ラティカが面白そうに笑っている。

「五月蝿い。あいつがいると本気で頭痛がしてくる」

「あーぁ、クローディア嬢もお可哀相に」

「可哀相なのはこっちだよ、わかってたんなら助けろよ」

ラティカのクスクス笑いが腹立たしい。むっとして言い返す。

性格悪いぞ、と思わず八つ当たりが口を吐いた。

苛々しているのと急いでいるので、自然と早歩きになる。

「クローディア嬢一人あしらえないでどうします。社交界にデビューしたらこんなもんじゃないですよ？」

「…デビューしないでおく」

知らず知らずのうちに眉間に皺が寄る。

「諦めなさいな。あんなお嬢さんばかりじゃないですよ、中には坊

ちゃん好みのおとなしい娘も」
「社交界なんて、兄貴たちが出てれば十分だろう」
考えただけでげんなりした。て言うかオレの好みって何だよ。
「お父上とお母上がなんておっしゃいますかね？」
「なんと言われても、だ」
こないだの母さんの誕生日パーティだって。
…先読み師は、星が降るのがわかったりするんだろうか。
女公爵邸の温室に招かれて以来数度あの温室に出向いたが、未だあの少女のような風貌の少年をこの屋敷に招くことは叶っていない。
再度改めて呼んでみようか。時間の指定は抜きにして。

寝室に着き、先に扉を開けて部屋の明かりをつけたラティカが、
「頭は痛くないですね？」
一応、といった体で聞いてくる。
「あぁ、何ともない」
着替えるように見せかけてのろのろと上着を脱いだ。
ラティカは出ていきすがら、ドア越しに振り返って思い出したかのように付け加えた。

「今日は冷えるから暖かくしてくださいね。それと―」

―バルコニー側の森には警備が出ていますから気をつけて。

じゃ、おやすみなさい。

瞠目して固まったオレに唇の片端を上げて、ドアは閉まった。

◆

月明かりの下、屋根の上を駆けて帽子屋に急ぐ。

ついさっきから、星が一つ二つ降り始めた。

――急がないと。

ラティカの言う通り普段はいない警備が森に出ていたせいで、いつもより大回りをして家を出る羽目になった。

それにしても。

どうしてばれてるんだ。ラティカのやつ。

思いっきり舌打ちしながら先刻のやり取りを思い返す。

あの感じだと、他には言わず見逃してくれそうだったけど。

あの去り際のお見通しと言わんばかりの笑顔がほんっっっとうに、腹立たしい。

その上でクローディアに捕まっていたオレを見て笑ってたんだ。

……いつか見返してやる。

『三月ウサギ』の能力をもってしても歯が立たない師匠に一矢報いることを誓いつつ、少年はこれからの楽しいことに頭を切り替えた。

白い息を吐きながら鑑賞ポイントを決め直す。

本当はスペード地区の国立図書館の屋上のさらに上に登ろうと思ってたけれど、もうこの時間ならその下に人がいるだろうし、その隣の劇場の上も図書館からよく見えるから、二人でいたら人目に付きそうだ。

そうでなくても時間が押しているから、帽子屋から遠くないところ

がいい。
走りながら周りで良さそうな場所を物色する。
ぐるりと見渡して、ハート地区の広場にある時計台に目が留まった。
――あそこの鐘のところとか、いいかも。
別にその辺の屋根の上でもいいけれど、出来れば空に近いところで観たほうが迫力があるだろうし。

アゼル起きてるかな。
まぁ寝てても起こすけど。
先日顔を見に行った時に、一緒に観よう、とは言っておいたが今日行くとは伝えていないからびっくりするだろう。
依然見た、あまり表情の変わらないアゼルの驚いた顔を思い出して口元が緩んだ。

当初の予定よりだいぶ遅い時間になってしまったけど、ようやく帽子屋に到着する。
家のすぐ横に生えている木に登り、3階のアゼルの部屋の前の枝に落ち着く。
ちょっと覗き込むと、シーツからのぞく銀髪が月光で煌いた。
…もう寝ちゃってるかな。寝つきが悪いんだって言ってたけど。
手を伸ばして窓ガラスを小さく叩くと、数瞬後、がばっと音を立て

そうな勢いで銀色の頭が起き上がった。

The meteoric shower 3

「うわぁ……っ」

背中から歓声が上がる。
年に一度の天体ショーはもう始まっていた。
頭の上を大小の星々が好き勝手な方向に散っていく。

「ねぇ、どこまで行くの？」

左の耳元で天使が囁いた。
さっきまで耳障りなキンキン声を聞いていた反動もあってか、アゼルの声がいつも以上に耳に心地いい。

「口閉じて」

前を向いたまま言うと、通りの向かいの建物に飛び移る。

「あそこの上」

危なげなく着地してから、もう目の前に迫った広場の時計台を顎で示した。生憎両手は塞がっている。
時計台の鐘の下は講堂になっていて夜は人気が無い。真下まで来て立ち止まる。
一度背中のアゼルを背負い直して、声をかけた。

「しっかり掴まっててよ。口も閉じててよ、舌噛むから」

うん、と言う返事と、肩に廻した腕に力が入るのを確認すると、体中のバネを使って垂直に飛び上がった。

◆

星が降ると言っても、空から星が雨みたいに落ちてくるわけではない。

ただ、今の今まで夜空の上で動かないでいた星が、何の前触れも無くいきなり光の尾を引いて物凄いスピードで動き出す。

それもそれぞれてんでばらばら、好き勝手な方向に、だ。

動いて別の場所に落ち着くのかと思いきや、それこそ一瞬でそのまま空の端に消えていってしまう。

「わぁぁ、……すごぉい」

無事時計台の鐘の屋根の上に到着すると、クレスはゆっくりしゃがんでアゼルを下ろした。

恐る恐る屋根の上に立ったアゼルは一度足元を確認すると、空を見上げて白い息と共に感嘆の声を上げた。

クレスもアゼルの横に立ち、自身も二度目の星降りを眺める。

ここら一帯で一番高い場所に立って空を見上げると、遮るものはなにもない、３６０度満天の星空だった。

普段のそれでも十分綺麗だが、星降りの夜は格別だった。

空のあちこちで光の線が浮かんでは消える。
いつもは我が物顔で夜空を統べる月も、この時期ばかりは肩身が狭かろう。

星空も綺麗だが。
クレスの視線は隣で夢中で空を見上げる少女の横顔に釘付けになる。

普段表情の乏しい淡々とした少女は一見相変わらずの無表情に見えるが、クレスにはわかる。

満天の星をいっぱいに写しこんでそれ自体が小さな星空の様に煌いた青紫の瞳と柔らかく綻んだ口元は、今まで見た中でも最大級の笑顔だ。

――連れてきてよかった。

こんなアゼルの喜ぶ顔が見れるなら、多少の無理を押してでも連れてきた甲斐があったというものだ。

不意に、アゼルが胸の前で祈るように合わせていた両の手を空に向かって伸ばした。

「本当に、手で掴めそう。こんなに近いもん」

屋根の傾斜は緩やかで立つのに不安はないのだが、何分暗い。
目の前に広がる星達の競演にばかり気を取られているアゼルは危なっかしくて、クレスは半歩下がってアゼルの後ろに立った。

支えてた方がいいな、と思ったその時。

向かって上の方向に動いた星を追って、仰け反ったアゼルの体がバランスを崩してよろめいた。

「っ　わ」

ぐらりと傾いだ体に、咄嗟に腕を伸ばして腰を攫う。
ぐっと足を踏ん張ってなんとかひっくり返るのは免れたものの、こらえきれず二人揃って尻餅をついた。
後ろからアゼルを抱え込む形で座り込んだまま、二人揃って止まっていた息を大きく吐き出した。

「危ない」

思わず言葉に力が入る。

「ごめんなさい…」

ため息を吐いたアゼルが気まずそうに身を捩った。

「だめ」

ぎゅっと力を入れて、そのまま抱きしめる。

「またひっくり返るから」

そう言うと、本当にひっくり返りそうになった手前強気にも出れないらしく、少しもぞもぞしていたが結局そのままの体勢で落ち着いた。

「くっついてた方が暖かいし」

視界の下半分を占める銀髪の上からぐるぐるに巻かれたマフラーに唇を埋めて冬空の寒さに感謝すると同時に、二人揃ってこれでもかと厚着をしていることを恨めしく思う自分の心に、内心苦笑した。

しばらく、二人は無言で空を見上げ続けた。

「あの星たちは、一体どこまで行っちゃうの？」

クレスの腕の中でずっと上を見上げていたアゼルがポツリと呟いた。

「さぁ…、少なくともレイシーのどこかに降った星が落ちてきて屋根に穴が開いたという話は聞いたことがないな」

「そうなの？…うん、そう言えば聞いたことないね」

「大人たちにも聞いてみたことがあるけど、皆そんな話は知らないと言っていたし、地面まで落ちてくることはないらしいよ」

「ふぅん。落ちてこないのに、なんで『星降り』って言うんだろうね？降るって言うより、流れてるとか、飛んでるって感じがする」

雨みたいに落ちてくれば、降ってるって感じするけど。

そう言ってアゼルは首に巻いていたもこもこのマフラーを一巻き外した。

「どうしたの？」

ちゃんと巻いときなよ、と言いかけた矢先、アゼルを閉じ込めて前で組んでいた手にマフラーの先がくるりと巻かれた。少年の灰色の目が大きくなる。

「手が寒いから」

小さな荒れた手が少年のむき出しになっていた両手を隠すようにマフラーの先を丁寧に巻きつけた。

ふむ、と一言満足したように洩らすと当の本人の手は自分のコートのポケットの中に戻っていく。

寒いのに、顔にどんどん熱が上っていくのがわかる。

アゼルから見えなくて良かった、と心から安堵した。

アゼルはまた空を見上げて呟いた。

「毎年のことだっていうのに、よく空から星がなくなっちゃったりしないよねぇ」

「そうだね、これだけ動いても全然減ったりしないね」

「星座も毎年変わらないよね？」

「うん、変わらないね。そう言われると不思議だな…」

「なんでだろうねー…」

見上げながら首を傾げるので、右の二の腕にアゼルの頭が軽く乗る。

「実は昼間のうちに、こっそり元の位置に戻ってるとか」
「えぇっそうなの？」

軽口に驚いて振り返ろうとするが、あまりに距離が近かったのでアゼルの額がクレスの鼻とメガネにぶつかった。

「わっ……」
「ご、ごめんっ　…大丈夫？」

仰け反った顔と自分の顔が近くて驚いたのか、振り向けた顔をバッと元に戻す。
銀髪から覗く耳までが赤くなっている気がする。
表情は全然変わらないのに、顔色はコロコロ変わるのだ。

―もう少し、表情が動けばいいんだけれど。

―オレの前でだけ。

「じゃあ毎年確かめようよ、オレ、また夜抜け出してくるからさ？」

堪え切れずクスクス笑いながら、すぐ目の前にある小さな銀色の旋毛にそっと口づけて耳元で呟いた。

「来年も、再来年も、一緒にここに来よう？」

その呟きが純粋な誘いなのか、彼女への懇願なのか、己の願望なのかは、自分でも判断が付かなかったが。

おそらくは、その全てなのだろう。

The meteoric shower 3（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

Penpals under the moon（前書き）

Fantan Domino → 七並べ

Penpals under the moon

とある午前中のこと。

日に日に勢力を増してくる秋の空気によってその覇権を脅かされつつも、太陽は未だ天上斜め三十度から無駄な抵抗を続けていた。

その努力を労い、むしろ心の中でエールを送りつつ、今日もアゼルは赤薔薇の生垣に囲まれた庭で洗濯物を干していた。

ここの物干しはかなり低めにしてあるが、それでもアゼルが背伸びをして手をうんと伸ばしても竿に手が届くかどうか。

ちゃんと手が届くようになれば洗濯バサミが楽に留められるんだけどな。

最近背が伸びた自覚はあるけれど。

最後の枕カバーを留めようと、爪先立ちで竿のすぐ下を洗濯バサミで挟んだ直後、バランスを崩してそのまま顔が空を仰いだ。

わ、と声をあげ、なんとか右足を下げて踏ん張ったものの、干したシーツの合間から向かいのアパルトマンの上にある太陽と直にお見合いしてしまう。

反射的に顔を背けて目を瞑ると同時に、あれ？と思った。

瞼の裏にかすかに残った残像。

姿勢を直してシーツの幕を潜ると、眩しさに手を翳しながら恐る恐る薄目を開けた。

今度は意識して、人影が見えた…気がした屋根の上に視線を向ける。

屋上など無い三階の屋根の上には、もちろん人が居るわけも無く。

…あんな人が、そう何人もいるわけないもんね。

瞼一枚隔てても突き刺さる日差しから目を背けたアゼルは、我知らず小さな溜め息を吐いた。

◆

クレスが学院に入学してから、季節が二つ変わった。

規格外な伯爵家のお坊ちゃんが帽子屋の勝手口から当たり前の顔をして入ってくることがなくなったこと以外、帽子屋の毎日には表向きは変化と呼べるものは少なく、淡々と、けれど相変わらずの忙しない日々が続いている。

朝は玄関の掃除をしてからレイズとパン屋に行き、朝食の後片付けが終わったら店の開店準備。

基本的に店頭に立つ回数は少ない。店に出て接客をするのは通いの店員が休んだり、どうしても人数が足りなくなった時だけだ。

だから大旦那やウォルターから用事を言いつけられない限り、マリアンと一緒に裏方の仕事をこなしている。

日によって当番が決まっているが、大抵午前中は生活共有部分の掃除をしてから買出しに出て昼食の支度をするか、家人全員分の洗濯をして庭に干していると終わってしまう。

午後は午後で店のお客様にお茶を出したり、マリアンに教えてもら

いながら午後のお茶に添えるお菓子を焼いたり、毎日のノルマとなっている勉強をしたり。
さらにその合間を縫って大人たちの雑用を聞き、洗濯物を取り込んで、少しずつ習っているビーズ刺繍やレースの留めつけを進める。
なんだかんだとそんなことをしていたらあっという間に夕食の支度をする時間になっていて、マリアンと台所に立ち、閉店作業を終えた皆と揃って夕食を食べる。
後片付けを終わるとお湯を使って、サーシャと少しおしゃべりして、遅くならないうちに部屋に戻るのだ。
これまでなら自分の寝つきの悪さも考慮に入れて早々にベッドに入ってしまうのだったけれど、この春以降、ベッドに入る前の日課が出来た。

春からきっちり二週に一度アゼルに届く、一見何の変哲も無い茶色の封筒。
表いっぱいに大きく書かれた帽子屋の住所と、アゼルの名前。
裏に返すと、そこにはローレンシア学院の紋章と、表と全く同じ調子で一文字だけ書かれた『C』の文字。

一番最初に届いた手紙を受け取った時の感動は忘れられない。
何せ、自分宛に手紙をもらうのなんて生まれて初めてだったから。
帽子屋に届く郵便物を仕分けするマリアンがいつもレイズに気付かれないようにこっそりと渡してくれてるから、多分きっとあの心配性の兄はこの手紙の存在を知らないはずだ。
知られたらまたひと悶着あるんだろうけれど、今のところそんな騒ぎは起こってない。
そうでなくたって、この手紙に心配されるようなことなんて、何も無い。

窓から覗く月と机の上の明かりを頼りに、夜毎ベッドに入る前に何度も何度も読み返しては丁寧に返事を書く。

今日来たお客さんのこと、うまく焼けたケーキのこと、新しく教えてもらったビーズ刺繍のこと。

彼のくれる手紙のように、面白いことなんて何も書けない。

彼が帽子屋に来ていた頃と差して変わらない毎日に、書けることなんてそう多くはないのだから。

ペンを持ちつつ、寂しいと言うか、申し訳ない気持ちになってくる。

一度そのことをちらと書いたら、優しいクレスはアゼルの生活が知れて楽しいと慰めてくれた上に次の手紙からはアゼルに向けていくつかの質問が書いてくれて、お返事を書き易くしてくれるようになった。

なんだか気を使わせてしまったみたいで自分の失言に少し落ち込んだアゼルだったが、知らなかったお互いの一面も垣間見えて、気がつくと自分からも毎回一つ二つ質問を書くようになっていた。

そうして質問への回答と、変わり映えしない日常生活を綴った薄紫色の便箋を揃いの封筒に入れて、封をする。

表はきちんと宛先とクレスの名前を書き、裏にはただ一文字だけ、『A』と書いた。

そして今夜も月明かりの下で、封筒と同じ紋章がある白い便箋の上に並んだ、罫線をややはみ出るくらいの大きな文字を追う。

授業のこと、いつもお茶を一緒に飲むお友達のこと、寮での生活のこと、便箋三枚に事細かに学院での暮らしを教えてくれる。
そのどれもが使用人の少女には未知の世界の話であり、未来の話だ。
そうして最後は必ず、ある言葉で終わっている。

『青薔薇の加護がありますように』

以前読んだ本には、家族や恋人、友人など大切な人に贈る言葉だと書いてあった。
二年後には従者になる間柄だけれど、クレスはまだ友達として手紙をくれる。
帽子屋の人たち以外からそんな言葉をもらえるなんて、とアゼルはとても幸せな気持ちになった。

まだ幼く世間知らずな少女は、楽しくて優しい手紙をくれる未来のご主人様に感謝しつつ、贈られた言葉の真意を正しく理解しないまま幸せな気持ちで今夜も便箋にペンを走らせる。

◆◆◆◆◆

「ふぅーん、頑張ってるみたいじゃん？」

秋は、月が大きくなる。

燦々と降り注ぐ銀の明かりは、大切なものを闇の中の陰に厳重に隠し込み、太陽よりも余程いろいろなものを映し出してしまう。

普段は見えないものも、見たくないものも、見てはいけないものも。

「観てるだけなんて、つまんないしさ、」

帽子屋の裏通りを挟んだ屋根の上の影が、くつくつと笑った。

それはそれは楽しそうに。

「困った時にこそ手を差し伸べるのが、友達だよね」

でしょう？

同意を求めて振り仰いだ金の双眸は喜色を纏って、是とも否とも返さない天上の支配者よりなお明るい。

そんな彼の方を写し取ったような瞳を細めつと立ち上がると、見下ろす窓辺にちらと目をやり、

音も無く闇に溶け込んだ。

―見落としてはいけない。

―見誤ってはいけない。

それらの中にこそ探しているものが、追い求める真実が、紛れているんだよ。

Penpals under the moon（後書き）

ご無沙汰してました。（土下座）

The reminder of me（前書き）

少し時間を遡ります。

The reminder of me

漸く朝晩の足元から這い上る冷気を感じなくなったある晴れた日に、アゼルは大旦那に連れられて伯爵家を訪れた。
本当はクレスが大旦那に直談判をした日からそう日を開けずに訪問するはずだったものが、伯爵が仕事で長くレイシーを離れていた為に、この日はもう翌日にクレスが学院に向けて出発するというギリギリの日程となった。

伯爵家を訪問するのはクレスとレイズが射撃対決をした時以来だった。

前回は真っ直ぐ伯爵夫人の居間に向かったが、今回通されたのは壁一面を書架で覆われた、伯爵の執務室。
大旦那の後に続いて扉をくぐると、伯爵――チョコレート色の長い髪を一つに結わえ、深い紺色の瞳をしたクレスの父が、大きな樫の一枚板で出来た机の向こうから出迎えてくれた。

「帽子屋、よく来てくれました」
「お久しぶりでございます」

机を回り込んでこちらにやってきた伯爵に、杖を手にした希代の帽子屋が恭しく頭を垂れる。
クレスの髪のちょっと茶色いのってお父様の色だったんだ、などと部屋に入ってから緊張のあまり全然関係ないことをぼんやり考えていたアゼルも慌ててそれに倣った。

「顔を上げなさい」

低くて柔らかい声が耳を撫でた。
その声にぎこちなくだが、ゆっくりと身体を起こす。

「君が、アゼルか」

もう帽子屋を出たときから早鐘を打っていた心臓は今や張り裂けんばかりに暴れていて、きゅっと口元に力を入れると、反対に伯爵様の唇は弧を描いた。

その笑んだ目元が、色は違えどクレスのそれとそっくりだと気付いたのは面接が終わった後、部屋の外で待っていたクレスに「お疲れ様」と微笑まれた時だった。

◆

「大丈夫？」

緊張の糸が切れたのか部屋を出た途端その場にへたり込んでしまったアゼルを見たクレスは、いつもの調子で軽々と抱き上げると大旦那には「借ります」の一言だけ残してさっさとその場を後にした。

「夕飯までには返してくれないと、あちこちが煩いからのぉ」

スタスタと廊下を去っていく少年の背中に、大旦那のぼやきが跳ね返った。

「…どこに行くの？」
「森」

久しぶりだし、そう言って行きすがらすれ違う使用人たちの驚きの視線をこれっぽっちも気にかけず廊下を進む。

良くも悪くも慣れてしまった腕の中で、アゼルの先程の対伯爵の緊張も少しは和らいだかと思ったら大間違いだった。
ここは人が居ない屋根の上じゃない。
漸く畏れ多くも伯爵様と面接という圧迫感から解放されたと思ったら、今度は恥ずかしさに居た堪れなくてさっきとはまた違った意味で顔に血が上っている。
文句の一つも言ってやりたいところだったが、今はとにかくこれ以上目立ちたくない。
アゼルは恨めしげに涼しい顔をした少年を睨んだが結局は何も言えず、すぐ横にある肩に埋めるようにして顔を隠した。

一方足早に廊下を行くクレスは腕の中で擦り寄ってくる感触にだらしなく弛みそうになる顔を必死でこらえ、宝物を大事そうに抱え直すと颯爽とベランダから外に飛び出した。

耳まで赤くなったアゼルを抱え、森の中を迷いの欠片も見られない足取りで進んでお目当ての大木に張り出した太い枝の上に飛び上がると、アゼルを枝先の方を向かせて跨るように座らせる。普段スカートに隠れている膝小僧が顔を出した。
そうして自分もその背後で幹に背をつけて同じように腰を下ろし、見慣れたお仕着せの深緑のワンピースを腕の中に囲い込んだ。

いつかの星空の下のように。
腕の中の温もりに、お仕着せに染み付いた甘い香りに、今度こそ少年の頬が弛む。

囲い込まれた少女は背を強ばらせたまま、それでもやっと羞恥刑から開放されたと言わんばかりに長い息を吐き出した。
が、直後。

「もうっどういうつもり！？」
「何が？」

背中を捕られながらも、宙に浮いた両足をばたつかせて猛然と抗議する。

「自分で歩けるのにあんなっ」
「あんなにへたり込んでたのに？」

笑い声を含んで聞き返したクレスは暴れ出したアゼルに廻した腕に力を込めた。
バランスを崩すといけない。
落ちたらただでは済まない高さだ。

「…皆見てたよ」

アゼルはお姫様抱っこを伯爵家の使用人たちに見られたのが余程恥ずかしかったらしい。
揺れなくなった足とすぐ間近で聞こえる小さくなった声は、怒っているのではなく照れて拗ねているそれで、ようやく背中に入っていた力も抜けた。
そしてこれだけ感情が乱高下しても、アゼルの心を一目で表すのは

口の動きと、大袈裟に変化する顔色くらいだろう。

「いいじゃん、オレの従者がどんな子か、皆知りたがってたし」

廊下ですれ違った侍女たちは今頃、三男坊に捕まった哀れな少女が帽子屋のお仕着せを着ていたことを面白おかしく話しているに違いない。

どうせ隠してもそう遠からずバレることだ。

「よくない」

あれ紹介じゃないし、そう呟いたアゼルの声はまだ不機嫌だ。

「心配しなくても、そのうちちゃんとお披露目するよ？」

「そういう意味じゃなくて、」

「じゃあどういう意味？」

「どうって…」

ただ単に恥ずかしかっただけなのだから十分な理屈なんて持ち合わせていなかったんだろう、言いあぐねた末に、また無言で足をバタバタさせている。

最近は対面でなければ、クレスと身体が近くてもアゼルは嫌がらない。

高いところにも慣れて最初の頃のように怖がらなくなり、今みたいに無防備に背中を向けていれば力を抜いて寄りかかってくる。

これもお姫様抱っこの効果だろうかと、目の前で木漏れ日に煌めく銀髪に目を細めた。

「オレの従者になったら、伯爵家の使用人てことになるんだよ？当

然屋敷の人間に紹介はするさ」

アゼルが伯爵家にくれば、今よりもっともっと一緒に居られる時間が増える。

「大丈夫、みんな優しいから」

オレがついてるし。

長い銀髪にすると指を通す。

本当は、この距離で大好きな青紫を眺めたいのだけれど。

今それをすれば、恥ずかしがりの未来の従者殿は今度こそ枝の上から転げ落ちてしまうだろう。

◆

「怒らないで…機嫌直して、ね？」

「知らない」

腕の中の姫のご機嫌はなかなか直らない。

「オレは仲直りしたいよ。しばらく会えないし」

そう。
次に会えるのは早くても夏になるというのに、ケンカ別れなんて絶対に御免だ。

「…従者を抱っこして運ぶご主人様なんて聞いたこと無いよ」
「じゃあオレが第一号」

木の上であやすように前後に身体を揺らしながら、やや焦る内心はともかく外見は嬉しそうに言うクレスに、アゼルは呆れたように溜め息を吐いた。

「父さんに、何聞かれた？」
「…今、帽子屋で何をやってるのか、とか、何が得意か、とか、学院に行って何を勉強したいのか、とか、あとはー…」

すぐ目の前の銀髪を撫でながら聞くと、思い出しながら指を折って数える。
うん、うん、と相槌を打って先を促したが、銀髪の旋毛は小さく傾き、固まった。

「…あと、なんだっけ」

ー緊張し過ぎて忘れちゃった。

「緊張した？」
「うん」
「オレの父さん、見た目はそんなに怖くはないと思うけど？」
「だって！」
「！」

ばっとこちらを振り返ろうとして、アゼルがまたバランスを崩しかけるのを引き寄せてどうにか抑える。
さわさわと、葉たちが笑った。
二人して強張った身体からふっと力を抜くと、思わず笑いがこぼれる。

「伯爵だから？」

笑いをまぶしながら問うと、当たり前じゃん、とふてくされた声が返ってきた。
確かに商家の一使用人にとっては雲の上の人なのかもしれない。

「大丈夫、仕事に関しては鬼だけどそれ以外はとても優しいよ。うちの父さん」
「怖いって事じゃない、あたしにとっては」
「いつも通りにしていれば問題ないよ」
「そうかなぁ？」
「そうだよ」

アゼルが不安気な空気を滲ませて溜め息半分に答えるから、話を元に戻した。

「それで、なんて答えたの？」
「え？、そのまんまだよ？」

もう一度指を折りながら、伯爵の前で語った自分の答えを辿っていく。
その一つ一つに相槌を打ち、自分が一番訊きたい質問を父親が訊かなかったことに安堵する。

卒業は四年後。

もちろん先のことなんてわからない。
ましてやダスクのような未来を覗き見る力もない。

これが今の自分に考え付く自分にとっての、本当に自分にとってだけの、最良の道だ。

アゼルの友達でいたいと言う言葉を脇に押しやっておきながら、彼女の将来の夢に手を貸すような素振りをして、その実自分の願望に沿うように言い包めて、大人たちを巻き込んで、自分のテリトリーに囲い込んで。

ずるいな、と自分でも思う。

けれど。

願わずには居られない。
望まずには居られない。
想い描かずには居られない。

卒業後に続く長いであろう自分の人生に、必要不可欠な腕の中のこの人と共に在る未来を。

その未来を手に入れる為なら、いくらでも頑張れる。

―アゼルは、オレが卒業したらどうするの？

けれど今のアゼルの答えがわかりきっているから、クレスはこの問いを喉ギリギリで押し留めた。

聞いたら困らせて、また怒らせてしまうのは必至だ。
本当にオレがアゼルを必要としているのはその先だと、どのタイミングで伝えればいいだろう。

ただわかるのは、まだ早い、それは今ではない、ということだけ。

「しばらく帽子屋に会いに行けないから、アゼルにはお守りをあげる」

ご機嫌取りの仕上げに、最終関門を無事通過したご褒美に、ポケットに入れていた細長い箱を取り出した。

「…え」
「開けてみて」

躊躇する小さな手に自分の手を添えて蓋を開けると、中には銀の細工物が一つ。

「これ……っ」

はっと息を呑んだアゼルが懲りもせずまた身体を捻って振り返ろうと…して失敗した。
オレがアゼルの右肩越しに手元を覗き込んでいたから、アゼルの右頬がオレの左頬に勢いよく当たる。

「あたっ」
「わっ」

「……三回目」

くすくす笑いながら反動でぐらつきかけた身体をまた抱き寄せる。
今回は予想がついていたので思わず声が出るものの、支えるの自体は危な気ない。
さっき二回支えた時は居づらそうに身動きしていたが、今はそれどころではないらしい。

「びっくりした？」

箱の中で木漏れ日を反射したのは、学院行きを切り出した日にアゼルが細工物屋で選んだかんざし型の栞だった。

「…どうして？」
「頑張ったご褒美」
「そうじゃなくて」

アゼルの困惑は当然だろう。
最後の二択に残って、自分が選んだのにオレが選ばなかった栞がなぜか今目の前にある。
オレがトレーごと店員に戻す素振りをして実はこっちを買い求めていたなんて、アゼルはちっとも気付いていなかったから。
いつ渡そうか、ずっと悩んで悩んで結局今日になってしまったけれど、渡せてよかった。

「あれ、全部一点ものだって…」
「そうだよ」
「もらえないよ！こんな高価な」
「受け取ってもらえないと困るな。返品出来ないから」

アゼルの言葉を遮り、ほら、とかんざし部分の真ん中辺りを指で示す。

小さく刻まれた、持ち主の名前。

「これはもうアゼルのものだから、ね？」
「そんなぁ…」

心底困ったといった声音で呟く少女を深く抱き込んで、肩に顔を埋める。
お仕着せにしみこんだ甘い香りが鼻をくすぐった。

「気に入ってたでしょ？」
「そうだけど…」
「アゼルに使って欲しいんだ」

所在無さげに箱を持つ手を、右手でそっと覆い撫でる。

「毎日読む本に使って？ね？」

そして毎日、オレのことを思い出して。

出来るだけ自分という存在を馴染ませて、染み込ませておきたかった。
たとえ離れている間で若干薄まってはしまっても、すぐに思い出せるように。

やっと手繰り寄せた糸は、まだまだ細い。
だが決して手放すことはしないだろう。

The reminder of me（後書き）

ここに来て、クレスの恋心全開？です。
でもまだダイレクトには出しません、出せません。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3497j/

The Mad Hatter in Abstract World

2011年11月16日17時27分発行